尚研究を要するもの。

初懐紙、花故事　一読　全集675—

句評集。　　　〃—

遺語部。　　　〃

芭蕉と蕪村二家比較論ものせよ。P(360)

参 飯空だより

13. 1. 30. — 13. 9. 23

大正十二年六月二十日印刷納本
大正十二年六月廿五日發行

【正價金四圓貳拾錢】

芭蕉研究

著作者　樋口　功

發行人　武藤　欽
京都市下長者町油小路西入

印刷人　早崎鶴之助
京都市木津屋橋堀川東入

不許複製

發行所
東京市神田區表神保町三
京都市下長者町油小路西入
文獻書院
振替口座 東京六〇〇六一
大阪六三〇九二

大賣捌所
大阪　合資會社　柳原書店
名古屋　株式會社　星野書店

○

近頃文人書と表現派の畫との類似を對比する者もある。其の例から推せば、蕪村の畫…特に俳畫…などは、表現派と相通うた處もあると謂へるのであらう。蕪村の俳句は俳畫と趣味の一致してゐるものであるから、その俳句も表現派と手段を同うした處もある筈である。して見れば、俳壇の二名家の目ざした處が、たま〳〵歐洲最近の藝壇の傾向と期せずして一致する所があつたといふ譯になる。見やうに依つてはいろ〳〵にいへるであらうが、兎に角蕪村の俳句よりも芭蕉の連句が東洋では比類が希であつたことは確かであると謂へよう。

近頃またふと數年前に出版されたある書を見たら、芭蕉と象徵主義との關係に就いて言及された條があつた。して見れば上述の予の考は果然陳腐であつた譯である。

淡雪に庭は挿木の半ば埋れぬ
　鶯の聲うちまねぶ妹がた枕
椿より桃より赤き撫子の花
　小よろぎの磯邊を行けば貝拾ふ子等
朝顏の花は日に〳〵小さくなりぬ
　子供等が蟬取る竹も折れて風吹く
曉の雪か霙かひまもる風か
　物の底に聞ゆる雞もぬくき古さと

など試みて、田舍のある物にチョイ〳〵載せて見たこともあつた。固より十年前のことで、兒戯に類したものであつたが、それ程に私は蕉風の連俳に興味を有つたのであつた。今後此の連俳の復興することが殆ど望みあるまいと思ふ毎に、私は悲しいのみでなく、國詩の爲に憤激の情をさへ起さずに居れぬのである。

私はいろ〳〵と頭の中が何時も忙しい。貧乏暇無しといふ諺は知證にも應用が出來るので、俳諧雜誌の類はあまり讀んでゐぬ。私のいふことなどは何時も陳腐を極めてゐるかも知れぬ。横着で讀まぬ譯ではなく、始終他の事に追はれるからである。恕して貰ひ度い。

んでゐようとは想はれぬが、蕉風の俳句も亦表現法が甚だしく象徴的であることは、更めて言ふ迄もあるまい。何となれば、蕉風の俳句の所謂取合せ、例へば「五月雨や」と「色紙へぎたる壁の跡」との照合は、連句の二句間の「うつり」と、趣味又は手段に於いて全く同一だからである。たゞ連句程に其の色彩が豊かでない迄である。因みに云ふ、近頃蕉風の連俳を説く者もだん〳〵出て來たが、付味を解釋するのに、兎角、意味の聯絡のみからしようとする傾きのあるのは遺憾である。蕉風のは「付意」といふよりは「付味」である。詞尻や意味の聯絡でなくて趣致風韵の聯絡である。たとひ意味の聯絡はあつても、その上に韻致の聯絡がなければならぬ。さうでなくては蕉風とは謂はれぬので、それが即ち『にほひ』『ひゞき』である。意味で付けるのは『心付』とて、蕉風では舊派として斥ぞけたのであることを忘れてはならぬ。

序でに一言させて貰はう。私は自分で作つてゐるのは和歌の方で、能力や其の他から考へて、俳句や漢詩は作らぬことに十數年前から定めてゐる。一は彼を試みたり是を試みたりするのは、其のものを「弄ぶ」意味になり易いからでもある。しかし蕉風の連俳だけは面白いので、若し相手があつたら試みようと思うたこともあつて、ある友人をそゝのかしたこともあつたが、相手にされなかつたので止めた。其の頃田舎に居たので、何とかして其の表現法だけは眞似て見度いなど思ひ、例の「にひばりつくば」の歌から考へ付いて、「繼歌」の名で、旋頭歌の形（旋頭歌は即ち片歌が二首合して出來たものである）で、

麥が食へるものか。熱ためて來い」と。此の客は自分の土地の習慣上、蕎麥は必ず熱くして食ふものと信じ切つてゐたのである。其所へ冷たい蕎麥を持ち出されたので、一喝して斥ぞけたのである。是も亦世間によくある例である。

連俳が子規氏に依つて殆ど叩き潰されてしまうたのを、俳人達は何と見て居らるゝか。或は子規氏の一失であるなど書いたものも見受けたが、どんな意味で一失とされたか。私は之に就いて俳人の詳しい意見を聽いて見たいと始終思うてゐる。私一個の意見としては蕎麥は熱いのでなくては食つてはならぬと宣傳されたのを、皆が正直に聽從した結果に過ぎまいかと思うてゐる。柔順の美德に對しては、私も彼是いへぬが、蕎麥は冷たい方が美よいと今も信じてゐる。而して芭蕉が折角あれ迄に仕揚げたもの、我が邦の詩形では最高の地位に進んでゐたもの、最も誇るべきものを、むざ〳〵泥溝の底に押し込んでしまうたのを、悲しくもあはれにも、またあまりに解らな過ぎた狂躁な沙汰であつたとも思うてゐる。しかし理窟などはまアどうでも可い。實際問題として、連俳の滅びたことが、俳諧の生命と價値とを縮めたのは疑ひあるまい。

蕉風の「にほひ」「ひゞき」「位」「うつり」は、連句の付味を標した語に過ぎぬが、是等の付味の裏には。淵玄にして幽渺なる象徴主義の表現法を最も多分に含んでゐる。近頃のある人の著書に、佛國の某が、芭蕉とヴエルレエヌとを比したとあるのを見たが、どんな比し方をしたのであるか。句付の連句に迄

本の元祿時代に出た一俳人の捉へた趣味を、廿世紀の歐洲の詩人が始めて高潮したからとて、奇とするには足るまい。たゞ時代や土地が異へば、似は似ても其の間に大なる相違のあることは、更めて言ふ迄も無い。

芭蕉の表現法と蕪村のとは、歐洲風から推せば、芭蕉の方が却て進んでゐる。しかし日本には日本特殊の事情がある。發達の經路が歐洲風でなかつたからとて、毫も差支は無い。たゞ謂へば、蕪村のはさ程負かに平準線から飛離れた處がない。摑み處は先づはあり觸れた古典派浪漫派あたりの處で、更に深く蹈み込んだ處はあまりなかつたやうに思はれる。巧拙は別問題として、表現法に對する思想の置き處目の着け處は、要するに平凡で常識的であつた。技倆をいふのではなく、目の着け處をいふのである蕪村の表現法、即ちやゝ狹い意味の詩想は、漢詩などにも類例は求められる。固より俳諧其れ自體に附隨した特殊味や、蕪村の個性に關聯した異彩は多分に具はつてゐるが、略ぼ似寄りのものは他にも容易に求め得る。然るに芭蕉の連俳に至つては、似たものすら殆ど得られぬ。

子規氏が芭蕉の連俳をも文學にあらずと說いたものは、或は一般のあり觸れた詩の類と、あまりに行き方が違ふので、方途を失つたといふことも、一の原因ではなかつたかと思ふ。私は嘗て斯ういふことを實見したことがある。ある田舍に東京風の看板を揭げた蕎麥屋があつた。其處へある客が來て、品書に依つて笊蕎麥を註文した。それが客の前に据ゑられると、客は忽ち一喝して曰ふ「こんな冷たい蕎

近頃支那學者などの間に、支那の繪畫は餘程進んだもので、西洋の繪畫のなほ未だ到らぬ境地を既に踏んでゐたと說く者もある。而して日本の繪畫は支那のゝ餘波に過ぎず、廣重の風景畫は、宋元の一段下つて俗化したものであるといふやうに見たりなどしてゐる。私は繪畫には尙更素人であるから、立ち入つた議論は出來ぬが、支那畫に廣重のやうな自然と人事との暖かい軟かい微妙な諧調を深く味はせるやうなものがあるかどうか疑問かと思ふ。何事につけても日本のものを貶すのが、一段高い見識でもあるやうな氣のする謬想からは、成るべくお互に避けねばならぬ。しかし支那の風景畫が、西洋のには一寸味はれぬあるものを現はしてゐることは、實際のやうに思はれる。而して日本で之を摹したものなど迚も及ばぬ處があつたことも私は信ずる。同時に光琳や廣重が、支那にも西洋にもあつたとは、私には想像さへし得ぬ。日本は地理上の關係から、大陸に比べれば、いろ〳〵な事に後れてはゐるが、文學や藝術にはそれ程低能でもなかつた。十把一からげなどの國は進んでゐるしどの國は後れてゐるといふやうな說は、餘程斟酌せねばならぬ。、

西洋史と東洋史とを讀み比べると、ある物は兩方が丸で正反對の發達の經路を取つてゐたやうに見える。日本と支那でも餘程事情が違つてゐる。ある物はある國が進みゐる點はある國民が先んじたといふことは幾らもあり得べき事である。支那では宋元頃に旣に爛熟したある繪畫の趣味を、西洋人が今後數十年を經て始めて繰り返すといふやうなこともあるかも知れぬ。私は現にさう信じてゐる一人である。ロ

それ程私は芭蕉の連俳を價値の高いものと見てゐた。而して同窓などに『是非一讀して見給へ』と勸めなどもした。ある校友會の雜誌などにも、私の書いたのは芭蕉の連俳の事か、同鄕の良寛（其の頃には殆ど噂する者も無かつた）の事位より外にはなかつた。其の後先輩に對する意見なども多少、否大に變つて來たが、芭蕉の連輩は立派な文學で、而も價値の最も高いものであるとの意見は、今も毫も變りはない。

歐洲の文學を紹介したものに據ると、歐洲では古典派浪漫派自然派印象派象徵派…最近では表現派…といふ風に發展してゐるといふ、固より國々に依つて事情も異つたり、隨つて經路も同じでなかつたであらうが、象徵派が近代迄では最も進步した表現法を取つてゐたといふことは、私の聽いたり讀んだりした處では、多數の專門家人々の意見が粗ぼ一致してゐるやうである。私は始め芭蕉の連俳を讀んだ時其の表現法の餘程進んだものであることを感じ、何か之に似寄つたものが、西洋にもあるか知らぬなど思うてゐた。其の後象徵派に就いて紹介されたものを讀んで、始めて西洋にも似寄つた處を目ざしてゐるものゝあることを知つた。

象徵主義とはどんなものか、私のやうな者から聽く必要もなからうし、又私もよく判つてゐる譯でもない。たゞ芭蕉の連俳の表現法が、象徵主義の說く所に最も近いものであることだけは、略ぼ謂へるやうに思ふ。之を細論することは、故意と私は避けて置くが、私が斯くいふ迄には多少の涉獵と思索とを積んだものであることだけはいうて置き度い。

を徹底せしめるに多少の補ひともあらうと思ひ、跋代りに引いて置く。

○

私は自分で俳句も連句も作らぬ。自分で作らぬ者の評論は、作る人の許論と、態度に多少相違のあるもので、是は俳句に限つたことではない。私は芭蕉の事を少々調べてゐるが、俳諧を面白く感じた爲に芭蕉を調べる氣になつたのではなく、芭蕉に興味を有つたことが俳諧に心を惹かれた原であつた。それ故私は俳人でない。所謂門外漢である。しかし門外漢であるから評論は却て割合に自由に出來るといふ處もある。且門外漢の評論は、兎角に同情に乏しくてしつくりとせぬものであるが、亦存外門内漢の却て氣の付かぬ處に、まぐれ中りの取得のあることも無いではない。

私は西洋の文學に就いても理解が淺い。其の淺い貧しい知識を應用するのは如何はしく自分でも思はぬでもないが、私が今いはうと思ふことを、最も判り易くする爲の便宜上少々利用させて貰はう。

私は芭蕉に親しんだ最初の學生時代から、寧ろ其の連俳の方に興味を有つてゐた。尤も發句の方は數も少なく、一二年も親しんでゐれば、殆ど大部分暗記の出來る程しか無いので、本で讀む必要がなくなつた爲に、自然に發句集を手にすることが稀になつたといふ處もある。私が何時も耽讀するのは大抵連俳の方であつた。而して學生時代に故子規氏の俳論なども讀んだが、其の『連俳は文學にあらず』との説などは、私は初めから『此の俳諧山師が何をいふか』といふ位に高を括つて、殆ど問題にしなかつた。

る。其の他のものは、多少の取り處も無いではないが、大抵は蕉風連句に對しての根本的な誤解が混つてゐたので、參考になるものは至つて少ない。蕉風の見方解し方は『花故事』のやうなのが正しいので、『七部婆心錄』のやうなのは全然根本を誤つたものである。といふのが予の私見である。蕉風連句のみならず、連句の研究はすべてに亘つてまだあまり手を着けられてないが、蕉風も古來注釋が少なくないに拘らず、『花故事』のやうな正しい見方によつて根本約に研究し直す必要がある。といふのも私の私見である。

近頃深川芭蕉庵跡と稱する(?)地に芭蕉堂が建てられた。行つて見ると、それは稻荷社の境內で、其處は矢張昔の松平遠州侯の邸內の地に當つてゐるが、後に紀州侯の下屋敷となり、維新後に米倉一平氏の別莊とかになつた地であるといふ。大正六年とかの洪水の際に、別莊の泉水の傍に置いてあつた多くの石造の蛙中の一が出て來たので、その附近の稻荷境內に、今度嘗て紀藩の茂承公が造らせた芭蕉像を手に入れて、堂を建てゝ祀つたのであるとかいふ。其の泉水が果して例の古池の跡だとの傳へでもあつたのか、詳しく關係者に聽き度いと思うたが、時間の都合で出來なかつた。能登屋からは西南の萬年橋に近い處であるが、地理の上から想像して、予には能登屋邊の處が庵の遺跡といふが實に近いやうな氣がされる。但し詳を聽く迄はしばらく考定を控へて置く。

左の一篇は、嘗て某雜誌に載せたもので、同じやうな說をあまりに度々繰返すに當るが、本書の主意

思ふ。古い注で予のと畧ぼ同じい說もある。

「はやり來て撫子飾る正月に」は古い注に「流行正月」とて、流行病のある時、疫拂ひの意味で月を撰ばず正月をし直すをいうたので、此の句は六月頃それをした意で「撫子飾る」といふたのだとの解がある。是に從ふと此の句の意もよく通じ、且付句の「鼓手向くる辨慶の宮」も、其の疫病禳の祈禱の心持も含むことになつて面白い。しかし流行正月の事は、予はまだ他書に記されたものも見ず、一二の博識なる先輩に質しても見たが、心當りがないといふので、しばらく疑問にして置く。若し此の意だと句中の「はやり」を名詞として流行病の意に取らねばならぬやうである。兎に角正月に「撫子飾る」といふのだから六月頃の正月か、又撫子が常の植物の撫子でなくて他の物であるか、どちらかでなければならぬ。

『冬之日』頃の連句は難解で、わからぬといふが當然である。强ひて明白にしようとすれば牽强附會に終る外はない。さればとて全然謎扱ひにするにも及ばぬので、解し試み得られる處は試みて可い。たゞ呉々も注意すべきは、意味だけで二句間の聯絡をつけて解釋しようとしてはならぬことゝ、なほ一つは付けた意を全然變へて取つて更にそれに次句を付けたものとの見に囚へられてはならぬことゝである。古風と蕉風との相違は茲に在る。是を誤つては大本を誤るので、どのやうに巧妙な又精到な注釋をしても畢竟は無駄な强解に陷つてしまふのである。

予が蕉風連句の注解として取るものは、芭蕉の自注との傳へのある『初懷紙』の注の『花故事』だけであ

炭賣の己が妻こそ黒からめ　　重五

此の「黒からめ」を「色こそ黒からうが常珍らしからう」の意と取る方が却て可いではないかとの說もあつた。元來右の前書は萬葉の「難波人蘆火たく家の（如く）煤してあれど己が妻こそ常珍しき」に依つたのであらうが、此の歌の意は蘆火たく家の如く煤けて黒く醜いが、自分の妻はいつも愛らしいといふのだけれども、右の前書は此の意には取れぬ。即ち「蘆火たく吾が家こそ煤けて穢くろしいが」の意としか取れぬ。さうとすると、發句は家こそ「穢くろしいが」「己が妻こそは黒く煤けてはゐまじく、或は美しからう」とつゞくやうな意に取るべきであらうと予は思うたのである。さうせぬと前書とのつゞきが惡く「家こそは穢くろしいが」と前書で言うて、又「妻は黒いが」と變にくどく言うた事になつて、如何にも面白くない。且脇句の「人の粧ひを鏡磨寒」には、美くしい妻の爲に眞黒になつて働く炭賣の境界がうつされてあるものと解さぬではひつたりせぬ。色の黒い妻のうつりに「粧ひ」や「鏡」はそぐはぬ。其の妻を白い美くしい女として始めて脇句が生きて來るのである。と予は解し度い。それで予は矢張「からめ」を反語即ち「からんや」の意として取り度い。無論和歌などならばこんな誤用はせぬが、俳諧では是位の無理は幾らもあつた。「黒いだらうが珍らしからう」と解すると、萬葉の歌の意と全く同一になつて、面白くないでもないが、此の解は萬葉の歌の意に累せられた考でないかと思ふ。「黒くこそあらめ」の意を「妻こそ黒からめ」は、前述の如く前後との關係が妙でないのみならず、語としても無理過ぎはしないかと

頃には幾らもゐるが、脇句で而も五巻の首位に置いたものには餘りに奇に思はれる。それで又「たぞやとはしる」の「ぞ」の濁點を筆工が過つて『は』に附したのでないかとも思うて見たが、あまり臆測を逞うするのも如何であるから差控へて置く。兎も角も合點の行き難い句である。古い注でも「とばしる」は變だというてゐる者もある。

「消えぬ卒都婆にすご〱と泣く」の「消えぬ」は卒都婆の文字と解するが可からうとの説もあつた。その方が當つてゐるかも知れぬ。

「霜にまだ見る蕣の食」の「食」は、一書にショクと讀ませてゐるが、予はジキ（食事をジキといふは古く、又今もある地方ではいふ）と讀んで見たが、或はメシと訓むべき語かも知れぬ。食の字を飯の意に用ひた例は俳諧でも多い。

「雨こゆる淺香の田螺掘り植ゑて」の「雨こゆる」を「雨越ゆる」と解して、例の「水越ゆる」の意味で淺香の枕詞に使つたのだと主張した者もあつた。古注は多く其の説であるが、「水越ゆる」を「雨越ゆる」は少々無理であるまいかとも思うたので、予は「雨肥ゆる」で雨に肥えたと田螺の形容の意に解したのである（雨肥えた淺香の沼の意では無論ない）但し又飜つて思ふに、當時の蕉風としては「水越ゆる」を「雨越ゆる」とは隨分いひさうなことでもある。依つてしばらく疑問として置かう。

難波津にあし火燒家はすゝけたれど

るが、どちらにしても發句の人を形容した意になる）發句脇が辭儀の意に應答された例は甚だ多く、たとへば「旅寢よし宿は師走の夕月夜芭蕉。庭さへぜばくつもる薄雪一井」「涼しさを我が宿にしてねまるなり芭蕉。常の蚊遣に草の葉を焚崎風」の類は數ふるに勝へぬ程ある。特に久しぶりに會うた遠來の客などに對した時は、辭儀で應答するのが殆ど例になつてゐる。『比左古』首頭の「木の下は汁も膾も櫻哉芭蕉。西日のどかによき天氣也　珍碩」なども挨拶の意を含めた脇と思はれるが、それは確かでないけれども「いろ／＼の名もむつかしや春の草珍碩。打たれて蝶の夢はさめぬる芭蕉」などは確かに辭儀の意を有つてゐるやうである。右のやうな譯で予は「誰ぞやと走る」と解してゐたのである。尤も發句の人の狀を形容した脇句も幾らもあるが、發句で芭蕉が自身の事をいうてゐるのに、脇句で其の人を「誰ぞや」などゝいうて說明するのは如何にも訝しい。然るに其の後に得た『冬之日』の原本を近頃ふと見ると、それには明らかに「とばしる」と「は」に濁點が打つてある。此の原本は、或は貞享板でなくて再板本だとの說もあるが、予は貞享板の後刷本らしく想像してゐる。兎に角貞享の初板本が出ぬ內は是を原本と見做して置いて差支ないと思ふ。其の本に「とばしる」とあるのだから、それに從つて解釋するが穩當である。それで予は一先づ自分の「と走る」と淸讀する考を撤回して置かうと思ふ。それは印本で濁點のあるべきを省くのは常例であるが、淸むべきに態々濁點を附した例は希有だからである。しかし又飜つて思ふに「誰ぞやとばしる」は如何にも變である。平句ならば耳遠い奇語を使うた例も『冬之日』

ある先輩からかういふ質問があつた。予の芭蕉連句の解釋は、古人の解釋にあまり便らな過ぎはせぬか。即ち古い解釋にももつと取るべき處はないかと。是は尤もな質問である。無論あの小冊子で一々古い註釋を紹介批評してゐる餘地はなかつた。けれども予の解釋は、一時一寸思ひついた事を書き散らしたのでなく、大抵は前から何遍も考へたり思ひ直して見たりした處を書いたのである。考へ違ひも幾らもあるべきであるが、相應に精練を經た考へであることだけは諒察して置いて貰ひ度い。(たゞ早く書き終らねばならなかつたので、書物を殆ど見ずに、空で書いた爲の誤脱が少なくなかつた)

『冬之日』の「狂句凩の」の脇句「たそやとはしる笠の山茶花」の「とはしる」は、古い註共は大抵「とばしる」と讀んで、山茶花の花が散亂することだと解釋してゐる。予はどうも變に思ひ、「誰ぞやと走る」で發句の人(即ち芭蕉)に對する辭儀（あいさつ）の意を含んだ脇(遠方からの客などに對する時は、發句と脇とで互の辭儀の意を含めることが多く、特に一集の首頭に置く歌仙などにはそれが少なくない)と解釋してゐた。即ち當句の竹齋に似た人を、脇句の人が、あれは誰ぞやと、發句の人の笠に挿した山茶花を目あてに走つて追かけた意に解釋したのである。さう取ると、辭儀の脇句となつて、野水が師の芭蕉に對する敬慕親愛の情も自づからあらはれて來る。「とばしる」は「とばしるも顔ににほへる薺かな」などの用例もあるが、花の散りかゝるのを「とばしる」は語が奇に過ぐるのみならず、句意も發句の人の狀を形容したものゝやうになる。(笠の山茶花は、笠に挿した山茶花とも、垣根などの山茶花が笠に散りかゝる狀とも取れ

としては「にや」が普通である。

無名庵に關係のある藤堂白舌公は、年代から推すと妥女元甫であらうといふ。元甫は六十九歳の時、宗家の嗣子が幼なかつた爲に、支家から入つて城代となつた人で、令名があつた。博學多識で、『三國地誌』(伊賀伊勢志摩の地誌)百十二卷、隨筆『思川の記』等の著もあり、且名勝の保存や史蹟の表彰に努めた和歌の家集もある。といふことである。此の人の隨筆歌集など閲したら、得る所があるかも知れぬが、未だその機會を得ぬ。(以上の數項は主として上野中學校佐々木教諭の調査に據る)

半左衛門の子孫が死に絶えたといふは誤りで、其の子孫は、明治十八年まで赤阪町の舊宅に居住し、後魚町に移つたが、現に當主を松尾萬吉氏というて、今も儼存してゐるといふ。竹二坊の芭蕉傳には間違ひだらけの書であるから、子孫が疫病で死に斷えたといふは誤聞かも知れぬが、斯樣な事は外の事と違うて、無造作に間違と斷ずることも出來ぬ。系譜なども精査せずして、現存の松尾氏が直に半左衛門の後裔だと決めるのは如何かと思ふ。一時斷絶した家を、親戚などから新たに入つて再興するといふも、幾らもある事だからである。

予は昨年『芭蕉七部集』と題する小冊子を文獻書院の依頼に依つて出したが、其の中に書いてあることに就いて、知人などから折々質問を受けた。其の質問中の二三を玆で説明して置かう。本書の記事と重複する處もあるが、本書にも深い關係があり、且予に取つては多少興味ある事柄だからだある。

を名乗らせられたに過ぎぬ家らしい。即ち藤堂家の重臣で、式部家豊前家玄蕃家、前記の出雲家妥女家なども皆それであつたといふ。

新七郎家の本邸は上野町丸之内の今の小學校の邊で、別邸が即ち玄蕃町に在つたのだといふ。蟬吟公は若殿であつたから、或は此の別邸の方に居り、芭蕉の宗房は此の邸に仕へてゐたのかも知れぬ。別邸の方は兄半左衛門の宅の直ぐ附近である。探丸公は蟬吟公の弟であつたが、蟬吟公に子が無かつたので後を嗣いだのらしい。芭蕉が招かれて「さま〳〵の事」の句を詠んだのも此の別邸であつたと傳へられてゐる。蟬吟公の墓は露人の發見で明らかになつたが、公の年齡を知り度いと思うて山溪寺の位牌や何かいろ〳〵と調べて見たが、判らなかつた。芭蕉よりも年長であつたらうと想像されるが明らかでない。

芭蕉が亡命した年齡は疑問として遺し置くの外ないが、或は蟬吟公歿後間もなく致仕し、しばらく鄉里や京阪間に流浪生活を送り、二十九歲で江戶に出たのかも知れぬ。而して「雲と隔つ」の句を詠んだのは、或は江戶に出る時の事でないとも限らぬが、人の門に遺して出奔したとの傳へを實とすると、矢張藤堂家を致仕する時のと考へるが自然なやうに思はれる。此の句「友にや」とも傳はつて、或は此の方が好からうとの說もあるが、矢張「友かや」の方が語法が整うてゐるやうに思ふ。「にや」は「にやせん」の意となるから、「雁の生別れ」に聯かつゞきが惡くなる。「かや」ならば「なるか」(やは嘆詞)で、あの雁も生き別れしつゝあるは、雲と隔たり行く我が友であるかの意となつて落付きが好いやうである。但し用例

明三年）は集め方がやゝ亂雜である。其の他『もとの水』（天明七年重厚輯？）や井上士朗の『芭蕉翁眞跡』（士朗に此の書の序があるから、此の書もあつたと判る迄で、未だ見ぬ）などがある。

芭蕉の文章を集めた古いものでは小林風德の『芭蕉文集』（安永二年）蝶夢の『翁文章』（安永五年序）などがある。『一葉集』の文之部は是等と順序も違ひ、何に據つたのか知らぬが、數は多いやうである。松村桃鏡の『芭蕉文集』は未だ見ぬ。『蓬萊島』（安永四年刊）も芭蕉の文章を集めたものである。沼波氏の『芭蕉全集』の文集部は、年代順に並べてあるから便利である。此の外斷片的に集めたものは多いが、上記のもの位で大概間に合はう。

右に擧げた書中の大部分は自分の手許に所藏してゐぬものであるから、著者板年を誤まつたり、著名の書の脫漏したりしたものもあらう。精校の機會がなかつたので、しばらく其のまゝ揭げて置く。

第三節　補　記

芭蕉の宗房の仕へた藤堂新七郎を上野城代の家だと傳へた者もあるが、それは全く誤りであるらしい最初の城代は藤堂出雲高清で、是を出雲家と稱した。後藤堂采女元則が之に代り、之を采女家と稱した爾來維新の際迄此の家が城代であつた。維新後此の家は本姓の保田に復したといふことである。『寬政重修諸家譜』などにも新七郎家の事が記載してなく、單に家臣新七郎良勝など見えてゐるのみで、あまりに訝かしいので、だん〳〵聞いたり調べたりして見ると、藤堂家の血緣の家ではなくて、政略上藤堂姓

のに當つてゐる。內容は簡單であるが、芭蕉の意がよく傳へられてあるやうで、又僞作らししい著い點も見えぬ。どういふ理由で僞作だといふのか、未だ詳しい說を聽かぬが、予の私見では、芭蕉の遺語として參考すべき書の一であると思ふ。刊本があまり新らしいので疑はれたのかも知れぬ。尤も此の書が芭蕉の消息中に云うてある『山中問答』其のまゝのものであるかどうかは、卒かに斷言することは出來ぬ。或はさうでないらしく思はれる處もある。

沼波の『俳論史』（明治四十年）と題する小冊子は、あまりに簡單過ぎるが、芭蕉及び門下の俳論にも多少言及してある。博文館の俳諧文庫の『俳諧論集』正續二冊、及び俳諧叢書の『俳論作法集』等には、古くからの俳論の書を收載してあつて、便利である。

芭蕉の消息を輯めたものに蓼太の輯めた『芭蕉翁眞蹟集』があつて、材料は松村伊兵衛（桃鏡の祖父）の家から多く出てゐるやうである。次に『同拾遺』（寫本として傳はる。沼波氏の芭蕉全集に引いてあつて參考し得る）がある。前者は眞蹟のまゝを摹刻したもので、芭蕉の筆蹟の參考ともなり、有益の書である。『芭蕉翁手鑑』（嘉永三年石外輯）は、蓼太のを取つて、之を削つたものと見え、大部分全く同じくて數がやゝ少なく、新材料は極めて僅かしか入れてない。闌更の輯めた『芭蕉消息集』は、天明六年の刊で此の殆ど全部其のまゝを、『一葉集』消息部に取つてあり、且他書からも補うてあつて便利であるが、原本と多少の異同もあり、且消息集は所持者の名を出してあるが、一葉の方は省いてある。『翁反故』（天

書にもよく引かれてゐるが、如何さま芭蕉らしくない處があり、俳論としては、大なる價値を認め難いものである。予は私かに之を假託の書と信ずるのであるが、其の理由は繁雜に亘るから略して置く。但し中の芭蕉に關する逸話等は、萬更捏造したものゝみでもあるまじく、根據のありさうなのもあるので本書中にも幾らか引いた。確かではない迄も、多少の參考にはならう。

有也無耶關

『俳諧有也無耶關』は明和元年の板(?)で、奥に落柿舍三世主人などあり、蕉風の俳諧の法式を說いた書である。俳諧文庫の此の書の解題(巖谷小波氏)に「正しく芭蕉が作なり」と斷定してゐるのは、何の據所あつてか。『句選年考』(最中の桃の句の條)にも「按ずるに有耶無耶の關は芭蕉の作と云ふとも、僞書と思はるゝ也」と云うてゐる。此の說に從ふべきで、芭蕉には例の十七體の訓の外には、式目の書など全く無かつたと思はれるのである。或書に此の書は千那(であつたか)の所傳の由あつたが、果してさうであるか。兎に角芭蕉の所說らしい處が殆ど無い。よし芭蕉の書とした處で、重きを置くに足らぬ。

山中問答

文隣編纂の五書中、俳論と見るべきものが寧ろ多いが、便宜上本節の初めに一括して批評した。然るに僞書說のあるもので、例へば『山中問答』の如きは、予は却て正しいものでないかと思ふのである。此の書は、芭蕉の奥州行脚の歸途、加賀の山中溫泉で北枝に語つた說を、北枝が筆記したもので、附錄として北枝の附方八方自他傳が添へてあり、後に也同といふ者の刊である。此の問答の事は、芭蕉が北枝に與へる書(消息集)にも「山中問答にも二つ物の事御尋なく」「山中問答へ御書加へ可レ被レ成候」などある

しく、去來關係の書中最もよく出來てゐる處が、却て最も後に出來た所以ではなからうかと疑はれるのである。但し此の書の内容が悉く疑はしいといふのではない。たゞ芭蕉に關する材料としては、『湖東問答』などよりも、やゝ不安心だといふ迄である。予は全部疑ひ無き去來の遺書として取扱ふには、聊か躊躇せざるを得ぬのである。但し蕉風に精通したものゝ手を經た書であることは疑ひ無く、蕉風の研究には、少なからず役に立つもので、予も本書中に屢〻引いた譯である。

『去來抄』には別本もあつたものか、『句選年考』の「八九間空で雨降る」の句の條下に、「去來抄に曰、素行曰、此句は其裝ひは知りぬ。落所確かならぬと云々」とあるが、今の『去來抄』の板本には此の條は無い。此の條と同じい文言が『梟日記』に見えてゐて、年考は此の書と『去來抄』との文字の相違を注してゐる程であるから、他書を『去來抄』と誤つて引いたものとは思はれぬ。さすれば、確かに此の條のある去來抄』もあつたものと見える。『隨齋諧話』に流布本は古實篇を除いたとあるそれに當るのか。

『俳諧三冊子』(白双紙、赤双紙、黑双紙の三冊子を合したもの)は、芭蕉門の伊賀の服部土房が、芭蕉から聽いた俳話を記したものと傳へられ、安永五年に闌更が序して世に出したもの(享和元年再版)である。此の書は僞作說があつて、『句選年考』の頭書にも、此の闌更板を「伊賀の土房筆記也と云ふ。虛實不分明也」と曰ひ、「赤双紙」に就いて「三草紙は云々。是は芭蕉覺書にて、翁の國の禪僧何某が所持也。此赤草紙は、其名を借りて作せる物か」と云うてゐる。此の書も『去來抄』等に次いで有名なもので、他

月も不明であるが（安永四年板の花實集の上卷が柿晋問答で湖十の序があつて是等が最古の板本かと云）內容は『去來抄』と過半、否大部分同じ物である。而して『去來抄』の方には去來曰としてある語で、此の書の方には其角曰となつてゐる處も少なくない。此の書の信用し得べき程度も、聊か疑問で、『去來抄』とどちらが先に出たのであるか等も、なほ精査すべきであるが、何れにせよ、二者は深い關係がある。或は一つの元から分れて出たのかも知れぬ。兎に角『去來抄』は外見上『湖東問答』と此の『柿晋問答』とを巧みに取捨綴合して整理を加へたもののやうに見える。『湖東問答』は寶暦十一年（旅寢論と內容は同じいやうであるが、旅寢論と題したものは、もつと古い寫本があつたやうに思ふ）即ち『去來抄』の出板に先だつこと十五年に上木したものである。其の蓼太の跋に、例の芭蕉の六感があつて、其れに去來の「應々といへど叩くや雪の門」の句が出てゐるが、『去來抄』にも『柿晋問答』にも、此の句を芭蕉歿後の吟としてある。此の六感などはどうでも宜しいが、是は蓼太が當時なほ『去來抄』を見てゐなかつたらしい一證にはなるかも知れぬ。『去來抄』の明和年間の寫本（蝶夢奥書）は見たが、もつと古い板本又は寫本もあるかどうか。（蕉門評が果して去來抄であるかどうか）久原文庫の所藏に、奥書に去來の自筆の由ある『去來抄』の寫本があるが、無論去來の自筆といふは疑はしく、もつと後のものであらう。併し是が或は『去來抄』の原稿本かも知れぬ。此の書に就いては藤井先生が目下研究されて居られるやうであるから、いづれ意見を發表されるであらう。兎に角『去來抄』は、去來の草稿其のままのものなどでは無論ないら

題する書が、此の去來抄であらうともいふが、原本を見ぬから、判然せぬ）それから又首を傾けさせるのは、内容が餘りに整頓し過ぎ文章もよく出來過ぎてゐて『湖東問答』などゝ大分調子の違つてゐる點である。又句評等でも、例へば、越人の「羨まし思ひ切る時猫の聲」を芭蕉が評して「心に俗情ある者、一度口に不レ出といふこと無し。彼が風雅茲に至りて本情を露はせり」と云うたと記してあるが如き、芭蕉らしもなく、又其れを態々記すなどは去來らしくもない。況や此の句は去來等の撰した『猿蓑』に立派に載せてあり、且更に去來は他の文では此の句を賞めて居るをや。又凩の荷兮の句と去來のとを比べて、芭蕉が去來のを「全體の好句也」など賞めてゐるのも首肯し難いが、其れを誇らしげに態々去來が記すといふのも訝かしい。（去來の句は理窟を含み、荷兮の句の方が却て優れてゐると思ふ）但し是等は、去來の話を聽いた者が誇張して記したと見れば、强ひて疑ふにも及ぶまいか。凡兆の「下京や雪積む上の夜の雨」の「下京や」に關する芭蕉の「汝手柄に云々」なども芭蕉の口吻らしくないが、是も仰山に記されたものとすれば解されぬこともない。『笈之小文』のことを記して「先師自撰の集也。名を聞ていまだ書を見ず。草稿半ばにして遷化まし〳〵ける云々」とある條は、『笈日記』の序の意に似てゐるが、後者及び『湖東問答』の意では、思うたゞけで、實行はしなかつたやうに聞える。此の條も聊か訝かしい處がある此の樣な處は少なくないが、更に訝かしい事がある。其角と去來との俳論を一所に集め、去來の序で記したものに『旆晉問答』と題した書があつて、予の見た書は文化頃よりもなほ後の新刷本らしく、出板年

其の他紀行以外で、三等文を解釋したもの丶類も多少あるが、太して役に立つものは少ない。『幻住庵記』に、江州の人(?)櫻門の私解(寫本)等があるが、是等もさしたるものでない。

芭蕉の俳論では、『去來抄』が最も名高いが、是は確かに去來の著であるかどうか、多少の疑ひを有つたものであることは、下にいはう。去來の『湖東問答』許六の『俳諧問答』其角の『雜談集』其の他直弟子の著書は、何れも參考せねばならぬこと言ふ迄も無い。是等を一纏めにして『一葉集』遺語部に引いてあるが、出處を明らかにしてないのは、甚だ困る。蝶夢の『蕉門俳諧語錄』も、之と似たものであるが、是も出處を記してはない。近頃出た荻原井泉水氏の『芭蕉の言葉』も、沼波氏の『芭蕉全集』遺語の部(一葉集に依る)も、何れもさうである。大部分は出典が判つてゐる筈であるから、出典に依つて分けた遺語集の早く世に出んことを切望する。出處の確否を先づ考へずに芭蕉の語とあれば、何もかも掻き集めた語錄に據つて、芭蕉は斯う思考した、斯う主張したと說くのは、危險此の上も無いこと勿論である。次に多少の疑問を有つた書を擧げて見よう。

◦去來抄

『去來抄』は、古今の俳論中でも有數の名著である。此の書は餘りよく出來て、如何にも去來の人と爲りにひつたり箝つてゐるやうなので、古來俳人の齊しく尊信したものであるが、訝かしい點も聊かある第一、是程の名著であるのに、其の傳來が少々曖昧である。此の書は去來歿後七十餘年の安永四年に曉臺(士朗跋)が出板したのであるが、それ迄誰の手をどう經たものか、明らかでない。(延享板の蕉門許さ

てあつて、是には尾花澤の清風(前編奥羽行脚の條參看)が蕉風に歸した逸話など記してある。即ち清風はもと不學無風流な紅花商人で、金あるに任せ、遊蕩に耽り、紅花大盡と呼ばれてゐたが、貞享何年かの、ある花見に、雅人の爲に想はぬ耻を受け、後又芭蕉に會うて俳道を聽き、遂に其の弟子になつたといふのである。是は清風が當時既に古風の一廉の俳人であり、撰集なども出してゐた事實と合はぬので誤傳とは想はれるが、話は一寸面白い。其の他多少の參考になる話が載せてある。『奧細道解』は天明七年の稿本で、文政十二年止隅寫とある簡單なものである。春星堂鶯宿に『鼇頭奧之細道』といふがあるが、注はあまり參考にならぬ。又此の書中の挿繪は蕪村の畫(春星堂も蕪村の號を嗣いだので蕪村の弟子か)であると奧書にあるが、蕪村の畫などゝは似ても似つかぬ拙畫である。其日庵錦江にも『奧細道通解』(安政五年序に、予築地公邸に在りし時、務の暇に云々とある)があつて、是は菅菰抄などよりも幾らか正確なやうである。『奧細道考』といふ田喜庵護物の自筆本(洒竹文庫本)もあるが、簡單である。其角筆の『奧之細道』には、老鼠堂永機の注が少しばかり入つてゐるが、其の少しばかりの内で、誤りの方が寧ろ多い程粗惡な注である。其の他一二あるが、未だ見ぬ。新らしいものゝ中でも、二三あるやうであるが、中に木村架空氏の新釋(明治二十九年)が好いといふことである。予は精讀して見ねが、地理なども、相當に注意してゐるやうである。小林某のも一寸見たが、地理などには、あまり考へ及んでゐぬやうである。(紀行文の解釋には地理の穿鑿が肝腎なこと言ふ迄も無い)

『炭俵』では遠藤曰人の『壽身俵注』(文化元年稿本)は未だ見ぬ。明治三十年に美濃の俳仙堂棚橋碌々といふ人が『炭俵集注解』(和裝二冊)を出してゐる。惜い哉印刷が甚だ惡く、注も立入つた處が無いやうである。

『續猿蓑』では尺木堂公石の『續猿蓑注解』月院社何丸の同じく『續猿蓑注解』がある。前者は月院社何丸撰擇、尺木堂公石著(公石は何丸の子)とあつて、板年が記してない。又後者は『俳諧書籍目錄』(新群書本)に出て、文政六年としてあるが、或は前者と同書で、何丸著として板年を入れたものでないかと思ふが、未だ原本を見ぬから判らぬ。

『野ざらし紀行』には翠園抄(文化十年)があつて、石河積翠(前出)の著であるが、あまり詳しくはない(俳諧年表に桃隣とあるば、此の人の跋があるので誤つたのか。此の桃隣は五世か)大垣の輕花坊といふ者に『泊船集注解』(文化九年序)といふがあつて、其の「紀行之部」は、此の紀行の注である(後を出さなかつたものか)が、積翠のには較べ物にならぬ程簡略である。『奧之細道』には簑笠庵梨一の『菅菰抄』(安永七年板)があつて、可なりの出來であるが、誤りも多く、粗漏な點もある。卷頭の芭蕉傳のことは前にいうた。序や本文中に附錄を添へるやうに記されてあるが、洒竹文庫本に梨一の『奧細道菅菰抄附錄』と題する寫本があつて、未だ精密に、菅菰抄の本文中に附錄に云々とある個條と、此の書の內容とを對照して見ぬけれども、多分是が卽ち其の書であらう。此の書には、「奇談雜話」と題するものが附載し

面白くもあり、又難かしくあるだけに、注書は最も多い。今里露休(石河積翠の友)の『冬之日附合考』は寫本で天明三年の序がある。(予の所藏してゐるのは著書の自筆稿本かも知れぬ)先づ可も無く不可も無い著で、取るべき説は多くない。江戸の人柳津魚潛にも同名の書がある。木陰庵の『冬之日解』(寛政六年)蘭叓の『冬之日解』(同年)共に未だ見ぬが、或は同書か。黄華庵竹六(文化十年歿す)の『冬之日注解』(寛政八年)二卷は、最も詳しいもので、相應に骨折つたものらしく、可なりによく出來てゐる。多分同書の註釋書中の白眉であらう。但し物足らぬ點も甚だ多い。矢張他の註釋家と同じく、古風の頭が混つてゐて、解釋も古風臭を帶びた處があるのは、是非も無い。升六は桃居門、或は云ふ、二柳門の俳人で相當の位地を占めてゐた人で、他に撰集などもある。虬月菴素綾の『冬之日解』(本名七部木槌)は寛政九年刊で、小冊子で、太したものではない。隨齋成美の『冬之日解』(文化六年)は、原本は未だ見ぬが、他書に引いてあるので見ると、好著のやうである。藍亭靑藍の『七部集初學』(寫本、冬之日だけ)も小著である。七部集全部の注の中に此の集もあること言ふ迄も無い。是程多くの注があるが、『花故事』に浪隨し得るやうな蕉風の眞髓を得たと思はれるものは殆ど無い。

『猿蓑』だけを注したものに杜勒の『猿蓑爪じるし』(天明七年)といふがあるといふ(俳書目)が未だ見ぬ東杵菴稱柯の『猿蓑さがし』(逆志抄とあるも同じい。萬延元年板、小本七冊)は、前に猿蓑註釋の例として引いたやうな注である。『猿蓑附合注解』は明治二十年矢部指直の著で、是れも一寸したものである。

部礫斷』（伊藤氏類題七部集に依る。未見）『標註七部集』（元治元年刊西馬述幹雄編、簡單乍ら一寸要を得た便利な書）など、まだ幾らもあらう。前節に舉げた曉臺の著は、是等の中の重要なものである。明治以後では二十六年に活版本二冊の『七部集講義』が出てゐる。著者は楠蔭波鷗といふ人で、連句だけの解であるが、可なり丁寧に解してゐる。但し同意し難い處が多いやうである。其の他斷片的の小著は時折出たが、纏つたものは無かつたやうである。なほ『七部集連句早見』（嘉永元年寄三輯、俳諧文庫にも收めてある）は、七部集の各句の四季、戀、月、花等を一見して直ぐ判るやうに符號で表はしたもので、一寸便利な書である。車蓋の『蕉門格外辯』と共に、蕉風の去嫌等の取扱方を手取早く知らん爲には座右に供へ置くべき好書である。

近頃出たもの

近頃出たものに『類題七部集』（伊藤松宇氏）『芭蕉俳句全錄』（荻原井泉水氏）などがある。前者は、其の名の如く類題で、卷末には七部集の變遷の説明や、註釋書の解題があつて、有益な參考書である。後者は年代順芭蕉俳句集と、作者別七部俳句集とを合本にしたもので、是も一寸便利であらう。但し全錄とあるけれども、洩れてゐるものも大分ある。併し集め方は好いやうである。又作者の略傳は、予は未だよく讀んで見ぬが、多少の參考にはならう。二書共連句は省いてあつて、予等から見れば、甚だ物足らぬ心地がする。小林某の七部集連句の評釋かの書は、よく讀んで見ぬが、嵩だけは可なりに大きい。

七部各集の注書

次に七部各集を別々に註釋した目ぼしいものを紹介しよう。七部集中では『冬の日』が最も特色もあり

前句の「意」に依つて付けるのは、其の付方の如何に係はらず、所謂「意付」で、蕉風の「句付」とは違ふ。前句を斯く〳〵の「意」に「見て」又は「取つて」付けるのは、檀林以前の俳風である。「句付」とは、繰返しいふ如く、前句の趣致風韻に依つて付けるのをいふである。然るに曲齋は、悉く「意」からのみ解してゐる。（後編續猿蓑註釋の例參看）趣致風韻の微妙なる變化は、意の上に似たやうなことが多少續いたとて強ひてそれには拘はる必要がないのである。是等のことも、佐々氏なども理窟では相應に明白に云うてゐるが、曲齋の注を元祿俳諧をよく解したものゝ如く稱揚してゐる處を見ると、甚だ訝かしく思はれるのである。曲齋には、此の書の外に『貞享式海印錄』といふ大著があるが、是等もあまりに參考にはならぬやうである。本を失して末の合ふことは殆どあり得ない。

岡本保孝の況齋叢書に『七部集打聽』といふ奇著が收めてあるが、此の原本であらう、況齋自筆本八冊（洒竹文庫本）がある。此の人は立派な學者であるが、俳諧は專門以外であつた爲か、あまり取るべき解釋も無いやうである。同じく國學者の富士谷成章に『俳諧手爾波抄』（文化四年刊）といふのもあつた。上に擧げたものゝ外、『鼇頭增註蕉翁八部集纂解大成』（寫本四冊）『俳諧古集之辯』（寬政四年板、正續猿蓑炭俵の解、遲日菴杜哉及び桃溪著）『七部十寸鏡』（天堂一叟、板本も寫本も、よくある書らしい。冬之日瓢、續猿蓑の注である）『元祿調引證』（七部集の注及び書入）それから隨齋成美校正とある『標注七部集草稿』（纂弦と題する稿本一卷もある由）其日庵錦江の大著『七部通旨』（十六冊、嘉永二年）遠藤曰人の『七

三句のうつり

曲齋の注

振々亭三路の著で、蓼太風の解に依つた七部集の頭注であるが、注としては、太したものではない。三路には他にも註釋書がある。月院社何丸が、句解大成と共に、畢生の心血を注いだ大著『七部集大鏡』は文政六年に成り、同十年頃の出板で、中には諸家の説を引用してあるが、前にいうた句解大成と同じく何丸自身の説よりも、是等の引用した説の方が却て役に立つやうである。此の大鏡の補遺として『七部小鏡』と題する小著もある。此の書は、主として『猿蓑さがし』の誤謬を指斥したもので、中々面白い意見や材料もあつて一讀すべき書である。故佐々醒雪氏などは、大鏡を貶して、次にいふ曲齋の書を稱揚してゐたが、予は全く是と反對の意見を有つてゐる。三句四句を同一情趣で解したとて、佐々氏などは非難してゐるが、元祿俳諧の「三句のうつり」とは、曲齋等のいふやうなものではない。前句の趣致風韻が、移るを知らずして自づから移つて行く處に妙味があるので、前句の句意を故らに急劇に轉じて句を付けるのは、古風のやり方である。大鏡が三句も四句も同じやうな心持で解した處は、從ふことは出來ぬが、さりとて是等を皆一圖に排斥することも出來ぬ。『冬の日』などには、どうしても三四句に亘つていづれも仙界の趣を詠んだとしか解釋し得ぬ句も續いてゐる。同一情景を引く(○繰返すこと)を嫌ふといふことに拘つて、無理にでも情景を全然變へねば解釋し得ぬやうな膠着した强解は、避けねばならぬ然るに一句々々、必ず前句の付けた時の意を全然變へて後句を付けたやうに傅會强解したのが、曲齋(歿年等未詳)の『七部婆心錄』(萬延元年板)で、全部を通じて此の傅會と强解とを以て滿たしてある。抑も

書の原本と同じやうであるから、大部分原本を板下にして刻したのであらう。雪中庵二世の吏登が「七部搜」（蓼太刊、後にいふ）を講じたのが寛保二年といふから、それよりも前であらう。再板の出たのが寛政七年である。又是より先、安永三年には小本の七部集（塙保己一序、蜀山人跋と云）が出てゐる。それから續々と七部集類が出たが、此の內芭蕉に關係あるものを擧げよう。『七部拾遺』は護車等編享和三年刊（？）で、月居と蒼虬の序があり、中には、初懷紙、野洒紀行、三歌仙、一つ橋、桃の實、初便、其袋が收めてある。是に先つて、之と同名の書で、內容の異うた小冊で、車蓋等編闌更序天明五年刊のもあつた。（俳諧年表文政元年の項に「七部拾遺成る」とあるものは未見）『續七部集』は寛政七年闌吏序、享和三年刊で、深川集、卯辰集、韻塞、砥並山、有磯海、小文庫、千鳥掛を收めてある。浪花（？）の醉室其成といふ者の『新七部集』（一名七部餘錄）は文政十一年刊で、田舍句合、常盤屋句合、續が原、武藏曲別座敷、雪丸げ、桃の白實が收めてある。（此の書の序に蝶夢が續七部集とあるは、闌吏の誤りかと思ふが、明らかでない）是等は何れも得易い書である。

七部集全體を注したものでは、蓼太の『七部搜』は、嵐雪門の吏登の口述に依つたものゝ由で、最も古く、卷頭に寛保二云々と記してある。『俳諧書籍目錄』（新群書本）に寶曆十一年板が記してあるが、予の見たものは、何れも安永四年板である。但し同人の『芭蕉句解』は寶曆七年に出てゐるから、右の書も是に引續いて出したのでがなあらう。『七部集振々抄』は、寫本（予の見たのは自筆本）で、蓼太の弟子の

らかでない。後のもので纏まつた書でも好いのは稀である。但し多少の參考になるものも全く無いではない。例へば曉臺の著といふ『秘註俳諧七部集』(酒竹文庫本、三冊奥書文久二年)などは、中々よく出來てゐて、流石に大家の著に相違無からうと想はしめる。中には舊注を蹈襲したらしく感服し兼ねる説もあるが、先づ名著と稱して可いものである。中には「待人入し小御門の鎰」を解して、「奥方門番として源氏蓬生の巻に、門守のしはぶる聲といへるに栞りたり。其巻に鎰を忘れて、源氏の君を待せし事なり」とし、次の「立かゝり屛風をたふす女子共」を「さればこそ源氏の君を見參らせんと女子共の立かゝりたる也」と解し、又次の「湯殿は竹の簀子侘しき」を、(○前略)但末摘花の巻の末摘花の體と見えたり。此君はいとまづしき御住居にておはせば、簀子侘しきとくつろげ給へり」と解したなど、少しく拘はり過ぎたやうであるが、俤はよく捉へ得てゐる。三句共源語の俤で解してゐると、故佐々博士などならば反對する注であるが、是等の差支無いことは、後にも辯ずる通りである。此の書は伊藤松宇氏の『類題芭蕉七部集』に、同名の書で曉臺注釋、士朗註解、露柱庵政二増訂とあるものと同書かも知れぬ。文化十二年の篤老園石兮(闌更門)の『芭蕉翁附合集評註』(小本二冊)は、前述の如く、蓼太の集めた『附合集』に依つた由、序文にある。注は簡單であるが、可なりに要領を得てゐて、一寸便利である。其の他『蕉門付句注解抄』(一鼠著、麥水評)や、彼是とあるが、あまり役に立つものゝ無いことは、前記の通りである。

俳諧七部集の事は既に後編にもいうた。始めて出たのは何時頃か判然せぬが、字體板式等大概七部各

の原本である。又蝶夢の編したものもある。連句全部を集めたものでは『一葉集』の付合部が得易く、是は年代順にしてあるから便利である。出處を記してないのは遺憾であるが、是には前にいうた『袖草紙』等が可なりの參考になる。精確な處は、一々引用した原本に當らねばならぬこと言ふ迄も無い。

連句の注釋書はあまり役に立たぬ

芭蕉の連句が、特別の注意と研究とを値するものであることは、前に繰返しいうた通りである。處が連句は其の性質上、中々判りにくい。特に蕉風の付方は響だの匂だのといふやうな、幽渺なる趣致風韻を辿つて付けるのであるから、單に意味の解釋だけでは眞の解釋にはならぬ。其れをどういふものか、意味だけで解釋しようと試みたのが多い。意味だけで付けぬのが蕉風の特色で、自身等もそれをよく合點してゐるやうに云うてゐ乍ら、解釋する段になると、意味だけから附會して無理にでも聯絡させようとしたものが大部分である。不思議なことであるが事實である。それ故響匂などいふことが本當には頭に入つてゐたのかどうか、隨分覺束なく思はれるのが多かつたといふ譯になる。

花故事等

連句の注釋書では、芭蕉の自注と傳へられる『初懷紙』百韻の前半五十句だけを注した名著『花故事』（後編初懷紙の條參看）がある。芭蕉の自注といふが實ならば、是が最も古い譯であるが、自注といふは疑はしい。但し芭蕉の話など記したものがあつたのに據つたのかも知れぬ。兎に角芭蕉の連句を注したものでは、第一の好書で、必ず一讀せねばならぬ書である。其の他『三冊子』や『去來抄』の類も、注釋として見るべき部分もあり、參考にもなるが、纏つた注書でもなく、且土芳や去來の著であるか否やも明

うである。三路の『芭蕉發句小鏡』は蓼太の說に依つて記したもので、あまり善い說も見えぬ。右の外未見のもので、堀麥水の『貞享正風句解』（前田家藏）といふものもある由、是も芭蕉の句を含んだものであらう。石河積翠の『元祿十子發句略解』もさうであるかどうか。櫻園秀和の『桃翁發句譯註』は芭蕉の句だけであらう。なほ何丸の『芭蕉句解參考』(?)は身まはりに無かつたので見洩らした。

解釋の進步

明治になつてからでは、角田竹冷氏等の『芭蕉句集講義』やいろ／＼あつたが、子規氏の著書にも、芭蕉の句の解釋に及んだものも少なくない。句の意味の解釋は、さう時代に依つて變るべき筈はないが、趣味の上からの解釋は、始終進步すべき筈のもので、決して是で盡きたといふことはないのである。

發句の解釋は可なりの程度

要するに、芭蕉の發句の解釋だけは、是迄世に出たものだけでも隨分間に合はぬこともない。たゞ之を取捨集大成して、一書に纏めたものが欲しい。且發句は前述の如く、出來た年代や場合さへよく判れば、意の所在も大概は見當が付くものであるが、是には『句選年考』といふやうな好書があつて、大層役に立つ。但しなほ不十分な點も多いから、此の方面だけでも調べの餘地は少なくない。發句は、年代の考證は勿論、解釋の方でも、芭蕉の經歷や行狀に精通した人でなくては、思ふやうに出來ぬ筈であるが斯樣な人は、容易に得難いのである。

連句集及び其の注釋書

芭蕉の連句のみを集めたものには、蕪村編纂の『芭蕉翁付合集』（安永三年刊）二冊がある。是は二三句づゝを拔き出して集めたものである。又蓼太の同名の書（同五年刊）があつて、是は後にいふ石兮の評註

師走囊　說叢大全　其の他　三家發句解　增注句彙　句解大成

明和元年の五月堂の『師走囊』があり、蓼太の句解と、杉雨の評林と此の書との三部中の說を並べて評論したものに、安永二年の綿屋素丸の『說叢大全』(大本五冊)がある。伊豆の無壁庵呑吐といふ人の『俳諧獨言』も、芭蕉發句解で、寶曆十三年の序があるから、古いものゝ一である。下總の茂蘭といふ人の『膝元さらず』も發句解で、明和二年(寫本)に成つてゐる。越中の六壁庵康工の『金花傳』(明和九年秋、安永二年刊か)は、芭蕉の發句の注に、自分や其の他の句をも附載したものである。越中の花萊庵蓬山といふ人に『蕉句雙說』といふがある。雙說とは、去來の說と素丸の說とを合せた意味であるが、本づく所は去來抄や前出の說叢のやうである。序は享和二年で天保八年求板とあるから、享和板もあつた筈である。遲日庵衛足の『芭蕉翁發句蒙引』は享和元年の編である。文化三年には能靜叟莊丹の『芭蕉句解參考』があつて、主として蓼太の說を本とし、他書の說をも參考して私考を加へた小著である。此の書と、同人の其角嵐雪の句の解とを合刻して『三家發句解』(中本三冊)として世に行はれてゐる。『增註桃靑翁句彙』は巢居の注に千當の增注したもので、文化三年板である。其の他寫本で傳はつた小著では、まだ幾らでもあるが、皆同じやうなものである。月院社何丸(茂呂氏、信濃の人江戸に住す。天保八年歿す、年七十七)の『芭蕉句解大成』(文政九年刊)は、此の人の七部集の注(後にいふ)と共に、大著述で、心血を注いだものであるが、無用の注が可なりあつて、大きい割には役には立たぬ處も多い。併し芭蕉の發句の注としては、最も詳しいものであらう。中に引用した他書や他人の說に却て取るべきものが多いや

解』（享和二年）は五升菴の自序があつて蝶夢の著か）佛兮湖中等の『芭蕉翁句集』は「葉集の發句の部と同じものであらう。『芭蕉翁句鑑』は寫本で傳はつてゐるが、割合に新らしくもあり、材料の取り方が正確でないから、參考になることも少なくないが、引用には餘程の注意を要しよう。

完全の句集は未だ無い

　要するに、芭蕉の句集は、未だ完全のものが無い。沼波氏『芭蕉全集』の發句の部は、編年體になつてゐる、校訂もあり、句もよく集まつてゐるが、洩れたものもあり、誤りもあり、且出所を一々正確に記してないのが遺憾である。荻原氏の『芭蕉俳句全集』は、一寸手輕で便利であるし、出處も記してあるが、洩れたものも多い。句集は出處を明らかにしたものでなくては正確とは謂へぬ。出處さへ明らかにすれば、年代は自づから定まつて來る場合も多い。又出來た時がよく判れば、句意は大概自づから解けるものである。それ故今後の句の編纂及び解釋の方法は、第一出典、第二年代の考證、第三字句の異同の校合、第四句意の解釋の四方面から見て貰ひ度い。

蓼太の句解

　芭蕉の發句を注釋したものとしては、先づ直弟子の支考許六其角去來等の著書には、多少是に關係のを有たぬものは少ない。但し纏つたものでは、寶曆八年(？)の蓼太(天明七年歿す、年八十)の『芭蕉句解』が先づ古いであらう。或は次の評林の方が先に出たらうとの説もある。即ち闇紫庵杉雨の『芭蕉翁發句評林』は、前者と同年の板である。之と天明二年の春稍庵梅丸の『茜堀』と、同四年の法橋吾山の『朱紫』

諸抄大成

との三部を合刻したものに『芭蕉翁發句諸抄大成』があつて、是は『俳諧叢書』中にも收めてある。此の外

發句集及び其の注釋書
泊船集

芭蕉句選

句選年考

句選拾遺

芭蕉の發句を集めたやゝ纒つたものでは、風國（去來門）の『泊船集』が先づ最初のものでもあらう。是は元祿十一年に出てゐる。近頃活版になつたものもあり木板でも得易い書である。此の書には其日庵錦江の『泊船集解說』といふものがあるといふが未だ見ぬ。美濃の輕花坊の注解（寫本）もある。積翠園の注と共に此の書中の甲子吟行だけで、他は出なかつたものゝやうである。是と先後して出た蕉門の撰集類には、芭蕉の句を多少收錄せぬものは殆ど無かつたが、數多くを纒めて收めたものは、先づ右の風國の書であらう。擲筆庵華雀の『芭蕉句選』は元文四年の板で、四季分にして廣く網羅してある。是には石河積翠園（享和三年歿す）の名著『芭蕉句選年考』があつて、寛政頃に成り、明治四十四年に二冊として活版にされた。此の書の卷頭に積翠の事蹟等を記してある。それ迄は寫本として傳はつたのである。是迄の芭蕉研究書中の白眉とも謂ふべき大著で、且最も精確なものである。芭蕉の發句は勿論經歷を調べる者の爲にも、座右に缺くべからざる無二の寶典で、隨分骨折つたものである。但し多少の誤りもあるから之をよく訂し、又增補もして、完全に近いものと爲す者があつて欲しい。句選に洩れたのを集めたものに『句選拾遺』（俳諧叢書にも收む）があつて、寶曆六年の出板である。編者の麥鄉觀寛治は、例の俳諧書林井筒屋の四世庄兵衛である。是より先、既に梅尺の『蕉翁發句拾遺』（延享二年）といふものもあつた。蝶夢にも『句選拾遺』と題した書があつたらしいが（句選年考頭書）未だ見ぬ。蝶夢の『芭蕉翁句集』は安永三年に出したもので、年代順になつてゐるが、其の年代は亂雜で、殆ど當てにはならぬ。（『蕉翁發句私

ので、出處が判らず、原本は既に亡びてしまうたのではないかと思はれるのも少なくない。本書は此の點に大なる功績を遺してゐる譯である。

袖草紙等

是より先、櫻田臥央の『幽蘭集』(寛政十一年刊)や『金蘭集』(文化三年)があつたが、花屋菴奇淵(天保五年歿す、年七十六)の『芭蕉袖草紙』(文化八年刊)がやゝ整頓してゐるやうである。袖草紙は連句を年代順に並べ、其の間を發句で聯絡させ、連句は一々出典を明記してある。一葉集に較べると、集めた句數は少ないが、可なりよく集めてあり、且出典を記したのは、甚だ結構である。其の引用した書名を數へて見ると、大凡六十六七種に上つてゐるやうで、其の中には、今見るを得ぬであらうと思はれる書も多少含んでゐる。此の本には、二卷だけのものと、別に「發句部」一卷を添へた三卷本とある。但し其の發句部は、芭蕉のを集めたのでなく文化頃迄の著名な俳人の句を四季部類分にして集めたので、芭蕉句集としては無意味に近いものである。

袖珍抄

それから嘉永五年に古絲舍默池といふ者の輯めた『俳諧袖珍抄』と題する小横本十三冊がある。是は體裁等も一葉集に似てゐるから、是に依つたものであらう。一葉集があれば此の書は要るまい。

纂註一代集

明治二十四年に花之本秀三氏等の校正した活版本『纂註芭蕉翁一代集』といふ書がある。中には發句紀行文章消息等を收め、連句は省いてある。註はあまり簡單で、參考にはならぬやうである。其の他大體全集の體裁を備へたものは多少あるが、何れも不完全で、茲に擧げたもの位が先づ役に立つに過ぎぬ。

聊か物足らなく思ふ。それに、引用書名を殆ど全く記してないのと、材料の取り方の聊か雜駁なのとは遺憾な點である。近時に小林某の著書や何かゞ出てゐるが、是迄出た芭蕉傳を、敷演したに過ぎぬやうである。沼波瓊音氏の『芭蕉全集』の卷頭に附してある芭蕉年譜は、一寸便利であるが、本文と矛盾があつたり、誤りと思はれる處もあり、聊か物足らぬが、いづれ訂正されることであらう。近頃勝峰晋風氏は、俳諧史に關する材料を蒐めたり、調査したりして、いろ〳〵と有益な論文を發表されつゝあり、予の如きも、芭蕉に關し、同氏から材料を與へられたり、助言を受けたりした事も多い。いづれ纏まつた著書も發表されるであらうが、俳諧史の研究に同氏の如き篤學の人を得たのは、喜ばしいことである。

佐藤紅綠氏の『俳句小史』(明治三十五年)齋藤溪舟氏の『俳諧二百年史』(明治四十四年)や池田秋旻氏の『日本俳諧史』(同年)などにも芭蕉傳が出てゐるが、立入つた說は無いやうである。

芭蕉の全集としては、古學庵佛兮と幻窓湖中との合編の『俳諧一葉集』が、最初のものであらう。文政十年の序がある。部の分け方は、發句、連句、紀行、文集、消息、句合評、遺語となつて、全部十卷の大編である。此の書の缺點は、出處を示さなかつたことで、又連句のみは編年體になつてゐるが、發句や消息等も、年代順になつてゐぬことも不便である。又校正も多少粗漏な點もある。消息の部は闌更(寛政十一年歿す年七十三)の『芭蕉翁消息集』を殆ど其のまゝ取り、是に別材料を多少加へた迄のやうである。遺語の部なども出處が記してないので、甚だ不便である。但し連句や遺語の此の書に引いてあるも

多い。是等の中のあるものは、本書中にも引いた通りである。又俳人の逸話の類を記した、夏目成美(文化十三年歿す、年六十八)の『隨齋諧話』(文政二年刊)建部涼岱(安永三年歿す、年未詳諸説あり)の『蕉門頭陀物語』(寶暦元年刊)竹内玄々一(文化元年歿す、年六十三)の『俳家奇人談』等に見えてゐるものも少なくない。但し信用の出來る程度に於いては、あまり高からぬものが多い。俳諧が平民文學となつて最も廣く行き亙り、芭蕉は其の祖師とされたので、芭蕉の事に多少なり言及したものは、幾百あるか幾千あるか、數へ切れぬ程である。闌更の『俳諧世說』(天明五年刊)等も參考すべき事が多い。

明治以後では、纏つたものは内田魯庵氏の「芭蕉庵桃青傳」(俳諧文庫芭蕉全集に附)などが古い方であらう。此の傳は中々よく出來てゐるが、固より誤りも少なくない。同氏には「同後傳」(同素堂鬼貫全集に附)もあつた。正岡子規氏の『行脚俳人芭蕉』は、子規氏の草稿を其のまゝ板下に上木したもので、字は中々巧みに書いてあるが、芭蕉傳としては、單に俗說を略記した迄で、殆ど何の參考にもならぬ。大野洒竹氏は有名な俳書藏弃家で、雜誌等に有益な考證を折々發表されたが、「芭蕉年譜」も甞て何かに揭げたことがあつて、予も一見したが、何にであつたか忘れた。其の他いろ〳〵あつたが、纏まつた芭蕉に關する著書は無かつたやうである。山崎藤吉氏の『俳人芭蕉』は大正五年(同氏の明治三十六年の芭蕉庵桃青と大略同じい)に出たもので、調べも可なり忠實で、好い說も中々多く、自分も此の書からヒントを得た事も多少ある。但し誤りも少なくないやうである。且俳風の變遷を叙すること太だ簡に過ぎて

句集等には見えぬやうである。此の書には、須磨明石には萬菊も共に行つたと間違はずに書いてある。（前編芳野紀行の條參看）五柳尾崎恭の『芭蕉全傳』は、酒竹文庫本で一見したが、編年を逸した。太して變つた材料は見えぬやうである。

○素蓮の芭蕉庵春秋

葛飾素蓮（幕末の人）の『芭蕉庵春秋』（嘉永六年、酒竹文庫本、自筆か）は、年譜體に出來てゐて（即ち春秋と題した所以か）材料は一々出處を明記してあるので、便利な書である。惜い哉晩年の部が缺けてゐる。山崎藤吉氏の『俳人芭蕉』の前半の邊は、此の書と大體同じで、たゞ山崎氏の著は、材料の出處を殆ど全く省いてある處が違うてゐる。但し素蓮の著に明記した出處に依つて、原本を搜つても、どうしても見當らぬものもあつた。（予の見落しかも知れぬ）素蓮には、他にも芭蕉の句の注などもあつて、可なりに忠實な芭蕉研究家であつた。

錦江の芭蕉傳

其日庵錦江の『芭蕉傳』は、内田魯庵氏の芭蕉傳（俳諧文庫芭蕉全集附）に引いてあつて、芭蕉遁世の原因に就いての異說を記してあるといふが、未だ見ぬ。圖書館などにも無いやうであるが、何人の所藏か錦江も芭蕉に關係の著書や俳論などが可なり多くあつて、此の方面での大家であつた

諸書に散見したもの

右の外、隨筆や雜著に散見したもので、多少の參考になるものもある。例へば『老之樂』や『宮川舍漫筆』（松尾服部兩家は松村家から出たとの傳へを記してある）や『墨水消夏錄』や、『一話一言』（此の書の芭蕉に關する記事は、誤りが多いが）の類に、或は略傳を記し、或は肖像や碑銘など掲げたものも隨分

も、芭蕉を景仰した程度が知られる。

○蝶夢の繪詞傳

蝶夢(洛東岡崎に住む、寛政七年歿す、年六十四)の『芭蕉翁繪詞傳』は寛政五年に出たのであるが、本書は挿繪が主で、傳即ち繪詞は至つて簡單で、隨つて研究的著書ではない。但し誤謬の割合に少ない好著である。活版本も出てゐる。此の蝶夢は熱心な芭蕉崇拜家で、此の傳の外に、芭蕉の句を集めたものや、いろ〳〵出し、又芭蕉の遺跡を世に表はしたり、遺物を探つたりと、隨分多くの仕事をしてゐる。芭蕉歿後の芭蕉の忠臣として、先づ第一位に置くべき人であらう。斯樣な仕事のみするのが、必ずしも忠臣たる唯一の條件ではないが、其の熱心は甚だ賞すべきである。

○竹二坊の芭蕉傳

同十年に竹二坊の『芭蕉翁正傳集』が出てゐるが、此の書は簡單である上に、誤謬も多く、記述も支離滅裂の部分のみで、あまり參考にはならぬ。

○湖中の芭蕉傳

湖中(江戸の人安永九年歿す)の『芭蕉翁略傳』は、幾分か詳しく、又考證も多少加へてあつて、好參考書ではあるが、固より誤謬も少なくない。此の書は湖中の草稿を、西巻野巣が校合して、芭蕉の百五十回忌の天保十四年に上木したものである。湖中も亦屈指の芭蕉研究家で、有名な『一葉集』(後にいふ)は、此の人の心血を注いだものであらう。先づ大家と稱すべきである。

○貞松の芭蕉傳

遠藤貞松の『芭蕉翁略傳』(寛政十年遠藤蓼花氏藏)は、あまり變つた材料も無いが、芭蕉の母の名をイヨとしてゐるなど、珍らしい。是は前編の初めにも引いた。其の他にも多少の參考になる事もある。濁子の妻の許より冬籠の料とて、薪でも貰うたのか「火を焚いて今宵は屋根の霜消さん」と詠んだなどは、

○伊賀實錄

れる。但し又、三十歳遁世説もあることから見ると、さうでなくも考へられる。兎も角も此の書は、最も主要な材料の一として、重きを成すものである。『伊賀實錄』（百明房著寶暦八年跋、帝國圖書舘本を勝峰氏の寫取つたものを借覧）は、芭蕉傳ではないが、芭蕉傳の參考になる材料も少なくない。中に收めてある芭蕉の眞蹟から寫した未滿の歌仙（玄虎發句）などは、芭蕉に違ひ無いやうに想はれる。芭蕉が例の蠟燭を嫌うた話なども、此の書にも出てゐる。

○冠山侯の芭蕉傳

松平冠山侯（因州侯、名定常、文政十二年卒す）の『芭蕉翁全集』中の芭蕉傳も可なりに詳しいもので、又異説を記してゐることも少なくない。侯は因州鳥取城主（支封より宗家を嗣ぐか）で、俳名去留、落梅舍又秋香亭と號した。（全集の奥書に見ゆ）學問を好み、著書もあり、學者との交際なども廣く、『江戸名所圖會』の序なども書いてゐる。此の芭蕉傳には、宗房遁世の原因として、主人の美妾某が、宗房の袴の綻びを補うたので讒言されたとの異傳を記してある。（前編第二節參看）又、宗房は在京七年神道を吉田家に、佛法を南禪寺塔頭の某和尚に、醫術を三條某に學び、嘗て小澤某（卜尺か）の中風症を癒したが某は遂に半身不隨に終つたこと、水道工事從事は、二十一二歳の時との異傳あること、芭蕉庵に居たのは、庵燒失の時であるとの說あること、延寶三年又は四年に歸鄕したこと『延寶二十歌仙』中の舘子の獨吟が、芭蕉のとの說あることなども記してある。取るべく思はれる記事も少なくない。但し概しての確實の程度から謂へば、第二流のものであらう。侯が全集といふ數十卷の大編纂を試みたことから想うて

和安永頃の人）の聞書をも加へた芭蕉傳が、卷頭に載せてある。桐雨の曾祖父猿雖は、芭蕉と深い關係のあつた弟子で、此の筆記は、猿雖からの傳へに本づいた筈であるから、簡單ではあるが、參考すべき個處も彼是ある。本書に『桐雨筆記』として引いたものが其れである。中の梨一の聞書なども、有益な材料である。

竹人の芭蕉傳

近頃迄あまり人の知らなかつたものに『芭蕉翁全傳』と題した良書がある。奥書に、土芳の兄景賢の口傳を竹人が記したもので、寶暦十二年とあり、再形庵白舌（前編第二節郷里の宿所參看）の序がある。竹人は此の白舌の家司で、俗名川口庄太夫、蕉門の荻子の弟の由、後にいふ『伊賀實錄』にある。本書は芭蕉傳としては、最も古いもの〻一で、中には誤謬と想はれる記事も無いではないが、多くは確實で、且是迄のあまり人の噂に上らなかつた材料をも多く含んでゐる。其れ等は本書中に折々引いた通りである

芭蕉傳中の白眉

予は勝峰晋風氏の所藏本を借覽した。蝶夢が其の『芭蕉翁繪詞傳』に、伊賀の芭蕉全傳として引いたものが、此の書らしい。確かに芭蕉傳中の白眉と稱して可い。此の書が、芭蕉二十九歲の時に、致仕して江戸に出たと記してあるのは、珍らしい傳へであることは、本書中に紹介した通りである。他の記事が大方正確なる資料と一致するに視て、此の記事も相當な注意を以て取扱ふべきであらう。但し蝶夢が此の書を見てゐるらしいのに、其の繪詞傳には、通説の二十三歲秋遁世説を記し乍ら、二十九歲説に一言も及ばなかつた處を見ると、或は予の見た寫本（勝峰氏藏）は、此の一項が脱漏したのでないかとも疑は

笈日記

芭蕉行狀記

許六の書

桐雨筆記

二歳頃からの弟子で、二十餘年間隨從してゐたのであるから、其の記も最も價値あることと言ふ迄も無い。但し惜い哉、芭蕉傳としては、簡に過ぎ、且前後の事實を混同した處などあつて、役立つ點は多くない。芭蕉庵の燒失を天和三年としたのなどは、誤りでないかと思ふ。支考の『笈日記』(元祿八年)は、右の書を補ふもので、特に芭蕉終焉前後の事を知らん爲には、此の二書を併せ看ねばならぬ。支考の此の書は後に多く出した他の著書の、譎詐僞瞞を事とした類ではなく、芭蕉の風韻がなほ心魂に匂うてゐた頃の著とて、眞面目に記してあつて、芭蕉傳關係書類中では、先づ第一位に置くべき良書である。文章も、後の著書のやうに浮華な處が無い。路通の『芭蕉行狀記』も枯尾花と殆ど同時に出來たもので、路通等の催した追善句集に添へたものである。路通は芭蕉の晩年には、ある事情の爲に、師に遠ざかつてゐた弟子で、同門の彼是の非難もあつた人であるが、芭蕉臨終の際、遺言で他意無きことを語られた(前編の終焉の條參看)といふやうな事で、感激して追善をしたり、此の記を書いたりしたのであらう。但し此の書もあまりに簡單で、傳としては參考すべき處が少ない。直弟子の書いた較〻纒つたものは、是位に過ぎぬ。其の外直弟子の記したもので、芭蕉傳に關係あるものとしては、許六の『歷代滑稽傳』(許六の自著であるまいとの說もある)の芭蕉の項、『風俗文選』作者傳の芭蕉の項などあるが、無論共に數行の記に過ぎぬ。支考の著書は、前記の『笈日記』でも除けば、他は記事に信用の置けぬものが多い。『奧細道菅菰抄』に、伊賀の桐雨(芭蕉門の猿雖の曾孫)の筆記と、加賀の既白坊の覺書とを合せ、それに梨一(明

ではあるが、桐葉を大津の人としたり、奥羽行脚の際芭蕉の移つた處を、杉風の後廳としたり、惣五郎が剃髪して曾良と改名したとしたり等、細かに穿鑿すれば、まだいろ〳〵出て來よう。而して其の大部分は、殆ど始終芭蕉に付き纏うてゐた筈(本書の記事に從へば)の次郎兵衛が、間違ふ譯はあるまじい事柄のみである。

要するに

要するに此の文曉編纂の五書は、全部假託の書と見るのが安全である。たとひ其の中に、多少正しい材料が混つてゐると假定しても、其れを見分けることは困難であるのみならず、さ樣な部分らしく思はれる處はあまり無い。本書と他の正しい材料と一致する點は本書が其の材料を取つて書いたと見られるのであるから、材料としては役に立たぬし、他の材料に無い事や、其等と一致せぬ事は、危險で、確かな參考には出來ぬから、本書は芭蕉傳の資料としては、殆ど全く用立ち難いものと謂はねばならぬ。たゞ文曉は芭蕉傳をかう取つた、芭蕉をかう解したといふ點が、多少の參考となるに過ぎぬ。芭蕉關係の僞書は、此の他にも多いが、此の五書を最傑作と謂ふべきである。僞書の多かつたのは、研究者に取つては邪魔になつて困る譯であるが、それが亦たま〳〵芭蕉の傑れてゐたことを現はしてゐるので、つまらぬ人なら、誰も假託の書など作つて迄、其の人を世間に傳へようとする筈もない。

役に立つ資料

確實なる資料としての芭蕉傳の最初のものは、先づ最も永く芭蕉に師事した高弟其角の『枯尾華』であらう。

枯尾花

此の書は芭蕉の終焉記として、葬式後の追悼會の句集に添へたものである。其角は芭蕉の三十一

年で、若し寛文六年亡命のまゝで、此の時始めて歸つたものとすると、十九年目に當る譯である。然るに此の時の『野ざらし紀行』に「秋十年却りて江戸をさす故鄕」とあるは、鄕里を出てから十年程にしかならぬことを明らかに語つてゐるから、此の記事は其の點でも事實に合はぬ。それから壽貞尼の亡くなつたのを、天和二年としてあるが、壽貞尼の亡くなつたのは、芭蕉の歿年と同年であることは、明らかな證據もあつて、殆ど疑ふべき餘地が無く、此の天和說は全く誤りとせねばならぬ。然るに本書か若し次郎兵衛の物語であるとすると、次郎兵衛は壽貞の子であるから、母の死んだ年を十三年も間違ふ筈がない。是等は此の書の價値を最も露骨に示すものと謂ふべきである。永い話の中には、次郎兵衛の話を聽いた人(魯町?)に、聽誤つた事も無いとも謂へぬが、芭蕉と同年に死んだ者を、それよりも十三年前に死んだことに聽誤る筈が無い。且死んだ前後の事や、月日迄明白に記してあるのだから、いづれにしても虛傳としか認めることは出來ぬ。それから、壽貞死去の記事の後に「二年三月迄居候處」(一四九頁)とあるは、三年三月でなければ、前と合はぬ(母が一周忌ちかく候故とあるのでも判る)が、さうすると其の後の芭蕉庵の火災を三年冬とせねばならぬ。然るに、其の邊の記事を見ると、二年冬のつもりのやうにもある。此の邊の記事は、年月が混雜して甚だ紛らはしくなつてゐる。次に芳野行脚の後、許六の迎に依つて彥根に行つたとあるのも、明らかな虛傳で、許六は、芭蕉の最後の江戸住中の元祿五年に始めて面會して入門したのであることは、許六の自記『俳諧問答』にあるから確かである。其の他些細な事

藤井博士が指摘された所である。（雜誌にひばり）それから、芭蕉が十九歲の頃、太宰府代參を仰付けられ、宗因と道連になつて下つたとあるは、あまりに珍らしい記事である。去來を非凡の人としたのは好いが、芭蕉の奥羽行脚からの歸期を、天文を察して豫知したなども、奇に過ぐる。此の書は大體に小說的記事が多い。落柿舍は去來の兄の別邸であつたといふが實らしい。

終りに、殆ど此の書の中堅とも謂ふべき『次郎兵衛物語』に就いていはう。先づ芭蕉の父母兄弟幼名等の記事に就いて、如何と考へられる點もあるが、是等は略して置かう。次に芭蕉が始めて仕へた時が六歲で、其の時若君（蟬吟公の事）も同年であつたとあるは、信用すべき他書の記事と合はぬ。蟬吟公が廿三歲で亡くなつたことになるのも、疑問とすべきである。それから芭蕉の亡命を九月二十一日としたのも、予の私見に依れば如何かと思ふ。例の「雲と隔つ友かや」の句は、春の句と見るが至當で、隨つて亡命も春とすべきであると考へられる。併し是は確かとは謂へぬから措く差控へて置く。それから十二年過ぎての（とあるが寛文六年から延寶七年迄は十四年經てゐる）延寶七年二月迄、芭蕉の行方は不明であつたが、其の年の東叡山涅槃會に、次郎兵衛が芭蕉に邂逅したとある。是は通說とは全然異うてゐるのみならず、寛文十二年に「伊賀上野松尾氏宗房」と署名して出された『見おほひ』のあつた事實等と丸で合はぬ。通說では芭蕉の東下は此の寛文十二年で、それ迄は京阪邊か鄕里邊をうろついてゐたとあるが本書は寛文六年亡命後直に江戶に出たことにしてあるのも訝しい。それから芭蕉の歸鄕したのは貞享元

いこと故、差控へて置く。但し『冬之日』の時に、杜國が芭蕉に五年後の再會を約して、別れてから、果して五年後に伊賀の蓑蟲庵に訪うて來た云々とあるは、少々訝しい。是は多分芳野行脚の時のことをいうたので、是より先芭蕉は江戸から來る途次杜國を訪ね、（此の時越人を連れて行つたので、其の紀行が即ち前に擧げた伊良古紀行である）其の時二人が芳野行脚を約し、伊勢で出會して、それから二人で伊賀上野に立寄つたのである。「先師を翁と稱し候事は云々」の條も、事實と違うてゐる。芭蕉を翁と稱したのは、芭蕉三十七歲の『田舍之句合』に旣に見えてゐる。俳論として疑ふべき點も多いが、其れは姑く略す。

次に『凡兆日記』中の數個條を擧げて見よう。去來の嵯峨の落柿舍は、もと三井秋風の別莊であつたとの記事は、何か據所があつたのかも知れぬ。自分も豫てから芭蕉の『嵯峨日記』を讀んで、落柿舍が舊と金持の別莊か何かであつたのでないかと疑うてゐた。此の記事を讀んで、成程こんな所傳もあつたのかと、多少參考になつた。併し秋風の妾が柿の落ちるのに喫驚して癪を起し、其の爲に別莊を去來に捨賣にしたなどは、隨分妙である。且此の日記に依れば、秋風が落柿舍を棄てゝ鳴瀧に移つたのは貞享末か元祿初の頃らしいのに、天和二年秋風編の『打曇砥』に旣に鳴瀧秋風とあり、芭蕉の『甲子吟行』には、貞享二年に芭蕉が此の鳴瀧の秋風亭を訪うてゐるので、年代が合はぬ。貞享三年秋に落成した筈の落柿舍が、芭蕉入舍の元祿四年には、荒れ果てた古家のやうに芭蕉が記してゐる（嵯峨日記）のも訝しい。是は

うての逸話は、鬼貫の「禁足之旅記」（犬居士）からでも想ひ付いて附會した話らしく、右記の鬼貫が同庵を訪うたことは架空の記事で、事實を記したものではない。第一右記は訪問を九月としてあるのに、此の書は老鶯の脇があつたと、夏の事にしてある。又特に撰集の事を說いてゐる芭蕉の言は、事實と合はぬやうな處が多い。是等の諸點から此の書の確かなものでないことだけは明らかに謂へる。

『芭蕉翁傳』は、右の『芭蕉談』の外『同後編』『凡兆日記』『次郎兵衞物語』『花屋日記』の四篇と、外に越人の『伊良古紀行』が添へてある。而して『芭蕉談』『同後編』は長崎の卯七の著、『凡兆日記』は芭蕉門の凡兆の著、『次郎兵衞物語』は、壽貞尼の子で芭蕉門の次郎兵衞の物語を、去來の弟魯町が筆記した體にしたもの、又『花屋日記』は前に紹介した如く、例の芭蕉終焉記である。

『芭蕉談後編』は、大部分俳論であるから、事實上の疑問となるやうな記事は至つて少ない。併し多少ある。杜國の事を記した條に、杜國の幼名を萬菊といふとあるが、『芳野紀行』の記事の意味では、どうもさうでないやうに思ふ。他の書にも、杜國の幼名を萬菊丸というたと記してゐるものもあるが、如何であるか。該紀行の本文の意味では、萬菊丸は紀行の時に假に呼んだ名らしく、杜國が流人である處から其の名を隱す爲に付けたものと取れる。上を憚つての假名に、たとひ幼名でも、杜國の本名を呼ぶ筈がないと思ふ。併し幼名でないと斷定する證據も無いから、是は姑く問題として措いて置かう。『冬之日』の卷に、一句も杜國の作句に糸を入れたることは無しなども、あり得ぬことゝ思ふが、是等も證據の無

『芭蕉談』は、享和二年に出たもので、此の書は是迄餘り疑うた者も無いやうである。但し合點の行き兼ねる記事が少なくない。例へば『續猿蓑』の事を去來卯七等が評する段に、卯七の「京入や鳥羽の田植の歸る中」を、芭蕉遷化の翌年の句としてゐるが、卯七の『渡り鳥』には、是を立句の歌仙が收めてあつて前書に「元祿の始め都に登り落柿舍を扣きて」としてあつて、元祿初年の句であること疑ひ無い。是などは最も露骨に『芭蕉談』の疑ふべきを語つてゐる。又かの「猿蓑に洩れたる霜の松露哉」を『續猿蓑』は沾圃の句としてあるが、是を『芭蕉談』は、露沾の句であるのを、支考が私に書き變へたものゝやうに云うてゐる。併し此の句の意は、自分は『猿蓑』の作者に洩れたとの意をも裏に有たせたものであるらしいのに、露沾の句は『猿蓑』に收められてある。して見るゝ、矢張沾圃の句といふのが實らしい。以上の二點は、曲齋が『七部婆心錄』(續猿蓑の條)に指摘してゐるが、尤もである。なほ同書は、『芭蕉談』が、芭蕉が、終焉前八月初に難波に行つたとしたのも誤りであると指摘してゐる(實は九月)が、是等は去來の記憶の誤りといへばそれ迄である。其の他にも一二事の誤謬を同書に指斥してゐる。それから傍證としては、『續猿蓑』を芭蕉自ら伊賀で編輯する意であつたとか、北村季吟が芭蕉の萬葉論に啓發されたとか鬼貫が幻住庵を訪うた時、連句で鬼貫が閉口し、丈草が「御膳はよいと松風の吹く」(「御膳はよいさ」は好いが、「松風の吹く」などは無意義である)と付けて芭蕉を首肯させたとか、俳文を論じて「西鶴があさましく下れる姿」と云うたとかの譚などは、何れも事實らしくは迚も思はれぬ。且鬼貫が幻住庵を訪

芭蕉の傳記類

疑はしいもの　文曉編の五書

るが、奈何せん、京都には關係書類が至つて乏しく、大部分は東京や遠隔の地にのみあるので、意の如くならなかつたのは、遺憾である。要するに、芭蕉の事を調べるには、こんなものがあるといふことをざつとでも心得て貰へば、本節の目的は足るのである。先づ芭蕉の傳記類から始めよう。

芭蕉傳は纏まつた單行のものも可なり多く、之に他書に附載されたものや、列傳中のものなどを加へたらば、隨分の數に上る。予の見たものだけでも、三四十種はあつたらう。但し是等の大部分は、新らしい調査の下に出來たものではなく、單に古い傳記を蹈襲敷演したに過ぎぬ。是等を除いて、純粹に有益な資料なり考證なりを含んだものゝみを數へると、あまり多くはない。それから、普く世に知られた書でも、疑はしいものも可なりにある。先づ疑はしいものから解題して見よう。

肥後八代（或は云肥前正敎寺）の僧文曉（享和文化頃の人）といふ者が編纂した書の、芭蕉に直接の關係あるものが、五種程ある。文曉の編纂ではなくて、校正といふことにしてはあるが、編纂と假定して置く方が安全である。此の五種は、近頃『芭蕉翁傳』と題して、合刷發行された。此の內『花屋日記』は既に前編にいうたから、茲では他の四種に就いていうて見よう。五種中、『花屋日記』と『芭蕉談』とだけは、古くから板本もあつて、普く世に知られてゐたが、他の三種は、世に流布せず、之を見た者は稀であつたであらう。實は四種中でも、傳記の參考書と見るべきは、『次郎兵衛物語』と『凡兆日記』とで、他は寧ろ俳論の書と謂ふべきであるが、便宜上茲に一括して紹介して置く。

じからねば、安永は安永、文化は文化、天保は天保の風調なり。時に唐宋明の風調あるも同じ。明人が唐を眞似ても、眞の唐にはならぬ。況や芭蕉のものには芭蕉の天才が加はつてゐる。特に連俳では芭蕉に、他の眞似ることをすら許さぬものがあつたのだから是非もない。

第二節　芭蕉に關する參考書一班

材料の選擇

古いことを調べるには、材料の取捨選擇が何よりも先づ肝腎である。然るに是は容易いやうで中々難かしく、寧ろ是が最難事であると謂へる。同じ材料で、甲と乙とが反對の結論に達することは、世によくある例であるが、材料の選擇を誤つて、正しい結論に達することは、殆どあり得ぬ。此の點に於いて予はなほ十分の自信は無く、不安心な處も少なくないが、是迄に調べ得考へ得た處だけを、極めて率直に並べて見ようと思ふ。

本節の主意

實は始めて芭蕉の事を調べ度いと志す者の手引ともなり、且一は芭蕉研究史の一斑になり共、本章を讀めばわたり得られるやうにとも思うたので、此の二つの便宜から述べ試みることにしたのである。以下に紹介する參考書中、固より精讀したものもあるが、中には旅行中に圖書館で見たとか、人の藏書を借覽したとかいふのもあつて、是等の中には内容を精査する遑の無かつたのもある。また名だけ聞いて未だ見ぬものや、聞きも見もせぬものも固より多い筈である。是等は追々に手にし得るに隨つて涉獵して行き、幸に又何かの機會があつたら、本章だけでも特に補ひ度いと希うてゐるが、先のことは豫約出來ぬ。本書起草以來、時間と便宜との許す限りは、涉獵には相應に努めたのであ

かつた。蕪村の連句は、發句に比して甚だしく拙劣であつた。予は芭蕉以後の俳書は、著名なもの丶外未だあまり多く見てゐぬが、其の見たものだけから謂へば、蕪村門の几董、曉臺系の乙二などがや丶蕉風連句の手段を了解してゐたやうであるが、天明五傑の人々など、連句の方から見ると、名程には太した處もなかつたやうである。降つて天保頃になると、之を涉獵するのさへ、可なりの忍耐力を要するものが多い。隨分芭蕉などゝは、似ても似つかぬ、何風とも謂ひやうのないのが、蕉風の眞髓を得たと自稱してゐたやうである。更に降つて幕末となり、明治となると、文學とし取扱うて可いものか否かさへ迷はざるを得ぬやうなものが大部分を占めるに至つた。

蒼虬門の梅通の『麥慰舍隨筆』（舍利風語）に、蕉風の變遷を說いてや丶要領を得た記事がある。左に引いて見よう。

翁遷化の後は、去來丈草口をつぐめ、素堂大志あれども及ばず。其角嵐雪我が意地を立て、蕉風に戾り、美濃風伊勢風盛なり。其後淡々五色墨など點取風に成來りて、一旦蕉門廢れたるを、安永の頃より諸哲競ひ起りて、正風に返さんとす。されど蕉翁發起の時に同じく、人心彩色の結構ならでは、寄りも付かねば、冬の日春の日などより導き、次第々々に正風を開く。天明寬政文化文政を經て、曠野猿蓑炭俵をうつし來る。さあれ安永に冬之日をうつせど、眞の冬之日にならず。文化に猿蓑を撰すと雖ど、更に猿蓑と等しからず。天保に炭俵を覘ふといへど、炭俵に同じからず。尤もなる哉。時人同

の門葉は、芭蕉生前から既に海内殆ど全部に行き亘つてゐたかの感がある。之を一時盛大を謠はれた檀林風などに比べても、流布の速かなる、殆ど同日の談ではなかつた。宗教でも、是程によく又早く行き亘つたものは少ないであらう。畢生の力を傾けて宣傳に努めてさへも、さうである。芭蕉はたゞ行脚癖に依つて諸方を彷徨ひ歩いたに過ぎぬとすれば、實に驚くべき奇蹟と謂はねばならぬでないか。

斯くいふと、其の歿後の蕉風の全盛に驚くであらうが、前にもいうたやうに、嚴密な意味に於いて、是等の人々は眞に芭蕉の俳風を繼承祖述し得たとは謂へぬのである。大人物の後はそれが通例で、宗教上の偉人の後なども、大抵皆さうである。況や詩人には別に詩才を要するので、芭蕉の後に芭蕉の無かつたのは、恰も親鸞日蓮の後に、親鸞日蓮の德量と文藻とを兼備した似寄りの者さへ無かつたのと同じい譯である。なほ芭蕉門下の諸人の評としては、許六の同門評（俳諧問答）は必ず一讀すべき値がある。風之の『俳諧耳底記』には、蕉門諸人を鳥類に譬へて評してゐるが、是等も一寸面白く記されてあつて、多少の參考になる。仲間同志で互に相難詰嘲罵しあうた書の、例へば『不猫蛇』とか『露川責』とか『削りかけの詞』とかの類も少なからずあつたが、あまり役に立つものは無かつた。

芭蕉後の連俳

芭蕉歿後の蕉風は、大凡上述の如き有樣であつた。其の後暫らく時を經て、天明の俳諧復興期に入り蕪村が現はれた。蕪村の發句は、優に芭蕉に匹敵するに足り、ある點は芭蕉を凌ぐ程の立派なものであつた。併し芭蕉の特技であつた連句の方面では、之と匹敵する者は愚か、雁行するにさへ堪へる者が無

は不明であるが、實は似た事位はあつたのかも知れぬ。許六程の物の判つた人が、寧ろ滑稽を感ぜしめるやうなあゝした大層な自負を、飽迄眞面目に言うてゐたものとは、どうも一寸受取れぬやうにもある併し文人は元來氣が小さく臆病なものである。あまりに物の判らぬ徒輩が跳梁するのに刺戟されて、無茶苦茶になつたのかも知れぬ。それは其の自負の言が、萬更の戯言とも想はれぬからでもある。許六の俳風は、支考の美濃風などに比べて、あまり勢力を弘げ得なかつたやうである。支考の風は、多分俗談平話を標榜した爲に世間に喜ばれたのであらう。併し其の俳諧でも俳論でも、芭蕉の本意に近かつた點に於いて、理窟のみを以て頭腦を充たされてゐた支考よりも、許六の方が優れた處が多かつたと謂うて可い。此の人も亦立派な武人の出であつた。

○名古屋
難波
○伊賀
其の他

　京都や江州に次いでは、名古屋が中々盛であつた。茲には「尾張五歌仙」の連中荷兮、杜國、野水、重五、正平等を始め、越人露川などもあつた。難波も亦之道(諷竹)呑舟、舍羅、祇空などの、蕉門の爲に相應な働きをした人々があつた。前出の珍碩(洒堂)も一時大阪に住み、園女夫婦や高津翁の野坡も居た次に芭蕉の郷里の伊賀も可なり盛であつた。藤堂家の人々を始め、土芳猿雖卓袋などが、何れも可なりの仕事をしてゐる。熱田、大垣、金澤等も、何れも蕉風の根據地となつた。伊勢では涼菟乙由が俗調を張り、長崎では、前にもいうた如く、去來兄弟が一風を持し、美濃では支考が別派を弘め、其の他越中では浪化、奥州では、須賀川の等躬酒田の不玉等を代表者として、蕉風の廣敷に努めた。數へ來れば其

屋に筋かふ天の川」などは、いづれも老練と謂ふべきである。「寒菊の隣もありや活大根」は例の得意な句「大髭に剃刀の飛ぶ寒さ哉」なども一寸面白い。「摺子木もついでに賴む卯杖哉」「出代や靜が宿へ武藏坊」「二番にて春は暮れたり紀三井寺」「初雪や正宗どのゝ門の家根」など叙事體の句として隨分惡くない。「今日限の春の行へや帆かけ舟」「爪紅の指で摘むや嘉定菓子」「看經の間を朝顏のさかり哉」「芋を煮る鍋の中迄月夜哉」「きり〳〵す鳴くや夜寒の芋俵」「欄干に上るや菊の影法師」「裸身に麻の匂ひや相撲取」「埋火や蒲團を返す茶の香ひ」「嫁入の門も過ぎけり鉢叩」などの、やゝ精緻な趣のも少なからずある。「初霜や治まる江戸の人心」などは、其の人柄の一面さへ偲ばれて、床しい處もあつた。

議論にも句作にも可

要するに許六は、議論もよく立ち、句作も相應に出來た人であるが、どちらか一方に力を傾けたならば、更に立派な處に達したらうと思ふ。若しさうしたらば、蕉門では何人も及ばぬ地位を占め得たかも知れぬ。但し斯樣な想像は、どうでも付け得るもので、考へやうに依つては、隨分反對の說も出し得るのであるから、深くはいはぬ。兎に角許六と支考とは、一方に感心の出來ぬ書物を出したり、あまり自負が强かつたりした爲に、後の評家に聊か酷く取扱はれ過ぎた感がある。併し蕉門では、論著の上で多くの蕉風研究の材料を遺したのは、此の二人の右に出る者は無い。

隨齋諧話の記事

『隨齋諧話』に、或る士人が許六に俳諧の指南を賴んだら、許六が斷つたので、其の平生の抱負と協はぬを詰ると、許六は、自分の平生の放言高論は、實は出任せの空言であるから、必ず賺され給ふなと云うて笑うたとの譚が載せてある。眞僞

ことによく氣付いてゐた(同)あたり等、何れも敬服に値するものがある。然るに師の風雅を大成して、一代の大宗匠となることなく、だん／＼邪路に蹈み入つて、遂に慢心と自負とに終つたのは、惜んでも餘りあることである。是は前述の天刑病の爲に、性質が自然と僻んで來て、憤懣憂悶の極、遂にさうなつたものかも知れぬ。實に氣の毒な人であつた。一は例の俳魔支考輩に刺戟されて氣を亂された爲でもあらう。去來や、丈草嵐雪のやうな、性格の醇正な人とのみ交つて居たら、許六は今少しく大きな仕事を成し得たかも知れぬ。頭腦のしつかりしてゐたことは、確かに蕉門に一二の人であつた。尤も此の種の人が、詩人として適當であるかは、寧ろ疑問であるが、何れにしても、文學者としての天品は、去來などよりも優れてゐたやうに思ふ。「發句の自由を得、俳諧の作意を盡し、文章をたくさんに書く者は許六が事なり。正風血脈の門人、芭蕉翁二代目といはんも、にくからんか」(歴代滑稽傳)と自賛してゐるのは、強ち虛喝とのみ見ることは出來ぬ。其の句も可なりのものもある。「本箱になるべき桐の若葉哉」など、支考の喜びさうな理臭を帶びたのもあるが、「春立や齒朶に留まる神矢根」「酢味噌あらば春の野守となり果てん」「淸水の上から出たり春の月」「西風に東近江の柳哉」「春雨や離れ／＼の金屛風」「勢ひも夕日に動く櫻哉」「生壁もからびて凄し春の雨」「菜の花や豆の粉飯の晝げしき」「藤の花さすや茶摘の荷ひ籠」。「鞍壺にすわり心や更衣」などは武士に適はしい句である。「人先に醫者の袷や衣更」「田植女の寢足らぬ空や杜宇」「四五月の卯波さ浪や子規」「山吹も巴も出づる田植哉」「一竿は死裝束や土用干」「秋も早蚊

看）芭蕉の一周忌にも畫像を手寫して野坡に深川の什物として贈つてゐる。（韻塞）許六が天刑病であつたといふ（頭陀物語等）に就いて、或は肺病であつたらしいと云ふ者もあるが、渡部狂（支考の弟子のやうにしてあるが、實は支考か）の弔ニ許六ニ文（本朝文鑑）に「此人に此病ありて、公務にたゝざること十とせあまり」とあるから、實際天刑病であつたのかも知れぬ。臨終の偈に芬々臭氣供ニ梵天ニなど云うたのも、天刑病に適はしく思はれるが如何であるか。

芭蕉の俳風を嗣ぐべき適材

芭蕉以後に芭蕉を得られぬは當然であるが、芭蕉の文學の方面を繼ぐのに、最もの適材は、此の許六ではなかつたかと思ふ。許六は、文も書ければ、議論も立ち、畫も描ける、發句も連句もよく出來るといふ八方利きの雋れた才を有つた人であつた。芭蕉のやうな創才の後を承けて、之を更に後に傳へるには此の種の人が最も適してゐたのである。

鋭利な才

豫てから芭蕉の連句の技倆に眼を看けたなど、識力の尋常でなかつた處も判る。芭蕉には晩年の弟子であり乍ら、始めて芭蕉に會して「十團子も小粒になりぬ秋の風」の名句を示したなど、芭蕉が感服したのも無理はない。此の句は、たとひ芭蕉の集中に置いても有數の名吟である。去來との議論（俳諧問答等）を見ても、論旨といひ、着眼といひ、蕉門では新參の許六の方が確かに優れてゐた。それ故芭蕉も一再ならず推奬の詞を與へてゐる。其の「蕉門の輩、多くは蕉翁を尊敬して蕉翁の俳諧の尊きことを尊敬せず云々」の説（篇突）や「師云、俳諧の連歌と云は、よく付と云字意也」と着眼した（宇陀之法師）處や、「新らしみ」に注目した（同）こと、芭蕉が連句に特技のあつた

曲水

を代表するものとして、重きを成してゐる。俳人として際立つて優れた人も無かつたやうであるが、人物としては、曲水などは非常な人であつたらしい。膳所藩士で、藩中の奸人を刺して自殺したといふことで、詳しい事情は判らぬが、何にしても一通りの武士でなかつたらしい。妻としては破鏡といふ才操の優れた淑女を有し、伯父に幻住老人といふ畸人を有し、芭蕉をして「勇士菅沼氏曲水子」（幻住庵記）と云はしめてゐる所などから想うても、中々の人であつたらしい。蕉門で最も武士らしい經歷を示したのは言ふ迄も無く此の人である。去來嵐蘭曾良等、何れも赳々たる武夫であつたが、是等の人々をして、慈父を慕ふ小兒の如くならしめた芭蕉の德量に至つては、言ふも今更である。尙白千那珍碩等、皆相當な仕事をしてゐる。乙州は芭蕉の愛弟子の一人であつた。芭蕉臨終の病床に侍した唯一の醫師であつた

其の他

木節も一風あつた人らしい。其の他此の邊からなほ多くの蕉門の名士が出てゐる。芭蕉が此の地の風景を愛熱したことが蕉風と因緣を結ぶ大原因の一であつたらう。

許六

彥根風は亦自づから別派を成してゐた。森川許六が其の宗師で、許六は井伊侯の給人であつたといふ嘗て書を狩野安信に學び、今も其の畫は往々傳はつてゐるが、優に黑う人の域に達してゐる。芭蕉の晩年の弟子で（前編第十二節參看）是より先、貞德派の田中常矩の弟子であつたと自ら記してゐることも、既にいうた。其の識見は確かであつた。嘗て五老井の愛櫻を伐つて芭蕉の木像を刻み、之を智月尼に贈つた。是が轉々して、京都東山雙林寺の芭蕉庵に納まつたのであるといふ。（前編末節芭蕉の肖像の項參

俳風

俳人と見られぬこともないが、湖南の人々とは亦自づから別派を成してゐたので、京都の俳人中に含めて見るのが寧ろ實に近からう。緇流の人だけに、俳風は恬淡高脱の趣を以て優り、才氣は相應に高かつたやうであるが、句作にのみ熱中しなかつた爲か、可も無く不可も無いやうなのが多い。此の人をして若し俳諧にのみ專らならしめたならば、嵐雪程度の處位は難かしくなかつたのであらう。が、佛門の人であつた上に、天性も至つて淡泊であつたらしく、血脈の祕傳のと騷いだり、句作で人と競ふことなど好まなかつたらしい。それでも中々の作家であつた。滑稽洒脱の趣の句などは、後の一茶に酷似してゐた。「友のある處へ掃くぞきりぎりす」と詠んで「きりぎりすの法師」と呼ばれた由である。

○凡兆等

凡兆が著い特色のあつたことは、後編『猿蓑』の項に一言したが、蕉風弘宣者としては、去來と共に此の書を編纂したこと位なもので、あまり際立つたことは爲なかつたやうである。其の他史邦等も、可なり働いてゐるが、すべて略す。

○湖畔の蕉風

江州は蕉風の根據地としては、殆ど江戸に次ぐ程の重要な地位に在つた。但し江州といふても、許六を中心とする彥根は、亦自づから別派と見ても可からう。卽ち湖南だけを一のグループと見るべきであらう。此の地は、芭蕉が西下の折によく行脚の足だまりとした粟津の無名庵邊を中心としてゐる。其の

蕉門での地位

人々は、膳所の昌房曲水（曲翠とも）正秀等を始め、大津の乙州（或書にオトクニと訓ませてある）木節、尙白、堅田の千那法師、瀨田の珍碩等、優れた者が可なり揃うてゐた。撰集では『比左古』が湖南の俳風

ない。芭蕉の發句も其の氣味のが可なりにあるが、又常人の及び難い高い天品が悠々として活いてゐた去來のは其の態があまりない。許六が「一代の秀逸の句幾らもあり。師の句たりとも中々上に立ち難く一人も羨まぬ者はなし」と謂うたのは、去來に對する辭儀が混つてゐるのであらう。俳論などを、許六の方が寧ろ一頭地を拔いた處があつたやうに見えることは、前にもいうた、但し天性が上述の如き人であつたゞけに、其の句には温雅醇正の長處はあつたやうで、其の方面には佳句が少なくなかつた。句例は前章の『猿蓑』の條に少しばかり出してある。「湖の水まさりけり五月雨」「凩の地にも落さぬ時雨哉」「荒磯や走りなれたる友千鳥」の類が、先づ好い方であらう。

去來と長崎

前記の卯七魯町は、主として長崎の方に蕉風を扶植した。なほ又去來の『湖東問答』や『去來抄』やのことは、參考書の條にいふが、是等も『芭蕉談』等と共に、卯七魯町とも關係ある書である。それ故去來の蕉風は、京都と長崎とに傳はつた譯である。而して關西の俳諧奉行と謂はれたり、後世に少なからぬ感化を與へたりしたのは、其の俳風の力と謂はんよりも、寧ろ穩健雅正な人柄の力であつたかと思ふ。近頃去來が妾を蓄へた（隨齋諧話）とかで、彼是議する者もあるやうだが、當時の士人に是位は常の事である。諸方面から考へて、去來の謹厚温雅の人であつたことは、動かぬやうである。一は名儒の子として其の立派な家庭に育つた爲であらう。芭蕉の最も愛した弟子中の一人であつたことは言ふ迄も無い。

其の感化

丈草は芭蕉歿後粟津無名庵や、其の近くの龍ケ岡の佛幻庵などに永く居たといふやうなことで、江州

がある。落柹舍のことに就いては『俳諧嵐山集』『落柹舍日記』等がある。上記の二哲考には、卯七を其の弟としてあるが、魯町も弟だとの傳へもある。魯町が弟であつたことは、『泊船集』に、去來の「手をはなつ中に落ちけり朧月」の前書に「弟魯町が鄉へ歸るを送りて」とあるから、實らしい。此の集の撰者風國は、京都の人で、去來門であるから、誤りはあるまいか。去來が芭蕉に入門した年は、明らかには判らぬが、貞享三年春の『蛙合』に去來の句が見えてゐるから、芭蕉が甲子紀行に京都に出た時に入門したとの說は實であらう。去來は名儒の子でもあり、立派な武人でもあり、學識も相當にあり、且蕉門では可なりの古參でもあり、第一に溫厚篤實の君子風の人であつたので、同門諸人の書などにも、其の人物は皆推賞して記してある。但し人物の優れたといふことが、必ずしも藝術家として優れてゐたと同意味にはならぬ。去來は、同門からも後人からも、其の稟賦が正しくて、人物が立派であつたといふことの爲に、藝術的には多少過重された氣味がある。品性の美くしかつたことは、流石の許六も「天性正しく生れつき給ふ」。(同門評判)と謂うてゐるが、句の方は「花實を謂はゞ、花は三つにして、實は七つなり。難じて謂はゞ、取囃し(○才氣)少し缺けたり。故に不易體の句は多けれども、流行の句は少なし。譬へていふ時は、衣冠束帶の正敷人、遊女町に立てるが如し」と評してゐるのは、大凡は當つてゐるやうである。去來の句は確かに其角や嵐雪に比べると、才氣が缺けてゐて、渾然として斧鑿の痕を留めずといふやうなのは稀で、天品發露の趣に乏しく、やう〱かゝつて拵へ上げたといふやうなのが少なく

の系を引いてゐる。だん〳〵と此の邊迄來ると、俳諧が文學であるか、又茶の湯など丶同じい一種の傳統的雜藝であるかの區別が、一寸し兼ねるやうになつてゐる。但し有名な炭屋太祇などは、此の系統を引いてゐる。淡々門からは羅人竿秋等が出、貞佐門には超波等があつた。併し其角の風が一時邪道に陷つた故か、榮えた割合には優れた人が多く出なかつたやうである。

嵐雪系

嵐雪の雪中派の正系は、吏登蓼太完來對山と傳はり、近年の雪中庵九世雀志に及んでゐる。蓼太は所謂天明五傑に數へられ、俗句と俗書とを多く出して名高くなり、門下から大江丸や、俳諧注釋家秦三駱など、多くの俳人を出してゐる。

杉風派桃隣派等

其の他杉風の採茶庵派は、近年の八世石丈に及び、又別派としての宗瑞の派もあつた。天野桃隣の系も太白堂派として永く續き、近世の九世日比野桃年に及んでゐる。石河積翠は此の派から出た人である

江戸では此の外に野波なども居て、此の派も所謂「輕味」を標榜して可なりに榮えた。

○京都

江戸に次いで盛であつたのは、先づ京都であらう。京都は、實は近くに江州を控へてゐた爲に榮えたやうなもので、寧ろ江州の方が盛であつたと見るのが實を得てゐるかも知れぬ。但し『猿蓑』を京都を代表したものと見る時は、其の重要な地位を認めずには居れぬ。京都の蕉風代表者は、即ち去來と凡兆とで、丈草も亦京都の人と見ることも出來る。此の外史邦風國野明凡兆の妻(？)羽紅などもゐた。去來丈草

○去來

二人を合傳したものに『蕉門十哲考』去來傳に「落柿先生行狀」(隨齋諧話)許六の「去來誄」(風俗文選)等

いたものもよくあり、年譜では『みゝな草』(螺窓)『晋子年譜』(太蟲)等がやゝ詳しい。

○嵐雪

嵐雪も、若い時は其角の蕩樂友達でもあつたらうが、性質は相反し、温柔で名利に淡く、撰集などもあまり出さなかつたが、江戸での地位は、其角に次いで重きを成してゐた。其の句の特色は、温藉重厚の處に在つたやうである。

許六の評

例の許六の評に「嵐雪器隨分惡し。本性柔弱にして、花あるに似たれども、實はなほ無し。相應に取りはやす(○才氣をあらはす)樣なれども、全體とりしめたる血脈無し。たとへば、能く料理する人に、獻立を書かせて、其の獻立を前に置きて、客をもてなすに似たり。唐の蚊や終にかれたるもしほ草、相撲取並ぶや秋のから錦。柔弱にして弱く、弱きによつて美しきやうなり。上に丹青を塗りて、彩りたれば、世俗の眼には眞の錦の如し」(俳諧問答)とある。評のやゝ酷に過ぎたのは許六の嗜好が嵐雪よりも其角に近かつたからであらう。但し嵐雪の風が、「弱く、弱きによつて美し」とは動かすべからざる評かと思はれる。吾々も、嵐雪の句に手强い處の無かつたのを、物足らなく感ずる一人である。即ちあまりに女性的であつたやうに見える。それだけに又其角のやうな生硬粗大の處が無くて可かつたといふ點もある。其角よりも幾分か芭蕉に近かつたと謂へよう。

其角系

其角門には早野巴人、淡々、秋色女、貞佐、堤亭など、多くの俊才があつて、後世此の派が最も弘まつたやうである。巴人は後嵐雪に學び、蕪村隨古などを門下に有し、此の一派からは相當な人が出てゐる。但し其角の正系として榮えたのは、所謂浮世風の湖十の一派である。近年物故した老鼠堂永機は此

無遠慮な材料

伊達

丈草凡兆などよりも優れてゐたとは謂へぬやうである。一體連句は、其角や嵐雪や蕪村一茶といふやうな、性質の粗放に傾いた人には向かなかつたやうで、是等の人々は何れも太して傑れたものを遺さなかつた。其角嵐雪等の連句は、何時迄も檀林臭味の抜け切らぬやうな處があつて、醇乎たる蕉風の最高處を代表するには到底適はなかつた。江戸の人々の連句での傑作といへば、『初懐紙』だけ位なものであつた。而も其嵐二家の發句に至つては、凡兆がどうの、丈草がどうのと云うても、矢張首位に置かねばならぬであらう。其の佳なるものは、芭蕉や後の蕪村に比べても遜らぬ處もあつた。其角は其の爲人が豪放であつたゞけに、發句の材料も隨分世人には下品と謂はれるやうなものも少なくない。それは句集を詠む者は直に氣付くであらう。已むを得ずに詠むのは致方無いが、故意に不快の感を起させるやうな材料を詠んだのもあるらしい。要するに其角の風は芭蕉の所謂「伊達を好んで細し」(〇一本に太し)で、芭蕉の寂味を主としたとは同じでなかつた。且其の生活や種々の點も、芭蕉と異なつてゐた。それだけに亦少なからぬ特色を持し得たのである。芭蕉が尋常の宗匠ならば、多分自然に遠かりでもしたのであらうが、殆ど際涯無き迄に凡ての物をよく容れ得た芭蕉は、却て異ふ所を面白がつて、益々之を愛したやうである。否自分と同じやうなものゝみを無理に迫らうとするやうな固陋からは、始めから全く擺脱してゐたのである。其角は芭蕉歿後は、一面にだん／＼蕉風に遠かつて、遂には謎のやうな俳句を始め笠付の點取宗匠などに似たことをも行つてゐるが、是等は蕉風と關係の無いこと故略す。其角の傳は書

蕉風の分布

芭蕉歿後の蕉風の分布を、支考の「恩報表」に概括して云うてある。當時「武城(○江戸)に其角嵐雪あり。洛陽(○京都)に去來丈草あり。杉風嵐蘭は其門のおもし人にして、武門に許六(彥根)あり、曲翠(○膳所)あり。其の外には、萬子(○金澤)素堂(○江戸)など。鎭西(○九州、實は長崎)に卯七は落柿舍(○去來)の旗に靡き、坂東(○實は出羽)に不玉は惟然坊(○多く關西邊を彷徨)の文に從ふ。尾張に露川あり。美濃に盧元あり。杜國(○尾張)落梧(○美濃)は昔の名に聞え、北枝(○金澤)吾仲は今の世にひゞく。千那(○堅田)尙白(○大津)の古老なる、松本の正秀も、難波の諷竹も、智月乙州(○大津)は氏族の情を結べり。其餘は尾城の古門人をさへに、伊賀の人々は、況て畏るべし。何れも龍門に名を題して、風雅の先達と仰がざらんや」とある。實に盛大を極めた有樣であつた。是等の內特に其の地方々々の俳壇の一中心となつて永く勢力を維持した目ぼしい所だけを擧げて見よう。

江戸

江戸は芭蕉が最も永く居住した土地で、且門下も最も多く居たゞけに、最も盛であつた。江戸での代表者は言ふ迄も無く其角嵐雪であつた。

其角

其角の發句は中々特色もあり、技倆も可なり優れてゐたので、蕉門中では矢張第一位に居るべき人であらう。性質は疎宕磊落な詩人風の人であつたらしい。幼時から俳諧にのみ沒頭してゐた爲か、文章は意味の纒まりの惡いやうなのが多い。而も奇矯詼衒の裏に一種の風格韻致を具へてゐたこと、其の俳風と似て、去來などの及ぶ所でなかつた。併し連句はあまり得意でなかつたらしく、嵐雪と共に、去來や

人格の無際限な發展

力が、歿後に永く俳壇を支配したのは、寧ろ其の優れた人格の力で、文學の方は、却て影響の乏しかつたことは、歿後の人々の持て囃したものが、芭蕉の最も傑れた點ではなくて、却て誰にでも學び得られ又模し得られるやうな點に在つた處を見ても判る。芭蕉が門下の人々の歸向心を繋ぎ得たのに、優れた技倆よりは寧ろ優れた人格がより多く與つて力あつた。此の事を許六が『篇突』に「蕉門の輩、多くは蕉翁を崇敬して蕉翁の俳諧の尊きことを崇敬せず。是れ俳諧に熱心少き故にして、蕉翁の俳諧の尊きを元來知らざる故也」と云うたのも、强ちに無理ではなかつたのである。それ故、支離滅裂と謂ふのも、實は文學上から見ての言で、其の人格の偉力が、人々の心に深く滲徹し、根を据ゑ、花を開き、實を結び、所謂俳諧宗として永く風雅の歸嚮する所を知らしめた點に至つては、殆ど無際限の發展を遂げたと謂うても可いのである。是等を以て見ても、人格の不可思議力を今更乍ら驚嘆せずには居られぬ。但し予は、文學上から嚴正に批評を下して、微細乍らも芭蕉の全型又は眞型を傳へ得たものは、殆ど無かつたと謂はねばならぬのである。併し是も時代の上から大きく見る時は、當然でもあり、又却て喜ぶべき結果であつたかも知れぬ。何となれば、偉人の後に只管之を祖述し墨守する者のみ出た日には、新境地の開拓があり得ぬからである。芭蕉の後一時支離滅裂に歸した芭蕉は、天明に及んで却て甚だしく異なつた特色のある蕪村等を生んでゐる。蕪村のことは既に後編の終りにもいうたが、支那では杜甫の後の詩人が、殆ど悉く杜甫の外に一歩も出ることの出來なかつたに比べて、是等は多少興味ある事實である

附編　芭蕉歿後の蕉風及び芭蕉に關する參考書一斑

第一節　芭蕉歿後の蕉風

芭蕉歿後の蕉風といふと、問題があまりに大き過ぎて、簡單には迚も說明し切れぬ。又是迄に蕉門の各人に就いて弘く材料を集めて調べた纏まつた書物が未だ出てゐぬ。第一蕉門各名家の全集さへ、殆ど一も出てゐぬ有樣である。但だ僅に最近に出版された勝峰氏等編の『其角全集』や、句解の『其角研究』などがあつて、其角だけは大分研究の步を進められたやうであるが、他は多くは斷片的のものゝみである蕉風全體のことを纒めて記したものに沼波瓊音氏の『蕉風』と題した書があつて、大體の樣子は判るが、其の他に詳しく調べて書いた此の種のものは、未だ見當らぬ。予も、既に一言したやうに、俳諧に興味を有つ前に、芭蕉に興味を有つたので、是迄は、芭蕉の感化の及び工合を知らん爲に、蕉門諸人のものを涉獵したに過ぎぬから、未ださう廣く深くは調べてゐぬ。

芭蕉歿後の蕉風は、一言で謂へば、支離滅裂と評して可い。是は偉人の歿後には、必ず來るべき當然の成行で、怪しむに足らぬことである。「此道や行く人無しに秋の暮」の句が、有意であつたと無意であつたとに拘はらず、芭蕉の往つた道を往き得た者は、嚴密に謂へば一人も無かつたのである。芭蕉の勢

にも此の說があるのを偶〻見たので、一寸面白く感じた。抑〻斯樣なことを、印象の明瞭不明瞭だの詩畫一致だのいふ考から說き得るであらうか。詩では、用語其のものに直ちに附隨して起る情緒に最も重きを置かねばならぬので、用語が現はす色や形は斷じて第二義以下のものでなければならぬ、予は固くさう信ずる。（レッシングのラオコーンの譯書も一讀したが、東洋藝術に其のまゝ應用し難く思はれる說も多い。東洋のものは、矢張東洋流の頭を土臺にして考へを進める方が可いやうである）

芭蕉の文章に就いても一言し度いが、前編奧羽行脚の條に、此の紀行の文に關して短評を試みてあるそれがやがて芭蕉の文章全體にも應用し得る處もあるから、略して置かう。大詩人杜甫の文章は、佶屈聱牙句讀し難いやうなのが多いが、芭蕉は文章も中々優れてゐた。しかしあまりに詩的で、意義の不透徹な處の少なくなかつたことは、旣にいうた通りである。

容易に出來ることではないが、詩の本色から謂へば、畫趣を句で現はすとか、寫生するとかいふのは、寧ろ例外又は緒餘とすべきである。『篇突』に許六が「總じて繪にうつらざる人は、風雅の上に缺けたること多し。古人も詩中の畫、畫中の詩とも云へり。又詩は有聲の畫とも書けり」と說いたのは、許六は畫が描けたゞけに、叙景句の畫趣に着眼したので、流石である。併し之に對し、去來が「如レ斯語は、廣く聞て細かに察せざるものなり。許六一事を擧げて人を導く教にもあらず。尤も繪にうつるといへる、うつるの一字肝要なり。第一繪にうつる人は、風雅に進むこと早かるべし」（湖東問答）と評したのは、聊か徹底を缺いてゐるが、詩畫の境をよく辨へての說と想はれる。斯く考へて來ると、詩と畫との各特色は、自づから明らかになつて行くであらう。即ち詩の特色は主觀的な處に在り、畫の特色は客觀的な處に在る。詩は、たとひ所謂客觀體のものでも、多分な主觀的要素が加はつて意義を成し、畫は專ら主觀的氣分を現はさうとしたものでも、客觀的基礎の不確實なことを許さぬのである。詩を强ひて畫に近づけようとするのは、詩の特色を捨てゝ畫の奴隸たらしめようとするもので、詩の墮落である。畫の方から謂うても恐らくばさうであらうと思ふ。其處迄行かずとも、斯樣な說は、畫の爲にも詩の爲にも、あまり多く益する所はあるまい。

一問題

同說

予は茲に一の問題を提供して置かう。芭蕉の「六月や峰に雲おく嵐山」の初五の六月は、予も久しい以前から、ロクグワツと音讀すべく、ミナヅキと訓讀してはならぬと考へてゐた。其の後支考の『古今抄』

明瞭を以て句の價値を定める一の標準としたのは、此の誤謬に基いたので、所謂印象とは、句を畫に直して見ての上のことである。元祿俳句の興味の焦點である「取合せ」や、特に連句の興味（本編初節參看）は寧ろ印象の幽渺な處に在るので「何とは無しに何やら」そんな趣に感ぜられるといふやうな處に妙味があつたのである。抑も詩は有聲の畫、畫は無聲の詩といふ說は、或る意味に於いて許されることで、一種の見解を含んだ面白い語である。東洋人の藝術觀の特色の一端も、此の語に現はれてゐるかと思ふ。文人畫や詩のあるものは、確かに此の語によく當り、又此の語でなければ適當に言現はし得なかつたやうである。詩畫一致の境地と謂ふべきある藝術境を是等のものは最もよく描いてゐる。併し一歩立入つて精細に兩者全體から批判する場合には、斯樣な單純な詩的な文句を其のまゝ應用し得べくもない。第一此の語を詩に應用する時と畫に應用する時とで、意味の違ふことは、少しく考へたら氣付くであらう。且前にもいうた如く、芭蕉や杜甫の句や詩の大部分は、如何に畫に飜譯しようとしてもし切れるものでない。し切れぬとて、是等を詩でないとは謂ひ得ない。否詩に飜譯し切れぬ畫、畫に飜譯し切れぬ詩にこそ各〻の眞の本色が在るべきではあるまいか。予は固くさう信ずる。此の意味から謂ふと、芭蕉の句が却て詩の本色に協ひ、畫趣に努めた所謂印象を明瞭ならしめんとした句などは、詩の本色に遠ざかつたものとせねばならぬのである。無論蕪村の句の畫趣の豊かな處など、特色があつて實に面白く、畫家とし深い修養があつたればこそと、感嘆の外は無く、芭蕉の句と比較して技倆の優劣を論ずるなどは、

例へば畫では文人畫のやうなの、詩では古い處では王維の或る詩なぞがそれである。蕪村の句などは、畫趣が至つて豊かであつた。是等には此の説は應用し得よう。但し一般の詩と畫とに之を應用することになると、甚だしい誤謬を含んだ不通の説となるのである。是に就き自分にいろ／＼考もあるが、簡單に言ひ盡すことは難かしいから、略して置く。たゞ一二の事だけいうて置かう。手取早くいへば、杜甫の詩や芭蕉の句などは、迚も此の説には當て箝らぬ。畫にも其の通りで、純粹な寫生畫や肖像畫には應用は出來さうにもない。或は是等の畫は眞の畫でなく、文人畫のやうなのだけが眞の畫であると云ふかも知れぬ。それが即ち前述の、ある特別の畫だけにしか應用し得ぬとの意味になるのである。但し畫の方からいふことは先づ措いて、詩の外からいうて見よう。詩は畫趣のあるのが尊いといふのは、詩はそれ自身に價値がなく、畫に飜譯し得るもので始めて價値が生ずるといふ意味になるのである。即ち詩は畫の從屬物又は奴隷として始めて存在の意義が生ずるといふことになる譯である。斯樣な考の誤りなことは、多言する迄もない。畫が色や形を目に訴へると同じく、詩は語と調とを耳に（尤も漢詩などは、文字が目にも訴へるが）訴へるので、兩者共、目に又は耳に直接に訴へる處に各長處がなければならぬ筈である。詩が耳に訴へられても直に美感を起さずに、一度それを色と形とに飜譯して眼前に浮べ、始めて美感を起すといふやうなことは、決して詩の本義でも特色でもない。是れ位なことは、苟も詩に諒解のある人ならば、判り切つたことで、更めて言ふ迄も無い筈である。然るに子規氏等が印象の明瞭不

けし水」（杜國）が付いてあつて、盗人の名に呼ぶ松（美濃國青野ヶ原の熊坂物見の松の事かと云）と宗祇の名付けた淸泉とを對した觀想などは、やがて芭蕉の人生觀を其のまゝ語つてゐる感がある。「月明けて打板山を隔つらん（桐葉）雲は夜盗の跡埋むなり」「鳴子驚く片藪の窗（釣雪）盗人に連れ添ふ妹が身を泣いて」「とう〳〵と榎に風の當る音（野坡）稻盗人の繩を解きやる」最初の句は、單に夜盗を冷眼に客觀したに過ぎぬが、後の二句は、一は盗賊の妻に深い同情の眼を向け、一は貧の盗みに慈愛の淚を注いでゐる。發句にも、加賀を通つた時の句（加賀は熊坂の鄕里と云）「熊坂がゆかりやいつの魂祭」（いつのはいつの誤との說に從ふべし）がある。「盗人に遭うた夜もあり」とか「剝がれ身には」とかの句は別として、上に引いた外にもなはあつたやうだが、略して置く。彼の態度から察すると、だゞ盗人に同情したといふやうな單純な動機からではなく、深く世相の裏に思ひ入つて、是等にも大なる詩的興趣を感じ得た結果からであらう。（前編第十六節參看）

芭蕉蕪村二家を比較した因みに、詩畫の地位に就いて一言して置かう。世には詩畫一致を說く者も彼是あるが、此の說は。若し詩畫共に藝術上の本義を同じうするからとの意味ならば、それは殆ど無意義で、恰も日本人は東洋人なりと主張するのと同じく、問題にはならぬ。又詩と畫とが特別に深い關係を有つてゐるとの主張ならば、それはある特別の詩と、特別の畫とに應用する場合の外は通じ難い。特別の畫とは、特に詩意を描かうとしたやうな畫をいふので、特別の詩とは、畫趣のある詩をいふのである

達し得なかつた所である。精細美の點は、蕪村にも芭蕉にもそれ〴〵特色があつて、「春雨に濡れつゝ屋根の手毬哉」や「春雨や小磯の小貝濡るゝ程」といふやうな秀麗な趣致は芭蕉には多少乏しかつたが、「鶯起きよ紙燭ともして」とか「蕗の芽取りに行燈ゆり消す」とかの幽艶な風韻は、蕪村には缺けてゐる。漢語古語俗語の活用も、蕪村は傍若無人で、且巧慧で氣が利いてゐたが、芭蕉の細味や勁味が無い。「二もとの梅に遲速を愛す哉」などは實に巧い。併し此のやうな言方はよく見ると句の搆成に粗雜な處がある(二もとのが純國語であるのに、遲速は純漢語で、無理がある)芭蕉の蕉風時代の句には、此のやうなのは至つて稀であつた。

芭蕉が人事美に興味を有つた一例として、其の盗賊に關する連句を擧げて見よう。芭蕉は詩材としては、殆ど所有物事に深い興味と大なる同感とを有つてゐたのであるが、特に盗賊には少なからぬ興味を有つたと見え、句は可なりにある。「生面を蹴挫かれては念無量(揚水)泥坊消えて雨の日青し」「夜とも照され俗桃灯(素堂)花の奥盗人狩に泊して」などは、純檀林風時代のものであるから、さして注意を拂ふ迄でもない。『虚栗』の句に「山野に飢ゑて餅を貪る(嵐蘭)盗井の月に伯夷が足洗ふ」とあるは、飢渇に堪へぬやうな、切迫詰つた時は、聖の清なる伯夷も、盗井(盗泉と同意か)に趨く。されど流石に井の水は飲まずに、足だけ洗うたと戯れたのらしい。所謂觀想に滑稽を混へた此の頃の風である。『冬の日』には有名な「今ぞ恨の矢を放つ聲(荷兮)盗人の記念の松は吹折れて」がある。是には「しばし宗祇の名を付

ら、此のやうな、今から見れば眞面目に相手になれぬやうな說を立てたのである。發句連句を合せて二家を比較すると、右の子規氏の說は、大部分は全く二家をあべこべに入れ代へねばならぬのである。先づ積極美消極美に就いて謂ふと、此の語の意味の取りやうに依つては、子規氏のやうに謂へるかも知れぬ。「方百里雨雲寄せぬ牡丹哉」といふやうな、故らに誇張したやうな積極美は芭蕉の連句にも希である。又最後の、蕪村が、(他の俳人に比べて)句法句調に新らしい特色を最も多く出したことも、確かである。艶麗なる句も、此の語の意味の取りやうでは、蕪村に多いと謂へる。併し其の他の點は、予は寧ろ、蕪村の名と芭蕉の名とを入れ代へねばならぬと思ふ。客觀的見地の高低とは、どんな意味であるか判然せぬが、事物を觀ずるに、着眼の高いと低いとを意味するならば、予は芭蕉の方が遻かに高かつたやうに思ふ。人事美に就いての趣味の深淺は、予の見る所では、芭蕉と蕪村とでは、殆ど比較にならぬ程に後者は淺かつたと思ふ。尤も是も「美」の意味の取りやうではどうでもなるかも知れぬ。「腰拔の妻美しき炬燵哉」のやうなのならば、蕪村に多かつた。併し眼を人生の奥底に注ぎ、深い洞察と同感とを以て、人間美又は人性美ともいふべきものを、其の幽玄微妙なる語の表に髣髴せしめるといふやうな態度は、蕪村には甚だしく乏しかつた。人事の過去未來、即ち歷史的又は理想的詩境を取扱うた技倆も、予は芭蕉の方が貪かに優れてゐたと見る。複雜美に至つては、蕪村は到底芭蕉の敵ではない。第一蕉風の連句の趣味其の物が、既に甚だしく複雜で、蕪村のやうな明快な單純な詩美を喜んだものゝ、容易に到

もならぬのである。それで二家を公平に比較して批評して見ると、斯樣なことが謂へるであらうと思ふ芭蕉の天性は連句に適し、蕪村の天性は發句に適してゐた。而して二家共其の適した所に才力を展べた二家の相違は又元祿趣味と天明趣味との相違で、連句は元祿の深沈幽玄の趣味に適し、發句は天明の明暢秀麗の趣味に適してゐたのであると。

正岡子規氏の俳人蕪村に、芭蕉と蕪村とを比較してゐる。「一、芭蕉の句は消極的にして、蕪村の句は積極的なり。例へば艶麗なる句の如き、芭蕉に無くして蕪村に多し。一、芭蕉は客觀的見地低くして、蕪村は最も高し。一、芭蕉は人事美に就て深き趣味を有せざるも、蕪村は多々益々辨ず。一、芭蕉に人事の過去及未來を叙せる句無きも、蕪村には之れあり。一、芭蕉は實在的を主として理想を知らず。蕪村は之に反す。一、芭蕉は複雜的美を嫌ふも、蕪村は好んで之を成す。一、芭蕉は精細的美に疎きも、蕪村は之れに精し。一、芭蕉其角等が活用する能はざる漢語と古語及俗語を、蕪村は縱横に活用し得たり。一、蕪村は其他句法及句調に於て新たなる特色を出せり（以上）とある。是等の比較論は單に芭蕉と蕪村の發句のみに適用すべきもので、二家の發句だけを見ると、大方は上のやうなことが謂へるのである。尤も是等の內、多少首肯し兼ねる說もあるが、先づ大體は當つてゐる。併し芭蕉の發句は、其の取材が自己の境涯に限られてゐたのに、蕪村は發句連句の取材の上に區別を置かなかつたので、右のやうな相違の生じて來るのは當然のことである。子規氏は芭蕉の連句を全く捨てゝ顧みなかつたのであるか

蕪村と芭蕉

は重厚で暖かい情を感ずる。是等を趣味の高下で分つのは、實は因襲的に頭がさう慣らされてゐるからで、浮世繪よりも文人畫が高尙だと考へるのも同じい一種の迷信に過ぎぬ。但し是等は兩極端からいうた迄で、蕪村と芭蕉とが必ずしも此兩極端に在るといふのではないが、芭蕉を以て、只管に自然をのみ友とした飄逸恬淡一偏の人であつたやうに見るのは、兎に角全然改めねばならぬ。

○旅に病んで夢は枯野を驅めぐる　芭蕉

○冬鶯昔王維が垣根かな　蕪村

二家の辭世であるが、茲迄來ると、最早どちらをどちらと、是非得失の論など挾み度くない。蕪村の句が如何に藝術的に高い香を放つてゐるかを看よ。微塵の俗念を留めてゐぬ處を看よ。されど予は結局芭蕉を捨てることは出來ぬ。

「發句は蕪村、連句は芭蕉」、二家の比較は是だけでも一斑は盡されてゐる。繰返しいうたやうに、芭蕉は發句と連句との取材の方法を別にしてゐた爲に、發句は割合に趣味が單調で、貧弱である。蕪村は之に反し、發句と連句との間に、材料の區別を全く立てなかつたから、其の發句は、趣味が多樣で、變化に富み、芭蕉の發句とは、殆ど比較にならぬ程に立派なものになつてゐる。それで二家を比較する場合には、發句連句を合せて見た上でせねばならぬ。從來の比較論は、大抵二家の發句だけに就いてゞあるから、發句論としては多少の參考にもなるが、二家の文學的地位の比較論としては、殆ど何の參考に

自然も人事の一部

くも人事よりも自然をより多く愛したとは決して謂へぬ。發句でも純粹に自然を叙した句は少なく、人事に關聯した叙景か若しくは人事を叙した句の方が多い。自然に興味を有つた點は、寧ろ蕪村の方が豐かであつた。蕪村は人事にも廣く興味を有つたが、其の興味は所謂客觀的で、繪畫にでも對するやうな傍觀的翫賞的態度に於いてゞあつた。而して自然にも人事にも同じやうな冷靜な態度を執つた。即ち人事も自然の一部といふやうな見方をしてゐた。芭蕉のは之に反し、人事には飽迄同情を以て對したのみならず、自然をも決して冷眼を以て見なかつた。即ち芭蕉に於いては、自然も亦人事の一部といふやうな態度であつた。其の結果は自づから句味に及んでゐる。即ち蕪村のやうな態度を取ると、自づから前述の他の目的を混へぬ純藝術的のものに該當して、趣味が瀟洒と輕快に、こだはりなく、熱苦しいとか重苦しいとかの感じを伴ふことなしに、純粹に、客觀的に、遊離的に、高脫的に詩美を詩美として味ふことが出來る。芭蕉のやうな態度を取ると、之に反して、何物何事に對しても、常に一種の切迫したる現實感即ち哀愁悲痛の情を伴ひ、趣味が沈鬱となることを免れぬ。前者は沖澹の裏に雜り氣の無い純藝術美を味ひ得るが、後者は多少とも濃厚(しつこ)く脂こいやうな混濁した感じの必ず雜るのが例である。それ故

藝術的には多少不純

純藝術を味はうとするものが前者を喜び易いのは尤もで、且後者に比して前者が一段高いやうな、實は誤まつた感じを起し易いのである。文人畫を喜ぶのなども、此の感じから來てゐるのらしい。彫刻でいふと前者は大理石像で、後者は銅像、花でいへば梅と櫻とである。前者は皎潔で冷たい美を感じ、後者

芭蕉は人事に寧ろ多くの趣味を有つた

上目的に協うてゐる事柄でも、それが人情と全く相反すと見た場合には、前者を捨てゝ後者に從ふのが人生派の歸結であらう。其の人情といふのも、人々の信念に依つて深淺廣狹いろ〳〵に異ひ、藝術の至上目的などいふと、一層難問題になつて、中々單純に解決し得べきものではないが、予自身は、思想としては大體に於いて右の歸結に服從する者である。此の點に於いては、予の如きは思想上の芭蕉の奴隷たるに甘んずる者である。但し是等は根本義に就いていふので、もつと手輕な意味でいふ時は、他の目的や意義を含まぬ純藝術的のものが、高くも淸くも感ぜられて、さうでないものが、不快や苦痛や醜惡厭嫌の感を伴ひ易いのに比し、藝術的快感のみを味ひ得る長所のあることは、認めねばならぬ。所謂藝術的の匂ひが高いとか纖塵を留めずとか評すべき藝術は斯ういふ處から生れて來る。自分は斯樣な藝術を愛する。併し此の種の藝術は畢竟するに、當然多少の遊戲的貴族的乃至道樂的意義を含むべき點に於いて、自分の根本的信念と合はぬ處がある。但し又、元來藝術は實用的でないとの意味で遊戲的、乃至ある一部の人々のみが味へるとの意味で貴族的であるといふことは、確かに謂へる。是等の畦界に就いては、多少の思ひ得た事も無いではないが、片言隻辭の說き盡し得る所でないから、略して置く。

聊か繁冗に亙るが、前述のことゝ關聯しての從來の芭蕉論の多くが謬つてゐる重要な點を一ついうて置き度い。それは芭蕉は人事よりも寧ろ自然を愛した一個の自然詩人であつたとの考である。此の考の謬りなことは、斷言しても可い程である。芭蕉は自然よりも寧ろ人事に多くの興味を有つてゐた。少な

ゐる。無論詩人や文學者が、皆こんな理屈を考へてゐた譯でなく、佛敎思想の永い間の感化から、日本人は、斯樣な人生觀を有つことが合理的であるやうに、自然に慣らされ來つたのであるが、芭蕉の如きは、特に佛敎思想の感化を多く受けた結果、其の色彩が最も强かつたのである。芭蕉の所謂「寂色」は、此の思想を詩化俳化した迄に過ぎぬ。

予は自分としては、目下の處積極的寂靜觀とでも謂ふべき觀法に惹かれつゝある。即ち水に映さぬ積極的向上的現實其のまゝに大寂靜（涅槃といふ語が當るならば、其の語を假用しても可い）の眞實味を味ひ度いと努めつゝある。此の點に於いて、芭蕉などの根本思想、又は其の文學の基本的色調に多少慊らぬ處もある。其の趣味を絶大なる感興を以て味ひ得るけれども、自分に取つては是が最上無二の趣味とは謂ひ難い。予は芭蕉の崇拜者讃美者であるけれども、思想上の模倣者ではない。芭蕉の思想は偉大であり深遠であるけれども、其のまゝを現代の我々の信仰として移し植ゑるには、なほ物足らぬ處がある

西洋の文學を說く者は、近代の藝術を、純藝術派と人生派、即ち藝術至上主義又は藝術の爲の藝術主義と、人生の爲の藝術主義とに分つ場合もあるが、芭蕉などを之に當箝めることは適當とは思はれぬけれども、どちらかと謂へば、後者に近い。是等は殆ど議論迄も無い程に明白かと思ふ。蕪村はどちらかと謂へば前者に近い。予一個の信念としては、後者を取ること言ふ迄も無い。併し是等のことは、其の人の知的理論から割出した主義に基くよりも、天性に基く場合が多いであらう。兎に角たとひ藝術の至

しいといふやうな世界を建立する。地獄極樂の劍の山や蓮池の具體的想像は、之を解り易く喩す爲の方便に過ぎぬこと言ふ迄もあるまい。其の結果は現世に於ける寂靜の境涯を、其の理想世界の現在への延長又は準備として思念することになる。寂滅爲樂の觀念は、是に於いて成立せねばならぬ。佛敎では門外漢の予の解釋に過ぎぬから、確かではないが、大體に於いて、こんな風に考へても可からうと思ふ。

斯く現世を觀た結果は、現世を眞實の第一義の世界とせずして、假現の世界とする。即ち「假の世」「夢幻の世」と觀る。斯く觀ることは即ちすべての相を消極的に觀ることゝなるのである。例へば人間の一行爲も、行爲其の物に積極的絶對的價値を付して考へずに、「假の」又は「方便」として觀る。之を物に譬へると、斯樣な人生觀は、恰も或る物體の相を水に映して見るやうなものである。映つた相は現實と異はぬが、現實其の物ではなく、假現の相である。且現實の物體は水平線上に向上的積極的姿勢を取つて見られてゐるが、映つた相は水平線下に向下的消極的姿勢を取つて見える。現世を眞實の世界と觀るのと、假現の世界と觀るのとで、斯く積極的人生觀と消極的人生觀との相違を生じて來るのである。此の水に映した消極的の相が即ち寂色の相である。假は眞あつての假であるが、眞其の物ではない。眞は玲瓏透徹水の如きものである。之に映つた假現の相が即ち寂靜の鑑に映つた世界である。所謂寂光を通して觀た世界である。娑婆即寂光土とは、火宅の現世が其のまゝ寂光土であるの義ではなく、寂光土の眞實相の假現としての義に於いて始めて許さるべきである。寂の思想なり趣味は、斯樣な處に根ざして

悲觀的傾向と寂滅觀

元來態々佛法を持出す迄も無く、寂滅觀は、佛法の傳來以來永い間に我が國文學に自然に浸潤して、其の根本思想を形造つたこと、恰も西洋文學の大部分が、希臘思想や基督教思想を根柢としたのと何の變りもない。芭蕉が特に之を高調したのは、我が國民の滑稽と快活とを好む本性から、一時たゞふざけ浮れてのみゐたのを、此の寂しい佛教思想に復らしめようとしたに過ぎぬ。足利時代の連歌も此の思想に本づいてゐること言ふ迄も無い。されば寂味は實は芭蕉の發明でもなければ、特色でもない。たゞ芭蕉は其の天性が之に向いてゐた爲に、其の文學にも特に此の色彩が強く現はれたといふに過ぎぬ。然らば寂味とはどんなものであるかを少しく說き試みよう。

元來現世の意義を重大に、又は樂觀的に見ると、輕小に、又は悲觀的に見るとで、其處に大なる人生觀の相違が生じて來る。一體此の現世に對する樂觀的傾向と悲觀的傾向とは、もと〳〵主として其の土地の自然の惠澤の厚薄から影響されたのであらうと想ふが、それは暫く別問題として置く。兎に角佛教の方では現世をさう重くは見ず、未來に寧ろ重きを置く傾向があつた。否現世を火宅又は苦界と觀て之を否定するやうな態度があつた。此の態度が寂滅觀の基底を成してゐるのであらう。現世其の物は重大の意義を有たず、たゞ未來の爲の現世として見る時に始めて意義が生ずる。乃で現世に執着する情念を否定し未來の理想世界に一致するやうに思想を仕向けねばならぬ。未來は我々の經驗を超越した世界であるから、之を具體的に觀念することは難かしい。乃で之を抽象的に觀想し、空寂無爲の、たゞ何と無しに樂

誤謬の明白なのも少なくない。予が逸話にあまり重きを置かぬは、前編にもいうた。

蕉風と寂味

芭蕉の發句は理想的、連句は沒理想的であることは、本編の初めにもいうたが、此の兩面を通じて行き亙つてゐる一の根本趣味がある。それは前にもいうた「寂味」である。是が芭蕉の人生觀の基調であるが、無論佛教の思想に本づいたものである。芭蕉の蕉風以後の藝術は、全體を通じて此の色彩乃至光澤に、ほのかに又微妙に包まれてゐる。此の色彩光澤を予は今假に寂色又は「寂光」と呼んで置かう。佛教では「寂光」は淨土の相を形容する語になつてゐるので、予が茲に謂ふ所と義を異にするであらうが、芭蕉の藝術の色調を形容するには、此の語が甚だ適はしいと思ふので使用する。蕉門では寂色といふ語を用ひてゐた。東洋藝術は概して其の眞趣を靜味に求めてゐた。詩や畫は特にさうであつた。之をなほ推廣げて行くと、所謂東洋文明は靜的であるといふ處に到着する。人生の大波瀾、白浪滔天の狀を描いても、其の歸趣には大抵一味靜寂の致が離れなかつた。寂味も亦廣義の靜味中に含まるべきものであらうが、單純な靜味といふやうな語では表現し得ぬ複雜微妙にして且洗練された趣味である。或は芭蕉の藝術が此の特色を有つてゐたと謂ふよりも、芭蕉は此の微妙なる寂光を通じて人生を觀たと謂ふ方が適切かも知れぬ。前記の蒼古幽玄も此の寂味中に含まるべきものである。

寂味と寂滅觀

寂味は佛法の諸法從本來、常示寂滅相の觀法に本づいてゐるので、簡單に說明することは困難である併し一通りいうて置かぬでは、芭蕉の俳風を了解する上に物足らぬことになるから、一言して見よう。

迷ひの種になるとて手元に留めたことを記してゐる。但し北枝に與へた書には、「附合十七體別紙に記進候云々」（消息集）とあつて、實際北枝には示したものらしい。吏登の『或問珍』（嵐雪の說を筆記したと稱するもの）にも「凡そ俳諧に卅體と申せど、體は其上幾らも侍るを、芭蕉翁至極に取つゞめ、粉骨して十七の句法を定められたり」とある。芭蕉の付合の手段が、容易に未熟の門下の頭に入らぬので、芭蕉が手引として、付方の諸方を書いて示したといふは、ありさうなことゝ思はれる。但し其の十七體の何であつたかは、明かには判らぬ。北枝の『山中問答』に附してある「北枝叟考」も、付句の法を說いたものであるが、北枝自らも、自分の工夫であると書してゐるのみならず、芭蕉の說らしくなく、十七體とは無關係なものであらう。其の外芭蕉の直傳など稱せられて世に傳へられたものに、予は未だ一も眞物らしいのを見たことがない。遺物中の新式が芭蕉手定の式目だとの說もあるが、予は信ぜぬ。

芭蕉の俳句に關する逸話も、多きに堪へぬ程いろ〳〵傳はつてゐるが、確實と認め得るのが至つて少ない。其の一二の例をいはう。近頃出た市島某の『藝苑一夕話』に引いた、芭蕉の「白露をこぼさぬ萩のうねり哉」を其角が初五を「月影を」と直して芭蕉が感服した話などがそれである。多少の俳句の心得のある者ならば、こんな兒戲に類した話を信じまいが、此の類の話が、存外まことしやかに傳へられてゐるから、一言するのである。例の「古池や」に附隨しての逸話など、八九分迄虛傳と認むべきものが混つてゐる。「木曾殿と脊中合せの寒さ哉」や「七景は霧に隱れて三井の鐘」の類を芭蕉の句としての逸話など

とあるのも、好い例である。（史邦の句の「つかれたり」を、「付かれたり」の意とするはいかゞ。「繼がれたり」で、赤人の名蹟が繼がれた即ち歌の後嗣が出來た意であるまいかと思ふ。さうでなくては、付句の「鳥も囀る」がよく響かぬやうに思ふ）又同書に、

草庵にしばらく居ては打破り　　芭蕉
命嬉しき撰集の沙汰　　去來

初めは、「和歌の奥儀は知らず候」と付けたり。先師（○芭蕉）曰く、前（○句）を西行（○頼朝の前で、和歌の奥儀は知らぬと答へた事がある）能因などの境界と見たるは好し。されど直ちに西行と付けんは、手づゝならん。たゞ面影にて付くべしとて、斯く直し給ひぬ。

とあるも好い例の一である。前句を西行と見て、直に西行の事を付けるのは、趣致の聯合よりも、寧ろ觀念の聯合が勝つ。直に西行と付けずに、何と無く自づと西行でも想ひ出させるやうな趣致の句を付けるのが即ち蕉風である。『去來抄』が果して去來の自說であるか否かは、疑問の餘地もあるが、兎に角蕉風に精通した人の記したものには違ひ無い。なほ「はしり」といふのも響と畧ぼ同意であらう。

芭蕉が門下を敎へる爲に、附合十七體を定めて示したことは、疑ひ無いやうである。先づ『湖東問答』に、路通が蕉門附合十七體とて、江州や長崎で敎へて歩いたのに就いて、芭蕉が嘗て加賀の門人（北枝のことであらう）の懇望で、附句の諸體を示す爲に草稿を作つたが、付句が是等に止まると思ふと却て

草庵にしばらく居ては打破り

は、前句は、古び歪んで、蓋の合はぬ半櫃で、付句は「其場」で、そんな埃塗れの破れ櫃の在るのに相應した、極く粗末な不用になれば壞して仕まふやうな草庵を付けたのであるが、若し單に是だけならば匂も響も無い。前句の歪みて蓋の合はぬが、何と無く偏屈狷介にして世に容れられぬ、又は世の用を成さぬ拗者のやうな趣に感ぜられるので、たま〳〵結んだ草庵を、暫く住んで、早出る時には打破つて、さつさと去つてしまうた畸人を付けたのである。斯様な處が所謂「感合」で、蕉風の他派に異なる所は、此處である。蕉風の連句に對する時には、必ず此の事を忘れてはならぬ。蕉風の連句が、前句と全く無關係な様なのが多く、一寸讀んでも判らぬのも、是が爲である。「其人」や「其場」が入つてゐれば、其れだけでも前句との關係が判るが、芭蕉の付句には、趣致風韻だけで付けたのが寧ろ大部分を占めてゐる。なほ是等の事に就いては、前篇幻住庵の項の、鬼貫が芭蕉を訪うた時の付合の話や、「初懐紙注釋の一例」の項等を參考され度い。なほ『去來抄』に、

(一五九)

赤人の名はつかれたり初霞　　史邦

鳥も囀る合點なるべし　　去來

先師(○芭蕉)曰く、うつりといひ、匂といひ、實は去年中三十棒を受けられたるしるしなりと悦び給ひけり。

守武宗鑑時代の附句は、大方附物、古風檀林風は、附物と心の附との混合體である。「うつり」響匂位は言ふ迄も無く蕉風の獨擅のもので、他派では模倣さへ出來なかつた最も進んだ附方である。『去來抄』には、是等を別々に、一々例を引いて說明してあるが、別々のものと見る必要はあるまい。「うつり」も響も匂も位も、畢竟は一に歸するのである。

是等の語意

先づ「うつり」といふのは、今いふ「うつりが好い」などの「うつり」で、對比、對照、又は相映發するなどの意味で、前句との照應をいふのである。響は格調などいふと同意で、前句に對して其れの相通ふことをいふのであらう。次に匂とは句の香即ち趣致風韻をいふので、響は音調の方からいひ、是は句の風趣からいうたのであらうが、畢竟は一つことに歸するのである。又位とは、句の品位姿態をいふのであらう。が、是亦詮じ詰めれば同じことになつてしまふ譯である。之を一言でいへば、前句に感合（俳諧芭蕉談の用語に從ふ）することをいふのである。此の付方は、前句の詞や意味に付けるのとは大なる相違があつて、詞付や心附は直接に、且主として概念的又は知識的聯合で付けるのであるが、此の感合は前句に伴うて起る情緒乃至氣分といふやうなものを媒介として付けるのである。例へば、「其人」「其場」「其時」等のみで付けるのは前者であるが、蕉風では、「其人」「其場」「其時」の付でも、決して前句のそれだけには付けずに、別に前句の趣致風韻の相ひゞくものがあるやうに付けるのである。例へば、

句付の一二例

ゆがみて蓋の合はぬ半櫃

のである。但し努めた所が必ずしも特色となつて現はれると限らぬけれども、予は芭蕉の最大特色は茲に在りと信ずる。子規氏が擧げた雄壯の句の例に匹敵すべきものは、蕪村などにも少なくない。併し細くしんみりと實意のあるものは、蕪村にも乏しかつた。他の俳人には尚更であつた。但し芭蕉のやうな人は、實はどんな趣味にでも同感同化し得たのであるから、特色は茲に在りと、一端にのみ限つて見るのは宜しくない。强ひて特色を探したりすると、却て偏見に陷るものである。是等の寂栞細味等の說も『去來抄』『柿晋問答』等以外にはあまり見受けぬから、芭蕉が是等を標語として始終說いてゐたものとも想はれぬ。けれども芭蕉の俳諧を特色づけるのに、是等の語が最も適當であるは疑ひない。

響句等は連句の付方をいうた語であるが、實に蕉風付合の眞髓は是等の語に現はされてゐるのである但し是等の語は芭蕉が言始めたのかどうか、疑ひが無いでもないが、徵すべき材料が他に見當らぬ。

先師(○芭蕉)曰く、發句は昔より樣々變り侍れど、附句は三變に止まれり。昔は附物を專らとす。中頃は心の附を專らとす。今は、うつり、響、匂、位を以て附くるを好しとす。(去來抄)

茲に「附物」とあるは、多分、梅には鶯を付けるとか、竹には雀を付けるとかの類をいふので、詞の緣ばかりで、意味の上の聯絡の全く無い付方も、此の中に含むのであらう。「心の付」とは、前句の意を直に說明するやうに附けるのをいふので、「寒い」といへば「冬の夜」を附け、「寂しい」といへば「秋の夕」を附けるといふやうな類をいふのである。連歌では、宗祇時代の附方は、大抵此の「心の附」で、俳諧では、

十團子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此句栞あり。

といふので、甚だ曖昧であるが、先づは右のやうな意味にでも取る外はあるまい。或は栞即ち「道しるべ」で、風雅の歸趣を確かに把んだ處のあるをいうたのかとも思はれるが、確かでない。

細味

細味は芭蕉の趣味を最もよく表はしてゐる。細味とは、粗大、豪放、疎曠等と反對の、あはれに細々と風情を含んだデリケシーのある句をいふたのらしい。

去來曰、細味はたより無き句にあらず。細味は句の心に在り。

鳥どもゝ寢入つてゐるか餘吾の海

先師曰。此句細味ありと評し給ひし也。

柴門辭にも

是等も要領を得兼ねるが、同書に芭蕉が「妻喚ぶ雉子のうろたへて啼く」の後半を「身を細うする」と直したとあるなどを適例として、察し得られる。芭蕉は空漠に疎大に荒々しく大きくいうたやうなものを好まず、か細くあはれげな中にしんみりと實意のある一節を失はぬといふやうなものを好んだ。許六に示して「細き一筋を失はず」(柴門辭)と云うたのも此の意に外ならぬ。我が風は「寂を好んで細し」なども同意であらう。內容の空疎なことをすばらしく大きくいふのと、正反對の趣味である。子規氏は芭蕉の特色を雄壯に在りとしたが、芭蕉自身の努めた所は、却て寧ろ此の反對の趣味とも謂ふべき細味に在つた

寂

「寂」も芭蕉が特に門下に教へた主義の主要なものゝ一である。所謂「寂」は閑寂をのみいふのではなくものさびた沈靜の色合をもいふのである。即ち蒼古幽玄の味をもいふのである。『去來抄』に

野明曰、句のさびは如何なるものにや。去來曰、さびは句の色なり。閑寂なる句をいふにあらず。譬へば、老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡を飾り、御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑やかなる句にもある者也。例へば、

花守や白き頭をつき合せ　　去來

先師(○芭蕉)曰、さび色よく現はれたり。

とあるのが、よく當つてゐるやうである。通常蕉風の特色を「閑寂」と稱してゐるが、「さび」又は「さび色」の中には、是も含まれてゐるけれども、其れだけでは言ひ足らぬ。即ち「物さびた」といふ中には閑寂沈靜の趣が自から附隨して來るが、寧ろ老蒼淵玄の趣が主となつてゐるのである。なほ此の寂に就いては、後に別に說いて見よう。

参 風俗文選127、許六の「直指の伝」「正風幽玄の実をなせり」

栞

栞といふ語の意味は、甚だ捕捉するに困るが、「栞あり」などいふ用例と、謠曲などでいふ「しをり」の語義等とから察すると、句風に手強い一種の「ねばり」即ち曲折又は彈力を有つてゐることをいうたのらしく思はれる。さうとすると、栞の字よりも撓又は彈の字が當る筈である。

去來曰、栞は哀れなる句にあらず。栞は句の姿に在り。

「調はずんば舌頭に千轉せよ」(去來抄)とは、果して芭蕉の語であるかどうか判らぬが、芭蕉は確かに之を實行した人である。語不ㇾ驚ㇾ人死不ㇾ休(杜甫)とは、彼の事である。芭蕉の發句が、大半、事に依ると過半又は大部分、一度も二度も三度も改作されてゐることは、既に擧げた幾多の例で知り得られる彼の句が、出てゐる集に依つて異同の甚だしかつたのは、多くは集の杜撰な爲ではなく、彼が幾度も更案改作した爲であるらしい。彼は實に死ぬ間際迄一字一語の推敲に粉骨碎身した人である。推敲したからとて、必ずしも好句が得られる譯ではないが、平生此の用意があるからこそ、出任せの漫吟亂作に陷らぬのである。憶ふに李白や蕪村の如き才氣の至つて高かつた人は、口を開けば忽ち章を成し、咳唾皆珠となるといふ風で、推敲を藉らずして自づから佳句を得られたであらうが、杜甫とか芭蕉とかいふ人は、天性からしてそんな風には出來てゐなかつたのである。是等の人は、心を彫り髓を刻み、腸を剜り骨を鏤せずば決して自から安んずることの出來ぬ天性を有つてゐたのである。李白や蕪村に百鍊千磨を勸めることの無理なのと同じく、杜甫や芭蕉に一氣呵成を强ひるのも、不可である。飄逸輕妙な文句は一氣呵成に口先を銜いて出る所に興趣があり、忼壯沈鬱の文字は、百鍊千磨腹の底から搾り出す所に眞味がある。前者に浮薄の弊があれば、後者に硬澁の失がある。而も是等は、天才の適不適に依るもので前者が後者を學んでも、後者が前者を學んでも、行かぬことが多い。詩人で此の兩面を兼ねた人は希有なやうである。

編參看）此の不易流行に關する說なども、聊か曖昧な處があつて、どうもはつきりせぬ。極く輕く意味を取つて置くが宜しく、あまりに難かしく拘泥し過ぎるのは、却て芭蕉の眞意を失ふ所以ではないかと思ふ。予は下に自分の憶說を一言して置かう。

不易流行說の眞意は、右の如く他に徵すべき明確な材料が無いので、判然とはいへぬが、或は斯樣な意から出たのかも知れぬ。芭蕉が所謂正風に入る迄は、古風、檀林風、虛栗風などいろ〳〵の風を經た然るに一度正風に入つて見ると、詩の本義はどうも此處に歸しさうに思はれる。即ち千載不易の眞趣は此處に求めなければならぬやうに思はれる。乃で、俳諧にも、必ず不易の體が無ければならぬといふ處に氣が付いて來た。然るに又飜つて思へば、自分の經て來た所から推しても、一人一派の創めた風は、大抵二年か三年、永くて五年か七年かで漸く廢つて、又新らしい風が出て來るといふ有樣であつた。して見ると、どうしても一時流行といふことも考へて置かねばならぬ。今日自分で、斯ういふ風が最も面白いと思うて詠んでも、明日になれば、早それが古臭くて面白くなくなるといふのも、亦すべての物事につけての常態である。此の考は、芭蕉が嘗て門人に「後世何者か出でゝ如何なる新しみをや探り出すべき。我はたゞ來者を畏る」（一葉集遺語）と語つたと傳へられることなどにも、思ひ合される。然るに一方には、どうしても時の流行などには支配されぬ不易の何物かゞ無ければならぬ氣もする。斯ういふ兩端の考が、不易流行の說となつて門下に語られたのであるまいか。但しあまりに深くはいへぬ。

不易を知らざれば基立ち難く、流行を知らざれば風新たにならず。不易は古に宜しく、後にも叶ふ句なるゆゑに、千歳不易といふ。流行は一時々々の變化にして、昨日の風は今日宜しからず。今日の風は明日に用ゐ難きゆゑ、一時流行とは、はやることをいふ也。

とあるが、大體の意義は、略ぼ是等に盡きてゐるのであらう。芭蕉の意も是れ位な處に在つたのであらう。但し不易の句例として、「月に柄をさしたらばよき扇哉」(宗鑑)「是は〳〵とばかり花の吉野山」(貞室)「秋の風伊勢の墓原なほ凄し」(芭蕉)を擧げ、「流行の句は、己に一つの物數寄ありて、はやる也。形容、衣裝、器具等に至るまで、時々のはやりあるが如し」とて、是等の句は之と異なり、一時の物數寄のない句であると說き、流行の句例としては「蒸すやうに夏にこしきの暑さ哉」「あれは松にてこそ候へまきの雪」「海を肥えて野花瘦せたるも友ならん」を擧げてゐるが、是等は果して適例かどうか。又不易流行の說を言出した頃迄の句には、往々異體のもあつて、行脚中にも「あな無殘やな冑の下のきり〴〵す」などもあつたが、後に「あな」の二字を削つたと云うてゐる。是等は尤もと聞える。以上の『去來抄』の說に依つて其の意を推すと、句によつて不易の句と流行の句とが別々にあるやうに思はれるが、又同書中の、去來の「應々といへど敲くや雪の門」の丈草の評には「此句不易にして、流行のたゞ中を得たり」などあるのから察すると、一句に、不易の體と流行の用とを兼ねることも出來るとの考もあつたらしい全體『去來抄』といふ書が、果して去來の言を其のまゝに傳へたものか否かの明かでない書であるが、(附

り一身を損うたりする者を嘲けつてゐるが、斯樣な不眞面目な態度で權威ある文學が生れやうがない。

『去來抄』に據れば、芭蕉が不易流行といふことを言出したのは、奧州行脚の後であつたとあるが、果してさうであつたか。他書には明白に云うてないやうである。一體此の不易流行といふことは、芭蕉がどういふつもりで言出したのか、去來などの說だけでは、如何かと思はれる點があつて、明かでない。或は、永く檀林風の言語遊戲に浮沈してから、漸く正風體に入つた自覺から、たゞ時々の流行を逐ふのみで、千載不易の眞諦に心掛けねば、一生無意義なたゞ言を並べるに終るといふ考から出たものでもあらう。それを去來などが、あまりに拘泥し過ぎて、彼是と面倒臭い理窟にして仕まうたものでないかと思ふ。どうもさうらしい。此の議論は、去來の『湖東問答』や、許六の『俳諧問答』などにいろ〳〵と繰返されてゐるが、議論は去來の方が兎角徹底を缺き、却て許六の方に道理が多いやうに見えるのである。去來は、是々は不易の句、是々は流行の句と、別々に考へ、師芭蕉の生きて導いて呉れてゐた間は師の流行に跟いて來たが、其の歿後は只管不易を守らうなど、友人の言を引いて云うたりしてゐる。許六のは、不易流行は、句が出來揚つた上に謂ふべきことで、始めから不易の句を作らう、流行の句を作らうなど思ひ搆ふべきではないといふので、こんなことにあまり拘泥してはならぬとの說である。だん〳〵兩者の意を察して見ると、どうも許六の方が芭蕉の眞意を得てゐるのでないかと思はれる。『去來抄』に

去來曰、蕉門に千歲不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つに分けて敎へ給へど、其元一つ也

運らし、終に卽點などゝ與する事共、偏に少年の讀みかるたに等し。されども、料理を調へ、酒を飽く迄にして、貧なる者を助け、點者を肥やしむること、是亦道の建立の一筋なるべきか。又志を勉め情を慰め、強ちに他の是非をとらず、是より誠の道にも入るべき器なり。などはるかに定家の骨を探り、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族、都鄙を敎へて十の指をふさず。君も則ち此十の指たるべし。能々御愼み、修行專一に存候(芭蕉消息集)

芭蕉は此の樣な大抱負を並べ立てることなど平生にはあまり無かつたやうであるが、腹の中には必ず是位の理想を常に藏めてゐたのであらう。彼は渾身是詩、詩卽一身、所謂「句と身と一枚にな」ることを必掛けてゐたに違ひ無い。而して優れた門人達にも、是を以て期待したに違ひ無い。加賀の北枝が火災に罹つて「燒けにけりされども櫻は散りすまし」(藝苑一夕話に散らすまじと訓んであるが本づく所があつたのか)の名句を詠んだのだのに「名歌を命に替へたる古人も候へば、斯る名句に御替(〇家を)被成候へばさのみ惜しかるまじくと存候」と激勵し、路通が還俗したことを「迚も西行能因の眞似はなるまじく候へば」と歎息してゐるなどでも、俳諧を退屈しのぎの道樂半分にやつてゐるやうな浮氣を門人にさへ許さなかつた意氣込が見える。言ふ迄も無く、名も利も、進んで家をも身をも抛出して、一心を只管に其の道に打込んでこそ、其處に大なる自己の天地が開かれるのであるが、其れは中々容易ではない。其れを門人に期待する處に芭蕉の眞面目が在る。儒者(栗山であつたか)などが、或は詩や歌で健康を害した

といふことは、前にもいうたが、是こそ最も注意して置かねばならぬ重要な點の一である。芭蕉の發句には、芭蕉らしい一種の香ひが始終付纏うてゐて、個性が著く現はれてゐるが、連句にはそれが殆ど無い。即ち連句には、個人的の特色が無く、全く相手次第で、相手の好みをよく呑込んで、其れと風格を似せるやうに努めたのである。それが芭蕉の俳論とどういふ關係に在るかといふに、連句では斯く八面玲瓏、十方無礙であつた爲に、どんな風が善いとか、どんな體が面白いとかの論が殆ど全く無かつたので、是が上述の事實とよく一致してゐるのである。芭蕉が連句に關して門人に敎へたことは、主として付方に就いてゞ、他は發句連句共通の栞とか細味とかだけであつた。(後にいふ)連俳に特技を有つた人のことゆゑ、特別の議論があつて然るべきに、無かつたのは、是が爲であらう。何かもつと議論を遺して置いて呉れたら、大に研究の助けになるのであるが、殆ど何も見當らぬ。

風雅の三等の説は芭蕉の眞面目を見るに最も面白い一である。是の説は門人の膳所の曲翠に與へた消息中に見えてゐる。

風雅の道筋大方世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し、勝負に道を見ずして、走りまはる者あり。彼等は風雅のうろたへ者に似候へ共、點者の妻子をはごくみ、店主の腹を脹らし候へば、僻事せんには優りたるべし。又其身富貴にして、目に立つ慰みは世上を憚り、人事言はんよりはと、日夜に二卷三卷、點取り、勝ちたる者も誇らず、負けたる者も强ひて怒らず。取かゝり、線香五分の間に工夫を

蕉の眞意の在る所を知らうとするには中々骨が折れるが、兎も角も詩人としては、理窟の決して少ない人ではなかつたらしい。是等は主として門人を喩す爲に發したので、多くの門人を有つた人としては蓋し已むを得ざるに出たのであらうが、先づ作家として傑れてゐた外に、理窟も相應に立つた人と謂うて可からうと思ふ。此の點は、西鶴や近松や、又俳人では後の蕪村などゝ異うてゐる。蕪村にも理窟はあつたが、芭蕉のやうな割合に組織立つた、又は精細なものでは無論なかつた。世間では、芭蕉を全く理窟を言はなかつた人と見る者と、何につけても一々理窟を有つてゐた人と見る者と、兩樣あるが、孰れも誤つてゐる。あれだけの門人を指導するのに、相應の理窟が無くて、出來るものでない。曲翠に與へた風雅の三等說や、許六に與へた「柴門辭」など見ても、彼が立派な議論の持主であつたことが判る。付方の三變を說いたり、(?)十七體を示したりしたことも、粗漫な頭惱では出來る筈がない。元來連句が律詩と似て、才氣ばかりでは行かぬ代物で、頭惱が緻密で、思索の精深な者でなくては堂に入り難いものである。芭蕉を以て理窟に拘泥しなかつた人と見るのは可いが、理窟を有ち得なかつた人と見るのは當らぬであらう。人としての芭蕉は寧ろ遲鈍であつたが、俳諧に對しては鋭敏であつた。併し又何事につけても一々理窟から割出してゐるやうに見るのは、尙更當らぬ。理窟を考へ得、解し得る用意はあつても、之に拘はつたり囚へられたりしなかつた處に、此の大詩人の面目が在る。

芭蕉の連句が、自己の一偏の所好に執着せずに、每に相手に應じて其の俳風を自由自在に變化させた

相應に理窟のあつた人

ある。それから一々前句の意味を、無理にでも付けた時の意と違へて取つてゐる處などは、頭が談林臭味を脱してゐぬからである。解釋は決して事實や印象にのみ拘泥してはならぬ。唯々にほひ響の幽微精深な處に着目すれば可い。繰返しいふ通り「何となくそんなやうな趣に感ぜられる」といふ處に興味の焦點が在ることを忘れてはならぬ。而して其處には想像の餘地が裕かに殘されて、畫を見るやうに、一定した色や形がはつきりと目に入つて動きの取れぬやうなのとは、全然異うた趣致を味ひ得る所を會得せねばならぬのである。曲齋の注などは、寧ろ折角の句付を解し殺すものである。

芭蕉の終焉前にも、作は可なりにあつたが、右の集を見れば大抵其の風を知ることが出來る。それと前編の末節の邊に出してある發句や、所在を擧げて置いた發句や歌仙のあるものなど見たならば、前にもいうたやうに、晩年には既に『猿蓑』前後のやうな調子の高い意義の優れた作が、稀有であつたことに氣付くであらう。

第十節　芭蕉の俳論及び趣味の基底

以上で芭蕉の俳風の實際的方面は略ぼ叙し了つたが、それに付けては、芭蕉が自説としては、どんな説を抱いてゐたかを知ることも、興味もあり、又必要でもある。以下其の方面の事を少しく紹介して見よう。芭蕉はあまり理窟など言はなかつたが、しかし相應に理窟のあつた人である。門人の聞傳へが、其の意を誤解したり、或は誇張したり、故意に曲解したり、捏造したりしたものが少なくないらしく、芭

樣也。

篠竹まじる柴を戴く　　惟然

前句水涸るゝ池の中より堤へ上る道有りてと云ふ句と見立て、人の出る樣を付けたり。池邊の藪生弘ごりたるを、水涸れ後刈りて出る人を見て、藪にて見えねど、池の中に道がある哉と思ふ樣也。

鷄があがるとやがて暮の月　　蕉

前句いたゞきて市に販ぐ柴と見立て、夕出を付けたり。るとはればと改めたし。(○案ずるにるとの方が好い）此句篠竹と云ふ詞を付落しけり。爰は篠竹と云ふを、機の押筬や管竹などを柴の次手に切添へ歸る女と見立て、織紡ぐ娘持ちたる里の月と起情する所也。

通りの無さに店たつる秋　　考

前句雞があがれば、直に暮ならむと、仕廻する體と見立て、街道の樣を付けたり。寒いに店明けゐても無益なれば、ちと早けれど、葢さす樣也。

始めのあたりは先づ可なりに無難に解釋してゐるが、進むにつれてだん／＼變になつてゐる。是等の解釋は、實に困るので、たゞ其の場とか、其の人とかにのみ拘泥して、例の如く「にほひ」「響」を丸で忘れてゐるのであるが、頭に入り易い方から謂へば、こんな風に考へて見るも、亦多少の手引になるかも知れぬ。其の場や其の人の印象をあまりに明白に浮ばさうとして、無理に牽強附會するからかうなるので

いふので、下賤には聞えぬ處から、蕨を以て笹づとにひゞかせつゝ、卯月野などの上品な語を以て句を成してゐる。要するに集中の芭蕉關係の連句は、芭蕉としても、先づは中位な出來と謂うて可からうと思ふ。多少は支考の手が入てゐるのかも知れぬと疑はれる句も無いではないが、大體に於いて正しいものであらうと予は臆測するのである。

此の書の注釋でも好いものが無い。玆に曲齋の『七部婆心錄』の一節を引いて見よう。是は寧ろ惡い注の一例としてゞある。

猿蓑に洩れたる霜の松露哉　　沾圃

猿蓑の一集の中、發句にも付句にも、松露の吟無きを見出して、己(○沾圃)が集に洩れし歎を述べけり。松露は猿の好物、誠に蓑の目を洩るといふ所作の姿也。(○下略)

日は寒けれど靜かなる岡　　芭蕉

發句霜の松露を松間の朝景色と見立て、其場の體を付けたり。立並びたる松もる旭脚薄き霜風を凌ぎつゝ、猿聲絕えて靜かなる磯山に、松露拾ふ姿を、けれどの三字に含みたり。

水涸るゝ池の中より道ありて　　支考

前句仰ぎ見る日は寒けれど、庵見えて靜かなる岡と見立て、其場の樣を付けたり。山田の用水池の落し水の後、乾れたる中を眞直に近道付けて、蹈堅めたる筋見ゆるを、此方より眺めて、其閑室を偲ぶ

ばれかゝれる」に、同じく「引立て無理に舞はするたをやかさ」の付なども、さう惡くもない。里圃の「勇み立つ鷹」を立句とした一卷は、芭蕉の句が一句しか入つてないが、それは

冬のまさきの霜乍ら飛ぶ　沾圃

大根の育たぬ土に節くれて　芭蕉

で、巧みな句である。芭蕉の「夏の夜や崩れて明けし冷し物」を立句とした一卷などは、此の書出版當時なほ健在の曲翠も入つて居り、且

鳶で工夫をしたる照降　支考

己が事歌に詠まるゝ橋の番　芭蕉

馬牽いて賑ひ初むる月の影　臥齋

尾張で付きし元の名になる　芭蕉

笹づとを棒に付けたる狹箱　臥齋

蕨こはゞる卯月野の末　芭蕉

などは、何れも芭蕉らしい付方である。「己が事」などは、俚鄙に聞えるが、實は前句の、鳶で晴雨を占ふ變な親爺の樣によく付けた、巧妙を極めた句である。「笹づと」の鄙めいた處に、狹箱の堅くるしい趣を、卯月野にこはゞづた蕨であしらうた手段など、例の巧いものである。笹づとが鄙ぶり乍ら、狹箱と

連句は芭蕉の作に疑ひあるまい

篠竹まじる柴をいたゞく　　惟然
雛があがるとやがて暮の月　　蕉
通りの無さに店たつる秋　　考

是等の句は、芭蕉としては決して上乘のものではないが、又支考などの技倆の迚も及ぶべくもないことも既にいうた。何れも調高く、趣致淸遠、何處と無く芭蕉らしい香ひがしてゐる。但し卷中に往々支考らしい付句もある。例へば「晝寢の癖を直し兼ねけり」に「聟が來てにつともせずに物語」又「朔日の日は何處へやら振舞はれ」に「一重羽織が失せて尋ぬる」などは、支考自身の句であるから我まんするが、東風の又西になり北になり」に、芭蕉の「我が手に脈を大事がらるゝ」、「寢汗のとまる今朝かたの夢」に、惟然の「鳥籠をつらりと起す松の風」などは、支考臭い處があるやうに思ふ。しかし是等も芭蕉の連句が每に其の相手の風に殉じた例に從へば、強ち僞卷の證左とはならず、又晩年には此の類の句も往々あつたのである。

水際光る濱の小鰯　　惟然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　　芭蕉

などは、芭蕉でなくては出さうもない佳句である。次に此の集の卷頭に出してある一卷は、調は餘程粹けて、品も下るが、「昨日から日和かたまる月の色」に芭蕉の「狗脊枯れて肌寒うなる」の付、「曉に星のこ

ますけれども、實はさうでない。杜少陵あたりの集中に、雄渾なる詩もあれば、又透迤曲折を以て優るものもあるのです。決して一方に偏しては居ない。明人が唐を學ぶといへば、只だ雄渾といふやうな處ばかりを學んで、此の如きものは殆ど知らず居たと思ふやうであります。是は大に賀すべからざる話であらうと思ひます。何しろ氣格雄渾のみが唐詩であるのではない。透迤曲折のものも唐詩であることを知らねばならぬ。云々。（杜詩講義上）

是等も一の見方で、其の風に對する好惡は別として、和漢の二大家共に此の一面を有つてゐたのである透迤曲折とは、瑣末な人事などをくど／＼と說話的に叙するをいふので、『炭俵』などもさういふ風があつた譯である。

江戸で『炭俵』の成つた後間も無く、芭蕉は最後の行脚に出かけ、其の年の十月に大阪で亡くなつたのであるが、亡くなる少しく前に郷里伊賀で成つた歌仙等を主材として、亡後に編纂されたのが『續猿蓑』である。此の集が支考の僞撰であることは、旣に前編にいうてある。此の集中に先づ第一に注意すべきは、『續猿蓑』の題號の依て出た卷である。

猿蓑に洩れたる霜の松露哉　沾圃
　日は寒けれど靜かなる岡　芭蕉
水凋るゝ池の中より道ありて　支考

○有意義の見方

の蕉門の俳徒、是を云はず。己が勝手惡しきにや」（橘庵漫筆）などゝ迄謂はれてゐる。是だから、蕉風俳諧はだん〳〵墮落して、終には救ふべからざるに至つたので、折角芭蕉の開いた多くの法門中、卑俗な方面のみが主として後に傳へられたのは、遺憾の極である。蕪村等の連俳のみは、流石に此の弊を脱してはゐるが、元祿風とは聊か異うた行き方をした爲に、連俳其のものゝ特色と遠ざかる傾きがあつて竟に妙境に到達し得なかつたのは是非も無い。

但し又見方に依つては、此の風は多少有意義にも見られぬこともない。漢詩では唐風と宋風といふことをいふが、芭蕉の圓熟期の俳風を唐風と見ると、炭俵風は此の宋風に當てゝ考へることも出來るやうである。尤も俳諧と漢詩の上でもあり、國土や時代の相異もあるから、大に異ふ點もあるが、よく似た點もある。而して杜甫の句に所謂宋風のものが混つてゐたのと同じく、芭蕉にも炭俵風が、『炭俵』には限らず、各期を通じて處々に混つてゐる。杜詩でいへば老妻畫レ紙爲二棋局一、稚子敲レ針作二釣鉤一といふやうなのが、宋風で、宋人の喜んだ趣味である。是に就いて故森槐南氏が、嘗て斯う云はれてゐる。

唐人の詩を學ぶには、必ず氣格雄渾とか何とか申します處が唐調であるかの如く思うて居る人があるでございますけれども、氣格雄渾は固より詩の一體に相違ありませぬが、氣格雄渾以外に、尚逶迤曲折いたした一體がございますことは何人も餘り多く知らないのであります。斯樣に逶迤曲折した處は宋人が學びましたものでありますから、遂に宋人の專有物であるかの樣に後人は思うて居る事であり

いふので、暫らく續けて見たに過ぎぬといふやうなことであつたかも知れぬ。どうもさうでも考へぬでは、解釋が付かぬ。此の年西下してから、江戸の杉風への消息に「上方筋別座舗炭俵にて色めきわたり候」など得意がつてゐるが、何程の自信があつて所謂「輕味に移」つたのか、明らかでない。

方々に十夜の内の鉦の音　芭蕉
桐の木高く月冴ゆるなり　野坡
空豆の花咲きにけり麥の縁　孤屋
晝の水雞の走る溝川　芭蕉
秋の空をのへの杉に離れたり　其角
後れて一羽海渡る鷹　孤屋
此の島の餓鬼も手をする月と花　芭蕉
砂にぬく味のうつる青草　野坡

などの、巧みな客觀趣味の句もあるが、是等は前にいうた同趣味の發句と相對すべきものであらう。

後人の噂の一例

野坡や越人は、蕉門では二流以下の人であつたが、其の鄙俗の體が、却て後世の人を喜ばせ、「蕉門の附合の體を備へたるは、野坡越人の兩人を功者とす。此兩人の體を學ぶが善しとかや。故芭蕉一世の間兩吟の附合は、野坡か越人ならで無かりしとなり。兎角此兩人の風體宜しと芭蕉も云はれしとかや。今

後の宗匠輩に喜ばれた句

馬に出ぬ日は内で戀する　　芭蕉

は、近松の「丹波與作」でも讀むやうな戯曲的興味がある。後の宗匠輩を喜ばせた句で、喜んだ意味は、吾々とは別であらうが、此の句には俗臭の厭ふべき所が無い。兎に角連句での芭蕉の取材は、殆ど網羅せぬ物は無かつたのである。集中では「門しめて默つて寢たる面白さ」「拾うた金で表替する」「未盡の高の果てぬ算用、隣へも知らさず嫁を連れて來て」「雞頭見ては又鼾かく、奉公の苦しき顔に墨塗りて」「今に庄屋の口はほどけず、賣手から打つて見せたるたゝき鉦」「同じ事老の咄のあくどくて、だまされて又薪部屋に待つ」「又今朝も佛の飯で埒を明け、損ばかりしてかしこ顔也」などは、俗氣の厭ふべき上に、付意の拙劣な、甚だ感服し兼ねる句であるが、後の俳人は却て此の樣なのを學んだ。芭蕉の句でも、「たゞ居るまゝに肱患ふ」に「江戸の左右向ひの亭主登られて」、「隣へも知らさず嫁を連れて來て」に「屏風の蔭に見ゆる菓子盆」、「妹をよい處から貰はるゝ」に「僧都の許へ先づ文を遣る」、「雪の跡吹はかしたる朧月」に「蒲團丸げて物思ひ居る」、「今の間に雪の厚さを差して見る」に「年貢濟んだと賞められにけり」、「星さへ見えず二十八日」に「ひだるきは特に戰の大事也」の付句など、後の宗匠輩を隨喜させたものであるが、あまりに俚鄙に過ぎて、詩趣に乏しく、あの芭蕉が何故是のやうな低調の句を付けたのであらうと、訝かしく思はれる許である。多分野坡等の風に從つてこんな句をも詠んだ迄で、どうも芭蕉自ら此の風が當時の最上乘であると思うて詠んだものとは取れぬ。それが亦一風あるので、是も面白からうと

などは俗調乍ら、多少の面白味もあるが、多くは俗惡で、一向に詩味に乏しい句ばかりである。高華とか幽玄とかいふ趣は何處にも見ることが出來ぬ。但し人事でも、

初雁に乘懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
桐の木高く月冴ゆるなり　野坡
門しめて默つて寢たる面白さ　芭蕉
はつち坊主を上へあがらす　利牛
泣く事のひそかに出來し淺茅生に　芭蕉
好物の餅をたやさぬ秋の風　野坡
割木の安き國の露霜　芭蕉
仲好くて傍輩合の借いらひ　野坡
壁を叩いて寢せぬ夕月　芭蕉

流石な處もあつた

などは流石に捨て難い趣もある。矢張芭蕉は芭蕉で、どんな風を詠んでも、尋常の宗匠輩の及ばぬ所があつたのである。

上置の干菜刻むもうはの空　野坡

梅が香にのつと日の出る山路哉　芭蕉

處々に雉子の鳴き立つ　野坡

家普請を春の手すきに取つきて　同

上の便りに騰る米の直　蕉

宵の内はらはらとせし月の雲　同

藪越話す秋のさびしさ　坡

といふ風で、野坡が越後屋の番頭であつたといふだけに、卑俗な下世話的な町人風とも謂ふべき人字が多く、それも殆どすべてを通じて、俗事を俗調に詠んだもののみである。什方も芭蕉獨得の精勁な味に太だ乏しい。

娘を堅う人に會はせぬ　芭蕉

奈良通ひ同じつらなる細元手　野坡

黒谷の先は岡崎聖護院　利牛

五百のかけを二度に取りけり　野坡

片はけ山に月を見るかな　利牛

好物の餅をたやさぬ秋の風　野坡

扇屋の煖簾白し衣更
刈込みし麥の匂ひや宿の内
初雪の見事や馬の鼻ばしら
土運ぶ籮に散り込む椿哉　　孤屋
藪垣や馬の顔かく桃の花
星合にもえ立つ紅や蚊屋の縁
こほろぎや箸で逐ひやる膳の上

好ささうなのを拔いたのであるがそれで此の樣である。集中では孤屋の句が多少面白いかと思ふ。しかし野坡は流石に句振に大家らしい氣味合も幾分見える。「鉢卷を取れば若衆ぞ大根引」「人聲の夜半を過ぐる寒さ哉」などは、後の宗匠輩に喜ばれた喧ましい句である。あの芭蕉がどうしてこんな風をも喜んだのか、寧ろ不思議に堪へぬが、其處が亦芭蕉の芭蕉たる處で、どんな風にでも同化し得た其の天性を語つてゐるのであらう。杜甫などにも俚俗の一面のあつたことは、人のよく知る通りで、それは後にもいはう。芭蕉自身が喜んでこんな風を創めたものはどうしても信じ得ぬ。

『炭俵』の連句も、前にもいうたやうに、或者は蕉風の眞髓は此の一集に在るやうに說いたのであるが實は發句と共に甚だ感服の出來ぬものである。

らくば兩方の意味があつたのであらう。

春雨や蜂の巢傳ふ屋根の漏

青柳の泥にしだるゝ潮干哉

木隱れて茶摘も聽くや子規

冬枯の磯に今朝見る雞冠栞哉

鞍壺に小坊主乘るや大根引

寒菊や粉糠のかゝる臼の端

右の内「木隱れて」を除けば、他は芭蕉としては寧ろ珍らしい純客觀的景氣の句のみである。編者野坡孤屋利牛等の句は、大抵「長松が親の名で來る御慶哉」の流で、高趣の句は少ない。發句は芭蕉から一々添削して貰ふ譯にも行かぬから、連句に比べると、なほ一層見劣りがする。

五人扶持取りてしだるゝ柳哉　野坡

麥畑や出拔けてもなほ麥の中

五月雨に小鮒を握る子供哉

行雲を寢てゐて看るや夏座敷

町内へしだるゝ宿の柳哉　利牛

卑俗で、連句でも、付意等も解り易く、又趣味が低級で、誰にでも入り易かつたからである。此の頃の芭蕉の付合は、皆多少淺俗の氣があつたが、此の集が特に代表的に卑近を極めてゐた。

蓬萊に聞かばや伊勢の初便
傘に押分け見たる柳哉
四つ五器の揃はぬ花見心哉
卯の花や暗き柳の及腰
鶯や竹の子藪に老を啼く
駿河路や花橘も茶の香ひ
朝顏や晝は錠おろす門の垣
煤掃は己が棚つる大工哉

○其の俳風
純客觀風の增加

何れも『猿蓑』前後の高調圓熟時代に比べると、老境に入つた態があり〳〵と見える。此の時代に、聊か注意すべきは、發句でも連句でも、純客觀の景氣を喜ぶ傾向がだん〳〵強くなつたと思はれることである。是等は善い意味にも惡い意味にも取れる。善い意味に取れば、是迄主觀趣味に偏してゐたのを、漸く又客觀趣味に拓くべき新境地を見出しかゝつたものとすべく、又惡い意味に取れば、主觀的の熱烈な切迫した要求がだん〳〵薄くなつた爲に、淡泊な客觀趣味を喜ぶやうになつたとも謂へるのである。恐

は、芭蕉が後で、あまりに殘忍な句を詠んだとて悔いたと傳へられる句である。(前にもいうた)確否はどうか判らぬが、實らしい譚である。芭蕉には桃青時代を通じて、此の種の血腥い句は他には絶無である。蕪村には「むさゝびの小鳥食み居る枯野哉」「草いきれ人死に居ると札の立つ」のやうな無氣味の句も多いが、芭蕉には發句連句を通じて、全く無かつた。

節季候を雀の笑ふ出立哉　　芭蕉
餅つきや上り兼ねたる雛の泊屋　　嵐蘭
文箱の先づ模樣見る衣くばり　　曾良
佛名や饅頭の香の薄けぶり　　洒堂
腹中の反古を見分けん年の暮　　素堂

發句は何れも可も無く不可も無いやうなものゝみである。三吟第三迄三句の「年忘盃に桃の花書かん」(嵐蘭)「膝に載せたる琵琶の風」(素堂)「宵の月よく寢る客に宿かして」(芭蕉)などは一寸面白い。素堂の句は、或は蕪村の「行春や重たき琵琶の抱き心」にヒントを與へた句かも知れぬ。

第九節　炭俵及び晩年時代

『炭俵』は芭蕉の歿年の前年から其の年にかけて出來たもので、芭蕉歿後では、此の集が最も廣く翫ばれ、遂には蕉門の『法華經』として尊崇さるゝに至つた。(誹諧耳底記等)それは此の集中の句が、最も淺近

芭蕉さしては凡作

伏見あたりの古手屋の月　芭蕉
玉水の早苗と聞けば懐しや　岱水
刈株や水田の上の秋の雲（發句）　酒堂
暮れかゝる日に城替る雁　嵐竹
衣擣つ麓は馬の寒がりて　芭蕉
しばし見送る我が客の笠　酒堂
さし汐の門の柱に打寄せて　嵐竹
窓を明れば壁に入る虹　芭蕉

などは、芭蕉さしては、尋常の作であるが、之を他門の付合に比べれば、何れも及びも付かぬ處がある「ふすまつかんで洗ふ油手」に「掛乞に戀の心を持たせばや」の付「今流行る單羽織を着連立」に「奉行の槍に誰も隱るゝ」の付などは、隨分喜ばれたものであるが、あまり感服出來ぬ。「才はりの朋輩中に憎まれて、燒き焦したる小袖揉み消す」（韵塞）「干物つきやる精進の朝、手拭のまぎれてそれを言つのり」（一葉集）などの、あまり感服の出來ぬ付方が、當時のものに往々ある。因みに云ふ、『深川集』中の、

殘忍な句

我が跡からも鐘鼓打ち來る　嵐蘭
山伏を斬つて懸けたる關の前　芭蕉

る。

綿館ならぶ冬向の里　許六

みそさゝ階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉

築地長閑に典藥の駕籠　酒堂

相國寺牡丹の花の盛りにて　嵐蘭

昔噺に野老泣する　許六

きぬ〴〵は宵の踊の箔を着て　芭蕉

日は赤う出る二月朔日　許六

初花に伊勢の蚫の取れそめて　芭蕉

なども、絶好とは謂へぬが、何れも佳聯たるを失はぬ。「きぬ〴〵」は名高い句であるが、是等も西鶴物の趣があつて、一寸面白い。(各句毎に全號を署したのは二句宛拔いたもの、以下倣之)

消ゆるばかりに鐙おさゆる　芭蕉

蹈迷ふ落花の雪の朝月夜　岱水

那智の御山の春遲き空　嵐蘭

革足袋に□雪蹈重き秋の霜　酒堂

「深川集」のことは、前篇にいうてある。（本章の俳諧七部集の項も參看）集中では、許六亭興行の「洗足に客と名の付く寒さ哉」の珍碩の句を立句とした一卷が最も優れてゐる。

乘かけの提灯しめす朝嵐　嵐蘭
汐さしかゝる星川の橋　芭蕉
村は花田面の草の青み立　許六
塚の蕨の萌ゆる石原　洒堂
虚無僧の師に巡り會ふ春の末　芭蕉
今は破れし今川の家　嵐蘭
うつり行く後撰の風を詠み興し　許六
又招かるゝ四國ゆかしき　洒堂
朝露に濡れわたりたる藍の花　嵐蘭
よごれし胸にかゝる麥の粉　芭蕉

〇淡雅の味を増す

此の邊は中々宜しい。嵐蘭は古參、珍碩は老巧、許六は秀才、是等を相手の卷であるからか、可なりに骨折つてゐる。但し華やかな處が漸く減じて、淡雅の味がだん〳〵益して來てゐる。許六の滑稽傳に、右の付合の「乘かけ」以下の二句を引いて「愚老が俳諧四五年の後は、皆かやうに成」と芭蕉が云うたとあ

此の解も、句や響に就いては殆ど言及してゐぬ。「刷ひぬ」とあるのが、一時荒された翼をつくろうてゐるやうな心地があるので、一時強く吹き捲つた初風が、しばし止んだ體の脇句を付けたのであらう。「颪の木の葉」などゝ、微細な景氣ゆゑ、第三は川も纔に膝を沒するにも足らぬ小さい流を付けたのであらう。次に股引のまゝ川越すなどが田舍の村はづれの景色である上に、朝から股引で川越す逞ましい氣せはしない狀が、自づと狸を嚇す弓にひゞいてゐる。第四は其の邊の即景に月をあしらうた迄であらうが狸を嚇すなどあるのが、宵の月によく適うてゐる。次の句は所謂起情で、景氣の句が續いたので、出したものであらう。まひら戶も蔦の這ひ纏ふに任せて置くなど、世間とあまり交際などせぬやうな狀があるので、人にも呉れぬ梨を取合せたのであらう。まひら戶に云々とあるので、相當な暮しの家と見え、又宵の月に名物の梨がまことに面白く應じてゐる。斯樣な處は決して不用意に見過してはならぬ。予の說明の當否は別として、芭蕉の付合は、飽迄細かく、飽迄行屆いてゐるものだといふことを必ず忘れてはならぬ。芭蕉はもつと不用意に付けたのであらうから、あまり穿鑿して故事つけぬ方が可いなどゝ、物が判つたらしく云ふ人には、せめて七部集の付合だけでも、一度念を入れて讀んで見られよと答へる外はない。尤も芭蕉自身はそんなに一々穿鑿して作つてゐた譯ではあるまいが、庖丁が牛を解くに、意を用ひずして自づから肯綮を經ず、恢々乎として刄を遊ばせて餘地あるやうなもので、滅多斬りに斬り散らすのとは、全然異ふことをよく〳〵心得て置かねばならぬ。

股引の朝から濡るゝ川越えて　凡兆

第三、其塲の餘景を探りて、むら時雨の朝まだき枝川の淺みを、里人の渡り行く狀を見出したる附也其塲一轉の附にして、句の上はたゞ川を越ゆる狀也。

狸をおどす篠强の弓　史邦

其川を越え行く人は、何をかなすらんと探りて、扨狸を驚す篠弓を持て行くと、其人の用を見出して附けたる也。

まひら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉

前句の篠弓を一轉して、内に入て附けたる句にして、篠張の弓の承塵などに懸てありたると見て、其家の狀を附けたる也。(〇此の解は聊か惡い)そこらあたり、狸の出歩くべき所を見て、古びたるまひら戸(〇玄關に用ひる、表面に細き棧の横に密にあるもの)に蔦かづらの這まとひたる家なるべしとせしにて、其戸に月の影さしたるとは、跡より月と置きたる手つまにして、月に仔細無く、見渡す景色に作りたる也。古寺などの狀もあるべくや。

人にも呉れず名物の梨　來

附意は起情(〇叙景などの客觀句に對して主觀的の句を付けるをいふ)にして、前の住家の主人の物惜みする狀也。院主などによくある情也。

起情

恰も杜甫の夔州時代

猿蓑キ釋の一例

に最も遺憾無く現はれてゐる。是等の付句になると、芭蕉だけは迢に水平線を離れてゐたのである。

芭蕉の奥羽行脚頃から『猿蓑』時代にかけては、恰も杜甫の夔州時代である。而して此の集中の連句や發句は、杜甫の「秋興八首」「詠懷古跡」「諸將」などの諸作の地位に在る。此の時代を過ぎると、そろ〳〵下り阪に向うてゐたやうに思はれる。俳風の轉化に過ぎぬといへばそれ迄であるが、今から我々が見ると、面白くない方へ移つて行つたとしか取れぬ。謂はゞ即ち退化である。如何に考へても『深川集』や『炭俵』や『續猿蓑』を此の頃のものと同列に置いても可いとは考へ得られぬ。其れ等の集以外に出たものでも、特に傑れたと見るべきものはあまり無い。予は『猿蓑』を頂點として、芭蕉の精思沈練の力が多少づゝ減退して行つたのでなからうかと疑ふのである。

此の集には『猿蓑さがし』と題する可なりの大著があり、其の他にも多少あるが、好著は殆ど無い。左に引くは、右のさがしの一節である。

鳶の羽も刷ひぬ初時雨　　去來

一吹風の木の葉しづまる　　芭蕉

(〇前略)此句打添(〇前句の趣を違へずに、之と同じやうな情景を付けること)の脇にして、只今時雨の降りかゝりたる狀を附けたり。(〇中略)鳶の冬木立の梢にうづくまりたる狀、北颪につれて降來る時雨の模樣、二句言外に思ひめぐらすべし。

柴さす家のむねをからげる　來

冬空の荒になりたる北おろし　兆

旅の馳走に有明し置く　蕉

是等は平淡の裏に一種の滋潤味を有つた句で、付味は何れも不即不離の妙がある。「明屋敷」から「露ばかり」それから「花と散る身」「春も暮」と移つて行くあたり、何れも自然で、而も「句々感合」の微妙なる是等も此の期の付合の特境である。「物賣の尻聲高く名乘り捨て(去來)雨の宿りの無常迅速(野水)」「絲櫻腹一ぱいに咲きにけり(去來)春は三月曙の空(野水)」なども付味といひ、句振といひ、巧いものである。第四卷は、初めの處少しばかり芭蕉が連座してゐるだけで、亦全體としても、四卷中最も見劣りがする。しかし、

二階の客は立たれたる秋　芭蕉

放ちやる鶉の跡は見えもせず　素男

稻の葉延の力無き風　乙州

發心のはじめに越ゆる鈴鹿山　蕉

などは、各々句意といひ、付方といひ、實に手に入つたもので、特に「放ちやる」から「稻の葉延」への移りの精緊味、それから又「發心の」への移りの自然味など、言ふも愚かである。芭蕉の神技は、是等の句

「草庵に」が風狂の詩人などの狀である處から（此の句の前句は「ゆがみて蓋の合はぬ半櫃」で、假の住ひの草庵には適はしい品であるが、「ゆがみて合はぬ」が、狷介世に合はぬ趣にもひゞく處から暫し居ては草庵を打破る（語意の强いのを看よ）すね者を付けたのである）勅撰集の沙汰に生甲斐のあつたことを付け、其の老歌人の狀から、戀のさま〴〵を經たことを付け、一轉して紅顏白骨の觀念に入つてゐる。『去來抄』に據れば、「命うれしき」は始め「和歌の奧儀は知らず候」と直に西行を丸出しに付けたのを、斯う芭蕉が直したのださうである。眞僞は知れぬが、如何さま尤らしい譚である。「浮世の果」は、芭蕉が豫てから此の句を思ひ付いて、適當な前句が出たら付けようと考へてゐた句だと傳へられてゐるが、實否は如何であるか。芭蕉の好きさうな句であるが、芭蕉としては寧ろ拙い付句である。但し意は、西鶴の「さても〳〵取集めたる戀や哀れや。無常なり。夢なり。現なり。」（五人女四）などゝ相通じて、捨て難い處もある。四句は恰も詩人の一生涯を語つてゐる趣がある。

町内の秋も更け行く明屋敷　去來
　何を見るにも露ばかり也　野水
花と散る身は西念が衣着て　芭蕉
　木曾の酢莖に春も暮れつゝ　凡兆
かへるやら山蔭傳ふ四十雀　水

湯殿は竹の簀の子わびしき　蕉
茴香(うゐきやう)の實を吹落す夕あらし　來
僧やゝ寒く寺に歸るか　兆
猿引の猿と世を經る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來

右は第二卷の裏十二句であるが、此の卷に最も興味豐かな句が多いやうである。「蛙こはがる」の若い上臈などの狀から、「蕗の芽」に行燈の纖麗なものを出し、「行燈ゆり消す」から有爲轉變の無常觀に入つて道心に移り、「花の莟む」の悲涼な趣から、七尾の冬を想ひ、住み憂き北國の濱邊を魚の骨しわぶる老と應じたる、何れも巧緻精微を極めてゐる。「待人」以下の三句は西鶴の『一代女』か、近松の時代物でも讀むやうな風趣がある。茴香以下の三句のうつりの自然にして而も荒寥蕭索の致を盡せる、蕉風の特に得意な處である。「しわぶる」は「しやぶる」ことであらう。古い用例もある。地子は租米をいふ。

草庵にしばらく居ては打破り　芭蕉
命うれしき撰集の沙汰　去來
さま〴〵に品かはりたる戀をして　凡兆
浮世の果は皆小町也　芭蕉

里見えそめて牛の貝吹く　蕉

ほつれたる去年の寢蓙のしたゝるく　兆

芙蓉の花のはら〳〵と散る　邦

の如き、何等の佳境ぞ、何等の佳趣ぞ。「何事も」の無爲而化の趣な處から、「里見えそめて」の、何と無く雞犬之聲相聞などいふ老子あたりの文句でも想はせるやうな付意の細やかさ。「青天に有明月の朝ぼらけ、（去來）湖水の秋の比良の初霜」「布子着習ふ風の夕暮（凡兆）押合うて寢ては又立つ假枕」の、一は景氣、一は人事の、共に言ふ可からざる妙趣の相應せる、共に此の頃の特境で、此の種の好句は當時のものに最も多かつたのである。

草むらに蛙こはがる夕まぐれ　凡兆

蕗の芽取に行燈ゆり消す　芭蕉

道心の起りは花の蕾む時　去來

能登の七尾の冬は住み憂き　兆

魚の骨しわぶる迄の老を見て　蕉

待人入りし小御門の鎰　來

立かゝり屛風をたふす女子共　兆

至つては、其の付意の手強さ、以前に比して更に字々に幾千鈞の力を加へた感あるものもある。

　鳶の羽も刷ひぬ初時雨　　去來
　一吹風の木の葉しづまる　　芭蕉

の如き、實に精勁無比、芭蕉一代の脇句中でも、希有の名句で、凄風枯條を吹く寒曠悲凉の天地が僅々十四文字中に活現してゐる。因みに云ふ『黒双紙』に「師(○芭蕉)云、猿蓑に脇第三を三體に仕わけて存し置きたり。心をつけて見るべし」とあるが、三體とは何を意味するのか、判然せぬ。但し此の脇第三を除けば、他の二卷のは、尋常の脇第三で、特別に注意すべき作ではないやうに思ふ。此の卷の第三以下の

　股引の朝から濡るゝ川越えて　　凡兆
　狸をおどす篠張の弓　　史邦
　まひら戸に蔦這かゝる宵の月　　芭蕉
　人にも呉れず名物の梨　　去來
　書きなぐる墨繪をかしく秋暮れて　　史邦
　穿き心よきめりやすの足袋(めりやすは莫大小か)　　凡兆
　何事も無言の内は靜か也　　去來

の名吟も、集中に異彩を放つてゐる。（奥州には「燕子花いつ見んことぞ澤ながら」の遊女に適はしい句も傳はつてゐる）又此の集には、芭蕉の仕へた蟬吟公の繼嗣探丸公の句も、少なからず收めてある。

一夜々々寒き姿や釣干菜　　探丸

我妹子が爪べに殘す雪丸げ

などは、一寸面白い。「魚の影鵜のやるせ無き氷哉」「山鳥や躑躅花よけ行く尾のひねり」などいふ、あまり感服の出來ぬ句もある。此の公も、蟬吟公の遺韻を嗣いで、芭蕉の弟子分として俳諧の修行をされたのでもあらう。蟬吟公の弟といふが實らしいことは前にもいうた。

連句は『比左古』に比べると、更に穩かに落付いてゐるが、其の裏に高秀蒼潤の味を豐かに湛へ『冬之日』の譎詭險怪が全く痕跡を沒して、溫雅沈靜となつてゐるが、それで膚淺平弱の態など毫も無く、しんみりと底深い味の上に、又華麗の趣をも十二分に有つてゐる。『冬之日』は、主として奇峭を以て優り是は深穩を以て優つてゐる。技倆の點からは、無論孰れを孰れとも謂ひ難く、其の相違は、單に時代の相違と見るの外はない。付味の方からいへば、凝り工合が、『初懷紙』などよりも更に〳〵和らいでゐるが、例に依つて弛緩や放漫の氣が露程も無い。たゞ餘りに凝り過ぎ餘りにひねくり過ぎて、却て晦澁の氣味が伴ふといふやうな處が全然無くなつた迄である。是等は、多年行つてゐる內に技倆も趣味もだん〳〵進步して、自然にさうなつた結果であらう。而も精緊の味は少しも失せぬのみならず、あるものに

夢去つて又一匂ひ宵の梅　　嵐蘭
百八のかねて迷ひや闇の梅　　其角
初午や雪に濟ぎ來る若菜舟　　嵐蘭
薄氷やはつかに咲ける芹の花　　其角
鶯の雪蹈み落す垣穗哉　　一桐
出代りや櫃に餘れる蓙の丈　　龜翁
春雨や田蓑の島の鮗賣　　史邦
泥龜や苗代水の畦傳ひ　　同
菫草小鍋洗ひし跡や是　　曲水
蝸牛打かぶせたる椿哉　　坂上氏
燒けにけりされ共花は散り濟まし　　北枝

なほ前揭の芭蕉去來凡兆の句をも倂せ看られ度い。勿論蕪村の句集など見た目からは、何と無く色彩に乏しいやうな氣がせぬでもないが、沈厚の味に至つては他の時代に比すべきものがない。且一集中に是だけの秀句を蒐め得たものも、他には絶無である。なほ又、

戀死なば我が塚で鳴け時鳥　　遊女奥州

猪に吹き返さるゝ照射哉　正秀
隈笹の廣葉うるはし餅粽　岩翁
ひね麥の味無き空や五月雨　木節
つかみあふ子供のたけや麥畑　游刀
子や泣かん其子の母も蚊も喰はん　嵐蘭
下闇や地蟲乍らの蟬の聲　嵐雪
舟引の妻の唱歌か合歡の花　千那
日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀
秋風や蓮を力に花一つ　讀人不知
笑ふにも泣くにも似ざる木槿哉　嵐蘭
三日月に鱶の頭をかくしけり　之道
月影や拍手もるゝ膝の上　史邦
僧正のいもとの小屋の砧かな　尙白
稗の穗の馬逼したる景色哉　越人
高土手に鶸の鳴く日や雪ちぎれ　珍碩

此の集を第一の參考書として推さねばならぬことは、躊躇無く謂へるであらう。

初霜に行くや北斗の星の前　百　藏
一色も動く物無き霜夜哉　野　水
初霜に何とおよるぞ船の中　其　角
百舌鳥の居る野中の杭よ神無月　嵐　蘭
溢梯を眺めて通る十夜哉　裾　道
道ばたに多賀の鳥居の寒さ哉　尙　白
浦風や巴を崩すむら千鳥　曾　良
狙の跡蹈み消すや濱衞　史　邦
此木戶や鎖のさゝれて冬の月　其　角
棕櫚の葉の霰に狂ふ嵐かな　野　童
霙降る音や朝飯の出來る迄　晝　好
蜀魂鳴くや木の間の角櫓　史　邦
入相の響の中や子規　羽　紅
洗濯や衣にもみ込む栴の花　薄　芝

注意すべきで、其の内のある者は其の儘蕪村句集中の秀逸である。『去來抄』に、芭蕉の「病雁の夜寒」と「海士の家は小海老に」とを比較して、凡兆は後者を優るとし、去來は前者を優るとし、芭蕉は去來の説に左袒したことが見えてゐるが、是等は或は實際の話であつたかも知れぬ。假託としても、三人の特長をよく呑込んでの作話である。芭蕉は、發句では主觀趣味のものを尙んだから、矢張凡兆よりも去來を喜んだであらうが、（又實際此の集中の句の巧拙などのみから、二人の優劣を卒かに定めるのは不可であるが）凡兆が非凡な一種の奇才を具へてゐたことは、右に擧げた句を一讀しても知られる。芭蕉程の人であつたから、其の才は認めてゐたであらうが、才は才として、發句としては芭蕉の正宗を嗣いだ者は矢張去來とせねばなるまい。兎も角も凡兆は、蕉門中、不思議な地位を有つた最も不可解な一人である

先づ開卷第一に、芭蕉の「猿も小蓑」を首頭に「あれ聽けと時雨來る夜の鐘の聲」（其角）「時雨れきや並び兼ねたる魦船」（千那）「幾人か時雨駈け拔く勢田の橋」（丈草）「鑓持のなほ振り立つる時雨哉」（正秀）「廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎」（史邦）「なつかしや奈良の隣の一時雨」（曾良）「時雨るゝや黑木積む屋の窓明り」（凡兆）「馬かりて竹田の里や行く時雨」（乙州）「新田に稗殼けぶる時雨哉」（昌房）「忙しや沖の時雨の眞帆片帆」（去來）と時雨の句共を並べてあるが、句々皆洗練を極めてあつて、卷を開けば先づ快心を覺える。句は何れも、後の天明調の輕捷俊爽な客觀風に、元祿風の雄渾沈勁を兼ねたといふ風で、勿論明治以前の俳句では、最高處を代表してゐるものである。俳句が歷史上どの程度迄上達したかを察するには

初潮や鳴門の浪の飛脚船
物の音ひとり仆るゝ案山子哉
上行くと下來る雲や秋の天
灰捨てゝ白梅うるむ垣根哉
鶯や下駄の齒につく小田の土
野馬に子供遊ばす狐哉
藏並ぶ裏は燕の通ひ路
鷲の巣の樟の枯枝に日は暮れぬ
雉の聲も聞ゆる山櫻
花散るや伽藍の樞落し行く

芭蕉の句も「桐の木に」の類の、所謂純客觀風の句が往々混つてゐる。是は晩年に近づくに隨つて、だん〳〵と殖えてゐるやうである。此の事はなほ後にもいはう。

此の集中で、凡兆の句は、內藤鳴雪氏などが嘗て特別に注意したやうに、當時の蕉門に在つては、實に無類の特色を現はしてゐて、元祿俳壇の珍とするに足るのである。凡兆の句で遺つてゐるものゝ大部分は此の集に出たものであるが、皆佳作のみである。句が多く客觀趣味を以て優つてゐることは、特に

時雨るゝや黒木積む家の窓明り
禪寺の松の落葉や神無月
砂よけや蜑のかたへの冬木立
炭竈に手負の猪の倒れけり
門前の小家も遊ぶ冬至哉
矢田の野や浦のなぐれに鳴く衛
下京や雪積む上の夜の雨
長々と川一筋や雪の原
子規何も無き野の門構
五月雨に家ふり捨てゝなめくじり
渡りかけて藻の花のぞく流れ哉
朝露や鬱金畠の秋の風
招き〳〵枴の先の芒かな
百舌鳥鳴くや入日さし込む女松原
吹く風の相手や空に月一つ

行春を近江の人と惜みける

○去來の句

尾頭の心もと無き生海鼠哉

荒礒や走り慣れたる友千鳥

引かけて行くや雪吹のてしま蓙

暮れて行く年の設けや伊勢熊野

つゝくりも果無阪や五月雨

百姓も麥に取付く茶摘歌

夕暮や禿げ並びたる雲の峯

初露や猪の臥す芝の起き上り

都にも住みまじりけり相撲取

君が手も混るなるべし花芒

かゝる夜の月も見にけり野邊送り

鉢叩來ぬ夜となれば朧也

○凡兆の句

初時雨猿も小蓑を欲しげ也

凩や頬腫痛む人の顔

すみつかぬ旅の心や置炬燵

雪散るや穂屋の薄の刈残し

辛鮭も空也の痩も寒の内

粽結ふ片手にはさむ額髪

日の道や葵傾く五月雨

眉掃を俤にして紅粉の花

合歡の木の葉越も厭へ星の影

桐の木に鶉啼くなる塀の内

病雁の夜寒に落ちて旅寐哉

海士の家は小海老に雜る竈馬哉

陽炎や柴胡の原の薄曇

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

鶯の笠落したる椿哉

弛緩味ではない。之を譬へれば、一は果たし眼で、刀の覇に手を掛け、居合腰になつて應對してゐる勢があり、一は腕を組み、顔色を和らげ、悠然として座し居乍ら、應對してゐる姿がある。而して寸分の隙も見せないことは兩者共同じである。『冬之日』頃の付句と、此の圓熟期の付句とは、恰も其のやうな特色の相違がある。即ち前者は「ひゞき」「にほひ」の強烈な處に味があつたが、後者はそれがほのかでゆつたりとした處に味があつた。而もそれは或る意味に於いて趣味の進歩とは見られるけれども、後者が前者よりも技巧上優れてゐると強ちに謂ふことは出來ぬのである。物は全く異ふが、例へば西鶴の『一代男』と『五人女』とのやうなもので、後者は老成圓熟の味が優れてはゐるが、前者が後者に劣つてゐると謂ひ得ぬと同じい。

『猿蓑』は、元祿四年芭蕉四十八歳の時の撰集で、撰者は去來凡兆である。此の集が、發句の方からも連俳の方からも蕉風第一の名編であることは、一部の『炭俵』崇拜論者を除けば、先づ何人も異論の無い所であらう。發句の方では、蕪村好の子規氏でさへ、此の集を、蕪村の『續明烏』『五車反古』と共に、『俳諧三佳書』の名で出してゐる程で、此の人々にも深く注意されたことが判る。芭蕉の句は、『奧之細道』中のものが、殆ど全部收められてあるので、それが特に生彩を放つてゐる。選句の精嚴といひ、體裁の要領を得てゐる處といひ、『曠野』などゝは殆ど比較にならぬ程氣持の好い撰集である。

芭蕉の句（前章奧羽行脚の條に出した句は重複を避けて省く）

見たきと泣き玉ひけり」の付、又此の句に珍碩の「手束弓紀の關守が頑に」の付なども、中々面白い。白子若松に一身田を付け、熊野に紀を付けるなど、尋常の宗匠ならば、許さぬ處であらう。

中々に土間に居れば蚤も無し　　曲水
我が名は里のなぶり者也　　芭蕉

は『續猿蓑』の「鳶で工夫を」の付句（其の項參看）とよく似た趣の句で、其の人も酷似した人のやうに想はれる。『冬之日』に「岡崎や」に荷兮の「庄屋の松」の付があるが、（前出）是等も同巧の句である。併し是等の内、此の付句が最も深味があるやうに思はれる。「憎まれていらぬ踊の肝を煎り」に

入神の付句

月夜々々に明けわたる月　　曲水
花薄あまり招けばうら枯れて　　芭蕉
唯四方なる草庵の露　　珍碩

の三句などは、何れも入神の付句で、うつりといひ句意といひ、其の妙味はたゞ百誦千讀して自づから感悟すべく、拙い言語筆舌の迚も〳〵及びも付かぬ所である。

付味や〻和らぐ

餘裕味は弛緩味でない

此の頃になつて、特に目立つのは、付味の凝り方が、だん〳〵和らいで來てゐることである。貞享頃のは、あまりに凝り過ぎ練り過ぎて、不即不離の裏に悠揚たる風韻を求めるといふやうな氣味が少なくつまり餘裕味に乏しかつたが、元祿に入る頃から、漸く此の味が加はつて來てゐる。併し此の餘裕味は

鞍置ける三歳駒に秋の來て　　芭蕉
名はさま〴〵に降り替る雨　　碩
入込に諏訪の涌湯の夕間暮　　水
中にも春の高き山伏　　蕉

など何等の精緻ぞ。「鞍置ける」「名は」の運など、例の巧いものである。「細き筋より戀つのりつゝ」に「物思ふ身に物食へとせつかれて」の芭蕉の付句は、有名なものであるが、芭蕉の戀の付句としては、寧ろ平凡なものである。但し物の字を二字使つてゐるが、毫も耳立たぬ處など、面白い。是等の句は『猿蓑』中のものと殆ど區別を付け難い。

秋風の船をこはがる浪の音　　野水
雁行く方や白子若松　　芭蕉
千部讀む花の盛りの一身田　　珍碩
順禮死ぬる道の陽炎　　水
何よりも蝶のうつゝぞ憐れなる　　蕉
文書くほどの力さへ無き　　碩

のあたり、實に何れも佳趣掬するに堪へた句のみである。「羅に日を厭はるる御かたち」に芭蕉の「熊野

比左古

珍碩

醇乎として醇なる蕉風

圓熟期と見て、所謂五時教中、佛の最後に説いた『法華經』に擬し、是れ以前の俳風を、未顯眞實の流で説いてゐるが、是等は一顧の値も無い説で、方便の教相判釋的假説に瞞されたに過ぎぬ。たゞ俳風の上よりすれば、晩年のものには亦晩年の特色が相應にあるといふ迄である。奥羽行脚中の句例は、前編の其の條に擧げてあるだけで十分であらう。

『比左古』は元祿三年卽ち奥羽行脚の翌年の春から夏にかけての作で、六月出板したものである。中の連句は、其の頃江州邊に滯在してゐた間に成つたものと見える。編者は瀨田の人濱田珍碩號洒堂又洒落堂で、此の人は後に有名な『深川集』をも編して居り（其の項を看よ）芭蕉歿後も彼是著書を出してゐる。發句では左程の好處も見えぬが、付合は中々の達人で、句風は老巧精悍であつたやうに見える。『比左古』は連句のみを五卷收めてあるが、芭蕉の連座したものは言ふ迄も無く、連座せぬものも、芭蕉の手が入つてゐるらしく、可なりによく出來てゐる。芭蕉連座のものは特に佳作で、其の俳風は『猿蓑』風に最も近い。蕉風の付合集としては、『猿蓑』『冬之日』『初懷紙』に次ぐ名編で、俳風としては、貞享風を脱して方に元祿の最圓熟期風に入つた頃の、醇乎として醇なる蕉風を代表したものである。集中では、劈頭の一卷が最も傑れてゐて、芭蕉一代の連句中でも、有數の名卷である。

月待ちて假の内裏の司召　　珍碩

籾臼つくる杣が早業　　曲水

要するに『曠野』は、撰集としては甚だ感服し兼ねるものであるが、強ひて之を七部集中に入れて置く値が何處ぞにあるだらうといふならば、それはたゞ蕉風の包容の廣いことゝ、可も無く不可も無い平凡無味の一體も亦蕉風中にあることゝを示した點に在るとでも謂はうか。それに、今一つは、芭蕉の三大旅行の一とも謂ふべき芳野行脚中の句が、大部分此の集に採られてあることも、多少の注意に値しよう此の點から謂へば、奥羽行脚中の句が『猿蓑』に收められたのと、相對してゐる譯であるが、二書の內容の特色から謂へば、固より比べ物にはならぬ。それと編輯の體裁だけは外見上整うた處があつた。それ等以上の價値は、此の集にはあまり認め得ぬやうに思ふのである。『凡兆日記』(文曉篇、黒田氏編の芭蕉翁傳に收む)に、此の集の事を「師翁の序ありて大集なり。其事詳なりといへども、是きつと正風ときまりたる書にても無く、古風正風の境無し。其故は、集中に、古風の宗鑑、貞德、貞室、宗因、其外名も聞かざる人、又誰とも知れぬはよみ人しらずなど見えたり」と謂うてゐるのは、よく此の集を看得た説である。此の日記は假託の書であらうが、是等は取るべき説であらう。兎に角『曠野』は色彩の不鮮明な駁雜を極めた不得要領な撰集である。

第八節　細道猿蓑時代(圓熟期)

奥羽行脚の頃から、幻住庵在庵の頃迄にかけての三箇年程の間が、芭蕉の俳風の最も圓熟完成した時代であることは、從來も彼是説かれた所である。然るに又或る一部の人々は、此の後の『炭俵』時代を最

垣穗のさゝげ露はこぼれて　　芭蕉
あや憎に思ふ妹が夕眺め　　人
あの雲は誰が涙包むぞ　　蕉

などは、芭蕉獨得の句であるが、是等も太したことはない。「秋の田を刈らせぬ公事の長引きて」に芭蕉の「さい〳〵乍ら文字問ひに來る」などは、名高い句であるが、『炭俵』あたりに適はしい俗趣の句で、佳句とは思はれぬ。但し此の俚鄙が亦芭蕉の一面で、晩年には此の種の句が多くなつたのである。揚句の

花の頃談義まゐりも羨まし　　越人
田螺を食うて腥き口　　芭蕉

は、矢張老莊趣味の句であるが、當時の芭蕉としては、一寸珍らしい洒落な句である。集中の付句に「火箸のはねて手の熱きなり」(荷兮)に「隱す物見せよと人の立かゝり」(越人)と付け、「今日も又物拾はんと立出づる」(荷兮)に「たま〳〵砂の中の木の端」(冬文)と付けたなどは、古風の惡付で、蕉風の薫化を受けた者の必ず避くべき筈の句である。芭蕉の連座したものには、こんなのは先ず無い。處が、後世では此の樣な惡句を却て手本にするやうな傾があつた。越人や荷兮の伎倆も、芭蕉が背後に在つてこそで、手離して付合はさせたらしいものは、大方見るに足らぬ。集中に越人と其角との卷、嵐雪との卷もあるが、是亦師とは似ても似つかぬ凡作のやうである。

瓢簞の大きさ五石ばかり也　同
風に吹かれて歸る市人　蕉

發句の「唐びずや」を「唐びず」の意に解した者もあるが、如何であるか。俳人の語法は隨分無理をやるが「ずや」を「ず」の意には、餘りである。予は「唐びてあるではないか」の意に解すべきであると思ふ。「藤袴」を袴といふより「窮屈に」といひ、窮屈を厭ふ意より、「理を離れたる」恬淡の心を付け、其れが老莊などの意の在る所から、「瓢簞の大きさ」と莊子の大瓢を想ひ、其の莊子より列子風に御しなどの辭でも想出してか、「風に吹れて」と逍遙無爲の趣の語を付けたものと見える。尤も句の表は、大瓢を負うて歸る市人の意でもあらう。何れにしても、老莊趣味の多分な句共である。付方も句振もあつさりとして、芭蕉としては優れたものではないが、一種の趣の捨て難い處がある。

足駄穿かせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵やあまりか細くあでやかに　芭蕉
風引き給ふ聲のうつくし　人
手も付かず晝の御膳も辷り來ぬ　蕉

なども、芭蕉としては上乘のものではないが、有名な付句で、多少の趣もある。

時鳥鼠の荒るゝ最中に　越人

樂や火を焚く衞士にあやからん」を「させる難も無く、秀でたる處も見えず」と評し、嵐雪の「鈴鴨」を「秀句限り無し」と評し、風水の句を「景氣微細に心を付けたり」と評し、調柳の「破れ葉の石蘭に顏出す鼬哉」を「小野の薄も思ひ寄せられては、可笑しく侍る」と評し、コ齋の「我笠に月夜忘るゝ夜興哉」を「狩人の形容訝かしき處あり」と評し、立些の「石蘭咲くや誰引捨てし雪車の跡」を「句意確と聞えず」と評してゐるなど、いづれも中々精到で、所謂老吏の獄を斷ずるが如く、正邪曲直一毫の微をも見遁さぬ概がある。四家の判とりどりに面白いが、芭蕉のが最も要領を得てゐるやうである。

貞享四年から元祿元年にかけて、芳野紀行に出かけたのであるから、此の間の發句の例は、前編の其の條を一讀され度い。

『曠野』は『比左古』中の作者荷兮の撰で、元祿二年三月の編である。此の集のあまり感服出來ぬことは前篇に謂うた通りである。たゞ員外として收めてある連句中に「深川の夜」が入つてあつて、是は芭蕉越人の兩吟であるが、相應の佳作である。

雁がねも靜かに聽けば唐びずや　越人
酒強ひならふ此の頃の月　芭蕉
藤袴誰が窮屈に賞でつらん　同
理を離れたる秋の夕暮　人

右

鴨食はで菜を干枯す鹽屋哉　　無兒

鈴鴨の聲ふり立てる、秀句限り無し。一句安らかにして、嚴寒の景色盡きたり。かの妹がり（○行けば冬の夜の、紀貫之の歌）の歌を吟ずれば、六月二十四日の日も寒しと書きけん、さることにや。右の句も鴛を飼ふ者の絹衣ぬためしと、あはれに侍れども、鈴鴨の聲句調高しとや謂はん。

といふ風で、痒い處に手の屆くが如く、讀者をして、其の判定の切當なるに服せしめる。實に一歩も動かぬ巧評と謂はねばならぬ。其の他芭蕉が推稱した句は、

落付かぬ木葉にあたる雫哉　　風水
子を連れて夜の網代に簑せはし　　心水
網代木のゆるぎ止みぬる氷哉　　不角
曉の霰は冬の信かな　　李下
森深く野馬飛込霰哉　　仲風
何方に行きて遊ばん煤拂　　擧白
煤拂時はめで度き佛かな　　不卜

などで、なほ『初懷紙』あたりの華麗の味が殘つてゐる。擧白の句を「優にして艶」と評し、去來の「御神

二番左　勝　霜

親と子の霜夜を圍ふ野馬哉　　溪　石

右

霜深し扇をかざす夜の舟　　勇　沼

（〇判詞以下倣レ之）物言はぬよもの獸すらだにも、あはれなる哉や親の子を思ふ（〇源實朝の歌）と詠み給ひし此歌に便りして、野馬の子をいとふ樣切也。右の句さもあるべき乍ら、左の句秀逸なれば、負け侍らんかし。

四番左　勝　枯野

松苗も枯野に目立つ嵐哉　　松　風

右

大橋を枯野にわたす入日哉　　金　峰

左の句木枯の吹盡して、苗松のそよ〳〵と動きたる風の宿り目に立つべき者也。寸松紅梁の姿を含みし一句丈高し。尤も亦枯野の風景見捨て難く侍れども、苗松の方や目に立ち侍らん。

七番左　勝　鴨

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し　　嵐　雪

罌粟咲いて情に見ゆる宿なれや　　枳風

の「兀げたる」の句を解して「寢ずしてしどけ無き體也。伊勢物語(○第六十四段)に、夙に殿守司が見るになどゝ書けるも此句の餘情ならんか」と云うてゐるのは、其の通りと思はれるが、次の「罌粟咲いて」の句を「兀げたる眉と云に、老長たる人の、おとろへて賤の家などにひそかに住みたる體也」と解いたのは、服し兼ねる。「兀げたる眉」の「兀げたる」を老人の眉の「兀げたる」意に解するなどは、檀林臭を帶びた解し方であるのみならず、第一老人の形容に「兀げたる眉」などいふであらうか。又老人の住居を「情に見ゆる」などいふであらうか。是は或は「らうたげなる人の」などあつたのを、誤つて「老長けたる人の」としたのでないかと思ふ。是等一二の缺點と思はれる處を除けば、大方は首肯すべき解釋をしてゐる。蕉門の連句を研究する者は必ず一讀せねばならぬ名著である。實は蕉風の連句の注釋では、信頼すべき殆ど唯一のものと予は思うてゐる。傳來の確かな處の判らぬのは、返すがへすも遺憾に堪へぬ。

『續之原』(續が原となつてゐる本もあるが、「の原」が本名であらう)は、一名「四季之句合」といひ、貞享四年、不卜才麿(麿は丸とも書く。檀林風から蕉風に歸した人で、もと西鶴の門人で、西丸と號したが、或者に西の丸樣と誤讀されたので、畏多いとて、才丸と改めたと海錄に見えてゐる)其角が、俳友の句を選んで、山口素堂、岸本調和、北村湖春(季吟の子)及び芭蕉の判を乞うたもので、其の內の冬の部が芭蕉の判である。其の詞判を見ると、芭蕉の趣味と批評眼とがよく判つて、中々面白い。

きたる五文字大切の處也。見る人心を翫味すべし。

炭がまこねて冬のこしらへ　　杉風

前句山家の體に見なして付侍る。獵師は鳥を狩り、山賤は炭竈を拵て冬を待つ體別條無き句と雖も、炭竈の句作、終に人のせぬ所を見付けたる、新しき句也。

里々の麥ほのかなるむら綠　　仙化

附様別條無し，炭竈の句を初冬の末霜月頃などの體に受けて、冬畑の有樣、よくいひのべ侍る其塲也。

我が乘る駒に雨おほひせよ　　李下

是等奇意也。何を付けたるとも無く、何を詠みたるとも無し。里々の麥といひたるより、旅體を思ひ出し、むら綠など麗はしきより、雨を催し侍る。景氣辯口筆頭に不レ掛。

實によく注釋してあつて、殆ど間然する處がない。蕉風の付方を是程よく理解して注釋したものは先づ他にあるまいと思ふ。注釋文としても、簡潔にして要領を得、上乘のものたるを失はぬ。しかし又合點し兼ねる解し方も稀にある。例へば、

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　　千里

兀げたる眉を隱すきぬ〴〵　　芭蕉

しとす。梧桐遠く立て、而も木枯のまゝにして枯れたる實の、梢に殘りたる景色言葉こまやかにして、桐の實といふは、桐の木といはんも同じ事乍ら、元朝に、梢は冬めきて、凬の其のまゝなれども、ほのかに霞み、朝日匂ひ出でゝ、うるはしく見え侍る體なるべし。但桐の實と附けたる新しみ、俳諧の本意斯る處に侍る。

雪村が柳見に行く棹さして　　枳風

第三の體、長高く、風流に句を作り侍る。發句の景と少しかはり目あり。柳見に行くとあればいまだ景に不レ對なり。雪村は畵の名筆也。柳を畵くべき時節は、柳を見て畵かんと、自から舟に棹さして出でたる、狂者の體珍重なり。桐の立木詠やう奇特に侍る。附様大切也。

酒の幌(のれん)に入あひの月　　コ齋

四句目なれば輕し。其道の様體、酒屋といふものよく出し侍る。幌は暖簾などいはん爲也尤も夕の景色あるべし。

秋の山手束の弓の鳥賣らん　　芳重

狩の鳥を得て、市に持出て賣る體さも有るべし。酒屋に便りたる珍重の付やう也。手束の弓は短き弓也（〇此の解は誤つてゐるが、其の意で付けたものかも知れぬ。手束の弓は、單に手に握る弓の意であらう）秋季を持ちたる鳥の名多くあれども、いはずして、秋の山と大やうに邑

初懷紙注釋の一例

花故事

希有の名著

其の例

廣葉を打合せ」に同人の「贊に買はるゝ秋の心は」の付「姉待つ牛の遲き日の影」に同「胸合はぬ越の縮を織り兼ねて」の付など、いづれもとり〴〵にあはれである。「三度蹈む芳野の櫻芳野山」は仙化の付句であるが、芭蕉の口ぶりそつくりである。「紅に牡丹十里の香を分けて」の千春の付句は蕪村の「方百里雨雲寄せぬ牡丹哉」と同功異曲である。芭蕉の此の頃の連句が最も蕪村の發句に近い。

『初懷紙』には、前編にも一寸いうたやうに、芭蕉の自注と傳へられる注釋書で『花故事』と題する書がある。芭蕉の自注でないことは、明らかに想像されるが、あまりによく出來てゐて、或は所傳の如く、芭蕉の口授などを筆記したものゝ遺つてゐたのがあつて、其れに基いたものでないかと想はしめる。兎に角蕉風の付方に精通してゐる所は『去來抄』の著者などよりも寧ろ優れてゐるやうである。例の曲齋などが、此の注を彼是と貶してゐるが、曲齋の注などの、迚も比べ物になるものではない。闌更が上木してゐるから、或は闌更の手など入つてゐるかも知れぬ。さうらしく思はれる處もある。

日の春をさすがに鶴の歩み哉　　其角

元朝の日の花やかにさし出て、長閑に幽玄なる景色を、鶴の歩みにかけていひつらね侍る。祝言々外にあらはる。流石にといふ天爾波感多し。

みぎりに高き去年の桐の實　　文鱗

貞德老人云、脇體四道ありと立てられ侍れども、當時は古くなりて、景氣を言添へたるをよろ

罌粟咲いて情に見ゆる宿なれや　枳風

葉分の風よ矢篦切りに入（よはょの誤かも知れぬ）　齋

かゝれとて下手のかけたる狐罠　角

霰月夜の曇る傘　鱗

石の戸樋鞍馬の坊に音澄みて　白

我三代の刀打つ鍛冶　下

既に『冬之日』の晦澁險奇の處が取れて、付方が餘程穩かになり、付意も明快になつてゐる。それでゐて少しもだれたり弛んだりしてゐず、相變らず精勁の致と高華の味とは、毫末も減じてない。「かゝれとて」に「霰月夜」の付方などは、『冬之日』のやうな味がし、狐の妖魔氣分を霰月夜の古傘に受けたので、二句のうつりに、蕪村の發句でも讀むやうな趣がある。以下二句の趣致も『冬之日』の「鼓手向くる」に「宜の日」（前出）と酷似してゐるが、此の方が句振も穩かに出來てゐる。脇句から第三第四第五（例は後に引く）等への轉じ工合の巧さ、趣致の高さ、初表に是程立派な句の並んでゐるのは、芭蕉一代の作中にも比類が少ない。「疾く起きて聞きがちにせん子規」に「舟の茶の湯の浦あはれなり」なども面白い。「人あまた年とる物をかつぎ行」に「酒もりいさむ金山の洞」は、大盜の巢窟の賑やかな年取を付けた興趣の豐かな付句である。「京に汲ますする醒ケ井の水」に、芭蕉の「玉川やおの〳〵六つの處見て」の付、「餅作る楢の

の風も殘つた處もあるといふやうになつてゐる。此の集を『猿蓑』と『冬之日』とに比べると、恰も其の中間程度で、『猿蓑』に比べれば、餘程『冬之日』に近いが、又後者に比べると、餘程前者に接近してゐるのである。

憎まれし宿の木槿の散る度に　文麟
後住の女砧打ち〳〵　其角
山深み乳を飲む猿の聲悲し　コ齋
命を甲斐の筏とも見よ　枳風
法の土我が黑髮を埋み置かん　杉風
耻かしの記を閉づる草の戶　芳重
咲く日より車數ふる花の蔭　李下
橋は小雨をもゆる陽炎　仙花
殘る雪殘る案山子の珍らしく　朱弦
靜かに醉うて蝶を取る歌　擧白
殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　千里
兀げたる眉を隱すきぬ〳〵　芭蕉

此の注だけでは、所謂「うつり」「響」などの味がよく解らぬが、「氷踏み行く」などの遒勁な語氣から雄々しい狩人に、それから稻妻の快速な心持が狩の敏捷な行裝にひゞき、又電光石火の無常の觀想が、自づと殺生を業とする者に對してゐるやうな處の微妙な味は、繰返し〳〵翫讀して見たら、自づから會得する所があるであらう。斯樣な處は、口や筆で說明することは困難である。吳々もいふが、蕉風は意味で付けるのではなく、趣致風韻で付けるので、たとひ意味の聯絡があつても、それは寧ろ末で、其の裏には別に韻致の感合があるのである。此の點が最も肝要であるのに、從來の舊注は、之を輕視して意味に重きを置いてゐるから、蕉注を讀む者は此の點を忘れぬやうにせねばならぬ。

第七節　初懷紙小文時代

小文は『笈之小文』を指したのである。『初懷紙』が貞享三年で、『笈之小文』紀行が、其の翌四年から、五年（元祿元）にかけてゞある。前者は『春之日』の一年後のものであるから二者を比べると餘程近いが、又多少進んだ處もある。或は『初懷紙』にもなほ檀林風が殘つてゐるやうに說く者もある。句が華麗で、幾分の奇趣を帶び、且其角風が混じてゐるので、さう謂ふのであらうが、同意し得ぬ。予は此の集に至れば最早醇乎たる蕉風と見て可からうと思ふのである。度々いふ通り、檀林風でも蕉風でも、突如として始まり、突如として終つたのではなく、昨年の作と、今年の作とを比べても、殆ど區別が付かぬ程に似てゐるが、三四年を隔つと餘程違ふやうになつてゐるのが例で、又三四年經つても、幾分か三四年前

氷踏み行く水のいなづま　　　重五

(○前略)時雨の未だ乾かぬ道の氷の上にちら〳〵と月影のうつる氣色を稻妻に比喩して、本句の餘意をかゝげたる脇也。

齒朶の葉を初狩人の矢に負て　　　野水

(○前略)此狩人を氷踏み行く稻妻に照し見る時感慨少なからず。扨句意は、市人の初商を祝する意にて、獵師の初狩をことぶきて、齒朶の業を胡籙に打かけ、一とせの門出を祝ふの姿宛も畫るが如し。

北の御門を押あけの春　　　芭蕉

(○前略)北の御門とは、北は極陰にして、卑賤の者の通入すべき門なればなるべし。亦北窓閉ぐの格にして、其處を押明ると作りたる一陽來復の意ならん。

馬糞かく扇に風の打かすみ　　　荷兮

(○前略)北の御門なれば、冬の間は鎖したらん。其處に心を運びて、掃除の體を附けたらん。春のうらゝかなる容を一句の化粧ひとして、扇もて馬糞搔くといふ、面白し。(○下略、扇は俗にいふジョリンのことゝ、或注にある)

茶の湯者惜む野邊のたんぽゝ　　　正平

掃除と云より、爰には奇麗好を見出して、茶の湯者と附けたり。(○下略)

冬之日注釋の一例

の調子が後にも往々出てゐるから、先づ差措いて、芭蕉の「夫醉醒の愁に噓して」「陽炎に座す緣低く狭かりき」「汝櫻よかへり咲かずや」「汗深かりし憤る夢」などは、何處と無く天和頃の香ひがしてゐる。特に「きれ凧に乳母が魂は空に飛」などは、寧ろ延寶頃の句風で、『冬之日』以後の句とは、何としても請取れぬ。他に貞享二年作との確證があれば格別、さうでなければ、署名も芭蕉とあり、且通じての俳風から察して、予は是を天和中の、『武藏曲』以後から『虛栗』頃迄の間の作、すなはち天和二三年頃の作でないかと想像するのである。淸風は多分尾花澤の淸風（前編奥羽行脚の條參看）で、江戸に出た時に一座して詠んだものであらう。淸風は時々江戸に出たらしいが、天和二三年頃に出てゐるかどうか。作風等からは、先づ其の頃のものと推定するの外は無いやうに思ふ。

『冬之日』の注は、他の集に比して最も多いが、偖好い注となると少ない。予の是迄見た所では、先づ升六の注が、最も詳しく、且穩當の說が多い。但し矢張取るべからざる處が少なからずある。左に引く所は、此の注の拔書で、參考になるやうな處だけを取つて見たのである。

杖を曳くこと僅に十步

つゝみ兼ねて月とり落す時雨哉　　杜國

此句降りみ降らずみ定め無きの歌より思ひ寄せて（〇中略）句意は、僅に十步の間にも時雨るゝかと見れば、忽ち月夜となる（〇中略）大に感あり。

後の二句のうつりなどは、何といふ巧さであらう。

穂蓼生ふ藏を住居に侘びなして　重五
我が名を橋の名に呼ばる月　荷兮
咲き分けの菊には惜しき白露ぞ　越人
秋の和名にかゝる順　旦藁

なども蕉風の精髓をあらはしてゐる。越人の付句「子規西行ならば歌詠まん」は、芭蕉の「芋洗ふ女西行ならば歌詠まん」から取つたものらしい。總じて謂へば『冬之日』とは幾分か劣るやうであるが、連句集として之を他門又は後世のものに比べると、似寄つたものすら無い程に傑れてゐる。それも芭蕉があまりに群を拔き過ぎてゐた爲で、固より當然のことである。七部集を創めたものが、此の集を入れたのは卓見と謂はねばならぬ。此の集は例の「古池や」の發句が入つてゐるので特に名高い。

「涼しさの凝粹くるか水車」の清風の句を立句に、芭蕉の「青鷺草を見越す朝月」を脇の、嵐雪、其角、才丸、コ齋、素堂の七吟百韻は「涼しさの卷」と呼ばれて、貞享二年の六月二日の興行といふことになつてゐる(一葉集)が、此の卷は果して當時の作かどうか疑はしい。予は單に內容から疑ふので、他に證據がある譯ではないが、其の作風から見ると、どうしても貞享以後の作とは思はれぬのである。其角の「鴻雁高く白眼ども落ちず」、嵐雪の「引板を業とすをのこ嘯く」などは、其嵐共、前にも一寸いうたやうに此

各〻涙笛をいたゞく　荷兮

文王の林に今日も土釣りて　李風

雨の雫の音の無き草　雨桐

肌寒み一度は骨をほどく世に　兮

傾城乳を隠す有明（月の句か）　圭

是等の處は當時の芭蕉の所謂手の內を丸出しにしてゐる。全く『冬之日』其のまゝと謂ふべきである。

旅衣頭ばかりを蚊屋借りて　羽笠

萩踏みたふす萬日の原　野水

里人に薦を施す秋の雨　越人

月無き浪に重石置く橋　笠

轉びたる木の根に花の鮎取らん　水

諷ひ盡せる春の湯の山　旦藁

長閑けしや筑紫の袂伊勢の帶　人

內侍の選ぶ世々の眉の圖　荷兮

是等の多くも芭蕉ならずしては迚も到るべくもない高趣で、何處と無く、其の香ひが強くしてゐる。最

参、曠野冬の日抄 P63ト

○春之日

芭蕉の手を經たもの

「一生俳諧ならず」とある）是等も實際の言であらうと思ふ。其角も『雜談集中』に、特に此の集に注意してゐる。信に蕉風を學ばん程の者は、必ず一度『冬之日』の關門を通らねばならぬのである。『冬之日』の高調を經ずしては、直に『比左古』や『猿蓑』の圓熟を目指すさへ如何と思はれるのに、況や『炭俵』や『續猿蓑』の低調に就くをや。然るに後の人は、低調の學び易く模し易い處から、直に之に就き、是等のみを唯一の金科玉條として、蕉風の眞髓は茲に在りと考へ、又は口實にしてゐた者が多かつたのである。多くは皆云ふ、『冬之日』は檀林風の拔け切らぬものであるから、模範とすべきでないと。芭蕉をして地下に泣かしめた者は、恐らくは是等の徒輩であらう。古くから『冬之日』は華勝り、『曠野』又は『炭俵』は實勝り『猿蓑』は華實兼備であると謂はれてゐて、是等は大體に於いて當つた評であるが、始めから華を無視して實のみを望んだ沒分曉漢に見るべき作の出來よう筈がなかつたのである。

『春之日』は、『冬之日』の翌貞享二年春に成り、三年の秋に出板したものである。作者は、『冬之日』の荷兮、重五、野水の外に、越人、雨桐、李風、昌圭、旦藁、羽笠、冬文、舟泉等が多數に加はつてゐる連句では芭蕉の名は見えぬが、芭蕉の手を經たものであることは一讀して直に知られる。

汐風によく／＼聽けば鷗鳴く　昌圭
曇りに沖の岩黒く見え　執筆
須磨寺に汗の帷子脱ぎかへん　重五

寅の日の旦を鍛冶の疾く起きて　　蕉
雲香ばしき南京の土　　笠

此のあたりは、引續いて凝りに凝り練りに練つた句のみで、當時の蕉風の特色を最もよく發揮してゐる「八十年を三つ見る」は諸説あるが、多分三度目の八十即ち三百八十年をいうたので、三百八十歳を越えた童になほ母が有ると、無上に長壽な仙界の狀を詠んだのであらう。其の仙界から星宿界の織女の媒を付け、星宿の天界から月中の桂を思ひ寄せて、其の花を付け、夕の意を苔むに應せしめ、其の神祕的な氣高い趣を、蘭の油で受けてゐる。此の蘭の付句などは、「西南」と「蘭」「桂」と「油」「花」と「しめ木」「苔む時」と「打つ音」とを對させて、宛ら對句のやうに出來てゐる。是等は餘りに襯貼緊密に付け過ぎた一例である。以下も何れも洗練の極を盡してゐる、特に「鼓手向くる」以下の三句などは、精勁の妙、言語に絕してゐる。是等の内、どの付句一句でも、芭蕉の靈腕で無くては迚も〳〵取扱ひ兼ねるのである。付方の精妙なるのみならず、微塵も卑俗の氣を雜へぬ處を看よ。「流行り來て」は「はやり正月」とて昔流行病のある時疫拂ひの意で月を選ばず正月をしたが、茲では六月頃のそれだとの解がある。

『冬之日』の蕉風で重要な地位を占めてゐることは、何人も認めねばならぬのであるが、芭蕉自身も流石にそれを自認してゐた者と見え「愚老が俳諧は、五歌仙(冬之日)に至らざる人、一生涯成就せず。大事なり。覺悟せよ。」(俳諧問答)など云うてゐる。(宇陀之法師にも「老翁が俳諧は、五歌仙に究めぬ人

婢子』の繪から想ひ付いたといふ名高い句であるが、「露萩」が其の趣によく應じてゐる處などを仔細に看取れ。「岡崎や」の連などは、前句が「や」「哉」と下手な狂歌の片句か何かに聞えるので、田舍の氣まぐれ者が、庄屋さんの松(といふので、慶たい意の句と判る)を狂歌に詠んで、庄屋さんに贈つたと付けたので、前句も矢張長久を祝ふやうな意にも聞えるので、付句にも祝ひの意を持たせたのらしい。實に精緻の極と謂はねばならぬ。

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　　荷兮
　宣旨かしこく釵を鑄る　　重五
八十年を三つ見る童母持ちて　　野水
　媒ち初むる七夕の妻　　杜國
西南に桂の花の莟む時(月の句か)　　羽笠
　蘭の油にしめ木打つ音　　芭蕉
賤が家に賢なる女見て歸る　　五
　釣瓶に粟を洗ふ日の暮　　兮
流行り來て撫子飾る正月に　　國
　鼓手向くる辨慶の宮　　水

嬉しげに囀る雲雀ちり〳〵と　芭蕉
岡崎や矢矧の橋の長き哉　杜國
庄屋の松を詠みて贈りぬ　荷兮
芥子の一重に名をこぼす禪　杜國
三日月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
賀茂川や胡麻千代祭やゝ近み　荷兮
岩倉の婿懐かしの頃　重五
酌取る童蘭切りに出で　野水
秋の頃旅の御連歌いと假に　芭蕉
乞食の簔を貰ふしのゝめ　荷兮
泥の上に尾を引く鯉を拾ひ得て　杜國
元政が草の袂も破れぬべし　芭蕉
伏見小幡の鐘花を撞つ　荷兮

などは、或は同致を付け、或は對比を付け、信に「千變萬化」の働きを示してゐる。前句の趣と微妙な精緻な感合のある處をよく注意せよ。「ひゞき」「にほひ」の細やかな處をよく〳〵見よ。燈籠は例の『御伽

今日は妹の眉書きに行　野水
桃花を手折る貞徳の富　正平
雨こゆる淺香の田螺掘り植ゑて　杜國
（注、雨越ゆるで淺香の枕詞にしたのか、雨肥ゆるで田螺を形容したのか）
こつ〳〵とのみ地藏切る町　荷兮
初花の世とや嫁の嚴めしく（やは也の假名にや）　杜國
櫛笥に餅すうる閨ほのかなる　荷兮
鶯起きよ紙燭ともして　芭蕉
歯朶の葉を初狩人の矢に負うて　野水
北の御門を押し明けの春　芭蕉
燈籠二つに情比ぶる　杜國
露萩の相撲ふ力を選ばれず　芭蕉
紅花買ふ途に子規聽く　荷兮
忍ぶ間の業とて雛を作り居る　野水
五形葷の畑六反　杜國

なほ幾多の例

脇は、他の粧ひの爲に鏡磨は寒さに手を凍らせてゐると付けたので、妻といふ語の艶なのに、粧、鏡などが應じ、鏡が又炭賣の黒い顔にもうつり、炭の冬の朝を、寒が受けてゐる。實に間髪を容れぬ精緊無比の付方である。第三は又更に凝つて、前句の人の粧ひの爲に苦勞する意を、花棘の妖婦などを想はせる美花が、無用に朽ちた馬の骨に咲いた處を付けたので、粧ひ、鏡の婀娜めいた趣を花棘の咲くを以て受け、人の爲に働いて朽ち果てる鏡磨を馬骨を以て應じ、寒は霜であしらうてゐる。霜に咲く花が、婉麗乍ら、冷かな味を有つてゐて、是に何と無く人を魅する妖婦などの俤が浮んでゐる處に注意せよ。第四は平句に入る處で、且三句共餘りに凝つてゐるので、月を出して聊かゆるめたかに見えるが、而も中々確かりと付けてある。花棘の艶にして、又馬骨の間の拔けたやうな處を合せて、鶴がよく應じてゐる霜に咲く花の麗はしくして且清い趣を月で受けてゐることは言ふ迄も無い。幽かなりで凄味も見せてゐる。第五は更に聊か緩めてゐるやうであるが、矢張可なりに精緊味を示してゐる。鶴見る窓を何となく清貧に安んずる詩人などの體と見て、瓶に酒無き日を付け、月の幽かなるを、風無き秋の靜かに寂しい頃にしたのである。第六などは、冬の日頃の特色のよく表はれた句で、其の清貧の隱逸詩人の內職を付けたのであるが、萩織る笠といひ、市に振賣するなどは、例の奇語奇想で、又高秀の致を極めてゐる。

當時の付方の精緊であつたことは、なほ例へば、

我が祈り明け方の星孕むべく　　荷兮

たことである。さう想はれる事がだん〴〵ある。

なほ又、此の頃の作は、檀林風時代の、一語一辭をも見遁さずに、しつくりと付けた精緊の味が殘つてゐて、付方か凝りに凝り、練りに練り、一毫のゆるみをも見せまいとしたので、一層難解となり、晦澁となつたのである。積翠園の『俳諧或問』に「天和貞享の附様は、元祿の附と違ひ、付たる時は至て附き、遠きは亦聞え兼ね侍るならん」と云うてゐるのは、善く當時の付方を見た說であるが、「遠きは亦聞え兼ね」たのは、實はあまりに凝り過ぎた結果と見て可いのである。

　　難波津に蘆火たく家はすゝけたれど

炭賣の己が妻こそ黑からめ　　重五
　人の粧ひを鏡磨寒　　荷兮
花棘馬骨の霜に咲きかへり　　杜國
　鶴見る窓の月幽かなり　　野水
風吹かぬ秋の日瓶に酒無き日　　芭蕉
　萩織る笠を市に振する　　羽笠

などは、其の最も凝りに凝り練りに練つた代表的な部分である。炭賣の妻の却てさぞ美しからう（からめは反語として用ひたのらしく、前書は萬葉の難波人云々の歌の意を誤解したものらしい）の發句の意に

〇冬之日の特色

どの一卷を取出しても、芭蕉一代の連句中には、『猿蓑』中のものでも除けば、他には殆ど類が無いと謂ひ得る程の名連が、而も五卷迄輯まつてゐるのである。憶ふに、此の旅行が芭蕉にある不思議な衝動を與へたのと、前にもいうたやうに、江戸を離れたのとで、此の名作を遺し得たのであらう。發句の方でも、是迄に無く短い月日で多くの佳作を得てゐる。なほ其の上に、「熱田三歌仙」迄も遺したのである。(前編の其の項參看)芭蕉は、大旅行毎に傑作を得るのが例であつたから、是も或は旅行の御蔭であつたかも知れぬ。兎も角も『冬之日』は、後の諸作にも到底見るを得ぬ多量な奇趣奇想を含んでゐて、恰も芭蕉の少壯期の才思が、抑へんとして抑へ切れずに縱横無盡に迸り出たものかの感がする。實に逸趣横生夭矯離奇、詭譎變幻、神出鬼沒など謂ふべき句を以て滿たされ、怪光陸離人目を眩せずんば已まざるの概がある。なほ謂へば、高華瑰麗と、幽窅淵玄と奇拗險怪とを兼ねたとでも評すべき趣である。此の集が後世如何に特色を認められたかは、純蕉風の手本とされなかつたに拘はらず、七部集中では註釋書が最も多く出たのからでも推すことが出來る。他派に對しても可なりの反響があつたらしい。單に此の一集だけでも、芭蕉の連句の古今獨歩なるを證して餘りある。唐の李長吉の詩を讀むと、上に擧げたやうな奇趣が味はれるが、『冬之日』は深味に於いて更に優つてゐる。國文學では此の味を有つものは甚だ乏しく、纔に謠曲や長唄の類に其の一端を味ひ得るに過ぎぬ。『冬之日』の特色は斯樣な處にあつた爲に句意が解りにくく、加之付意の微妙なるを以てしたから、他門は勿論、同門の人でも容易に腹に入り兼ね

であるからで、野洒は野洒紀行即ち甲子吟行の意である。通例此の時からを蕉風時代としてゐるので、此の二書共貞享元年芭蕉四十一歳の冬の作である。

前章の甲子吟行の項を見ても判るやうに、此の時代の發句は、字餘りの奇語奇調のがなほ可なりに多かつたのである。「馬に寢て殘夢月遠し茶の煙」「牡丹蘂深く分け出づる蝶の名殘哉」といふ調子で、又字餘りでなくても「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」「冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす」といふ風で、調子が變つてゐるか、意味が晦澁であるかで、なほ虚栗風が多分に殘つてゐたのである。併し

野ざらしを心に風の沁む身哉
道の邊の槿は馬に喰はれけり
秋風や藪も畑も不破の關
馬をさへ眺むる雪のあした哉
年暮れぬ笠着て草鞋穿き乍ら
我が衣に伏見の桃の雫せよ

などは、いづれも純雅平靜、醇乎たる蕉風と稱して可いものである。

『冬之日』は此の旅行中に、名古屋で出來た五卷の歌仙と追加表六句とを收めたもので、發句は一句も入れてない。此の五卷は『猿蓑』と共に、芭蕉關係の連句の選集中の二大傑作と稱すべきもので。五卷中

深川集

四佳書

菓』を除いて伊賀を代表するものとして『續猿蓑』を加へても可いが、兎も角も『續猿蓑』は僞撰であるから、芭蕉の目を經たものばかりを入れるといふ意で、除くも可からう。風も際立つた出色な處もない。『春之日』は傑作で、古池の句も收めてあり、又芭蕉の手の入つたものに違ひ無いが、連句に芭蕉が連座してゐぬから、省いても可からう。『初懷紙』は蕉風百韻の例としても、是非入れねばならぬ。『炭俵』にも百韻が收めてあるが、芭蕉が連座せず、且駄作である。『虛栗』は、蕉風とは謂ひ難いが、江戸を代表する、且蕉風への轉期の集として、入れても可からう。要するに七部集は便利な書ではあるが、亦物足らぬ集である。右に擧げたもの殘らずを入れたら、やゝ完全に近い代表集が出來るであらう。『深川集』の相應に重視せねばならぬに就いては、成美は『七部集纂考』に續猿を除いて、此の集を加へ、梅通は『麥慰舍隨筆』に「蕉門に七部集を要文とすれど、猿蓑炭俵深川等を本とすべし」など云うてゐる。『續猿蓑』は僞撰としても、可なり良くは撰ばれてあるから、入れても惡くはない。要するに芭蕉の特色と手腕とを見るだけならば、冬、初懷、瓢、猿、の四集を讀めば足つてゐる。(予は此の四集を「芭蕉連俳の四佳書」と呼んで、嘗て「藝文」に內容を紹介したことがある)併し芭蕉の蕉風連句の變遷の大體に通じようとするならば、少くも前に擧げた諸集位は讀まねばならぬ。

第六節　野洒冬之日時代(蕉風初期)

以下を野洒冬之日時代といふ風に、名を二つ宛擧げたのは、經歷と關係を付けて俳風を考へるに便利

割合によく選ばれてゐる

輯めたものであるが、何時頃に輯めたものか、よく判らぬ。曲齋の說く所に依れば、芭蕉歿後からさして永くない時代に、ある書肆が、是等の原板や新刻本を一つに綴ぢ合せて、「七部集」と題して出したものだといふ。古い七部集を見ると、成程多くはそれ〳〵の原板の板式のまゝで輯まつてゐる。(曲齋は今の七部集も原文も、殘らず再板だと主張してゐるが、是等は事實を丸で無視した說で、初板の原本も幾らも傳はつてゐる）兎に角安永三年には旣に小本七部集が出てゐるから、最初の七部集の出たのは、それよりも可なり前である。是より先寛保二年に吏登の『七部搜』（蓼太編、七部集の注）が出來た筈で、是れに依れば、其の以前に七部集があつた事になるが、果して原本は七部集に依つての注であるかどうか兎に角それ以來七部集は蕉風の七書となり、七經となつて、他のものは往々忘られ勝にされた。多分始めは單だ苟且に、目ぼしい七種を取集めた過ぎなかつたのであらうが、それがだん〳〵喧ましい物になり、終に芭蕉の俳諧は七部集に殆ど盡きてゐるかに考へられるやうになつた。此の七部だけで、蕉風時代の俳諧が盡されてゐる譯でもなく、又必ずしも最良の撰集のみを取つた譯でもないが、此の七部を看れば、蕉風の大體に通ずることが出來るので、割合によく選ばれてゐる。併し、此の中に、最初期のものとして『虛栗』、それから『初懷紙』『深川集』なども加へ度いので、寧ろ雜駁な『曠野』を除いても、是等を入るべきであると思ふ。若し强ひて七部とせねばならぬならば、『虛栗』『冬之日』『初懷紙』『比左古』『猿蓑』『深川集』『炭俵』とするか、或は僞撰の『續猿蓑』を加へて『深川集』を除くかし度いのである。或は『虛

武士の鎧の丸寢枕かす　　蕉
八聲の駒の雪を告つゝ　　角
詩あきんど花を貪る酒債哉　　同
春湖日暮て駕ㇾ興吟　　蕉

旅行の爲に早く此の風を脱した

是等は一際虚栗風の特色を保つてゐるが、又一面には如何に『冬之日』の俳風に近いものであるかを看るべきである。是から其角趣味と思はれる特色を減き去ると、跡に殘つたものは、『冬之日』と甚だしく近似して來るであらう。芭蕉が若し甲子の旅に出ずに、なほ江戸に留まつて、其角などの相手になつてゐたならば、もつと永く此の虚栗風が續いたかも知れぬと思ふ。幸に江戸を離れ、まだ癖の餘り出來て居らぬ尾張の俳人達（實は半素人であつたらう）を相手にしたので、芭蕉が自由手腕を割合によく發揮することの出來たのと、一は行脚其のもゝの賜とで、あの名作が得られたのであらう。されば『冬之日』は殆ど大部分が芭蕉其の人の趣味と手腕とに成つたと見るべきものであるが、亦一面には、江戸以來持ち越した虚栗風が可なりの執念さを以て付き纒うてゐたのである。而して是等がやがて亦芭蕉の、才を恃んで自分勝手の一風など創めぬ謹厚謙虚か、又は本來の順應性の天賦かをよく語つてゐるのであらう。度々いふが、芭蕉には自ら進んで創めた風といふものは、一も無かつたと予は見てゐるのである。

○俳諧七部集

『俳諧七部集』は、『冬之日』外六種、即ち『春之日』『曠野』『比左古』（瓢）『猿蓑』『炭俵』『續猿蓑』の七種を

ゐる。

詩あきんど年を貪る酒債哉　其角

冬湖日暮れて駕馬鯉　芭蕉

干鈍き夷に關をゆるすらん　同

黑鯛くろしおとゝ女が乳　同

枯藻髮榮螺の角を卷ならん　角

魔神を使とす荒海の崎　蕉

鐵の弓取猛き世に出よ　角

虎懷に妊るあかつき　蕉

山寒き四睡の床を吹く嵐　角

埋み火消えて指の灯　蕉

下司後朝をねたみ月を閉　角

西瓜を綾に包むあやにく　同

哀いかに宮城野のぼた吹凋るらん　蕉

みちのくの夷しらぬ石臼　角

『虚栗』中の連句は翌年冬の『冬之日』に比べて、風格の上からは太した違ひはない。是は發句でも、又連句でもさうであるが、連句は特に、『冬之日』に比べて、極めて僅かな間隔しかなかつたのである。

月は袖こほろぎ眠る膝の上に　其角
鴫の羽しはる夜深きなり　芭蕉
恥知らぬ僧を笑ふか草薄　同
しぐれ山崎傘を舞　角
笹竹のどてらを藍に染なして　蕉
狩場の雲に若殿を戀　角
一の姫里の庄家に養はれ　蕉
鼾名に立つと云題を責めけり　角
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり　蕉
うき世に沈む寒食の痩　角

是等の邊の芭蕉の句は固より、其角の句の大部分すら、後の蕉風時代の連句中に入れても殆ど見分けが付くまい。但し「沓は花貧重し笠はさん俵」「腐れたる俳諧犬も食はずや」「寸ン法師切レの衣の短きに」などは、當時の特調で、『冬之日』にもなほ僅に此の風が遺されたが、純正風になつてからは全く跡を絶つて

世にふるも更に宗祇の宿り哉（前編參看）

のやうな蕉風に近い温雅平實の句も混つてゐる。是等がやがて芭蕉本來の趣味から出た句であらう。芭蕉及び其の一派が一度此の虛栗の奇調を經たのは、蕉風の爲に喜ぶべきことであつたらうと見られる。始めから明暢温雅をのみ力めた句は、動ともすると、否大抵は、卑弱となり、平板となり、一轉しては俗惡となり易いのであるが、斯樣な調子を一度經て平正に歸したのは、其の弊に陷ることが少ない輕快な洒落から、沈實な正風に入る過渡期としては、是非經ねばならぬ階段であつたやうに思はれるのである。

當時流行の調

虛栗調は決して芭蕉一派が創めたものでなく、當時一般に此の調子が流行したのであることや、また岡西惟中などが好んで此の風を詠んでゐたことなど、初編に一言した。『歷代滑稽傳』に、當時俳諧が次

一息にはいはれぬ

第に亂雜となり「漢字を集め、詩を聞くやうに成り、又は字餘り、一息にいはれぬ樣なる事になり、京江戶田舍共に亂れ立つて、此時談林の俳諧滅亡のしるし也」といひ、三四の例を擧げてゐる。發句では「嶽や〱呑手の若者花修行」「今宵の大將たり抑たはらの芋太郞」「うなだれしは歌讀候かいかに薄」附句では「天道や人道や女道や惡道や、殊にかなしきは借錢界親仁界」「數平蜘これなん朝敵のはじめ、蜩（ひた）甲（かぶと）を並べて庭上に列す」などがそれで、虛栗風と酷似してゐる。此の亂調はやがて又檀林風が衰へて正風が興つて來る間の、過渡期の一時の變調と見られるのである。

恰も其の最極期の代表的撰集となつたに過ぎぬのである。先づ發句を擧げて見よう。

禮者敲レ門柴朶暗く花明か也　　幻吁

春柴負葩木深き宿を山路哉　　翠紅

いでや春地無し小袖のかいとりせる　　信徳

大概皆こんな風である。芭蕉の句は、「花に浮世我が酒白く食黑し」「淸く聽かん耳に香焚いて郭公」「雪の魨左勝水無月の鯉」「髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ」「夜着は重し吳天に雪を見るあらん」などで、いづれも虚栗風のくねり調で、故らに語を轉倒したり、奇異にしたりして、險怪を裝はしめたものである。併し其の奇拗險怪な調子の中に、一種苦澁の味と跌蕩磊砢の趣とを含んでゐて、輕い駄洒落の甘味を脫して、幽玄の趣に趨かうとする過渡期の頂點を代表するものとして、前節に擧げたものに比べては、一層奇味が豐かになつてゐるのである。「時鳥睦月は梅の花咲けり」「靑ざしや草餅の穗に出でつらん」「三日月や朝顏の夕つぼむらん」「椹や花無き蝶の世捨酒」「氷苦く偃鼠が咽を沾せり」などは、調子は幾分か平正であるが、意味を故らに晦澁にしてあるので、隨分判りにくい。而も判りにくい乍らに、一種の苦味を味はせてゐる。但し

鶯を魂に眠るか嬌柳

朝顏に我は飯食ふ男哉

ぞ若衆かな女哉」「貧山の釜霜に鳴く聲寒し」「夕貌の白く夜の後架に紙燭執りて」「侘て住め月詫齋がなら茶歌」「芭蕉野分して盥に雨を聽く夜哉」（茅舍の感）「櫓の聲波を打て腸氷る夜や泪」（深川冬夜感）是等の内、「侘て住め」「芭蕉野分して」などは、幾分か沈靜になつてゐる。總じて發句連句を通じて、狂態がだんく滅じて、一歩々々寂味の方に近づきつゝあるの感がする。連句は、麋塒、千春、卜尺、其角、素堂、言水等との百韻が收めてあるが、中の芭蕉の付句は「せんしところの茶に月を汲」「行脚坊卒都婆を夢の草枕」「ねり物高く五歩に一樓」「匂落つ杏に酒を買ふところ」「藏守の叟霜を身に着る」「日を額に打つ不二の棟上」「遁世のよそに妻子を覗き見て」「袖に入る蝸夢を契りけん」「奥にての御遊隔レ塀戀」などいふ風で、殆ど全く虛栗風と稱しても可い。こんな調子も趣味も、芭蕉の本色とは多少そぐはぬ處があつた爲か、此の前後の連句には太した傑作も無かつたやうである。

天和を通じて過渡期

第五節　虛栗時代（過渡期）

天和時代は、延寶の檀林風から貞享以後の蕉風に移る過渡期である。前出の元年の『次韻』、二年の『武藏曲』、三年の此の集と、實は此の三集を通じて此の過渡期を最もよく代表してゐるのである。

『虛栗』は天和三年の五月其角の撰である。此の集は所謂「虛栗調」とて、一種異樣な字餘りと漢語混りの佶屈生硬な、くねつた調子の句を集めた特別の集のやうに考へてゐる者もあるが、前にいふ如く、實は當時の一般の流行風であつたので、特に蕉門の間に、一時此の調子が大に歡迎された迄で、此の集は

當時の蕉風は實は其嵐の風

二六三頁参照。

武藏曲

詩とは殆ど何の關係も無かつたのである。「秋に對して所帶堂の記」(才麿)だの「煤掃之禮ニ用ニ於鯨之脯一」(其角)だのが、しかつめらしくて却て可笑しく聞えるのは、「然り而して」だの「頗る非常に」だのいふと故らにふざけて聞えるのと同じい。

此の次韻は、一見して判るやうに、既に『虚栗』を豫想してゐる。斯樣な點から、之を蕉風の初聲と見る者もあるが、さう見れば見られぬこともない。併し純蕉風と比べて、大なる距離のあることも亦承知して置かねばならぬ。又是等の風を、芭蕉が自分の考で始めたやうに見る者が多いやうであるが、予の考は全く異ふ。既にいうたやうに、芭蕉は自分で先に立つて何か一つ始めて見ようといふやうな人ではなかつた。特に連句では、前節にも述べたやうな天性からか、何時も周圍と相手とに依つて其の風を變化させたのである。此の前後の佶屈奇澁な風も、實は蕉門に限らず、當時一般の風であつたのであるが特に其角や嵐雪が最も喜んだ風で、芭蕉も偶ゝ之に相手になつた迄で、芭蕉の方が寧ろ引込まれたのらしい。是が其嵐の風であつたことは、其の後永く其嵐が此の風を續けてゐたことからでも推せる。引込まれて居り乍ら、どんな風でも、仲間の誰も及ぶことの出來ぬ處を行るといふのが、芭蕉の常で、其れがやがて連句の異能見たる所以である。

『次韻』の翌天和二年春に出た『武藏曲』(千春編)になると、益ゝ『虚栗』に接近してゐる。此の集中の句を取出して、卒然之を『虚栗』の句中に混じて見せられても、其の區別は容易に出來ぬであらう。「梅柳さ

の生田の森の初月夜」などの、後の蕉風連句中に入れても差支無いやうな句も往々混つてゐる。斯様な處があつたので、蕉風の先聲とも謂はれたのであらう。

老莊くづし洒落禪

『次韻』から『虚栗』頃迄を通じての桃青一派の風は漢詩口調、漢語口調の佶屈奇澁を特色とし、興味の焦點を、老莊くづし又は狂禪、洒落禪とでも謂つたやうな風の處に置いてゐたやうである。而して何か寓意でも含めてゐるやうな氣味合に、妙にひねくつて言ひ、其の態とらしく鹿爪らしい語法に、故らに可笑味を有たせてゐる。或人は之を寓言時代など謂うてゐるが、實は寓言ではなくて、莊子の口調などを態と眞似て、寓言めかし乍ら、其處に一種の洒落氣を弄しただに過ぎぬのである。『句選年考』に「芭蕉の句多く觀想なり。天和貞享の頃は、別て觀想古事古歌謠などの裁入れ多し。至つて安らかとなりたるは、奥之細道已後と見えたり。此の事は、去來抄、梅白し昨日や鶴を盗まれしの句評に、句體の物ぐるほしきは其頃の風なりと見えたり」と謂うてゐる。

理趣

觀想とは理趣のことで、哲理めいた趣の句を謂ふのである。而して古事や古語などを矢鱈に入れて、勿體らしく、深意でもありさうに言ひはしてゐるが、實は眞の觀想や理趣でなくて、たゞ持つて廻つた一種の洒落に過ぎぬ。即ち奇矯にして澁硬、意味を判りにくゝし、言方を妙にまはり遠くして、態と深長らしくした處に、一種の澁く凝つたひねくつた詼諧味を弄んだに過ぎぬのである。漢詩調や漢語を多く入れたのは、當時新興の蘐園の古文辭派や、木門の詩人などが多く出た感化であらうと謂ふ者もあるが、或はそんなことかも知れぬ。但し内容は固より漢

揚水の四吟である。信徳のことも、『七百五十韻』のことも、既に前編にいうてある。次韻とは實は名ばかりで、信徳の風とは少なからず異うてゐるやうであるが、其處が桃青一派の多少得意とした處かも知れぬ。門下の去來なども「先師の次韻起りて、信徳が七百韻衰ふ」(俳諧問答)など云うてゐる。

鷺の足雉子脛長く繼ぎ添へて　桃青
這句以荘子可見矣　其角
禪骨の力たわしう成る迄に　才麿
しばらく風の松にをかしき　揚水
夢に來て鼾を語るほとゝぎす　其角
燈心賣と詠じけん月　桃青
微雨ゆく麻から山の木の間より　揚水
粟に稗さく黍はらの守　才麿

此の始めのあたりは、大分落付いてゐるが、進むにつれて、「渾沌翠に乘て氣に遊ぶ」「愛を捨て子を捨て毗盧遮阿毗羅吽」の類の茫洋たるもの、「白き親仁紅葉村に送レ婿」「勅使茅原の朝臣蕪房」の類の惡く洒落れたもの、「禰小僧豆麸に月の詩を刻む」「槌子に抱く幻の君」の類の怪奇を弄したもの等が、だん〳〵と出て來てゐる。但し「薄の院の陵を訪ふ」「露にしがらむ妹が黑髮」「月に秋訪ふ東金の僧」「津の國

客僧の衣かせ山一祈り
　　小坂の道に犬が尾を振る

桃青としては、付方が少々拙いやうな氣もする。但し卷末の館子のよりも桃青らしいやうに思ふ。又案ずるに、芭蕉のやうな性格の人は、獨吟では却て面白く行かなかつたかも知れぬ。即ち此の種の人は、他人と接觸した場合に始めて其の眞の天才が發露されるので、相手が多方面であればある程愈〻多方面に、大なればより大に、深ければより深く、所謂相手の打ち方で如何やうにも響くといふ風に出來てゐたのであらう。而して芭蕉は其の最も甚だしい者であつたのでなからうか。是は予が以前から芭蕉に對して有つてゐた考の一であるが、どうもさうらしく思はれる。是程の連句の名人に、獨吟があまり傳はつてゐなかつたことも、此の考を強める理由の一である。芭蕉の獨吟として、多少傳へられてゐるものもあるが、眞僞は兎に角に、いづれも駄作のみである。前述の獨吟も、館子のは固より、吟桃のも皆佳作とは謂へぬ。或は桃青の獨吟の二十歌仙も、桃青としてはあまりに拙かつたので、傳はらなかつたのでないとも限らぬ。それは兎に角、芭蕉の天才は相手を待つて始めて顯はれる天才であつて、其れが又やがて連俳に適してゐた所以であつたと予は信ずる。

第四節　次韻時代（檀林風不滿期）

『次韻』は、天和元年（延寶九）春の伊藤信德の『七百五十韻』に次いだ二百五十韻で、桃青、其角、才麿

知れぬ。延寶中の付句にも「老子の婁山の端隱れ（信章）寓言の昔の落葉かき捨てゝ（桃青）」の類の句も少なからずある。檀林風の洒落趣味から、所謂正風趣味に移つて行つたのは、他面から謂へば、即ち老莊趣味から儒教趣味に移つて行つたといふ意味にもなるのである。是は大概の人々の思想の經路で、芭蕉も謂はゞ平凡に此の經路を取つたに過ぎぬ。田中桐江に莊子を學んだのは此の頃かも知れぬ。

『延寶二十歌仙』は、桃青の門下の獨吟歌仙のみを集めたので、桃青の名の署してあるのは一卷も無いから、批評は略して置く。なほ又此の外に、桃青獨吟の二十歌仙といふものがあつたのでないかと思ふのであるが、是は既に前編にいうてある。又吟桃と署名してあるのが、或は桃青でないかといふことも其の項でいうたが、是は固より當推量に過ぎず、何だか桃青らしくないやうな處もあるが、試みに調子の穩かな部分の數句を擧げて置かう。

きぬ〳〵の恨みを添ふるつむぎ裏　　吟桃
枕のかねや一歩四五百
ある醫者のくすりむなしき月の暮
井戸に蓋する桐の下露
秋の風雲を東に鞠飛んで
都を出でし公家の執心

らし。此日は火の沙汰を忌むといへば、批言の批をも忌むべきなり。(田舎之句合)

第二十三番　左勝

麩といふ物あり性水を好んで氷に遊ぶ

右

氷筋の如しかんてんのかんは寒いと訓む

(〇判詞)麩は性を註し、かんてんは文字を解く。増補獻立抄に曰く、麩は風味の切、以レ酒煮、以レ油煎、則味愈厚しといへり。此方賞翫たるべし。(常盤屋句合)

此の頃頻りに老莊趣味を振廻したことは、『田舎之句合』の序には「判詞莊周が腹中を呑んで、希逸が辯も口にふるす」といひ、判詞には、「莊周が心あらん。尤玩味すべし」といひ、列子曰、陽氣壯則夢渉ニ大火ニ云々といひ、「此山(〇能無し山)何れの處にや。山海經にも見えず。若し無何有郷廣莫之野に續きたる名所か。彼の大樗を捨てざるの例も想ひ出られて、うどの大木亦愛すべし」「鳶に乘つて無窮の空々たるに逍遙せん」「冥靈大椿を論ずるに似たり」といふの類、皆此の趣味から出てゐる。第十一、號の栩々齋といふのが、例の齋物論の栩々然蝶也から取つてゐる。なほ又「大福山拾德寺の和尚に見えて問ふ」だの「衆才寺の入道前の關白」だの、「早蕨の杖にすがり、忽然と來り云々、此山に隱れ棲む野老先生と云者也と云て卽失せぬ」などの假設の人物を出してふざけるのも、莊子の寓言あたりから思ひ付いたのかも

き」などもたゞ調子にかゝつて叩えたに過ぎまい。併し亦「如何に漁翁心得たるか秋の風」「人穴深き早桶の底」などの、幾分か凄涼の味を有つた句も少なからぬ。又「古文眞寶氣のつまる秋(信章)酒の露たはけ起つて白雲飛ぶ(桃青)」「傳聞く唐の羊羹かすていら(信章)上碧落より下は杉打(桃青)」の如き、漢詩もぢりの句は、既に當時から始められ、『虚栗』頃に極端に達したのである。前掲の内「地にあらば石臼」などもそれで、隨分無遠慮にもぢつたものである。要するに當時迄の桃青の連句は、巧いといふことを外にしては、後の芭蕉を豫想せしめるやうな處は、殆ど無かつたやうに見える。

『田舍之句合』は其角の作句二句宛を、句合の形に並べた二十五番五十句に、芭蕉が判詞を下したもので、『常盤屋句合』も同じく杉風の青物二十五番の句合に、芭蕉の判詞を添へたものである。此の書の序に「既に桃翁栩々齋にゐまして」又「翁の判を得たり」などゝ三十七歳の芭蕉を翁扱ひにしてゐる。芭蕉を翁と稱したのは、是等が始めてゞあらう。二書共延寶八年に出たものである。

第四番　左

歸る雁米つきも古里や思ふ　　練馬の農夫

右勝

今案ずるに寒食の家には自身番　　葛西の野人

(○判詞)越後に歸る雁がねに、米つき古郷を慕ふ。あはれ深からぬにはあらざれ共、寒食の自身番珍

當時の連句は通人趣味

洒落と輕口とを事とす

偖又當時の桃青の連句を通じての句意の趣味は、一言で謂へば、通人趣味とでも稱すべきもので、中に出て來る語は、吉原通ひ、揚屋、茶屋、小芝居、新狂言、連節の端唄、たはけ狂ひ、浮名、茶小紋の羽折、若衆、てかけ、後家、…の黄金の膚、伊勢白粉、小糠袋、下帶、紅絹のふた布、赤い褌、玉子酒十才の和尚の浮氣、二間程書く文、口説申候、地にあらば石臼などゝ契ひ、枕並べし腰拔、まだ〳〵「小枕やころ〳〵ぶしは引たふし（信章）臺所より下女のよび聲（桃青）」「しなひ打大夜着の裏表まで（信德）鞍馬僧正床入の山（桃青）」「裏かへす疊破れて夢も無し（信德）蚤に喰はれて來ぬ夜數搔く（桃青）」「紙燭消しては鶉啼くなり（信德）あゝ誰ぢや下女が枕の初尾花（桃青）」「岩橋の夜の小袖を引かぶり（桃青）一汗流す谷川の月（同）」などゝ傍若無人にやつてのけてゐる。なほ又「神代も聞かず百文の戀（春澄）靈寶の枕草紙をふし拜み（桃青）」などの念の入つたのもある。後年には、至心歸依、殆ど高僧の俤を偲ばしめた芭蕉も、當時は「是生滅法生姜梅漬」と洒落れ、「釋迦も此世を缺落の時」と浮かれ、「八萬諸聖敎古手形也」とほたえ、「双六の菩薩も茲に伊達姿（信德）衆生の錢をすくひ取らる（桃青）」「むつごとの氣がねの蚤の這ひ出でゝ（似春）釋迦に添寢の夢の短夜（桃青）」と戯れ、「能因法師」の「若衆の時」を想ひ「南無や酒樽醬油」の御「來迎」を希ひ、徹頭徹尾、たゞ洒落と輕口とを是れ事としてゐたのである。但し是等の材料は、桃青が好んで故らに用ひたといふ譯ではなく、周圍や相手の「雁よ千鳥よ阿房友達」が、皆こんな風であつたが爲で、桃青も其の御仲間入をしたに過ぎぬと見るべきであらう。前の『貝おほひ』中の「昔は衆道好

教相判釋其のまゝ

檀林風と蕉風との區別すら明白でない

かし、又「次韻」で草中の草を示したが、門人達には解し得なかつたので、更に『虚栗』に和らげ、『冬之日』に誘引して、それからだん〳〵と曲節を避けて平話に趣いたのだなど云うてゐる。乃で門人達も入り易くなり、隨つて門人も殖えたといふのだ。宛然天台宗の教相判釋其のまゝである。多分其等から想ひ付いたのであらう。「次韻」には幾分か沈靜の趣が添うて來てゐるが、此の百韻などの、純然たる檀林風であることは、今更辯ずる迄も無く、苟も蕉風と檀林風との差別の大體でも心得てゐる者には、判り切つてゐる筈である。然るに近年になつても、曲齋の此の說などを引いて、此の頃から既に蕉風の萠芽が見えたやうに云ふ者もあるから、一言して置くのである。曲齋の說は、すべて自己流の强解と附會とで出來てゐるが、是などは、其の最も甚だしい一である。曲齋は婆心錄や其の他の大著述を出した程の芭蕉研究の大家と稱すべき人であつたに係はらず、檀林風の付合と、蕉風の付合との間の相違すらを、明白にし得なかつたらしい所を見ると、後の蕉風を祖述した俳人等に、蕉風連句の本質を會得した者の極めて尠なかつたといふことが、無理からぬやうにも思はれるのである。曲齋は斯ういふ頭で七部集を注したのであるから、蕉風をも悉く檀林臭味を以て解釋してゐる。尤も他の人にも、此の弊を免れた人は極く少なかつたが、(殆ど無いと謂うても可い程に)曲齋は特に甚だしかつたのである。檀林風の付合と蕉風のとの區別を先づ以て明確に看取して置くことが、「文學として」の連俳の價値を會得する第一步であると謂はねばならぬ。

○當時の諸名家が何故芭蕉に推服したか

曲齋の說

ようや。柳生某が仕合の小手先でも、是程手際には行かぬであらう。後に芭蕉門に入つた許六が、是等の付合の巧妙さに驚嘆し、其の師常矩などの迚も及ぶ所でないと感じたのは、『俳諧問答』流石と謂はねばならぬ。當時の一流の大家であつた信德信章、其の他言水才丸等の諸俳豪が、だん〳〵芭蕉に推服するやうになつたのは、芭蕉の爲人が異常に優れてゐたことも一原因であらうが、一は斯く付合の實力の際立つて優れた處があつたからでなければならぬ。門下の諸俊髦が、神の如くに推服したのも、德望に加へて此の異才があつたからでなければならぬ。若しも文學者としての實力を缺いてゐたならば、如何に立派な人格の持主であらう共、眼ある者が、何で文學上から之に屈服しようや。然るに、上に擧げた諸大家は、皆當時一流の人々であつたに拘はらず、其の連句は、漸々蕉風に化せられてゐる。其の化せられた諸大家の作すら、之を芭蕉の物と仔細に比べて見たならば、矢張其の逕庭の大なるに、何人も驚歎せずに居れぬであらう。

曲齋の大著『七部婆心錄』の附錄に、右に引いた「此梅に」の百韻を擧げて、是等の卷を正風の先聲とし「延寶の始め、翁がかゝる句法を成就して、俳諧を開き給へるを、今の今迄も、そを知らざる人のみなるは、嗚呼道に不信なるかも」など云うてゐる。是が、芭蕉が檀林風時代から既に連俳には特技を有つてゐたとの意味でならば、首肯し得るが、さうではないらしい。曲齋は、是等の風を草體と名づけ、道には、擬宜、誘引、彈呵、淘汰の四があつて、此の百韻、次韻は擬宜に當るとし、始め此の草體で世を驚

海老雜魚まじり折節は鮒　　德
醬油のあとは湯水に月澄みて　　青
更けてしば〳〵小便の露　　章

此の三吟などの巧妙さを看よ。是も前掲の「此の梅」の卷に優る共劣らぬ名卷である。「あら何とも無や」は、謠曲の常用語で、「私とした事が」とか、現代語の「マアどうしませう」とかいふ意であるのを、「何とも無い」の意にもぢつたのである。「しさつて足の先」なども、河豚食うて身中温たまつた意であるが能の振をも想はせてゐる。其の他句意は大凡明らかである。拙者儀はと、居合腰が鯱張つて名乘る狀に霰の玉の亂るゝ風の篠原と、其れを苗字にして洒落れて退けた手腕の物凄さ、眞に身の毛がよだつではないか。他の二人の句も是等の百韻では特に好いのは、桃青に引ずられたからと見るの外あるまい。

難波の蘆は伊勢のよも市

聞耳や餘所に怪しき荻の聲　　信德
難波の蘆は伊勢のよも市　　桃青

などは、其の精妙さ、斯樣の手際が、抑も何人の追隨を許さうや。「聞耳や」が、何と無く盲人が首でも傾けて聞耳立てゝゐる狀にも取れるので、荻の緣から「難波の蘆は伊勢の」（難波の蘆は伊勢の濱荻）と迄言ひ下して、偖「よも一」と、座頭のやうな名でちよいと結んだ（伊勢の盲俳人望一が非凡な耳を有つてゐたことを忘れてはならぬ）洒落工合などいふものは、異能兒桃青ならずして、何人か眞似さへ爲し得

宗因も及ばぬ

分の「輕う洒落れたる」趣味が現はれてゐるに過ぎぬ。併し其の洒落れ方の如何に巧妙を極めてゐるかによく〳〵注意せよ。實に前句の一語一辭の末迄を、秋毫も見遁すことなく、又一字一言も無駄の無いやうに、前句に精妙且微細に付いてゐる。「春の雨」の句に「酢味噌」、「擂鉢」に「昔はたらき」、「胝」に「爪立てゝ」の付工合などは、精緻無比、眞に巧緻の極を盡してゐる。斯樣な巧妙な付方は、檀林風の開祖宗因の作でも、迚も〳〵及びも付かぬのである。宗因には亦宗因一流の磊落疎宕の面白味はあるが、付方の巧妙といふ點からいへば、此の連句の異能兒桃青には、及ぶべくもなかつたので、是は寧ろ當然のことであつた。是等の諸作を、同時代の檀林風諸大家の作に比べて見たならば、芭蕉が如何に連句に特異な天才を有つてゐたかゞ判るであらう。全く芭蕉のみが能くし得た離れ業であつた。從來斯樣な方面に論及した者が無かつたやうだが、注意して見る者には、直に氣が付く筈である。信章が是等の卷では別人のやうに見えてゐるのは、桃青の感化であらう。次に同年冬の三吟を擧げて見よう。

信章信德との三吟

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁　桃青

寒さしさつて足の先まで　信章

居合拔霰の玉や亂すらん　信德

拙者苗字は風の篠原　青

相應の御用もあらば池のほとり　章

摺鉢を(にカ)若紫のすりころも　同
　昔はたらきの男ありけり　章
胝の開けそめたる空の月　同
　爪立てゝ行く足びきの山　青

右は百韻の表八句である。發句の梅牛から推すと、或は天滿宮に奉納の付合かも知れぬ。或は梅は梅翁宗因の俳風の意をも含めたものとも取れる。表はれた意は鶯を牛に代へて可笑味を取つたに過ぎぬ。脇句は、牛さへも初音を啼くから、ましてや歌を詠むといふ蛙、(古今序)其の蛙仲間の人間樣の作をやと洒落れたのである。第三は、蛙より春雨を付け、輕う洒落れた作と應じさせたもの。第四は輕う洒落れたに酢味噌、春雨に下萌を付けたもの。第五は、酢味噌に摺鉢、下萌に若紫を對し、すり衣は摺染の衣と、韲物などの衣とを持たせたものらしい。第六は、若紫のすり衣より「しのぶの亂」の勢語の歌を想ひ其の勢語の口調を眞似て、昔男ありけりとし、向鉢卷か何かで摺子木をまはす働男を付けたのである。(種彥校合の江戸二吟等には「庭働の男置きけり」とあるが、是は誤寫と見るべきであらう歟)第七は働男の胝を新月の形に見立てゝ、月の座に故事付けたもの。第八は胝足の痛さに、爪立てゝ、趁跛引きつゝ月見に行くと、枕詞の足びきをもぢつて付けたのである。何れも詞の縁に、多少の意の上の縁を混ぜて滑稽問答的に洒落れた迄で、句の內容の上には、獨立した興味が殆ど全く無く、たゞ句々を通じて、幾

信章との
兩吟

發句を脱し過ぎた論。

○此の梅に牛も初音を啼きつべし　延寶五
○あら何とも無や明日は過ぎて河豚汁
○見渡せば眺むれば見れば須磨の秋　延寶六
○鹽にしていざことづてん都鳥
○實にや月間口千金の通り町
○捧げたり二月中旬初茄子　延寶七
○色づくや豆腐に落ちて薄紅葉
○忘れ草煎茶に摘まん年の暮

前記の延寶五年最初の遺作といふは、信章との兩吟であるが、此の兩吟に、突如として桃青の驚くべき付合の異能が現はれてゐて、當時の發句の、多くは兒戲に類してゐたやうな幼稚さとは、宛ら別人の如き感を起さしめてゐる。

此の梅に牛も初音と啼きつべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
春雨の輕うしやれたる世の中に　同
酢味噌まじりの野邊の下萌　青

らは、前にもいうた如く、特別に巧いと思はれるやうな處は無かつた。特に檀林模倣以前の發句に至つては、どうしてこんな拙い句ばかり詠んでゐたものかと寧ろ不思議に感せられる程であつた。是等の發句を季吟の選集其の他の中で見て、後にあれ程の名家にならうなどゝは、如何な明眼の人でも、想像し得なかつたであらう。然るに連俳になると、是は又あまりに飛離れて巧いのに、驚絶せしめられるのである。左に延寶五年から七年迄の間に成つた連句の目錄を掲げて見よう。

一、春二百韻(實は百韻二卷、以下準之) 延寶五年三十四歲の春、信章(後に素堂)との兩吟、

一、江戸三百韻 同年冬から翌六年三十五歲の春にかけて、信章信德との三吟、

一、三吟二百韻 同六年秋、似春(井上氏、醫と云。一說に小西氏大阪の人江戸本町に住し後行德に行き社職となる。俳家大系圖に見ゆ) 四友(茶道と云)と、四友亭での興行、

一、三吟歌仙之卷 同秋、春澄、似春との付合、

一、歌仙一卷 同夜、二葉子、紀子、卜尺との付合、

一、夢想(表八句だけ) 同七年春杉風等との付合、

一、百韻 同年秋、杉風との兩吟、

一、歌仙 同年冬、千春、信德との三吟。(以上一葉集に依る)

なほ右の連句の卷頭の發句だけを擧げて置かう。

發句と連句とが別人のやう

た純蕉風の句ではなく、矢張諧謔を主とした檀林風の句である。「鳥のとまりたる哉」などゝ、態と詞を無法に長らして持つてまはつたのが、即ち戯れた處で、秋の暮の淋しさを主眼として詠んだのではなく秋の暮には適はしい鳥が、とまつたこと哉とふざけたに過ぎぬ。『俳諧古選』に、芭蕉が若い時、檀林中に交遊してゐたが、一日忽ち此の句を唱へた處が、満座愕然として之を上座に延いた。間も無く一派を開いたとある（俳家奇人談にもある）が、眞僞は覺束ない。但し其の景氣が、何處かに寂し味があつて、後の蕉風の趣味に協うた處があるので、是から八九年後の『曠野』（元祿二年）に「鳥のとまりけり」と直して入集させたのであらう。之を蕉風の初聲だなど謂ひ噴ぐのは、固より當らぬ。此の句の脇として傳へられてゐる素堂の「鍬かたげ行く霧の遠里」（二弟準縄等）も、矢張幾分の諧謔味を有つた檀林臭の抜け切らぬ句であることは、よく味はうたら判るであらう。其の他の句も一句として洒落氣を呈びぬはない。たゞ中の「雪の朝」などが、其の氣を呈び乍らも、多分實境其のまゝで、前述の眞率味の克つた句と謂へる位なものである。「元日や思へば淋し秋の暮」（蛇之鮓）などや、寂しい味の句である。而して是等を何れも當時の連句に比べると、後者の才氣縦横なのと、餘程異うた感じを起さしめるのは、奇である。

凡そ其の道の異才と謂はれるには、特別に巧いといふ處が無ければならぬ。巧拙の境を脱するにしても、一度巧を通り抜けた上のことである。芭蕉の發句にも、蕉風時代のものでは、他人の追随を許さぬ高渾老蒼の趣は豊かにあつたが、其れ等は寧ろ彼の天性の發露として見るべきで、單に技倆といふ上か

年）の「夏の月御油より出でゝ赤阪や」（不卜向ヶ岡）同九年の「蜀魂招くか麥のむら尾花」（情風後雙六）同年の「山吹の露菜の花のかこち顔なるや」「花槿裸童のかざし哉」「夜竊に蟲は月下の栗を穿つ」「枯枝に烏のとまりたる哉秋の暮」「雪の朝ひとり干鱈を嚙み居たり」等（東日記）などがある。季吟の撰集に最も多く出てゐる處を見ても、季吟系の人であつたことと深く想像される。（年代は出板年を示す）

なほ『如意寶珠』（荻野安靜撰、寛文五―九成る）には「さみだれに御物遠や」等の五六句が出てゐる由（芭蕉庵春秋）であるが、此の書は未だ見ぬし、且中の句はいづれも前に引いたものゝみのやうであるから、略して置く。「五月雨は鶴の足短くなれり」（東日記）などは、可なり調子が變つてゐる。

右の内「夏の月」や「蜀魂」の句を、蕉風に近い句とし、特に「夏の月」を「枯枝に」と共に延寶年中の絶唱と説いてゐる者（内田氏桃青傳等）もあるが、如何かと思ふ。「夏の月」は、宵の間のみの短かい夏の月を東海道では驛間の最も短かい御油を出で赤阪に着く間なりと可笑しくいうたに過ぎぬらしい。又「蜀魂」も麥の穂を尾花に准らへ、人を招くのは尾花であるが、麥は時鳥を招くとて靡いてゐるのかと戯れたのであらう。さすれば、二句共矢張可笑味を主とした句である。二句の内寧ろ後者の方が却て風情が優れてゐるやうに思ふ。是等よりも、却て、「和歌の跡訪ふや出雲の八重霞」「梢よりあだに落ちけり蟬のから」などの方が、蕉風に近いやう思はれる。但し「和歌の跡」は傳來の確かな句かどうか判らぬ。

又「枯枝」は正風の句として、蕉門でも喧ましく議論されたものではあるが、是亦決して寂味を旨とし

○庭訓の往來誰が文庫より今朝の春
大裏雛人形天皇の御宇とかや

不卜亡母追悼

水ひけて跡とひたまへ道明寺
木を伐て本口見るや今日の月
雨の日や世間の秋を堺町
一時雨礫や降て小石川

一、江戸新道（言水）延寳六年

針立や肩に槌打つから衣

一、坂東太郎（才丸）延寳七年

今朝の雪根深を薗の枝折哉
○霜を着て衣かたしく捨子哉
盃や山路の菊と是を干す
蒼海の浪酒臭しけふの月

右の外寳七年の「忘れ草菜飯に摘まん年の暮」「草履の尻折りて歸らん山櫻」等（江戸之春）同八年（一說七

大比叡やしの字を引て一かすみ

龍宮もけふの鹽路や土用干

先しるや義竹が竹にはなの雪（江廣、宜竹）

またぬのに菜賣に來たか時鳥

五月雨や龍燈あくる番太郎

近江蚊屋汗やさゝ波夜の床

唐ひきや軒端の荻のとりちかへ（同、唐粔）

盃の下行菊や朽木ぼん

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風

行雲や犬の欠尿むらしくれ（江新、犬の逊ほえ）

霜を着て風を敷寝の捨子哉

富士の雪盧生が夢をつかせたり

成にけり成にけり迄年の暮

江戸廣小路（不卜） 延寶六年

（前の集にあるものは省く）

○江戸俳人悉く檀林風へ

○樸實味眞率味

去り、芭蕉も無論化せられて、朋友門弟等と共に之に趨つたのである。此の頃には、江戸檀林の大祖田代松意の放縦奇巧なる所謂「飛體」(歷代滑稽傳)が鼓吹され、其の風は、師の宗因を凌ぐばかりに流行した。延寶五年春の信章(山口素堂)との兩吟百韻の卷頭「梅の花俳諧國にさかん也(信章)こちとうづれも此時の春(桃青)」は、梅翁宗因の檀林風を謳歌したものであること言ふ迄も無い。桃青も嘗て宗因に面會したこともあると傳へられ、眞僞不明であるが、或は實であつたかも知れぬ。(前編參看)何れにもせよ、檀林風は磊落洒脫を宗とする新風であつたから、氣早で洒落好の江戸つ兒が、重苦しい、あまり氣の利かぬ古風を捨てゝ、皆輕快な新風に趨つたのは、尤もなことである。桃青と一座して檀林調を詠んだ信德も、信章も、皆古風の出であるが、流石に流行には敵はなかつたのであらう。延寶の初年頃の桃青の長連句も、前にもいふ如く、此の連句の異能兒に無かつた筈はなく、又一躍して信德信章等との付合のやうな、巧妙なものを爲り得る筈も無いと思ふのであるが、傳はつてゐぬ。なほ連句の例を擧げるに先だち、前に擧げた發句の句例後即ち延寶五年以後のもの數句を左に擧げて見よう。延寶五年頃から以後が桃青の純檀林風時代になるのである。發句での桃青は、此の時代になつても、さしたる出色な處も認めることは出來ぬ。たゞ樸實味眞率味といふやうな點だけは、當時から既に彼の一特色あつたやうに思はれるが、是とて別段際立つた處もなかつた。

六百番俳諧發句合(任口、季吟)延寶五年(前に引いたものは省く)

吉野郡見馴川
五月雨も瀬ふみ尋ぬ見馴川
時世粧（維舟） 寛文十二年
○五月雨に御物遠や月のかほ
耳無草 寛文中
夕貌の花に心やうかりひよん
續連珠（季吟） 延寶四年
我も神のひさうやあふく梅の花
雲を根に富士は杉なりの茂かな
けふの今宵寝る時もなき月見哉
見るに我もおれるばかりぞ女郎花
たかうなや雫もよかの篠の露

第三節 百韻時代（檀林風心醉期）

芭蕉の連句で、纒まつて遺つてゐるものは、延寶五年三十四歳以後のである。此の前々年には、檀林派の大宗匠の西山宗因が江戸に下り、『檀林十百韻』を興行するといふ勢なので、此の風は江戸を風靡し

風吹は尾ほそうなるや犬櫻

花は賤のめにも見えけり鬼口

降音も耳もすふなる梅の雨

五月雨に御物（音）や月の貌

しはしまもまつやほさゝきす千年

秋風の鑓戸の口やとかりこゑ

七夕のあはぬこゝろや雨中天

たんたすめ住は都ぞけふの月

影は天下のてる姫か月のかほ

荻の聲こや秋風の口うつし

月の鏡小春にみるや目正月

霜枯に咲は辛氣の花野哉

大和順禮（郡山人岡村正春）寛文十年

山邊郡宇治山

うち山や外様しらすの花盛

から記して置く迄である。なほもつと年代の近いものゝ中に手本もあつたであらうが、見當らなかつたので略して置く。

寛文延寶年間の宗房の句で、諸書に散見してゐるものも可なりある。左に擧げる所は、勝峰晋風氏の抄錄に、予の見たものも參酌し、前に引いた句と重複の句を除いたものである。沼波氏の『芭蕉全集』などに洩れたものもあるから、煩はしいが、揭げて置く。

佐夜の中山(重賴) 寛文四年

月ぞしるべこなたへいらせ旅の宿

續山井(季吟) 寛文七年

花の影に晴うつしろや朧月
盛なる梅にすで引風も哉
あち東風や面々さはき柳髮
餅雪をしら糸となす柳哉
春風にふき出し笑ふ花も哉
なつちかし其口たはへ花の風
糸櫻こやかへるさの足もつれ

○これらは連歌合 あとから入て 芭蕉の革新の 素材は闡明される

しい。左に季吟の『祇園奉納俳諧連歌合』(明暦二年)の中から、一例を引いて見よう。

左勝

夜明けてみつの朝ぢやと知る
月日星と鳴く鶯に目覺まして　静山

右

出雲鍬にて小田かへすらし
ぬるむ水に洗ふ手な土足なつち　季吟

(○季吟の判詞)左の前句、みつの朝といへるは、彼の聖廟の御詞に、春之暮月、月之三朝とのたまはせたる心にて、上己などに侍らんを、三光を鳴く鶯の聲に取りなされたるこそ、誠に目の覺むる心地すれ。右は拙が句にて侍る也。出雲の國つ神は、手摩乳脚摩乳と申侍るべきを、怪しきやうに申かくせし事、我乍ら安らかにも思ひなされず侍れば、三光の光に立ならぶべくもいとかたはらいたし。

『貝おほひ』の判詞は、流行唄などを扱うたゞけに、くだけ且洒落れてゐるが、體裁が酷似してゐる。句中の語を借り來つて、直に之を優劣の評に應用するやり方など、全く同じい。季吟のゝ明暦二年から、宗房のゝ寛文十二年迄は、十七年間も隔つてゐるが、それで斯く似てゐる處を見ると、宗房は斯樣な方面でも季吟の感化を受けたものらしく思はれるが、如何であらうか。右はたゞ偶ゝ似たものが見當つた

やうも無し。右の女夫鹿、委しく論せんも毛むづかしければ、あぶなき筒先に遁げのき侍りぬ。

句よりも判詞

此の頃の句合としては、相應に面白く出來てゐるが、發句は寧ろ芭蕉本來の不得意のものであつたから無論太したことはない。併し又之を一向に詰らぬやうに謂ふのも、後の蕉風を見た頭で見るからである判詞に至つては、更に面白い。紫のしなもの云々など、源語をもじつた外に、何か意味を有たせてあるらしい。打出されたる玉の句とか、火繩の批言とかの言ひ方は、此の頃の判詞の慣用法である。「鎌の刄金も」云々「毛むづかしければ、あぶなき筒先」云々の如く、句中の語を其のまゝ用ひて評語に使ふやり方は、季吟などから學んだらしい(後にいふ)が、其れが中々手際よく行つてゐる。句合としては、當時の都會の大宗匠でも、恐らくば是程興味ある氣の利いたものを出すことは、さう容易くなかつたらうと思ふ。一體芭蕉の蕉風以前の判詞は、隨分凝つてゐて、大抵は、句よりも寧ろ此の方が面白い。右の判詞も、恰も巧みな俳文を讀むやうな趣がある。評語中に「我も昔は衆道好きのひが耳にや」などゝ、所謂隅に置けぬことも言ひ散らしてゐる。

判詞の手本

さて又是等の體裁や判詞の手本らしいものが、是以前にあつたかのといふに、それは確かにあつたものと思ふ。如何に芭蕉の異才でも、始めての撰集に獨創を出すなどは、あり得ぬことであらう。斯く考へつゝ、其の師事したと傳へられる季吟のものなど讀んで見ると、それらしい處が彼是ある。尤も當時の判詞は、大概は多少是等と類似してゐるが、宗房季吟の關係から想ふと、宗房は季吟を學んだものら

九番　左勝

鎌で切る音やちよい／＼花の莖　露節

右

きても見よ甚べが羽折花ごろも　宗房

(○判詞)左花の枝をちよい／＼と譽めたる作意は、誠に俳諧の親々ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽折は、着て見て我おりやといふ心なれども、一句の仕立も惡く、染出す言葉の色もよろしからず見ゆるは、愚意の手つゝとも申すべし。其上左の鎌の刄金も堅さうなれば、甚兵衛が頭も危なくて、負に定め侍りき。

二十番　左勝

鹿をしもうたばや小野が手鐵炮　政輝

右

女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むづかし　宗房

(○判詞)左の發句小野といふより、鹿とつゞけられ侍るは、かの紫のしなもの光るお源の物語にも、小野に鹿の景色を書きつらね侍りしより、尤よく取合されたるなるべし。其上をのが手鐵炮といふを取なされたる、鐵砲の寸口かしこく打出されたる、玉の句ともいふべければ、火繩の批言をいふべき

る。同五年の『六百番俳諧發句合』（後に引く）頃から、だん〴〵檀林風に近づいて行つてゐるやうである同集中の「門松や思へば一夜三十年」「猫の妻へつゐの崩れより通ひけり」「あすは粽難波の枯野夢なれや」「秋來にけり耳を尋ねて枕の風」「今宵月磨出せ人見出雪守」などは、檀林調にかぶれたもので、又「梢よりあだに落ちけり蟬の殼」「白炭や彼うら島が老のはこ」などは、多少の寂味を以て句意に興趣を添へたもので、從來のものと差ゝ異うた處がある。是からだん〴〵と檀林に深入して、「あら何とも無や昨日は過ぎて河豚汁」「内裏雛人形天皇の御宇かとよ」といふ調子となり、天和の『虛栗』に至つて極端な奇調となり、それを頂點として次第に平穩の調に復り、貞享に入つて遂に蕉風に改まつたのである。古風時代は斯く平凡な時代であつたが、併し芭蕉自撰の一書があつて、一寸面白いものであることが、聊か寂寞を破つてゐる。芭蕉の自撰と認むべき句集は、實はたゞ此の一書だけしか無かつたのである。

芭蕉の古風時代の撰集としての『貝おほひ』（前編の其の項も參看）は、當時の芭蕉を髣髴すべき最も重要な資料である。此の外には、多分無かつたのであらう。此の集の成つたのは、宗房が江戸に下つた寬文十二年の正月で又句は卅番の句合で、序も判詞も宗房である。序に「小六ついたる竹の杖、節々多き小唄にすがり、或は流行詞の一癖あるを種として、言ひ捨てられし句どもを集め」とあつて、句は何れも當時の流行唄や流行詞の裁入れで出來てゐるが、伊賀上野あたりの田舍の編として、可なり氣の利いたもので、又判詞も中々振つてゐる。

通じて略ぼ檀林風を模倣し、天和に入つて漸く檀林風に飽らぬやうな傾向をあらはして、所謂虚栗調となり、貞享元年『冬之日』を出した頃から次第に蕉風に進み、元祿に入つて始めて醇乎たる蕉風となり、それから一二變して世を去つたのである。

芭蕉の初期の發句は、前編にも擧げたものを一見すれだ判るやうに、何の長所も特色も殆ど全く認めることは出來ぬ。既にいうたやうに、付合では早くから其の異能を露はしたのであらうと想はれるのであるが、纏まつて傳はつてゐるのは、江戸に出てから四五年以後の作で、其の前の作風はよく判らぬ。それ故付合の方での初期の技倆に就いては、多くを謂ふことは出來ぬ。たゞ偶〻傳はつてゐる斷片から推すと、才氣は相當に露はれてゐたやうである。茲では發句だけに就いて少しく謂うて置かう。

寛文から延寶の初年にかけての芭蕉の俳風は、全く貞德風であつた。「花に明ぬなげきや我が歌袋」「霰まじる帷子雪はこもん哉」などは貞德そつくりである。「姥櫻さくや老後の思ひ出」「うかれけり人や初瀬の山櫻」「夕顔に見とるゝや身もうかりひよん」「植うること子のごとくせよ兒櫻」など、皆純然たる古風で、而も古風中でもあまり氣の利かぬものである。こんな稚拙な句ばかり詠んでゐた宗房が、どうしてあのやうな俳聖になり得たのかと、不思議に思はれる程である。「岩躑躅染むる泪やほとゝぎす」「寢たる萩や容顔無禮花の顔」「時雨をやもどかしがりて松の雪」「しをれふすや世はさかさまの雪の竹」などは、意味だけは先づ纏まつてゐるが、さして面白うもをかしくもない。是等は皆延寶四年以前の作であ

芭蕉の手にかゝつたかどうかは、讀んで見ると大概は見當がつくやうである。例へば『春之日』などが其の好例で、是などは、芭蕉手が深い處迄入つてゐることは、斷言して可いと思ふ。（本編春之日の項參看）なほ是等のことは、本編を讀んで行く間に自然に合點されるであらう。

連句は漢詩で謂へば律體などに似た處がある。律體も中々拘束があつて、才氣に任せて詠み散らすといふやうな譯には行かぬ。李白のやうな人が此の體を嫌ひもし、又試みても拙であつて、杜甫のやうな人がよく之に適してゐたのは、尤もである。凡そ其の道の天才は、うるさい筈の拘束を少しもうるさく感ぜず、頭が徹底的にそれに精熟し切つて、語を出せば自づから合するやうになるのである。否拘束ではなくて、技の精が自づから格法と一致するので、格法が難かしければ難かしい程、神技が愈〻發揮されるのである。杜甫の律體に於ける、芭蕉の付合に於ける、皆さうである。蕪村の才は李白に似て、付合には適さなかつた。世には天才を皆放縱無規律な一氣呵成的の方にばかり求めようとする者もあるが、粗大な處に天才を發揮する者もあり、精緻な處に發揮する者もあり、各〻其の才に從ふものである。孔子は細かくて孟子は麁かつたとて、孟子は天才で、孔子は凡才だといふことは出來ぬ。拘束を厭ふのみが天才であるといふやうな考に、改めねばならぬ。

第二節　貝おほひ時代（古風模倣期）

芭蕉の俳風は、始め古風から入つて、寛文年間は大抵此の風を奉じ、江戸に出でからは、延寳年間を

右の條々の外に、なほ注意すべき事一二をいうて置かう。芭蕉が連座しての門生達との付合は、句々すべてが、一々芭蕉の修正を經たものと見ねばならぬことなども、心得て置かねばならぬ。是は、同人の作でも、芭蕉の連座したものだけは際立つて秀でゝゐるのに、さうでないものは甚だしく拙劣で、全く別人の作のやうに見える處から推してもよく判るのである。今でも付合は、句々大抵一座の宗匠の改修を經るのが例で、改修の上に執筆が記すので、餘程技の進んだ人でなくては、自分の試みた句が其のまゝ通ることは稀である。月並宗匠の付合ですらさうである。是は、付合は、發句のやうに單純無造作には行かぬ爲で、詩才の外に深い練習や種々の心得が要るからである。『去來抄』などに、去來の句を芭蕉が直した例を彼是擧げてあるが、悉く確かでないとしても、實際あんな風であつたらうと想ふ。付合に異能を有つた凝り性の芭蕉が、門下の不精練な句を、其のまゝ通す筈がない。高弟達の句でも、芭蕉が一座した時のと、さうでないのとが、如何に異ふかは、『初懐紙』と、其等の人々の獨吟などゝを讀み比べたゞけでもよく判る。但し芭蕉が先輩や同輩並の人々と付合した時には、正か直す譯に行く筈がないから、卷を通じて其の特色の著く現はれてゐぬ作が多い。隨つて中の芭蕉の句も、平凡なのが多い。是が亦芭蕉がすべて相手次第であつた處を遺憾無く語つてゐるのである。芭蕉の改修の事は、なほ又芭蕉歿後の付合を見渡してもよく判る。歿後の蕉門の一流の人々の付合でも、芭蕉連座の作を讀んだ眼で見ると、すべてが似ても似つかぬものばかりである。それ故芭蕉生前のもので、芭蕉の連座せぬものでも

旅かせぎの藝人を留めて、斷腸の一曲、名月に對つて無限の哀愁を遣る關の遊女、吉原の土堤に子の日の松引く傾國や、さては宿場あたりの假の宿りの煤びた壁などに、都で別れた戀人の名を落書した田舍渡らひの浮れ女、とりぐ〵にあはれならぬはない。中にも、此の頃室に新たに身を賣られた浪人などの娘でもあらう、古里への無事の便りの細々と認めた一封を、賴み得た鏡磨、何等の幸便ぞ。「星祭る髮は白髮にかゝる迄」(曾良)に「集に遊女の名をとむる月」などは「戀死なば」の遊女奥州の句を收めた『猿蓑』を想出させる。前に出した「襟に高尾」なども、豪華な元祿振が遺憾無く現はれてゐる。「髮おろす侍從が娘衰へて」に「野の宮の嵐妓王寺の鐘」などは、何と無く白拍子の身の果などをも偲ばせる。「月夜々々に明けわたる月」に「花薄あまり招けばうら枯れて」なども、仇し仇波の身の上に適はしい句であらう。道樂者の名を博した其角にさへ、遊女の情味を是程によく描き出した句は稀であつた。而も毫末も卑俗の氣を混へぬ處、專門家とも謂ふべき西鶴近松をさへ三歎せしめずには措かぬであらう。是等の點に於いても、予は從來の芭蕉觀と異なつた觀方をする者である。少女の痴嬌の態を寫した句の、例へば「鶯起きよ紙燭ともして」とか「行燈をへだてゝ顏を隱しあひ」とか「手枕に細き腕をさし入れて」とか「かゝへし琴の膝や重たき」とか「きぬぐ〵やあまりか細くあてやかに」の類は、連句では特に芭蕉の獨擅の一で、あるものは西鶴の手段に酷似し、あるものは近松の筆致に髣髴してゐる。是等を見たならば、芭蕉一人を拔け者にしようとしても、到底出來ぬではないか。

馬に出ぬ日は内で戀する」

などは、宛ら近松の世話物の中にでも出て來さうな場面を想像せしめられる。西鶴と近松とは、共通の點もいろ〳〵あり、異うた點もいろ〳〵あるが、異うた點の一をいへば、西鶴のは鋭利で峻烈で痛快で徹底的であり、近松は、常識的で、ふつくらとして何處と無く暖か味があり、隨つて隱約縹緲の處があつた。芭蕉は、其の爲人も好尚も、どちらかと謂へば近松に近かつたことは無論であらうが、其の爲か作を通じての趣味も、寧ろ近松に近かつたやうに思はれる。元祿文學の花形として幅を利かせてゐた遊女も、芭蕉の連句中には少なからず出て來てゐる。

藝者(〇旅藝人か)をさむる明月の關　桐葉
面白の遊女の秋の夜すがらや」
餅二かさねえにし添ふ帶　擧白
吉原の土手に子の日の松引かん」
遊女四五人田舍わたらひ　曾良
落書に戀しき君が名もありて」
此頃室(〇室之津)に身を賣られたる　路通
文書いて賴む便りの鏡磨」

湯殿は竹の簀の子わびしき」

主として戀の句のみを擧げたが、是等は西鶴物を讀む時のやうな興趣を感ぜしめられる。

細き筋より戀つのりつゝ　曲水
物思ふ身に物食へとせつかれて」　史邦
夜遊びの更けて床取る坊主共　荷兮
百里其のまゝ船のきぬぎぬ」　越人
雪の狂呉の國の笠珍らしく　（荷兮）
襟に高尾が片袖を解く」　（越人）
あや憎に患ふ妹が夕眺め
あの雲は誰が涙包むぞ」　（越人）
萩の墨繪の縮緬は誰　昝良
物言へば小笠に顔を押入るゝ」　凡兆
隣をかりて車引き込む　（凡兆）
うき人を枳殼垣よりくゞらせん」　（凡兆）
上置の干菜きざむもうはの空　野坡

○実や月の句
関口千鋼の通り町
○巻三二五

西鶴や近松が髣髴せしめる句

聊か返答に困るが、試みに近松や西鶴に於いて最も強く味はれ得るやうな趣味の句を少しばかり引いて、三家に共通で、他の時代に比べて特に濃厚な色彩の現はれてゐる處を髣髴させて見ようと思ふ。

我が宿は鷺に宿かすあたりにて　野水
髮生やする間をしのぶ身の程」
稲妻の光りて來れば筆投げて　一有
野中の別れ片袖をもぐ」
さまざまの香薫りけり月の前　越人
人一代の戀を問ふ秋」
分別無しに戀をしかかる　去來
蓬生に面白げつく伏見脇」
更くる夜の壁つき破る鹿の角　曾良
島の夜伽の泣き伏せる月」
より聟は假諸大夫に粧ひて　濁子
浮名は辰の市で戀する」
立かゝり屏風をたふす女子共　凡兆

門人達は鮒の泥に醉うたる如し

それが連句になると、何人のも全く比べ物にならぬ程に、甚だしい逕庭があつた。既にいうた如く、芭蕉は其の眞摯な性格からも、當時は半道樂と謂うても可いやうな俳諧などを職業とすることを、始めから喜んだのではなく、自分に斯く特別の天品があり、天品があるから面白くもなるといふやうな譯で、一方には俗事に疎い處もあつたので、終に俳人になつたのであらう。『俳諧問答』にも、芭蕉の付句に對し、門人達は「たゞ予(○芭蕉)より言ひ出せば、肝をつぶしたる顏のみにて、善惡の差別もなく、鮒の泥に醉うたる如し」といふ風であつたとあるが、是が實際の有樣であつたらう。文學者としての芭蕉の本色は寧ろ連句に在つたのである。此の點に於いて、予は從來の芭蕉論者と全く意見を異にしてゐる。子規氏なども、流石に、芭蕉は連俳の方が巧かつたとの說だけは認めてゐたやうでもあるが、其れが文學として價値が無いと主張するに至つて、氏が實は連俳の性質をどう解してゐたのかと、甚だ怪訝に堪へないのである。

元祿文學と芭蕉

芭蕉も亦近松や西鶴と同じく、元祿文學の代表者で、芭蕉一人が時代と緣遠い異境を辿つてゐたのではないといふことも、予の持說の一である。芭蕉の發句ばかり見てゐる人には、それが容易に知れる筈はないが、連句の方を調べて見た人には、是も氣付かずには居れぬであらう。芭蕉の連句は、趣味が豐富で多方面であるが、其の一面には、元祿文學の時代的色調がよく現はれてゐるのである。是等も從來論及した者の殆ど無いのも、不思議の一である。然らば元祿文學の特色とは何んなものかと問はれると

俳諧に古人無し

却て蕪村の方が優れてゐる。蕉門でも、一二の高弟は、句作の技倆に於いてさして芭蕉に劣つてゐなかつたのである。然るに一度目を芭蕉の連句に轉ずると、其の趣味の複雜多樣なる、其の表現の巧妙を極めたる、蕪村の發句すらも遠く及ばなかつた所、況や他の俳人をや。芭蕉の發句は、往々にして稚拙の趣を免がれ得なかつたが、連句の芭蕉は、是と殆ど全く別人の感を起さしめる。繰返しいふ如く、芭蕉の連句の技倆は、全く天品で、常人の到底企て及ぶことの出來ぬ處があつたのである。詩人として優れた性格を有つてゐたことは、言ふ迄も無いが、此の性格の外に、特別に連句に於いて、他の俳人の輩が如何に學んでも努めても、眞似すら容易でない非凡な天禀を具へてゐたのである。芭蕉は「俳諧に古人無し」(俳諧は歷史的には猶ほ未熟であるから、別段極則として法るべき古人がある譯でないとの意と思はれる)といふことを、每に言うてゐた由、支考の『葛之松原』(芭蕉生前の元祿五年の編といふが、如何かとも思ふ)に見えてゐるが、(俳諧十論第一にも見えてゐる)或は實際であつたかも知れぬ。如何に溫恭にして謙虛な芭蕉でも、俳諧では古人の毫も畏るゝに足らぬ位のことは、私かに思ひもし、又親しい門人などには言ひもしたであらう。又「發句は門人の中、予に劣らぬ句する人多し。俳諧(○連句)に於ては、老翁が骨髓」であるとも、每に言うてゐたともある。(宇陀之法師)是等も本當であつたらうと思ふ。實際其の通りであつたので、發句でも、流石に芭蕉のは、一種の及び難い高致はあつたが、單に其の句作の技倆から謂へば、芭蕉だけが飛び離れて秀でゝゐたといふ程ではなかつたのである。然るに

かつたのである。之に反し平句で自己を詠むことは、稀有例外を除けば、先づは絶無であつた。

脇句の性質と叙景

脇句は發句に對して往々挨拶の意に詠まれるので、發句に准ぜられる塲合も多い。即ち脇句は謂はゞ准發句の地位に在るので、季も發句に合せるのが通則である。それ故脇句だけは、通常の連句（即ち平句）と等し並には取扱ふことが出來ぬのである。それに就いて一言して置き度いのは、芭蕉の脇句は、抒情風よりも寧ろ叙景風の句の多いことである。又芭蕉自身の語として、脇句は景氣（即ち叙景）が可いと云うたことが傳はつてゐる。（初懷紙註釋の例の項參看）脇句は發句から平句に移る中間の地位に在るので、發句の意に應じた叙景で次の純所見體の句を起すのが便利であるから、自然にさうなつたのであらう。子規氏が芭蕉は叙景に疎かであつたやうに論じたのも、發句以外に眼を着けなつた同氏としては怪むに足らぬが、實は脇句に於いて芭蕉の叙景の技倆は殆ど遺憾無く現はされてゐるのである。發句に於いても、芭蕉は晩年に叙景句に着眼してゐたと見え『不玉獨吟歌仙芭蕉評』に、不玉の「坊主子やあたまうたるゝ初霰」を評して「近年の作心情（○即ち主觀體）專に用ふる故句體重し。左候へば、愚句體多くは景氣斗を用候。是等も愚意相應に、感美いたし候」と云うてゐる。其の他にも、是と似た意見の表はされたものもある。揚句も亦准發句の塲合が少なくない。

芭蕉の本色は寧ろ連俳に在る

芭蕉が蕉風の一派を創めて、發句でも一大法門を開いたことは、固より其の大才の致す所であるが、發句では、後の蕪村の如き、確かに之と拮抗して毫も遜色無きのみならず、趣味の豐富な點から見ると

戀の句が好例

どうか、確かとも謂ひ難いが）斯く芭蕉の發句は、其の直接經驗の埒外には出ぬので、此の事はなほ其の戀の句が最も好例である。芭蕉は連句では、戀の句が特に優れてゐた（芭蕉翁附合集評註下）と稱されてゐた程であるのに、發句では戀の句は僅々數句しか無い。それさへも、「紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ」の昔物語を詠んだらしいものか、「行末は誰が肌ふれん紅の花」の畫讃か題詠らしいもので、是等の外は「麥飯にやつるゝ戀か猫の妻」「猫の戀やむ時閨の朧月」の類の猫の戀のみである。而も此の內、「紅梅や」の句は、果して芭蕉のかどうか確かでなく、又「行末は」も、どうかはつきりせぬ句である。（此の句の入つた眞蹟の書簡が、某家に傳はつてゐるといふが、信ずべきものかどうか。紅梅の句も此の句も芭蕉の發句とすれば、至つて珍らしい句である）芭蕉が如何に發句の上では自己の直接經驗に忠實であつたかは、是のみを以てしても眞によく判る。芭蕉は戀愛生活に、若し經驗があつたとしても、多分それは藤堂家を辭した時に終つたものと見るべきであることは、前編に述べた通りである。然るに連句では、殆どあらゆる種類の戀を取扱うてゐる。

能見所見

僧似雲が、其の師武者小路實陰からの聞書を記した『詞林拾葉』に、能見所見（佛敎の用語を假り用ひたもの）の語を用ひ「能見とは、山賤の事を詠むに此方より能く見候たる所を詠むなり。所見とは、其の山賤に直になりたる心にて見らるゝなり」と云うてゐるが、便利な語である。自己以外の事でも、此の所謂「所見」で詠む例は、和歌にも多かつたのである。然るに芭蕉は、發句では殆ど全く「所見」を詠まな

その一例

る扇哉」を評して、「此句は名將の作にして、句主の手柄は少しも無し」（俳諧芭蕉談にも見えてゐる）と云うてゐるのも、此の意であらう。此の許六の說を引いて、去來も「昔の取樣に此の品あり。今は甚だ嫌ひ侍る」と云うてゐる（湖東問答）のは、「昔は斯樣な材料の取り方もあつたが、今では甚だしく嫌ふ」との意であらう。又其角の『雜談集』に信德の「鼻紙を扇に使ふ女哉」を評して「是は盃乾し兼ぬるなどいふ句に付くる句也。もと付合の道具（○材料）なるを、珍らしと思へるのは、未練なるべし」と云うてゐるのも、意の歸する所は同じことである。すなはち、蕉門では、發句は自己の經驗なり境涯なりの、一言でいへば自己分內を直接に表現するのが通則で、連句は之に反してゐたのである。されば、發句の主我的、理想的なのに對し、連句は沒我的、沒理想的であつた。（主觀的客觀的の語はよく當らぬ）理想的であるのは、自己の鑑賞に入つた境地を其のまゝに語るからである。更に判り易くいへば主我的の句は「是は自分の賞翫する景なり趣なりである」との意味を、自づから語つてゐるからである。

それで例へば蕪村の句に「追剝を弟子に剃りけり秋の旅」とあつたとて、蕪村の經驗と關係の有無は判らぬ（多分無關係であらう）が、芭蕉の句に「剝がれたる身には砧の響かな」とあれば、是を芭蕉が實際追剝に遭うての句と見ねばならぬので、句集にも「近江路を通り侍る頃、日野山の邊にて、胡摩といふ者に、上の衣を取られて」と前書してある。（此の前書は、芭蕉の自序であるかどうか疑はしいが、此の傳說は俳諧世說、隨齋諧話等に見えて、又此の句から察して實らしい。但し此の句が果して芭蕉のであるか

蕉門の發句連句の關係

發句は身上を出づべからず

は付句として價値が無いとしてゐた。それ故此の點のみから謂うても、蕉風の連句の文學としての價値を認めねばならぬのである。芭蕉の連句を一句づゝ引離して見たら、其の材料や趣味が、如何に蕪村等の發句に近かつたかを、何人も感じ得るであらう。其れは其の筈で、蕪村は發句と連句との間に、材料の差別を全然置かなかつたからである。

芭蕉の發句と連句とが、材料の取り方が全く異うてゐたことは、芭蕉の俳諧を少しく注意して見る者には、直に氣付く筈である。然るに此のことを是迄明白に說いた者の至つて希なのは、寧ろ不思議に感ぜざるを得ぬ。芭蕉の發句は、自己を直接に表現したもので、連句の方は、其の自然の性質上、自己を直接に露出せぬことを原則としてゐたのである。此の事を蕉門でもあまり論ぜられなかつたのは、自明の事として、論ずる迄も無かつたからかも知れぬ。『去來抄』七三六の

靈祭生れぬ先の父戀し　甘泉

去來曰、吾子は出生已前に父を喪し給ふや。甘泉曰、去々年逆葬し侍る。去來曰、然れば是は他人の句なり。吾子に對してをかしからず。凡そ發句は、吟ずるに、意は聖賢佛神の境にも遊ぶべし。處は禁裏仙洞の噂も申すべし。乞食桑門の上にも及ぶべし。句に於ては、身上を出づべからず。身上を吟ぜば、惡しき害を求め侍らん。

とあるなどが、先づ此の事に說き及んだ適例の一である。又同じく許六等の『篇突』に、「名將の橋の反見

佐々氏の説

時か色づく唐辛子、如斯にて、其比の發句ともなり侍らんか」と云うてゐる。是は連俳の性質をよく看拔き得た說で、實に此の通りである。すなはち、發句の取合せの味を其のまゝ句と句との取合せに移したのが連句で、趣味の上では全然同一なのである。なほ是と同じやうな說明を、故佐々醒雪氏も、其の「元祿の蕉風」（俳諧註釋集上）に試みてゐる。卽ち、例へば「山里は萬歲遲し、梅の花。」の上五七と下五との關係は附句の二句間の關係と同樣に、其の匂ひ、響き、位に於いて相通うてゐるので、若し是を附合の形に改めると、「この頃は垣根の梅の盛りにて」「萬葉遲し甲斐の山里」とでもすれば、其の儘匂ひ附の附句となる。是に至つては、發句も附句も全然同趣味となるといふのである。此の說は或は前に引いた積翠園の議論などから出たのかも知れぬが、醒雪氏は特に連俳の研究を相應にした人とて、流石に其の性質をよく見てゐる。是れ位のことが、どうして子規氏などに判らなかつたのか、寧ろ不思議のやうであるが、實際はさう無造作には行かなかつたものと見える。實は是だけの單純な事をさへ、よく合點してゐた人が、甚だ少なかつたので、子規氏なども、偶〻其の一人であつたに過ぎぬのである。

連句の各句單獨の興味

なほ又、芭蕉の連句が、文學として價値の重い點は、各句を一句づゝ引離して見ても、單獨に纏つた興味のあることである。是れ亦蕉風の特色で、芭蕉以前の連句には無かつたのである。連句の興味の焦點は、二句の關係から起る所謂「取合せ」に在るのであるから、一句だけを截り取つて味ふ時は、甚だしく興味を減ずるのであるが、併し一句だけでも、一と節あつて、興味が相應に豐かでなくては、蕉風で

同派の發句連句は常に相應してゐた

加はるので。單純に眼で見たまゝを寫生したものとは趣味が一致せぬ場合が多い。子規氏などが同感し得なかつたのも、一は其處に在つたものと思ふ。抑〻同一人又は同一派の、同時代の發句と連句とは、常に同じ行き方をするのが例であつた。例へば、古風の連句は古風の發句と相應し、檀林風の連句は檀林風の發句と相應し、芭蕉の連句は芭蕉の發句と相應してゐたのである。此の事は古人も既に明白に說いてゐる。積翠園の『俳諧或問』に、或人の、元祿の附合の事を問うたのに對し、

積翠の說

> （〇前略）先づ附合の面白き處を知るべし。發句に言葉の巧みを面白しと思ふ心にては、元祿の附合は面白からず。延寶の頃發句に言語の作（〇詞の上の戲謔）を好み侍れば、附方も言語の作也。延寶も元祿も、附句は二句にて、其世々の發句の趣意になり侍る。是れ二人して吟出したる連歌の、歌一首となり侍ると同じ。

と答へてゐる。此の事は、發句と連句との兩方を並べ味はうた人には、直に知れる筈であるが、連句を排斥する人々には、是が解らなかつたものと見える。附句の二句の關係は、發句の「取合せ」の關係と全く同じいので、たゞ前者は關係が複雜なだけである。それ故同書の、右の文の續きにも、「例へば　延寶八年の八百韻に、螢の火の粉受けて飛ぶ風、やゝ起きい〳〵やい手枕野。とあるを發句に直せば、手枕野起きよ螢の火の粉飛ぶ。斯の如くにて、其比の發句とも成り侍らんか。（〇中略）又元祿の猿蓑に、戸障子もむしろ圍ひの賣屋敷、曲翠。天井まもり何時か色づく、芭蕉。とあるを、發句にせば、賣家や何

子規氏の俳風と蕉風

らかと謂へば、天明風に近いやうであつた。（氏の句は、學生が課題にでも科せられて、作つて見たといふやうなのが多くて、實は何風と謂うて可いのか、一寸當惑するのであるが）斯樣な點と、一には、新風を拓く爲に唱導宣傳した自分の說を、其のまゝ古人の評論に應用した爲に、偏したり謬まつたりの議論が多くなつたのであらう。斯ういふ行き方は、得て公平を缺き易いものである。子規氏は、新派を興した點から謂へば、大功績者であらうが、古人を傳へて不親切であつたといふやうなことで、後世では、いろ〳〵と議論されることであらう。

連俳の文學的價値

先づ連俳が果して文學として價値の無いものかどうかを論じて見よう。子規氏などの議論から得た迷想に囚へられずに、虛心平氣に考へて貰ひ度い。一度蕉風連句の性質を了解したならば、子規氏などの說が、如何に空疎な、淺薄なものであるかに氣付くであらう。それが判らぬやうならば、元祿の俳句の興味にも到底觸れ得まいと思ふ。何となれば、兩者は全く同一趣味から出たものだからである。以下少しく其れに就いていはう。

取合せと連句

既に是迄も多くの人々に依つて說かれたやうに、元祿俳諧の興味の焦點は、所謂「取り合せ」の處にあつたのである。元祿の連句、特に蕉風では、此の「取り合せ」の趣味の一層複雜に且微妙になつたものに過ぎぬ。然るに子規氏などの最も喜んだものは、此の趣味とはやゝ離れた純客觀趣味の勝つた直寫的又は直叙的な天明風で、且氏自身の句も、寫生風なのが多い。「取合せ」には主觀的要素と興味とが多分に

大部分は不親切な偏見

る功績を遺した人であることは、何人も異論のあらう筈はない。又文學上の常識にも富み、議論も達者で蕪村に關する評論なども、大體に首肯し得るものが多いやうに思ふ。尤も氏の俳論の根據は、其の後著るく進歩してゐる現今の思想から見ると、幼稚で、淺薄で、さ程に感服し難いものであらうが、當時に在つては、中々立派な議論であつた。然るに其れが芭蕉を論ずる段になると、大部分は、不親切な、寧ろ無理解な、時としては誤謬と偏執とで固めたやうなものゝみであつた。子規氏は、芭蕉の連俳を文學として價値が無いとして斥けてゐるが、實は自身で眞面目に芭蕉の連俳を讀んで見たのかどうかさへ疑はしい。氏の蕉風の連句を論じたもの（獺祭書屋俳話等）を見ると、檀林風と蕉風との區別をさへ、明らかにしてゐたか如何かを疑はしめるやうな處がある。氏の得意であるべき芭蕉の發句に就いての評論さへ、予等には服し兼ねるものが多い。例へば芭蕉の特色を「雄壯」に在りとしてゐるなどは、芭蕉の特色を確かに捉へ得てはゐるが、亦甚だしく物足らぬ說である。芭蕉が最も努めた所は「細味」であることを先づ考の中に置かねばならぬ。氏の自筆の草稿を摹刻した『行脚俳人芭蕉』などは、字だけは上手に書いてあるが、芭蕉傳としては、あり觸れた俗傳を、誤謬と併せて並べた以上に、研究らしい點は殆ど認め難いやうである。一は氏の趣味嗜好が、蕪村などに近かつたので、自然芭蕉とは疎隔した處があつた爲かも知れぬ。尤も氏の自から詠んだ句中、是が天明調をよく學び得たものだなどゝて示した句を見ると、其れでも蕪村に似てゐるのつもりなのかと、聊か訝しく思はれる處も無いではないが、强ひてどち

されてゐるもの程批評や解釋が一定せずに、世俗の人々に對して鎖された神祕の部分を豐かに保持してゐる。世俗の人々は、之を揣摩し臆測しつゝ、其の周圍をぐる〳〵回つて、我こそは其の眞意眞味に觸れ得たりと信じ、喋々し囂々しつゝ喧噪を縱まにしてゐるが、何人か果して之に觸れ得たりとすべき。予の愛讀するファウストなどは、十人は十人乍ら皆其の歸趣に就いての解釋を異にするといふことである。予の愛讀する杜詩の如きも、最傑作と謂はるゝ秋興八首など、眞意は容易に解し得ぬ。結局は判らぬ永遠の神祕と謂ふより仕方がないやうである。判らぬものを何で傑作と決めるのか。他無し、何人も認めずに居れぬ普遍性を有するからである。是れ予が、藝術は普遍性と共に永遠の孤獨性を有すと謂ふ所以である。

芭蕉の發句も判りにくいのが可なり多いが、連句に至つては、更に判りにくい。嚴密に言はれると、是も結局判らぬと斷めるより致方がない。併し亦感知し得らるゝ一面もある。吾人は此の感知し得らるゝ一面を辿つて評論を進めて行くの外はない。評論も亦一種の創作であるとの說は、此の塲合に最もよく適るであらう。普遍の一面を便つて、永遠の神祕、永遠の孤獨の周圍を、恰も螺線錐の目を匍匐ひつゝ上る蟻のやうに、ぐる〳〵回り乍ら、永遠に向上の一路を躋るのを、吾人の任務とする外はない。

正岡子規氏は、最早故人であるが、其の文學史上の地位に就いては、なほ十分に論じ盡されてない。それを今予が敢て彼是議論するのは、あまり面白いと思はぬが、芭蕉を說くにつけて、已むを得ず少しくいうて置かねばならぬ。子規氏は所謂新派の首唱者として、俳句改革者として、俳論家として、大な

藝術の孤獨性神祕性

後編　芭蕉の俳風及び其の變遷

(文學者としての芭蕉)

第一節　蕉風の特色

此の一節は、芭蕉の俳歷を一通り叙し了つてからにするのが順序であるが、又是を知つて置かぬでは俳歷の方が解しにくいかも知れぬ虞れもあるので、其の豫備知識として、必要であらうと思はれる點だけを、前にまはして略叙することにしたのである。

文章千古事、得失寸心知。藝術は一面に於いて普遍性を有すると共に、他面に於いては永遠の孤獨性を保つてゐる。是は人格や道德に於いても同樣であるとも謂ひ得ようが、藝術に於いては、それが特に著るい。孔子は莫ニ我知一也夫と歎じてゐるが、又德不レ孤必有レ隣と慰めてゐる。人格や道德は、割合に世人に認められ易い處がある。德の在る處には自づから人が聚まる。然るに藝術は、優れたもの程却て其の時代に容れられぬやうな傾向を有つてゐる。昔から價値の高い藝術が、直に「識者」から認められた例よりも、認められなかつた例の方が多いであらう。併し時代を經るに隨つて、漸々廣く認められて來るのも亦世間の常態である。是れ即ち優れたもの程大なる普遍性を有するからでなければならぬ。而も此の普遍性が大き過ぎる程、俗人に容易に認められ難いやうである。且他の一面を見ると、價値の高いと

した變化はなかつたやうである。尤も自分の見たものは、さう多くはないから、精確なことは謂へぬ。

前に言洩らした事の一二を補うて置かう。池永太蟲の『晉子年譜』延寶四年の條に、「松尾桃青始めて小田原町二丁目に菴を結ばれて栩々齋を號し玉ふ」とあるは、何に據つたのか知れぬが、珍らしい一資料である。又漢學を田中桐江に學んだことに就いては桐江の「半時庵說」に、桐江が江戸に居た頃、桃青が數〻書齋を訪ひ、叩以㆓南華㆒歲月所㆑積文義頗熟其廬名㆓芭蕉㆒とあるといふ。(田中桐江傳)是に據れば、芭蕉が桐江に學んだのは『莊子』である。而して是は延寶天和の頃であつたらう。此の頃老莊趣味に沒頭してゐたのと併せ考へて、興味がある。

最も信ずべき像

ないかと思ふ。『陸奥衛』は、前にも度々引いたが、芭蕉の姪で、且直弟子であつた桃隣の著で、且元祿十年のものであるから、最も信用して可いであらう。いづれ皆記憶を辿つて製つたものである限り、製つた人々の印象の工合で、多少の相違あるは免かれぬ。卷頭に掲げた許六が五老井の櫻樹で製つて智月に贈つたと傳へる木像は、頬は大分こけてゐるが、甚だしく憔悴れてゐるといふ程ではない。しかし前記の「頬そば立つて」とあるのにもよく協うてゐるので、像として實に近いものゝ一として掲げたのである。此の像の由來は闌更の記に詳しく述べてある。杉風筆のと、桃隣のと、此の像とを彼是斟酌して考へたら、實を得るに近からうと思ふ。破笠筆のは、或は原圖が多少崩れたのか、又は破笠が芭蕉庵に近く出入してゐた貞享頃の芭蕉を寫したものか、豐頬で水々し過ぎてゐるやうである。

「絵画は二つのものを現はさなければならぬ—人間と魂」レオナルド

芭蕉の書

芭蕉は能書家であつた。其の書は洒脱に失せず、謹嚴に過ぎず、よく其の爲人を現してゐる。或人(子規氏であつたか)は、芭蕉の書は、漢字にも假字にも善く、千蔭などよりも優れてゐると謂うてゐるがそれ程に見るべきであるかどうか。予の私見では、書としては良寛などの方が好い。芭蕉の書は、それ程太したものとは思へぬ。併し俳人中では、芭蕉程見事な筆蹟の者はあまり無かつたやうである。予は蕪村の書をあまり好まぬから、公平な批評は出來ぬかも知れぬが、蕪村よりは巧かつたやうに思ふ。蕪村の書は、故意らしい癖があまりに目立つてゐる。(漢字でも、大雅の方が蕪村よりも好かつたやうに思ふ。十便十宜圖でも一見すれば二家の特色がよく判る)なほ又芭蕉の書は、壯年の頃と晩年の頃とで太

芭蕉の容貌

水雞塚集の記事

あるが、「月夜々々に明け渡る月（曲水）花薄あまり招けばうら枯れて（芭蕉）」「布子着習ふ風の夕暮（凡兆）押合うて寝ては又立つ假枕（芭蕉）」「水際光る濱の小鰯（惟然）見て通る紀三井は花の咲きかゝり（芭蕉）」「青天に有明月の朝ぼらけ（去來）湖水の秋の比良の初霜（芭蕉）」の如き、叙事又は叙景の裏に、自然の妙相と、一種の大人生觀とを、影の如く幻の如く漂はせてゐる眞趣に至つては、芭蕉でなくては見るを得ぬ。兩者の間に優劣を置くことは、全く不可能である。文字の壯麗さにのみ眩惑してはならぬ。

芭蕉の容貌に就いては、『老の樂』に「うすいもあり」などある外、若い時から老人に見えたさか、四十前後に髭が白かつたとかいふ位なもので、普通の書には殆ど見えぬ。「いも」は『屋土里塚』（章初に引いた）に、角上の傳へとして、顔に疣があつたとあるのと紛らはしく、どちらが實であつたか判らぬ。然るに茲にたゞ一つ『水雞塚』（廣文庫に引く反古集にも）に「そのさま、面長に、脊高からず、低からず、頬そば立つて眉、毛長く、眼中すこやかに、鼻は鈍骨の雙柱、耳厚く、薄脣にして、痩がれたる形容とや」（露川の傳へか）と詳しく記した珍らしい記事がある。是は信ずべき遺像と可なり合ふので、注意すべき記事かと思ふ。此の傳へに最もよく合ふのは、自分の見た芭蕉像中では、『陸奥衛』所載の像である沼波氏の『芭蕉全集』に載せてある杉風筆と稱する像は、幾らか豐頬で、ふつくりとした處があつて、どちらかと謂へば、湖中の芭蕉傳所載の破笠筆を模寫したといふものに近い。即ち芭蕉の肖像は、大體に於いて、圓顔と面長との二通りあるが、予の私見では、此の面長で痩せてゐる方が、實に近かつたので

此の外なほ氣付かなかつたのが幾らかあらう。又細かに穿鑿したら多少出て來るであらう。

序でに少しくいうて置かう。世には支那第一の詩聖杜甫と、日本の一俳人芭蕉となど、比べ者になるものかといふやうに考へてゐる者もある。現に予の知人中、さう謂うたものが兩三人ある。兎角外國の事を學んだ者は、何でもかでも外國のものが優れてゐるやうに考へ度がる癖がある。惡い癖である。杜甫の詩は、予も平素愛讀してゐるが、芭蕉に比べると、ある點は優れ、ある點は劣り、一長一短、決して輕々しく優劣などを付けることは出來るものでない。全體支那は文字の國だけに、支那人は文字を使ふことに特別の異能を有つてゐる。支那文學の興味の主要部は其處に在るかと思はれる。中にも杜甫の如きは、支那第一の詩聖と謂はれるだけに、文字の使ひ方の巧妙なことは、信に驚くべきものである。實に巧い。全く神技である。又杜甫の思想には他の詩人に殆ど類例の無い純潔味誠實味がある。それが其の文字驅使の天才と相待つて、雄渾となり沈鬱となり、痛烈となり、悲壯となり、力量萬鈞となり、精光萬丈となり、信に海嶽を簸盪し、天地を吐呑するの大文章となつてゐる。併し其の思想は割合に單純で、底に硬い骨氣はあつても、奥行が淺い。包容も乏しくて、複雜味に缺けた處がある。芭蕉の連句を讀むと、人生のあらゆる種々相が、現の如く、又夢の如く、髣髴として目前に浮動して來るが、杜詩などには其の趣が貧しい。草昧英雄起、謳歌曆數歸、風塵三尺劍、社稷一戎衣の如き、南嶽配㆓朱鳥㆒、秩禮自㆓百王㆒、歘吸領㆓地靈㆒、鴻洞半㆓炎方㆒の如き宏麗にして典重な文字は、漢詩の特境で、又杜甫の獨擅で

注しなかつた、白河の栗の樹蔭の僧庵の事を記した條の文中に「橡拾ふ太山もかくやと云々」とあるは、同谷七歌の歲拾二橡栗一隨二狙公一か『莊子』盜跖かゝら出たものであらう。松島の景を賞した文中に「負へるあり。抱けるあり。兒孫愛するが如し」とあるは、菅菰抄にもいうてゐる如く、西嶽(華山)の諸峰羅立似二兒孫一から出たものであらう。平泉懷古の條に「國破れて山河あり。城春にして草青みたり」とあるは、春望の國破山河在、城春草木深であること言ふ迄も無いが、「夏草や兵共が夢の跡」も、此の二句から脱胎したのであらう。尿前之關から出羽に越える山中の條に「雲端に土降る心地して」とあるは、鄭駙馬宅宴二洞中一の已入二風磴一霾二雲端一であること明らかである。「藥欄(一に園)のいづれの花を草枕」は賓至の乘レ興還來看二藥欄一からか、白詩にも似た句がある。「幻住庵記」の「魂呉楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。」とあるは、前の句は、先にも引いた呉楚東南坼であるが、後の句は、或は瀟湘洞庭虛應レ空から出たといふのは、如何であるか。又同記に「樂天は五臟の神を傷り、老杜は瘦せたり」とある瘦は、かの『本事詩』の李白の飯顆山頭の詩の爲問緣レ何太瘦生、只爲二從前作詩苦一に依つたものらしい。芭蕉庵の大瓢四山の素堂の銘にも「這中飯顆山」とあつて、芭蕉の同辭にも「中にも飯顆山は老杜が住める地にして、李白が戯れの句あり」とある。元祿五年頃の歌仙中の「水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ(兀峰)白頭更に蘆靜か也(芭蕉)」は、前句を春望の恨レ別鳥驚レ心に思ひ取つて、白頭搔更短を裁ち入れたのである。「人に家を買はせて我は年忘」に、杜位宅守歲を引いた者もあるが、是は單に境遇が似たといふに過ぎぬ。

次に杜句を用ひた例をいはう。「鬣風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ」は、言ふ迄も無く杜詩白帝城最高樓の杖レ藜嘆レ世者誰子に依つたのである。「日の道や葵傾く五月雨」は、確かとはいへぬが、赴二奉先縣一詠懷の葵藿傾二太陽一、物性固莫レ奪から出たのでないかと想はれる。「よき家や雀喜ぶ脊戸の粟」は、南隣の得レ食階除鳥雀馴の意に近い。此の句の前對は慣レ看賓客兒童喜と喜の字を用ひてある。但し關係は、あるかどうか斷言し得ぬ。「いざ子供走り歩かん玉霰」は稚子無レ憂走二風雨一より案じ付いたのでないかと思ふが、明らかでない。「剝がれたる身には砧のひゞき哉」は、秋興八首中の寒衣處々催二刀尺一白帝城高急二暮砧一から出たと諸注もいうてゐるが、如何さまさうらしい。「面白うてやがて哀しき鵜船哉」は、觀二打魚歌の既飽二歡娛一亦蕭瑟、又咫尺波濤永相失などの意に似てゐるが、必ずしも是に據つたとは謂ひ難い。『野洒紀行』の翠園抄に「猿を聽く人捨兒に秋の風いかに」に、秋興八首の聽レ猿實下三聲淚を引いてゐるのは拘り過ぎてゐる。又「あけぼのや白魚白きこと一寸」に、白小の天然二寸魚を引いてゐるのも、如何であらうか。『鹿島紀行』の文中に「頗る人をして深省を發せしむ」とあるは、遊二龍門奉先寺一の令三人發二深省一で、又「寺に寢てまこと顏なる月見哉」も、此の句の意から出てゐる。『芳野紀行』の文中に「吳楚東南の眺めも斯る處にや」とあるは、登二岳陽樓一の吳楚東南坼であること言ふ迄も無い。『奥之細道』行脚には、杜詩集でも持つて出かけたのか、紀行中杜句を屢〻引いてゐる。「行春や鳥啼き魚の目は淚」を菅菰抄に、春望の感レ時花濺レ淚、恨レ別鳥驚レ心を引いてゐるのは、如何かと思はれるが、同書が

引いてある眞蹟書翰には「西行能因が精神世外之樂、此外有間鋪候」とあつて、例の路通の事を「迚も西行能因の眞似はなる間敷」（三等之文と同書翰）と云うたなどゝ合せ看て、法體の行脚歌人として、此の二人に特に注意してゐたことも想はれる。作に現はれた處では、宗祇よりも西行の影響をより多く受けたやうに見える。

芭蕉と杜詩

芭蕉が杜詩を愛讀したといふことは、諸書にも傳へられても居り、又實際であつたに違ひ無い。但し杜詩をどんな讀み方をしたか、どういふ點を愛したかは、興味あることであるが、詳しくは判つてゐぬ今左に、芭蕉の物を讀過する際氣付いた杜詩と關係ある句を列擧して見よう。是は一は芭蕉がどんな風に杜詩を味うたかを推測する參考となるからである。

杜甫の名に及んだ例

先づ「三等之文」中に、「はるかに定家の骨を探り、西行が筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族」云々とある。『花屋日記』は既述の如く、信ずべき書ではないが、芭蕉臨終の席の、門人への遺訓に「汝此以後とても地を離るゝこと勿れ。地とは、心は杜子美の老を思ひ」云々とあり、又同書遺物中にも、御頭陀の中に、杜子美詩集を出してある。『熱田三歌仙』中の連句に「庵住やひとり杜律を味ひて」とあるのも、芭蕉に引當てた句らしく想はれる。（泊船堂の號の項參看）「幻住庵記」に「老杜は痩せたり」とあるは、自ら比した語である。是等は單に杜甫の名に言ひ及んだ迄に過ぎぬ。此の例はなほ他にもあつたかと記憶する。

覺束無し」（韻塞白雙紙）など云うたとある。其の放浪癖の强かつたことは、奥羽行脚の條などにもいうた通りで、所謂無所住の觀念と共に、此の痼癖が、彼をして永住の地を定むるを許さゞらしめたのであらう。行脚が一の修行であつた點に於いても、僧徒と俳人とは全く同じかつた譯である。

西行との關係

西行の和歌と芭蕉の俳諧との關係の深かつたことは、今更言ふ迄も無い。「西行の庵もあらん花の庭」「芋洗ふ女西行ならば歌詠まん」「又越えん小夜の中山初かつを」の類は固より「雲折々人を休むる月見哉」「何の木の花とは知らず匂ひ哉」「命なりわづかの笠の下涼み」の類の西行の歌に依つたもの、「凍とけて水に汲みほす淸水哉」「柴の戸の月や其儘阿彌陀坊」「露とく〳〵試にうき世すゝがばや」の西行の遺蹟に關係あるものなど、數へ立てれば隨分多い。連句にも「發心のはじめに越ゆる鈴鹿山」の類の西行の俤や名や、其の歌を換骨したものやが、少なからずある。友人素堂も「亡友芭蕉居士、近來山家集の風體を慕はれければ、追悼に此集を讀誦するものならし」と題して「あはれさや時雨るゝ頃の山家集」など詠んでゐる。（陸奥衛）木節が嘗て中頃の歌人は誰なりやと問うたに對し、西行と實朝とを推したとある。（一葉集）されば「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける」（笈之小文）「定家の骨をさぐり、西行の筋を辿り」（所謂三等之文）の類の語のあつたのも當然である。遺物中に『山家集』があつたとある（花屋日記）は確かでないが、始終愛讀はしてゐたであらう。有名な西行の賛には「捨て果てゝ身は無きものと思へ共風の吹く日は寒くこそあれ」に「花の降る日は浮かれこそすれ」と和してゐる。（風俗文選）『一話一言』に

逸話の價値

芭蕉の逸話として、既に引いたものゝ外、なほいろ〳〵傳へられてゐる事もあるが、元來逸話といふものは、ある場合には、其の人の眞面目がよく露はれることもあると同時に、誇張や虚飾が多くて、餘程愼重な態度を以て取扱はぬと、時には途方も無い謬りに陷るものである。予は古人を觀察するに、逸話にはあまり重きを置かぬ主義を取つてゐる。世には口から口に傳へられたあやふやな逸事を、如何にも重大事のやうに面白さうに言囃して、其の人の爲人が、其の一事で定りでもするやうに持まはる者も少なくないが、予は取らぬ。芭蕉の逸事も此の類が往々ありさうであるから、注意せねばならぬ。特に句に關するものには、如何と思はれるのが多い。（後編參看）

私淑した古人

宗祇

古人中で芭蕉の最も私淑したのは、我が邦では西行と宗祇とで、支那では杜甫であつた。是等の人々は、何れも性格や經歷境遇が自分とよく似てゐたからであらう。宗祇の連歌に於ける地位は、序編にもいうた如く、芭蕉の俳諧に於けると、全く同じかつたのと、半僧半俗の境遇や、一生を旅で暮した經歷やも、よく似てゐたので、最も私淑したのであらう。「世にふるは更に宗祇の時雨哉」の句などが、最もよく之を語つてゐる。「藤の實は俳諧にせん花の跡」の類の、宗祇の句から脫胎したのもある。西行も亦生涯を旅で過した人で、故藤岡東圃氏が、西行宗祇芭蕉を、日本文人の三大旅行家と稱してゐる（異本山家集中西行論）如く、三人共殆ど行脚を生命としてゐたと謂うて可い。杜甫も亦、生涯を旅で過し、

行脚

旅で歿した人である。芭蕉は特に行脚を詩人の一資格としたと見え「東海道の一筋も知らぬ人、風雅に

蒟蒻を嗜んだらしいといふ者（句選年考）もある。發句には「蒟蒻の刺身も少し梅の花」などがある。其の他淡泊な物を喜んだ記事が、門下の書などにも折々見えてゐる。「我が門の人は、茶漬（〇一に奈良茶）三石六斗食はざる内は俳諧上手になるべからず」（一葉集遺語）など云うたとあるは、確かゝどうか判らぬが、是等が其の本意であつたことは疑ひ無い。すべてを手輕に、儉素に、あつさりと濟ますのも俳味の一部分で「芹賣の拾錢を得て戻りけり」の輕い生涯を喜ぶのが主旨であつたし、養生喰などの用意は、芭蕉には全く無かつたであらう。其の消極的不養生も、芭蕉の壽命を縮めた一原因かも知れぬ。

茶色の羽織を好んで、旅行の時なども、常に之を用ひたことは、前にも一寸いうた通りで、是は諸書に見えてゐるから確かである。又俳諧袖とて、右の袂を左よりも一寸程短くしたものを用ひたことが、『隨齋諧話』に見えてゐる。是などは孔子と暗合してゐるので、甚だ興味がある。芭蕉のやうな人は、物事の撰り好みなど全然せぬやうで、却て物に依つて存外深い撰り好みをするものである。是は趣味性の強い爲であらう。趣味性の強かつたことは、天成の詩人として當然である。笠を張つて、其の形に會心の笑を洩らしたり、『更科紀行』に蒔繪の杯を面白がつたり、奧羽行脚に染緒の草鞋に驚悦したり、其の他是に似た逸事はいろ〳〵あつた。法隆寺の開帳に詣で、聖德太子の冠を見落したとて、又の開帳に態々行つて見た（黑雙紙）など、ありさうな事である。斯樣な性質は、世渡りの術には最も邪魔なこと請合である。芭蕉愛用の茶色の衣なども常に縫うたのは、友田某の妻智秀といふ者であつたと。（伊賀實錄）

苦しんだ點は、芭蕉と似てゐた。芭蕉が蠟燭を嫌うたことは『伊賀實錄』にも見えてゐる。

酒も煙草も好き

芭蕉は、食物などの嗜好はあまり偏してゐなかつたやうに想はれる。酒を嗜んだことは、明らかで、人から酒を贈られた書狀などもあり、又酒に關係のある句も可なりに多い。「花に浮世我が酒白く食黑し」「飲みあけて花いけにせん二升樽」「椎の實や花無き蝶の世捨酒」「夕顔や醉うて顔出す窓の穴」「御命講や油のやうな酒五升」「酒飲めばいとゞ寢られぬ夜の雪」又此の句の前書の閑居箴には「物をも言はず、ひとり酒飲みて、心に問ひ、心に語る」(本朝文鑑)など云うてゐる。「賴むぞよ寢酒無き夜の紙衾」其の他なほ數句ある。故郷に歸つた際、大晦日に酒飲んだ爲に元日に寢忘れたこともあり、(卯辰紀行の條參看)『更科紀行』には、月を賞し乍ら、蒔繪の大杯で酒を飲んで興に入つたことが記してある。無」量不及」亂の程度であつたこと言ふ迄もあるまい、又煙草も嗜んだものと見え、『俳諧世說』に、内藤露沾公の邸での會席で、芭蕉が煙草を控へたのを、其角が不平を言うたに就いて、禮儀を無視するのを磊落と心得るやうな不埒を誡めた譚が載せてある。是等は確かゝどうか判らぬが、何でも大抵人並にはやり、又何にでも一通りの趣味を有つてゐたやうな樣子は、其の作からでもよく想像し得る。

淡泊な物を好む

身體も弱く、特に胃腸が惡かつたらしいから、濃厚な食物は、自然に嫌うたであらうが、其の精神的の趣味即ち「わび味」からも、淡泊なものを好んだらしい。蒟蒻を好んだことは「麻生後序」(風俗文選)などに見えてゐる。支考が『削りかけの返詞』に、蒟蒻の白韲でもして靈供に供へ給へとあるので、芭蕉が

食俳人たる身分を忘れぬ心掛とから自づと出たのでなければならぬ。更に駕などに乘るに、毎も價をいふがまゝに與へた(同)など、此の人として、さもあるべきである。後にもいふが露沾公の前で、好きな煙草を差控へたことなど、其の面目が最もよく露はれてゐる。死病に取付かれてさへ、身分を思うて、醫者好みなどしなかつたことも、常人の難しとする所であらう。此の平素の異常な遠慮深さが、或は芭蕉の壽命を多少縮めたかも知れぬ。少なくとも病身を更に病身にするに與かつて力あつたであらう。

多病と長雪隱

　芭蕉が、生來病身で、特に下血が持病であつたことは、幻住庵の項などにもいうた通りである。元來多病であつたことも、其の世才に疎かつたことゝ相待つて、俳人とならしめた一の原因であつたらうと思ふ。其の長雪隱で、生涯の半ばを後架で暮した(其角三上吟)などゝ戯れたのも、此の下血病の爲であらう。元來腸が弱かつた處へ、茸の壅物など多食した爲に、死病となつたのであらう。丈草の「三上辨」(三上とは、鞍上枕上厠上をいひ、詩の推敲に最も好い處とされた)にも「長雪隱云々、近き比は芭蕉の翁のみ、此所の面白味を知りて」(和漢文操)とある。是につけても想ふが、杜甫は性質の隨分躁急

悠長

な人であつたらしいが、芭蕉は之に反して、悠長な人であつたらしい。それが自づから詩にも表はれてゐる。芭蕉は或る時客に招かれて、食後、「蠟燭を早除けて貰ひ度い。夜の更けるのが目に見えて氣せはしい」と云うた(黒雙紙)とある。一句の推敲に二日も三日も費す位なことは、例であつたであらう。其處が詩人として尊い處で、役人などゝして向かなかつた處である。杜甫は性質は異うてゐたが、推敲に

木曾殿を死後の話相手

遠慮深さ

ること言ふ迄も無いが、切實なる內容を有たぬ。芭蕉のは、人間の興味と及び靈味とに强く接觸した結果が、自然に人間愛となつて現はれたものであらう。趣味性の鋭い人は、一片の頑石にすら愛翫措く能はざる妙處を感得する。人間に對して、內容の驚絕すべく豐富なる『雲根志』を書き得る人にして、始めて切實なる人間愛を體現し得るであらう。尋常ならば、同じ詩人仲間か佛徒とでも墓を隣べ度いなどあるべき處を、「幻住庵は浮世に遠し。木曾殿と塚をならべて」(枯尾華)とあつて、沐猴冠の驕兒木曾殿を死後の話相手(?)に選んでゐる。彼の博厚なる人間に對する興趣は此の一木强漢にさへ深い親しみを感じたものと見える。浮世に遠い地を厭うたことも、其の人間を離れ兼ねた心持がよく露はれてゐるかと思ふ。彼に取つては人間は趣味の對象であると同時に信仰の對象であつた。それ故之を面白く感ずると共に、之に對して飽迄敬虔の念を持し、批評がましい事や疑難がましい事は少しも言はなかつた。此の點に於いて徹底してゐたことと芭蕉の如きは、古今の詩人中にあまり類例が無かつたであらう。

芭蕉が至つて遠慮深い人であつたことは、前に屢〻いうた通りである。此の種の美はしい人格の持主には、是等は寧ろ當然で、態々附言する迄のことでないが、吾々から見ると、今更のやうに感ぜられるので、繰返しいうたのである。或る貴人に請待された時、上座に就いて貰ひ度いと切望されたが、氣が落付かぬで、却て俳諧の障りになるとて、下座を動かなかつたといふ。(黑雙紙)又難波に旅行した時、市の少し手前で駕を下り、薦を身に纏うて行つたとある。(同)是等は勿論矯飾ではなく、其の至性とに

たので、強ひて畸人や異味のある人を喜ぶといふのとは、同視することは出來まい。

殘忍な付句を後悔

出處は一寸想ひ出せぬが、「我があとからも鐘鼓打ち來る」に芭蕉が「山臥を斬つてかけたる關の前に」（深川集、卯辰集、一葉附四ノ一三オ）と付けて、後で此のやうな殘忍な句を詠むではなかつたと、いたく悔いたとの譚もある。眞僞は確かでないが、芭蕉としては如何にもありさうな譚で、たとひ作り譚にしても、芭蕉の爲人がよく現はれてゐる。

嚴格

一方には又嚴格な處もあつたといふのが、益〻其の人柄の高明であつたことを想はしめる。其角や嵐雪が、芭蕉と一所に居るのを窮屈がつたことは、前にもいうた。ある俳諧の席で、芭蕉の句案に暇取つたので、執筆が退屈紛らしに爪に字を書いてゐたのを、芭蕉が見て、文臺を下れと叱つたと傳へられるのも、或は實であらう。此の眞摯があればこそ、其の寛裕温柔も意義を成すのである。

人間に對する興味と人間愛

仁愛の宗教的歸結は當然平等の仁無我の愛といふ處に迄至るべきであらう。但し其處迄至ると、最早實際とは縁遠い一片の理想に過ぎぬことゝならう。況や始めから絶對無我平等無差別の愛といふやうな理想と謂ふよりも寧ろ空想と謂ふべき感情的幻影に本づいたものは、思想としては妙であるが、現實的價値に乏しい。芭蕉が仁や愛を口にした例は、未だ一も見當らぬ。彼は主義や理想として之を說いたり宣べたりはしなかつたが、實際には之を體現したのである。仁愛の基礎は人間に對する深い興味と理解とである。是から出發せぬ仁愛は、一種の善美な空想に過ぎぬ。空想は單に空想としても價値を有ち得

金持には興味を有たなかつた

ある。但し孔子と共に金持だけにはあまり興味を感じなかつたと見え、孔子も其の有難からぬを數ふる說いてゐるが、芭蕉も尾花澤の淸風を評して「富める者なれども、志卑しからず」など云うてゐる。尋常ならば、泊めて御馳走して貰うた人ゆゑ、もつと何か御世辭の言ひ方もあらうに、芭蕉としては不似合な冷語ではないか。加賀で萬子の贈金を辭した事や、三井秋風を再び訪はなかつた事なども、或は實であらう。金持にあまり親しい近づきを有たなかつたことは言ふ迄も無い。共に金持に反感を有つ程の狹隘はなかつたこと無論であるが、孔子なども、其の爲に志を隳させられぬやうに、警戒した意は見えるやうである。已むを得ずに、やゝ不倫な孔子を引いたが、單だ此の種の偉人には共通點のあることを明かにし度い爲である。他の半面に至つては、寧ろ互に正反對の性格を有つてゐたこと、更めて言ふ迄もあるまい。

偏固の人に興味を有つ

孔子が子路のやうな剛毅木訥の人を特に愛したと似て、芭蕉も頑固一轍な寧ろ愚直な片意地物、偏執物などに特に興味を有つたやうである。曾良は此の型の人であつたらしい。杉風も町人乍ら似た處があつたやうである。嵐蘭、曲翠なども、恐らくば多少此の傾向を有つた人々であらう。句でも「昔聞け秩父殿さへ角力取」「景情も花見の座には七兵衛」「月白き師走は子路が寢覺哉」「月さびよ明智の妻の噺せん」「辨慶は夏も紙子の羽織哉」の類のが多く、是等の人々は、皆義朝や義仲とも共通の處があつたかと思ふ。芭蕉も亦不㆑爲㆓己甚㆒の人であつたが、矢張不㆘得㆓中行㆒而與㆖之必狂狷乎といふやうな處もあつ

凡べての人間に興味を有つ

てゐるが、もつと古いものにあらう）などは、寧ろ當然であるが、鵜飼を見て「面白うてやがて悲しき」と憐んだり、「鷹の目も今やくれぬと啼く鶉」と思ひやつたり、小鳥を飼ふことを痛斥したりした所、彼の滿腔子が、たゞ惻隱の心であつたことが判る。其の仁恕の心の飽迄厚かつた處など、正に孔子の如き人柄をさへ想はしめる。芭蕉は論語に現はれた孔子と、あるが點が酷似してゐた。

孔子が罪人の公冶長を愛して其の子を妻はした事など、草卒に考へると、何でもない事のやうであるが、孔子の主張や平生から深く考へると、實に思ひ切つたやり方と想はれる。孔子には斯うした一面があつた爲に、其の生涯が波瀾に充ち、隨つて光輝をして益々强からしめてゐるのである。併し芭蕉ならば、寧ろそれ位の事は、文句も理窟も無しに平氣でやつたであらう。是等は主として、生涯嚴正な道德主義と始終した敎育家と、半世捨人的詩人との相違が然らしめたのであらう。木曾義仲に甚く興味を感じたり、義朝の心を深く考へて見たり、奧州三代の盛衰の跡に無限の感慨を寄せたり、熊坂や盜賊に博厚な同情を有つたり（後編第十節參看）した處、如何に彼の人間を深く理解し、且之に同感し得る微妙な感受性を有つてゐたかを察し得る。彼は古人と今人との別無く、どんな種類の人間にでも興味と同感とを有し得たやうである。而して其の興味同感は、蕪村などのやうに面白可笑しくといふやうなものでなく始終眞摯誠實な態度を持してゐた。さればこそ凡べての人を愛敬し得たのである。孔子は峻烈な處があつたゞけに、不仁者や女子や小人やを痛斥したが、芭蕉は頭からそんな事を念頭に置かなかつたやうで

彼はすべての人を愛敬した

破門の弟子

も美しく、最も大なる光を放つ者は仁人である。而して芭蕉は、兎にも角にも其の一人であつた。

彼の言行や、其の感化の及ぼした結果を見る者、何人か彼の人格の光輝に充ちた反影を否定し得よう彼は生涯人からの貢ぎや、勸進や寄食やで過した一介の乞食俳人に過ぎなかつた。然るに其の先輩友人後輩に至る迄、凡そ彼を知る者にして、彼を愛し、彼を敬し、彼を慕ひ、彼を仰がぬ者は殆ど無かつた是れ卽ち彼が、よく其等の人々を愛し、敬し、慕ひ、仰いだ結果に外ならぬ。彼程の仕事を成し遂げた人には、必ず多少の敵を有つのが例であるに、彼には殆ど一人の敵もなかつた。彼の門下には、あらゆる階級とあらゆる種類の人々が居た。立派な武人も、高僧も大名も金持も居た。彼は其れ等の凡べてを愛し凡べてを敬し、而して又其れ等の凡てから愛され敬された。彼は恐らくば人を憎むことは知らなかつたであらう。老脚に霜雪を蹈んで、罪人杜國を其の配所に訪ひ、恩を忘れて師を疎んじた荷兮が自分の方から態々訪ね寄り、輕薄無節の人として、同門等から指彈された路通の事を氣にかけて、其の臨終の間際に人々に親交を依賴し、才高くして行の無かつたらしい凡兆と、彼を共にして相樂しむといふが如き、尋常人の容易に爲し得る所であらうか。許六の滑稽傳に、「路通荷兮野水越人木因等は勘當の門人なり」とあるが、種々の方面から考へて、事實とは受取れぬ。寧ろいづれも是等の人々の方から遠ざかつたといふやうなことであるらしい。『湖東問答』にも、越人路通を忌むとあるが、破門したといふやうなことではあるまい。杉風の聾に同情して、生涯聾を口にしなかつた（此の事は蓼太の雪おろしに見え

とも甚く違うてゐる。但し仁の差別的、現世的、實際的である所は大に參考になる。予は仁道の人德愛の人たる希望も資格も無いけれども、其の至高の價値を確信する者である。或は愛又は慈悲心などいふのも適切であるかも知れぬが、暫く儒教の語を借用して置く。宋儒が仁を解して生の德とした所など微妙と謂ふべきである）

仁人としての芭蕉

孔子曰はく、仁者は人を愛すと。予は此の語を前にも引いたが、茲に再び之を引かねばならぬ。孔子又曰ふ、道二つ、仁と不二とのみと。芭蕉は詩人であつたのみならず、又仁人であつた。彼は詩人として深く人生を愛したのみならず、仁人として深く人間を愛した。仁人が人間として最も大なるものである間は、彼も亦吾等に對して最も大なるものでなければならぬ。

偉人と仁人

偉人は人生の光である。吾等は此の光を常に望み、斷えず仰いでゐればこそ、生きて行けるのである否彼等に依つて、人間の眞の美しさを感得するのである。吾等は偉人の傳記に依つて始めて人間の眞價値と人生の眞意義とを知り得るのである。近い時代の偉人でも、例へば老西郷の傳記を讀んで、誰か人間の滋味の豊かさに恍惚たらざる者があらうか。優れた人々の傳記や言行を見ると、人間はつまらぬものだといふやうな考を有つことが淺間しくなつて來る。人生の深味を語る者は、たゞ大詩人の詩と、偉人の言行とのみである。而も最も切實に、最も端的に之を語る者は、偉人の行實を第一に推さねばならぬ。予は天才崇拜者であると同時に、此の意味に於いて偉人崇拜者である。其の偉人中の最も偉に、最

つたといふことは、必ずしも文學者として立派であつたとの意味にはならぬ。近松や西鶴は、傳記の曖昧な人で、どんな平生を送つたか明らかでなく、随つて其の爲人は判然せぬが、其の爲に二人の文學者としての價値が毫も減ることはない。予は寧ろ、世人が往々にして、所謂人格と其の作とを結び付けて價値を云々するの謬見を斥け度い。人格が如何に高く共、美しく共、其の作が拙劣であれば、文學者として價値に乏しい人である。併し乍ら、人格の力は、確かにある不可思議なる力を其の作に及ぼすものであることだけは、疑ふを得ぬ。文學は人格の表現であるとの説は、少なからず斟酌を要するが、文學が人格其のものゝ表現である場合に、最も優れた力強さを示すことは、到底否定し得ぬ。是は予に取つては、理窟であるよりも寧ろ儼然たる事實である。之に就いて、予にも多少の考が無いではないが、今はさ樣な根本義を論じてゐる場合でないから略す。

予は茲にあまりに平凡な陳腐な知れ切つた文句の二三を並べねばならぬ。人間の有し得る善中の最高最美なるものは仁である。仁は人間の生命であり、光明である。凡べての美を超越した至美である。是あればこそ我等は生きて活いて行くことが出來るのである。人間の深味も強味も趣味も滋味も、皆此の裏から生れ、此の裏に養はれつゝあるのである。芭蕉は詩人として深く之を見得たのみならず、人としても深く之を體し得た人であつた。予は先づ此の點を力説せねばならぬ。（仁に就いては、予は倫理學者でないから、適當に之を言表はす方法を知らぬ。予の考は儒教と同じでなく、又他の宗教などで說く所

ことを恕して貰ひ度い。自分の立場を明らかにせぬと、自分の人物觀が徹底を缺く虞れがあるから已むを得ぬ。

藝術の尊いといふのは、それが人爲だからである。自然其のまゝは、如何に莊嚴善美を極めてゐようとも、藝術品でないからは、藝術として價値を認め難い。野の百合が如何に美しく粧はれてあつても、それは自然で、藝術ではない。藝術を尊ぶ者は、自然の模倣又は奴隸として尊ぶのではなくて、自然味から得られぬ人間味を尊ぶのである。藝術味は卽ち人間味である。自然を寫した爲に藝術が尊いのならば、凡ての藝術を廢して自然のみを眺めてゐれば可い筈である。自然のみに慊らぬ處に、藝術は生れたのである。

人間も亦自然の一部分である。併し人間は自然の一部分であるから尊いのではなくて、人間のやうな優れたものがあればこそ自然が尊いのである。予は此の意味に於いて人間至上主義者である。最善最美なるものを人間裏に求めんとする者である。其の人間美は大體に於いて二方面に最もよく現はれてゐる二方面とは、一は人性美(廣義の人格美)他は藝術美である。予は芭蕉を、此の二方面とも立派に具備した代表者の一人として見るのであるが、本編では主として前者に就いていうて見よう。

人としての芭蕉は、實に美はしかつた。以下說く所を以て、若し溢美と思ふ人があるならば、試みに其の門下や知已の人々が、芭蕉に關して記したものなど一通り讀んで貰ひ度い。但し人として立派であ

ても可いのである。されば肝腎な點は、實際芭蕉の手の入つた卷であるかどうかを鑑別するに在る。予は此の點から見て、大體に於いて、芭蕉の名の出てゐる卷だけは、確かに芭蕉の手の入つたものであらうと信ずるのである。越人の『不猫蛇』に「續猿蓑、かたはら痛き事、あのやうなる埒も無き集、付やうの古さ、句の仕やうの惡さ、語路の惡さ、翁の句なりと汝が作りて入れたる句、如何程かある」と貶してゐるが、集中の連句の手際は、迚も支考などの不束な手段で及びさうもないやうに思はれる。なほ内容に就いては、別に後編にいはう。

越人の評

『花屋日記』に、芭蕉の臨終後の遺物中に『後猿蓑』と題した、歌仙三卷、發句四五吟程あつたと記してあるのは、前にも引いた『芭蕉談』の記事などゝ合す爲に書込んだものかと推量されぬこともない。何となれば、若しそれが事實ならば、支考が『笈日記』などの、芭蕉遺物中に、得たりとして書加へさうな筈だからである。たゞ諸說を綜合して考へて見ると、歌仙三卷程は確かに芭蕉の自筆の草稿などあつたものらしく想はれるのである。發句の方は、どんなものを芭蕉が出すつもりであつたか、どの程度迄支考の私意が及んでゐるか、何か新らしい材料の出ぬ限りは、今から十分な判斷を下すことは、殆ど不可能であらう。

笈日記の遺中に此の書が見えぬ

第十六節　芭蕉の爲人

本節は芭蕉の人物觀とでも謂ふべき自分の考を述べるのであるから、自分の意見や主張の多分に混る

幾分は、何か根據があつて云うたのかも知れぬ。即ち郷里の門人中、誰かゞ撰集し度いなど請うたので其れに出すつもりで、句を書き溜めて置いたさいふ位な事實は、或はあつたのかも知れぬ。許六の『滑稽傳』に、江戸で保生沾圃を勸め、『續猿蓑』を手傳うて伊賀に歸つたなどあるのは、此の集に依つて想像した說でないかと思ふ。『宇陀之法師』などにも、此の書の噂があつて、別に批難もしてゐぬ所を見ると、許六は此の書を正しいものと信じてゐたのであらう。『去來抄』の「涼しさの野山に滿つる念佛哉」の條に、此の句がもと初五「ひいやりと」であつたのを芭蕉が「風薫る」と改め、『續猿蓑』(後猿蓑)を撰ぶ時再び「涼しさの」と改めたとあるが、是も確かゝどうか判らぬ。『去來抄』も亦容易くは信を置き難いものであることは、附編にいふ。

何にもせよ、撰び方の如何は兎も角も、集中の句だけは、正か勝手に僞作したものなどはなからうと思ふ。「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」の芭蕉の句は、元祿五年(出板はなほ後)の『安梅集』に出てゐるが、『笈日記』には支考等が芭蕉を伊賀に訪ねた時の句のやうに記してある。而して『續猿蓑』の方には此の句の前書に「伊勢の斗從に山家を訪はれて」としてあるのを、棒引して消し、それを「蕎麥はまた云々」の句の方に付けてある。斯樣な處は、多少訝かしく無いでもないが、句は芭蕉のに違ひない。內容が疑はしいと謂うても、先づ此の程度であらう、又連句は、芭蕉の方から謂へば、名などは一向構はぬことで、芭蕉連座のものは、句全部芭蕉の改定を經るのが例であつたらしいから、全體が芭蕉の物と見

日は寒けれど靜かなる岡　芭蕉
水涸るゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然
雞があがるとやがて暮の月　芭蕉

の一卷は、實は發句は露沾、脇は芭蕉、第三露荷、第四沾蓬、第五沾德の五吟であつたのを、右の如く名を入れかへたのだとあるが、是等も信じ得ぬことは、後にもいふ。又「勇み立つ鷹引すうる嵐哉」里圃)「冬のまさきの霜乍ら飛ぶ」(沾圃)は、脇はもと「流れのなりに枯るゝ水草」で、第三馬莧第四芭蕉であつたが、面白くないとて、後に改作したものだとあるが、是も前の例に依ると、卒かには信じ得ぬ。第一何の爲に自分に關係の無い者の名を入れ代へなどしたのか、譯が判らぬではないか。又云ふには、芭蕉が歿年の七月に、伊賀に歸つたら、兄半左衞門や猿雖土芳などが、鄉里からも一撰集を出さぬのは殘念だと口說いた。併し其の年は『炭俵』の撰集で、諸國からの句も撰び盡し、反古に殘つた句は二百に足らぬ。けれ共幸に美濃の落梧が『瓜畠集』(第八節參看)を出すとの話のあつた時、送つた仙歌があつて落梧が死んで(元祿五年頃か)集が出なかつたから、其の歌仙と、伊賀での猿雖の野分の一卷があるのとに、なほ一二卷加へて出し度いと、去來へも手紙があつた。序も去來に書かせる積りであつた。(以上)と。芭蕉が自ら撰集を企てたなどは、其の平生から推して、是も容易に信じ得ぬ。併し是等の説の內の

参全25　二一、

部集の中にも入れられてゐるから、一言して置く必要があらう。此の集が支考の僞撰であることは、殆ど疑ふの餘地がない。たゞ中に收めてある句などがどの程度迄眞物で、どれだけ僞作が混つてゐるかを鑑別するのは、容易なことではない。此の書は、芭蕉歿後五年の元祿十一年五月に上木したもので、伊賀の上野の芭蕉の兄松尾某（半左衛門を指したのであらう）の手許に草稿のあつたのを、例の俳書專門の書肆京の井筒屋が乞ひ受けて、草稿を其のまゝ板下として出板したといふことにしてある。而して「何人の撰といふことを知らず」と云うてゐる。（同書奥書）これは、暗に芭蕉自身の草稿か、又は芭蕉の編輯と思はせる爲に仕込んだ細工であること、言ふ迄もあるまい。編中では、芭蕉に次いで支考の名が最も重きを成すやうにしてある。『芭蕉葉ふね』などの說では、芭蕉の草稿が伊賀無名庵にあつたが、支考が編輯するとて、己の名の洩れてゐることを不快とし、本書は自分が貰ひ、寫しには己の名を多く入れ、其れを半殘に與へ置き、時を經て井筒屋に取出させたのだとあるが、是も想像に過ぎまい。又例の『俳諧芭蕉談』に、「京入や鳥羽の田植の歸る中」（卯七）「瀧壺もひしげと雉子のほろゝ哉」（去來）「山の端を力貌なり春の月」（魯丁）などは、芭蕉の歿した翌年の句だとしてゐるが、卯七の句は元祿初年のものであること、『渡り鳥』にある通りである。（なほ此の事は後に別にいふ）又此の集の連俳中の最も主位を占めてゐる

猿蓑に洩れたる霜の松露哉　　里圃

遺物も笈花屋兩書間に相違がある。是等は何れも他書と一致せぬ點であるが、他書に無い記事でも疑はしい處もある。但し是等は對照すべき材料が無いから、暫らく略して置く。第四に、此の書の姉妹篇『次郎兵衞物語』等も、何れも疑はしいものである。(附編にいふ)其の他此の書の文體が始終一貫しよく整頓して、臨終の取込最中に數人の手で記されたものらしくないことなども、疑はれる點の一である。

太平記的價値

右の如く、此の書は疑はしいものではあるが、亦空想で出鱈目に造り上げたものではなく、大抵は事實を本とし、可ν成他の材料と一致するやう、衝突せぬやうに記されてある。それ故隨分に誇張したらしい處や、誤謬らしい處も混つてはゐるが、背景は大凡は事實と認めても可い。であるから、『太平記』の價値と同じやうな意味に於いての價値は確かに認めてやらねばならぬ。芭蕉の面目を活躍させてゐる點に於いて、此の記事に匹ぶべきものは、他には殆ど見るを得ぬ。若し「芭蕉は斯ういふ人であつた」との意味として此の書を見るのであるならば、予は大體に此の書の所説に同意せねばならぬのである。

此の書が、若し僞作としても、文曉の細工であるか、又は文曉以前からあつたのを、文曉が信じて出板したのであるかは、亦別問題として殘る譯である。『芭蕉談』も『次郎兵衞物語』も、皆此の人の手から出たことを想ふと、僞作とすれば、文曉の細工でないかと考へられる。なほ予は『花屋裏』と題したものや、其の他の類似本も見たが、何れも該日記を抄略したものと見えた。

續猿蓑

『續猿蓑』は、芭蕉歿後世に出たものであるが、生前に芭蕉が編輯して置いたものだと傳へられ、且七

枕頭に侍しつゝの記であるならば、斯樣な誤りがあり得ぬ筈である。

園女のことを書いた記事も、亦全然誤りと見るべきでないかと思ふ。芭蕉の「白菊の目に立てゝ」（前出）の句を、『花屋日記』は、園女が寡婦として貞潔を全うしてゐるのを褒めたものと記してゐる。同書が、同女を岡西惟中の妻とし、夫に別れて云々と記した條の誤りであることは、更めて言ふ迄も無い。園女と一有渭川との關係は、予も疑問としてゐたが、故洒竹氏にも、一有渭川同人說があつたさうで、だん／＼考へて見ると、此の說が眞を得てゐるやうである。其の證は、第一に『菊の塵』等に出てゐる右の白菊を立句の歌仙の第四は、渭川となつてゐるが、『後ればせ』（元祿十一年）には、それが一有となつてゐる。次に『菊の塵』中の來山の句の前書に、斯波氏渭川とあつて、斯波一有と同姓になつてゐる。次に同集の園女の序に、渭川の亡くなつたことを叙べて、「渭川さへ身をいたつきに云々、あはや悲しく、亡き人の數に入られたりけり」とある文情から察しても、夫でもなくては適はぬ詞のやうに想はれる。次に又、信用すべき書には、白菊の句が、園女の寡婦としての貞操を稱したものなどしてゐぬことも考へて見ねばならぬ。要するに、是等の材料だけから推す時は、一有渭川を同人の見るの外はないやうである。それで、『花屋日記』が、「二夫に見えざる貞潔」としたのは、『俳諧家譜』（寶曆元年）などの記事に依つて謬まられた爲と見るべきではないかと思ふ。兎も角も、此の記事も亦此の日記の疑ふべき一證であらう。（此の一項は勝峰晋風氏の所說からヒントを得たものも多い）

事實を間違へたらしい點

の終焉の始末を記すとて「病中の間は晋子が終焉記に詳しければ」といひ、『枯尾華』(即ち晋子が終焉記)に洩れた事共を補ふ由が斷つてある。若し『花屋日記』のやうな重要な材料があつたならば、支考も其の筆者の一人となつて居り、特に終焉當時の芭蕉とは深い關係があり、且諸種の僞作迄して芭蕉と自身との關係を誇張しようとした程の支考であるから、必ず眞先に此の記に言及し、是を誇示せねばならぬ筈である。然るに是を露程も言はぬのは、此の書の疑ふべき最も有力な理由とならう。其の他芭蕉の終焉の事を書いたものを見ると、何れも晋子や支考の記にしか言及してゐぬは言ふ迄も無い。竹人の芭蕉傳なども無論さうである。第三に事實を誤つたとは思はれる處もある。『花屋日記』には、花屋裏座敷とあるが、『桐雨筆記』『繪飼傳』等にも、借家又は別屋としてある。又其處に移つたのは、『花屋日記』には三日とあるが、『笈日記』始め信ずべき書共には五日としてある。又病床へ眞先に駈付けたのは、『笈日記』には正秀とあつて、間も無く去來が來たとしてあるが、『花屋日記』は去來が第一に來たとしてある。(枯尾華にも「人々の中にも、去來京より馳來るに、膳所よりは正秀云々」とあるが、是は去來が第一に駈付けたの意ではなく、是等の人々が先づ集まつたの意と見るべきで、始めから附いてゐた支考の記事を確かとすべきである)又去來等の來たのは、七日の晝と『笈日記』にあるのに、『花屋日記』には三日の夜とある。此の七日の晝との記事は、風國の『こがらし』(元祿八年芭蕉追悼集)に「去來は心もとなしと、六日の夜船にぞ下り申されぬ」とあるのともよく合ひ、三日說の誤りであることがよく判る。若し果して

芭蕉歿後百十餘年に流布

他書に此の書の噂が見えぬ

を芭蕉傳の正確な材料として取扱ひ難いことは、斷言して置いて可い。

『花屋日記』は、肥後八代の僧文曉が、文化七年に上木したもので、芭蕉歿後百十餘年を經て世に公にされたのである。其の體裁は、芭蕉終焉の有樣を、枕頭に侍して看護した門人等が、代る〲記したやうに出來てゐて、病床の模樣から、芭蕉は勿論、門人達の言動に至る迄、一々實況を目の當り睹るやうに、眞によく書けてある。併し此の書の疑ふべきものであることは、既に是迄も多くの人に注意されてゐる。第一に是程の名著が、芭蕉歿後百年餘も世に全く知られずに過ぎたといふは、事實として容易にあり得べからざることである芭蕉歿後はあらぬ假託の書さへ作つて、何でもかでも芭蕉に附會しようとした時代に、是程芭蕉と密接な關係のある名著が、門人や流派の口にも筆にも少しも上らなかつたとは、餘りに不可思議な事である。第二に、支考の『笈日記』に、芭蕉



義仲寺及び無名庵共、今なほ湖畔に儼存して、此の偉人の幽魂を納めた當時の原形は、あまり崩されずに遺つてゐる。『說叢大全』に、無名庵は「翁滅後丈草茲に住みぬ。丈草死して後、南の岡へ移して、一人の道者(○惟然か)住みける。其後寛保年中咄道和尚造營して、今は黄檗派の一字となれりとぞ。寺號は忘れたり」。寶暦の初、雲裡坊杉夫發起にて、幻住庵の椎の木を茲に移し、且翁の庵の舊地に新庵を造つて後の幻住庵と呼んだ(以上)とある。此の記事では、寺と庵との區別が判然せぬが、兎に角寺と庵とは、多少の變遷はあつたのであらう。蝶夢の繪詞傳に、墳の芭蕉翁の三字の碑は、丈草の筆で、其角去來等の建てたもの(此の事は古い記にも見えてゐる)其の周圍の石垣は百川法橋の繞らしたもの、行狀の碑文(前にも引いた)は角上の建てたもの、芭蕉堂は、八十年忌に蝶夢の創めたもの、粟津文庫は百年忌に沂風等の營んだものとある。茲に掲ぐる圖は、義仲寺の發行に係り、五十回忌碑(即ち行狀碑)の位地や、其の他堂宇の間隔等、現狀と多少異うた處もあるが、平面圖よりも、其の面影を髣髴せしむるに近いから、掲げた。『東海道名所圖會』にも圖が出てゐるが、やゝ實に遠い。門前は、街道を隔てゝ十餘步の處に湖水が緩く浪を打つて、墓畔の松風に悠久の韻きを和しつゝある。

第十五節　花屋日記と續猿蓑

『花屋日記』を予が何故に臨終の記事の材料として取らなかつたかに就いて一言して置かう。此の書が僞作であることを確定するには、なほもつと動かす可からざる證據が欲しく無いこともないが、此の書

い。遺書中の市兵衞は雪芝、次右衞門は苔蘇、意專は猿雖、十右左衞門は土芳、半左は半左衞門の半殘である由『花屋裏』に見えてゐるが、『花屋日記』の頭注に、十右衞門半殘、半左衞門土芳とあるが正しからう。(蓑蟲庵集に、土芳通稱半左衞門とある)「又右衞門便りになされ」とあるは、何人であるか。此の人は、他の兄への消息(眞蹟集拾遺)にも見えてゐる「道中に又右衞門かげにて云々」とある人でないかと思ふ。さうとすると、大阪迄芭蕉に随いて行つた者らしい。又三通中の一通だけは、『一葉集』などには見えてゐぬやうであるから、左に揭げて見よう。

一、杉風へ申。久々厚志、死後迄難レ忘存候。不慮なる所に而相果、御暇乞不レ致段、互に存念無二是非一事に存候。彌俳諧御勉候而、老後の御樂に可レ被レ成候。

一、甚兵衞殿へ申候。永々御厚情にあづかり、死後迄も難レ忘存候。不慮なる所にて(〇中略、前段と同意)御内室樣に、不二相替一御懇情、最後迄も悅申候。

一、門人方幾口(〇一本其角とあるに可レ從)は、此方へ登、嵐雪を始として、不レ殘候。(衍ヵ)御心得可レ被レ成候。

元祿七年十月　自筆はせを朱印(竹人芭蕉傳)

此の書は『十論爲辨抄』にも載せてあるが、字句に多少の異同がある。但し意には變りはない。右の內、甚兵衞は、中川氏、美濃大垣の住士、俳名濁子、後意水とある。濁子は芭蕉とは餘程深い關係のあつた人らしいが、詳しいことは未だ判らぬ。

記』に記してあるが、是は路通の『芭蕉行状記』から取つたものかも知れぬ。路通の記には、路通が何か芭蕉の心に觸ることがあつて、音信不通にしてゐたのを、寶永阿闍梨の取なしで、許して貰うた。但し故あつて表向は疎音にしてゐたのを、芭蕉が臨終の遺言の序でに、諸門人に、歿後は必ず親しく交つて呉れと云はれたとある。芭蕉の人を愛するの深かつたことは、今更言ふ迄も無いが、此の一事など此の翁の眞面目を最もよく語つてゐる。孔子曰はく、仁者は人を愛すと。よく此の語に當り得ること此の翁の如き者、たとひ忠恕仁愛を標榜する人々の間でも、古來幾人あつたであらうか。翁こそ實に滿腔子惻隱之心の人であつた。

芭蕉の遺書は『笈日記』に「支考を召して遺書數通を認めしむ。外に一通は自ら書きて、伊賀の兄に贈らる」とあり、又、之を十六日夜、曲水亭に會して、開き見た處、「伊賀への文は、たゞ何事も無くて、先立ち給へる事の淺間しう覺す由、かへす〱申殘されしなり。外の三通には、思ひ置ける形見の品に多くは反故文章等の有所、なつかしき人々への永き別れを惜めるなりけり」とある。是は竹人の芭蕉傳にも「三通は何れも支考の筆にして、芭蕉(○はせをヵ)の三字自筆」とあるのと一致する。三通中の一通に、支考の此の度の忠勤を謝した文句があるが、是も芭蕉自筆といふことである。(竹人芭蕉傳)是等の内二通は、『一葉集』其の他にも收めてあつて、文句に異同はあるが、略ぼ正しいものと認めて可からう。又兄への自筆の一通も、諸書に出てゐて、文句中の人名などに、聊かの異同はあるが、大凡は同じ

を濡らした。此の日は小春日和の暖かくて、障子に蝿が集まつてゐるのを、病人の邪魔になるからと、

蝿狩

鳥黐を竹に塗つて、蝿狩を始めた。其の狩様に上手下手があるのを芭蕉も見て、暫く興に入つた。が、

大往生

それも一時で、やがて何事も言はなくなつた。此の日申の刻、今の午後四時頃眠るが如く大往生を遂げた。

義仲寺に葬る

其の夜竊かに遺骸を長櫃に納め、商人の荷物のやうに装うて、川舟に乗せ、其角、去來、乙州、丈草支考、惟然、正秀、木節、呑舟、次郎兵衛の十人が附添うて、淀川を溯り、伏見で舟を上り、明くれば十三日朝、伏見から江州木曾塚の草庵に着いた。十四日の夜、生前の遺言に從ひ、義仲寺の木曾塚の右に並べて埋葬した。京大阪及び江州界隈等から聞傳へて、會葬した者が三百餘人あつた。遺物は『笈日記』に、

遺物

一、新式、埋木の二傳　一、古今之序註、百人一首の兩部　一、三日月日記、奥之細道　一、被風、銅鉢。此の外芭蕉庵に安置申されし出山の尊像

とある。尊像は「支考が方に傳へ侍る」とある。此の中に、例の後猿蓑（續猿蓑）の無かつたことは、注意すべきである。『花屋日記』には「後猿蓑」と題した歌仙三卷、發句四五吟程、頭陀の中に入れてあつたと記してある。

路通の事を遺言

芭蕉が臨終の間際に、路通のことを言ひ出して、予の歿後も隔て無く交つて呉れと云はれたと『花屋日

に即興の句など詠んで、慰み合つた。

うづくまる藥の下の寒さ哉　丈草
病中の餘り啜るや冬籠　去來
引張りて蒲團に寒き笑ひ哉　惟然
叱られて次の間へ出る寒さ哉　支考
思ひ寄る夜伽もし度し冬籠　正秀
鬮取つて菜飯焚かする夜伽哉　木節
皆子なり蓑蟲寒く鳴き盡す　乙州

藥方を木節に委す

『花屋日記』には、是等の句に就いての巧妙な譚を傳へてゐるが、句に依つて案出したものかも知れぬ。『俳諧世説』に、丈草の句のみを芭蕉が賞めた事が記してあるが、日記は、是等の話をも手際よく鹽梅してある。其の明け方に、木節を召んで喩して曰はれるには「死期も最早迫つたやうである。水宿雲棲の身の、此の藥の彼の藥のと、氣隨に言ひ騷ぐべきでない。希くば尊老の藥方で、最後迄唇を濡らし度い」と。（笈日記）實に風流道德みな間然する所が無かつた。（花屋日記）、それから人を遠ざけて沐浴し、不淨を清め香を焚いて後安臥し、物を言はなかつた。

十二日は、前日から絶食してゐたのに、晝頃に目を寤した時、粥を侑めた所が、助け起され乍ら、唇

去來抄にも

遺書を認む

此の日は隨分苦惱した。十日の夜は、特に發熱甚だしく、人々は皆惶惑措く所を知らなかつた。夜に入つて去來を喚んで、暫らく何か話した。それから支考を喚んで、遺書數道を代筆させた。外に一通、伊賀の兄に贈るべき分だけは、自筆で認めた。是は後で正秀が預つて、木曾塚の草庵に歸つた。夜更けて、人々の寢た後に、數人の者が、枕邊に侍し乍ら、今後の風雅は如何成り行くであらうかと問うた。

今後の風雅

芭蕉は「此道の吾に出て後、三十餘年にて百變百化す。然れども其境眞草行の三を離れず。其三が中に未だ一をも盡さゞる由、唇を沾ほし〳〵」語りつゞけた。人々は皆感激して、袖を絞る者が多かつた。何分不淨を遠慮されるので、他の人々は、病人を苦しめぬ爲に、可レ成餘り近寄らぬやうに氣を注けてゐたので、身まはりの世話は、舍羅と呑舟とを專ら之に當らしめる事にした。二人は之道の門人で、貧乏な日傭夫かなどの身分であつたらしい。（舍羅が極貧であつたことは俳家奇人談に見えてゐる）十一日の暮に、思ひがけ無く其角が來た。

其角來る

其角は泉州淡輪迄所用で來て、此の日大阪に寄つたが、何と無く師翁の事が氣にかゝつて、胸さわぎがしたので、聞いて見ると、病氣だといふので、驚いて駈付けたのである。直樣病床を訪うて「言はん方無き懷ひを述べ、力無き聲の詞をかはし」師弟の深い契りに、住吉神の御導きでもあつたらうと、嬉しさと悲しさとに、身も浮くばかり泣くのであつた。十四五歲から芭蕉に從遊した所謂子飼の弟子であるから、其の二十年間の師弟の情誼は、亦別格のものがあつたであらうそれに恰も江戸から來合せてゐたのも、奇緣と謂はねばならぬ。其の夜は、人々は皆眠りもやらで、五

初雪にやがて手引かん佐太の宮　正秀
神の留守頼み力や松の風　之道
居上ていさみつきけり鷹の貌　伽香
起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉　支考
水仙や便につれて床離れ　呑舟
峠越す鴨のさなりや諸きほひ　丈草
日にまして見ます顔なり霜の菊　乙州

然るに、「生前の俳諧を忘れよう」と云うた口の下から、九日には、服薬の後、支考に向ひ、「此の事は、去來にも話して置いたが、先日の大井川波に塵無し夏の月の句は、園女亭の白菊の句と似てゐて、是も死後の妄執にならうから、清瀧や波に散り込む青松葉と直し度い」と云ふのである。此の事は、去來の『湖東問答』にも見えてゐる。(去來抄にも)嗚呼、死に瀕して、無爲涅槃の大道に歸し、生前の執着を一切捨去らうと云うた芭蕉は、臨終に於いて、其の一面なる宗敎的天性を柔順に語つてゐるが、さういふ口の下から、なほ等閑の一句にすら、忽ち復た慘澹たる經營に引戻された所、更に其の強烈なる藝術的天分を露はしてゐるではないか。然り、此の二つの性格が、始終相表裏して、芭蕉一代の意味深い事業を成就せしめたのである。

の句を詠んだ。多分呑舟に書かせたのであらう。後で支考を召んで、「なほ馳廻る夢心」とも案じてあるがどうであらうなど言うた。支考は、若し其の初五文字を問うたら、又苦索されて、病氣に障るであらうとの遠慮から、前者は決して劣つてはゐませんと答へた。是は『笈日記』の意に本づいたのであるが、『枯尾華』には、又の案は「枯野を廻る夢心」とあつて、「旅に病んで」の初五文字は其のまゝにして、かく改めては如何かとの意であるらしく記してある。此の方が實らしく聞える。且去來丈草等の高弟も居るのに、若輩の支考を召んで相談したといふのも、聊か訝かしいが、暫らく記して置く。又曰はれるには「今や生死の轉變を眼前に控へ乍ら、句の善惡の詮議も無いものだが、風雅の道に死なうと常々心掛けてゐた一念が附纏うて、此の通り苦心する。是をば、佛が妄執とて誡めて置かれたのに」など、深く歎いた。而して「此の後はたゞ生前の俳諧を忘れようとのみ思ふは」と、返す／＼云うた。『俳諧世説』に、門人が辭世の事を尋ねたら、芭蕉は笑つて、自分の一生の句は、皆辭世であると云うた譚が出てゐる。是を『花屋日記』は物々しく敷演して、「古池」の句以來、一句として辭世ならぬはないなど熱心に説いたやうに記してゐるが、實らしく思はれぬ。此の夜、一同で、病氣平癒祈禱の發句を詠んだ。

落つきやから手水して神集め　木節

凩の空見直すや鶴の聲　去來

足輕に竹の林やみそさゝひ　惟然

諸門人集まる

ど見せられたが(四十歳前後から既に白髮の老翁であつたことは前にもいうた)見る影も無く瘦れ果てゝ「枯木の寒巖に添へるやうに覺え」(笈日記)た。七日の朝に先づ膳所から正秀が駈け付けた。(花屋日記に去來が眞先に驅付けたやうに記し、枯尾華にもそんな風に記してあるが、笈日記に從ふべきである) 直に病床を見舞ふと、芭蕉は兎角の言葉も無く、たゞ落涙するのみであつた。間も無く京都から去來が馳せ着いた。其の暮に、大津から、木節、乙州、丈草、及び平田からは李由が來た。而して皆々で看病した。

去來の熱心な看護

中にも去來は、寸時も病室を離れずに、一心不亂に看護に勤めた。云ふには「此の度師翁が來られた時の御話に、人々(去來等を指したのであらう)は吾に親のやうに仕へて呉れるのに、吾は人々を子のやうに慈しむことが出來ぬなど言はれた。(笈日記の意に依る。そんな風に取れる)然るに自分(去來)は常に世務に牽かれて、翁に仕へること親のやうには出來なかつた。翁の此の御言葉を聽いて、あまりに畏れ多く感じた。それ故此の度こそは、一刻も離れず仕へる」と。(以上笈日記の文意に本づく)併し芭蕉は、病氣が病氣であるので、不淨を憚つて、人々を接近させぬやうにしたので、人々は多く壁を隔てゝ附切つてゐた。(枯尾華)などは、此の翁の例の遠慮深い性質から、實にさもこそと思はれる。それで始終病床に付添うてゐたのは、去來一人位のものであつたかも知れぬ。八日には之道が、住吉神社に病氣平癒の祈願の爲に詣でた。此の夜深更に、是も看病に來てゐた呑舟を病床に召んで、墨を磨らせ、

旅に病んで

旅 に 病 ん で 夢 は 枯 野 を 駈 廻 る

笈日記

病床に仆る

第十四節　終　焉

二十三日半左衛門宛の消息（眞蹟集拾遺）に依れば、芭蕉は大阪を數日で切り揚げ、名張を越えて參宮に出かけるつもりであつたらしい。それが急病の爲に果されずに、遂に大阪の客舍で殪れた譯である。芭蕉終焉の始末は有名な『花屋日記』に詳しく記してあるが、此の書は僞作の疑があるから、（後に改めていふ）據ることは出來ぬ。依て其角の『枯尾華』と、支考の『笈日記』とに專ら據ることにする。『笈日記』は、例の怪漢支考の著ではあるが、當時の著者は、なほ眞面目な處があつて、記事も大抵は信を置いて可からうと思ふのである。支考の後の著書は、假託と牽論とに塡められてゐて、役に立つものは至つて少ないが、此の『笈日記』などは、芭蕉研究に缺くべからざる好著で、特に芭蕉終焉及び其の前後の模樣を知るには、殆ど唯一の參考書である。芭蕉門下としての支考は、此の一書に依つて、僞書で師翁を謬り傳へた罪の幾分を減ずることが出來よう。

九月三十日夜からは、全く病床に偃れた。下痢は益〻激しくなる、手も足も冷え切つて來たので、一同大事と思ひ、方々へ急報した。花屋仁左衛門の借家（相雨筆記に據る。繪詞傳等にも別屋とあるから花屋日記に裏座敷としたのは如何かと思ふ）に移したのは、十月五日らしい。信ずべき書どもには皆五日としてある。『花屋日記』に三日としたのは、誤りであらう。其の暮に支考を病床に召して、特の外心が落付いたなど云うた。六日には、藥が利いて、心地良くなつたとて、自ら起きかへつて、白髮の樣子な

園女亭の會

暮れぬ」の句を遺した。此の頃、「此秋は何で年よる雲に鳥」の難解の句があつた。二十八日（一說に二十七日）に園女亭に人々（諷竹、渭川、支考、惟然、洒堂、舍羅、何中、園女）と相會して、「白菊の目に立てゝ見る塵も無し」の句があり、園女の「紅葉に水を流す朝月」の脇があつて、歌仙一卷（一葉附四ノ八一ゥ）を得た。白菊の句は、園女の風韻を賞したのである。（園女を岡西惟中の妻とする說は誤りで、惟中は一有と似た音であるから紛れたのらしい。園女は一有の妻で、又一有は渭川とは同人らしい。此

七種の戀

の事はなほ花屋日記の條にいはう）此の夜秋の名殘を惜むとて、七種の戀を結題にして、人々の發句があつた。是等は泥足が『其便』に出した。

下痢

「秋深き隣は何をする人ぞ」は此の前夜芝柏に遺した感吟である。廿九日の夜から、下痢が甚だしくなつたが、やがて癒るであらうと思うてゐると、だん／＼劇しくなつて行つた。傳へ云ふ、此の下痢は、園女亭の饗應に茸の羹物があつて、それを多食したのが原であると。『枯尾華』には「菌の塊積（つかへ）にさはる也と覺えしかど云々」とあるから、實であらう。而して前記の惡寒發熱などあつた後の衰弱も病勢を助けたのであらう。通說では花屋に移る迄は、之道亭に居た（花屋日記に依るか）としてあるが、十日附杉風宛の書翰に、九日「大阪に至候而、洒堂方に旅宿、假に足をとゞめ候」とあるから、少なくとも大阪に着いた當座は、洒堂亭に居たのであらう。後に之道亭に移つたのかも知れぬ。洒堂は前年の夏大阪に移つたのだと或書にある。

菊の香や奈良は幾夜の男振

難波に遊ぶ

此の日奈良から難波に向うた。生玉の邊から日が暮れたので、「菊に出て奈良と難波は宵月夜」。難波では暫く洒堂亭に宿つたやうである。(後にいふ)翌十日から、瘧か何かの氣味でふるひが出、是が二十日頃までも續いた。(眞蹟集拾遺)十三日の夜は、月見がてら住吉に詣でたが、晝の内から雨が降つたので氣分が惡く、特に夕方には、惡寒に惱まされて歸つた。翌十四日の夜は、やゝ快くなつたとて、畦止亭

處々での會

(長谷川氏)に行き、前夜の住吉行を題に、「升買うて分別かはる月見哉」。畦止の脇があつて、歌仙一巻(一葉附四ノ七八オ)を巻いた。十六日には、去來正秀から消息があり、奈良の鹿の句を感じたことなどあつて、人々の鹿の句を記してあつた。其の頃其柳亭で「秋も早はらつく雨に月の形」の句があつたが是は始め「昨日からちよつ〳〵と秋の時雨哉」としたのを、後改めたのである。二十一二日の夜は、雨ぞぼ降り、靜かであつたので、「秋の夜を打崩したる咄哉」。車庸の脇で一巻(一葉附四ノ八〇オ)あつた。又車庸亭で「面白き秋の寢覺や亭主ぶり」の句があつた。二十六日は、清水の茶店に遊び、泥足(長崎の人と云)が集の半歌仙(一葉附四ノ八〇ウ、但し十八人であるが、十二人は誤にや)があつた。連衆十二人

此道や行く人無しに

(?)發句「此道や行く人無しに秋の暮」は別に「人聲や此道歸る秋の暮」の句をも試みたが、前者を取つたのであつた。「此の道や」の句を斯道に伴ふ者の無いことを嘆じた意と解した者もあるが、ある書には「所思」と前書してある所から思ふと、或はさうかも知れぬ。又泥足の望みに依り、「松風や軒をめぐりて秋

支考斗從訪ふ

奈良に遊ぶ

猿澤池畔に宿る

栗の穗（芭蕉）」の歌仙一卷（一葉附四ノ六九オ）あつた。

九月三日、支考が伊勢の斗從を伴うて、芭蕉を伊賀の山中（無名庵か）に訪うた。「蕎麥はまだ花でもてなす山路哉」「松茸や知らぬ木の葉のへばり付く」。此の「松茸」の句に就いては、後で『續猿蓑』の項にいはう。之を立句として、歌仙一卷。（一葉四ノ六七ウ、但し駄作）あつた。次の夜また某亭に會して、「行く秋や手を廣げたる栗の毬」。同月八日、舊都の重陽を志して、奈良に向うた。支考惟然次郎兵衛（壽貞尼の子）も隨うた。次郎兵衛も此の時歸鄕してゐたものと見える。人々の見送りなどが煩はしいので、早朝霧の内に出かけた。兄半左衞門も、見送り乍ら、「別れる度に、もう會ふことが出來まい／＼と諦めてはゐるが、互に老衰して行くに隨ひ、別れるのがつらい」（意）など云ひ、伴の者等に、介抱の事など呉々も賴んで、後ろ影の見える限り立つてゐた。是が見をさめとなつたのである。其の日の内に是非奈良迄と急いで、笠置から河舟に乘つた。錢司といふ所を通るに、山の腰が蜜柑畑で埋まつてゐるのを見て支考が、先日の夜「山は皆蜜柑の色の黃になりて」（松風にの支考の發句での歌仙中の句）と詠まれたのは正しく此處ですと云ふと、芭蕉は「己の臑を見られた」など云うて笑うた。此の夕奈良に着き、猿澤池の邊で宿つたが、隨分疲勞の樣子であつた。此の夜は月が好かつたので、三更の頃迄池のほとりを吟行した。「ひいと鳴く尻聲寒し夜の鹿」。翌九日には、

菊の香や奈良には古き佛達

湖南に

追剝に遭ふ?

郷里に歸る

じさを繪に寫しけり嵯峨の竹」。此のあたりを吟行して「淸瀧の水汲み寄せて心太」。「六月や峰に雲置く嵐山」。此の句も有數の佳句である。「淸瀧や波に散り込む青松葉」。浪華の之道(諷竹)が始めて入門したのを送るとて「我に似な二つに割し眞瓜うり」。又「夏の夜や崩れて明けし冷し物」も此の頃の句である。それから無名庵に入つた。六月十六日には曲水を訪うた。游刀亭では、「湖や暑さを惜む雲の峰」。大津木節亭を訪ひ、「秋近き心の寄るや四疊半」。「ひや〳〵と壁を踏へて晝寢哉」。(無名庵にてか)此の頃彥根の許六を訪はうとして、道で大賊犬神五郎とかいふ者に遭うた譚が『隨齋諧話』に出てゐる眞僞の程は覺束無いが「剝がれたる身には砧のひゞき哉」の句が、此の時のとして傳はつてゐる。

七月十五日、伊賀の兄半左衛門から大津へ消息があつたので、鄕里に歸り、菩提所愛染院(此の寺の事は前にいうた)で、盆會を營んだ。(續猿蓑)

家 は 皆 杖 に 白 髮 の 墓 參

の悲痛哀切の句は、此の時の吟である。『隨齋諧話』に據れば、此の頃(同書に八月十五日入庵の時の宴の獻立書が出してある)兄の後園に無名庵を營んだのであるといふ。但しもつと以前であるともいふ。(前にいうた)以下は主として支考の『笈日記』に據つて述べて行く。

名月の夜は、猿雖の蓑蟲庵に遊んで、「名月に麓の霧や田の曇り」「名月の花かと見えて綿畠」。「今宵誰吉野の月も十六里」。是より先、七月二十八日には、「荒れ〳〵て末は海行く野分哉(猿雖)鶴の頭をあぐる

日程

の三吟一卷（笈日記）（一葉附四ノ五二ウ）があつた。それから勢州長島久居を經て、二十八日伊賀に着き父母の墳墓に詣で、翌月半ば頃迄滯在した。『眞蹟集拾遺』の、膳所から杉風に與へた書に依れば、此の旅行の日程は、十五日島田に着き、三日間滯在、十九日出立、名古屋佐屋等を經て、二十八日郷里に入り、翌閏五月十六日迄逗留、其の日大和加茂の猪兵衛在所を訪ひ一宿、十七日大津、十八日膳所となつてゐる。されば此書の日附の十一日は、或は廿一日などの誤りかと思はれる。さうとすると、二十二日には京都に出たことになつてゐるのと、よく合ふ譯である。（大和加茂は、山城加茂の誤りでないかと思ふ。大和迄一日に行き、又一日で江州迄行ける筈が無い。山城加茂からも、大津迄は可なり遠いが、其の邊の人の話では、宇治街道を田上越とかして行けば、一日で行けるさうである。加茂に立寄つたことは、猪兵衛に宛てた書翰にもあり、其れに平兵衛とあるは、猪兵衛の親か何かであらう。而して其の日附は五月二十一日とあるが、杉風宛の書翰も、日附を二十一日の誤りとすると、二書は同時に江戸に向けて出したものとなつて、合點が行き易い。二書共疑はしいものではあるまいと思ふ）二十二日に京都

京都に

に出、嵯峨の落柹舍を訪れて、洒堂去來支考、丈草之道等と歌仙があつた。（續有磯海、砥並山、市之庵等に出てゐる歌仙は、此の時のものであらう。芭蕉が、去來に、人々は吾に親の如く仕へて呉れるになど語つたのは、此の頃の事か。終焉の項參看）「柳行李片荷は涼し初眞瓜」「朝露によごれて涼し瓜の泥」。此の頃又賀茂に詣でたり、東山の桃花坊に支考を訪問した（笈日記）といふことである。野明亭では、「京

道祖神に誘はる

断えず片雲の風に誘はれて、漂泊の思の止まなかつた行脚好の芭蕉は、江戸に留まること二箇年餘にして、又も西行の旅に出かけた。此の度は西國に渡り、長崎にしばし足を留め、唐土船を見、異國の語をも聴かん、など思うて出かけたといふ。(陸奥衛)又死期の近づいたのを蟲が知らせたものか、「淺漬も歯に沁みわたるなれば、年の名殘も近づくにや」など、正秀への消息に書いてあつた。(芭蕉行狀記)出立は五月十一日(支考説に閏五月とあるは誤歟)といふことで、庵を出るとて、

鶯や竹の子籔に老を鳴く

東海道を上る

京橋の乙州が旅館に立寄つて、同行を誘うて見たが、乙州は差支があつたので斷わつた。川崎で見送りの人々と別れるとて「麥の穂を力につかむ別れ哉」。箱根を越えるとて「目にか〻る時や特更五月富士」。大井川の川留に遭ひ、島田の塚本如舟が家に逗留して、「苣はまだ青葉乍らに茄子汁」「五月雨の雲吹き落せ大井川。」此の五月雨の句は「吹飛ばす石は淺間」の句など〻共に雄抜の趣ある好句である。尾州に入り、名古屋に荷兮を訪ね、二日滯在した。『俳諧問答』に荷兮は一時芭蕉から遠ざかつたのを、芭蕉は怨を棄て〻此の時訪ねたもの〻由ある。實に常人の克くし難い所を克くしてゐる。野水露川等にも會ひ、

世を旅に

世を旅に代かく小田の行戻り

美濃に入つて、(晝顔にひるねせうもの床の山は此の時の吟か)又名古屋に引返し(?)露川等に佐屋まで送られて、共に山田素覽が亭に宿り、「水雞鳴くと人のいへばや佐屋泊り」。是を立句に、露川、素覽と

蕉の發句は、「寒からぬ露や牡丹の花の蜜」「鶯や竹の子藪に老を鳴く」の二句しか出てない。又素龍齋仝故の芭蕉を餞する餅があつて、中に「思ふぞよいく世の旅に行く人の、とまるも袖は同じ雫に」の解りにくい歌も入つてゐる。（旅に行く人は芭蕉、とまるは自分を指したのであらう）又浄求と呼ぶ僧のことを記した文も載せてある。

深川の邊に浄求といへる道心有り、慧（愚カ）智文盲にして、正直一偏の者也。常に翁に仕へて小さき草の戸を得たり。朝夕芭蕉の茶を煑ること妙也。門人餞別の句を綴るを聞き居て、愚も一句せんといふて、指折り文字を算へて、斯といふ、各〻笑ひあへること止まず。されば（さばれカ）愚なる者の心をはかりて記し侍る。

餞や粽やさらばかしは餅　浄求

芭蕉が例の人を愛したことは、斯樣な逸話にもよく現はれてゐる。特に無智正直を喜んだことは、奥羽行脚の際の日光の宿屋佛五左衞門の例などもある。此の集の序に、芭蕉出立の砌「俳諧を尋ねけるに、翁今思ふ體は、淺き砂川を見る如く、句の形は、心共に輕きなり。其所に至りて意味ありと侍る」とある（此の語に本づいて、諷竹は砂川、宜麥は淺川といふ集を出してゐる）されば芭蕉の晩年の俳風が甚く輕味に傾いたのも、芭蕉自身の本意であつたものとも見える。

第十三節　最後の行脚

桐奚

一人であることは、前にもいうた。「秋風に折れて哀しき桑の弓」。又其角の父東順の傳（俳諧錦繡段、風俗文選八）を書いて、「入月の跡は机の四隅哉」。女木澤(をなぎさは)の桐奚に招かれて「秋に添うて行かばや末は小松川」。此の句は、一説に五年の吟かと云。（桐奚の奚は溪の略字かも知れぬ。一書に桐實とあるは誤りであらう）女木澤は即ち小名木澤（川）で、此の川の上流を小松川といふ由。桐奚は『深川集』に名が見えて居り、素堂亭のなほ上流の邊に住うてゐたものと見える。重陽の素堂亭の菊の宴に「菊の香や庭に切れたる履の底」。又「鞍壺に小坊主乘るや大根引」。曲水が旅館を訪うて、「埋火や壁には客の影法師」。藤堂玄虎の旅館を訪うて「ものゝふの大根辛き噺かな」。暮に「有明も晦日に近し餅の音」。

五十一歳

元祿七年五十一歳の春は同じく深川芭蕉庵に迎へて、「蓬萊に聞かばや伊勢の初便」「梅が香にのつと日の出る山路かな」「四つ五器の揃はぬ花見心かな」「春雨や蜂の巣傳ふ屋根の漏」「木隱れて茶摘も聽くや時鳥」。桃隣が新宅を賀して、自畵讃を贈つた。「寒からぬ露や牡丹の花の蜜」。此の自畵は、『別座敷』に摹寫が載せてある。

炭俵

『炭俵』は此の前後に成つたものを野坡等が集めた書で、七部集中にも入れられてあるが、内容に就いては後編にいふ。

別座敷

『別座敷』は此の年（元祿七）の五月八日に芭蕉の「紫陽花や藪を小庭の別座敷」を立句として出來た歌仙を巻頭に、子珊、桃隣、杉風等の内弟子分の歌仙五巻許と、發句數十句とを集めたものである。中の芭

嵐蘭歿す

「繪は取て予が師とし、風雅は敎へて予が弟子となす」といひ、「され共師が書は精神微に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は、夏爐冬扇の如し、衆に逆ひて用ふる所無し」といひ、「只釋阿(○俊成)西行の詞のみ、かりそめに言ひ散らされしあだなる戲れ言も、あはれなる所多し」「後鳥羽上皇の書かせ給ひしもの(○後鳥羽院口傳)にも、是等は歌に誠ありて、而も哀しびを添ふるとのたまひ侍りしとかや。されば此御言葉を力とし、其の細き一筋を辿り失ふこと勿れ。猶古の人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり」といふあたり、學んで厭はず、人を誨へて倦まざる此の翁の面目が宛らに露はれてゐる。「細き一筋」とは即ち彼の俳諧の根本義である。又「例の次郎兵衛を使として」(とあるから、當時次郎兵衛は芭蕉庵にでも居たものか)別に懇な文を寄せた。其の發句「椎の花の心にも似よ木曾の旅」。(韻塞)又「は一聲の江に横たふや子規」「子規聲横たふや水の上」は此の頃の句かといふことで、芭蕉が此の二句を沾德に批評させて、「水の上」の方に定めたのに對し、許六がいろ〳〵と議論してゐる喧ましい句である。(篇突、俳諧問答)

「高水に星の旅寢や岩の上」(七夕小町が歌を題に)「朝顔や是も亦我が友ならず」「川上と此の川下や月の友」。此の月の友の句は、素堂の事を詠んだものと言傳へられてゐるが、或はさうであらう。素堂は小名木川の芭蕉庵のやゝ上流の邊に住んでゐたのである。(芭蕉庵の位置の項參考)八月二十七日に、門人の松倉嵐蘭が亡せた。芭蕉は深く之を悲しんで誄辭(風俗文選六)もあつた。嵐蘭は其角に次ぐ最古參の

芭蕉らしくない

どうも疑はしいものである。此の歌仙は蓼太が『俳諧未來記』と題して、明和年間に出板したものゝ中に出てゐて、ある貴家(露沾公の家を指したかと云。又冠里公の家とも)の文庫の其角の自筆から寫し取つたものだと序文に書いてある。併し中の芭蕉の付句は、可なりに骨折つて作つてあるが、どうも付方も句振も、芭蕉らしくないやうに思ふ。芭蕉晩年の作には、隨分感服し難い作もあるから、斷言は出來ぬが、「とつぷりと」として、又二句置いて直に「ずんずと」としたあたりや、句風が總じて鄙俗の氣の甚だしい處や、「負軍功者に引いて歸る也」「たしなき(○他事無きにや。或は上方語の少き意にや)風の石菖へ來る」の、あまりに作り過ぎて如何にも拙いことや、「御醫者まじりに伽衆立たるゝ」「女房呼ぶ米屋の亭主若やぎて」の、句柄の氣品を缺いてゐるあたり、どう見ても芭蕉らしくない。特に揚句の處を「榮えよと未來を植ゑし花の蔭、三人笑ふ春の日ぐらし」としたなどは、如何にも餘りに細工過ぎる。蓼太

合點の行かぬ巻

が雪中派で、嵐雪に其角に先だつて脇をさせてゐるなども注意すべきであらう。どうも合點の行かぬ巻である。但し「寢言さへ初瀨籠の無南大慈(其角)豆蒔き仕まふ宵過の東風(芭蕉)」「見盡して蚊帳へ這入る月の友(其角)庵の雜水をすゝる小男鹿(芭蕉)」などは、芭蕉に一寸似てゐるやうである。漫りに疑ふのは、感心すべきことではないが、眞實を知らうと努力する者には、疑ふべきは飽迄疑はねばならぬ。疑はしきを疑ひ僞を僞として始めて眞が顯はれるのである。

柴門辭

五月の初め許六の木曾行を送るとて、「柴門辭」(韻塞、風俗文選一)があつた。中に許六の畫を稱して

寄れ初時雨」。素堂亭の忘年會に「節季候を雀の笑ふ出立哉」。又「鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚」。「初雪やかけかゝりたる橋の上」。「有難や戴いて蹈む橋の霜」。前者は新大橋（兩國橋の舊稱大橋に對した稱）の工事中に詠んだ句で、元祿五年冬の句、後者は其の翌六年橋の竣工（七月）した初冬の句であらう。（武江年表參看）「賴むぞよ寢酒無き夜の紙衾」「月花の愚に針立てん寒の入」又「雪ごとに梁たわむ住居哉」。此の最後の句は、芭蕉の句でないとの説もあり、『一葉集』元祿元年の付合に、岱水の發句として出てゐるが、何れにもせよ芭蕉庵での句であらう。

五十歳

元祿六年五十歳の春は、深川で迎へた。「年々や猿に着せたる猿の面」といふ異説の多い句は、此の春の吟共、五年の吟共いふ。「蒟蒻の刺身も少し梅の花」。（去來に）芭蕉は蒟蒻好であつたと傳へられてゐる。二月珍碩を送つて、「難波津や田螺の蓋も冬ごもり」。（一説に二年）三月内藤露沾公の花見に招かれて「西行の庵もあらん花の庭」。

兩の手に

句選に「草庵に桃櫻あり。門人に其角嵐雪あり」と前書して、「兩の手に桃と櫻や草の餅」の句がある。此の句は、元祿六年の『桃之實』に見えてゐる。（泊船集、或問珍も參看）又『嵐雪十七回忌集』の序（句選年考に引く）にも、前書共に見えてゐるさうである。句の出來た年は五年説と六年説とある。予は此の句は兎に角に、前書に多少の疑ひを有つてゐるが、芭蕉生前の編纂物に出てゐること故、暫く措く。或は芭蕉が老後の慰みにこんな句を詠んだのかも知れぬ。併し此の句を立句の芭蕉嵐雪其角の三吟歌仙は

と自ら云うてゐる。『篇突』に「許六が芭蕉庵の障子に書く時、師雪中の南天を好まれたるは云々」とあるは、新庵の襖に此の頃書いたのであらう。此の頃の句に「名月や門にさし來る潮頭」の句があつた。此の句で、池は大川に續いてゐたものらしいことが想像されるので、庵は前記の如く、池に造り掛けたのである。

又『小文庫』『風俗文選』四等に「閉關說」と題する文が載せてあるが、是も此の頃のものであらう。

(○前略)人生七十を稀なりとして、身の盛なることは、僅に二十餘年なり。初めの老の來れること、一夜の夢の如し。五十年六十年の齡傾くより、あさましくくづほれて、宵寝がちに、朝起したる、寝覺の分別何事をか貪る。愚なる者は思ふこと多し。(○中略)唯利害を破却し、老若を忘れて、閑にならんこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり。出ては他の家業を妨ぐるも憂し。孫敬が戸を閉ぢて、杜五郎(○大和國の隱者と云)が門を鎖さんには。友無きを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫自ら書し、自ら禁戒となす。

朝顔や晝は鎖おろす門の垣

「他の家業を云々」など、此の人の例の遠慮深い性質が、最もよく現はれてゐる。

九月に珍碩(當時大阪住か)が深川の庵を訪ね、翌年二月迄滯在した。『深川集』(後編參看)は此の間に成つたのである。支梁亭の口切に、「口切に堺の庭ぞなつかしき」。許六が旅寓では「今日ばかり人も年

三間の茅屋

たに一庵を營んだ。其の場處は、「猶此(○舊庵の)あたり得立ち去らで、舊き庵も稍近う」(移ニ芭蕉ニ辭)などあるので、舊庵附近であつたことが判る。而して「三間の茅屋つき〴〵しう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸安らかに、葭垣いと厚くわたして、南に向ひ、池に臨みて、水樓となす」(同)とあるので、庵の狀は大凡想像がつく。「池に臨みて云々」とあるから、池も可なり大きなものであつたことも推測し得る。當時芭蕉の名聲は、既に可なり高かつたのであるから、門人達も、新庵は舊庵よりも多少優しに造つてやつたかも知れぬ。それは、舊庵はもつと粗末であつたらしく想像されるからである。

芭蕉を移す

出來揚つたのは、五月半ば頃(同)であつた。入庵の頃に「風流のまことを鳴くや子規(涼葉)旅の草鞋に卯の花の雪(芭蕉)」の一卷(一葉附四ノ五オ)の興行があつた。庵には舊庵の芭蕉を移し植ゑた。「移ニ芭蕉ニ辭」は此の事を記したのである。鄕里から同行した桃隣は江戸に留まり、支考は一度名古屋(?)迄歸つて、五月中旬再び東下し、奧州行脚に旅立つた。

許六の入門

許六が始めて芭蕉に謁して入門したのは、此の年八月で、許六が江戸に出たのは、七月である。許六は豫てより芭蕉を慕ひ、東下の度には、其角を訪ひなどしてゐたが、此の時遂に入門するを得たのである。

予明の年七月、又東武に趣く。此時翁に對面せんことを喜ぶなり。橘町より深川芭蕉庵再興して入たまふ年なり。江戸着の日數經ず。桃隣手引して、八月九日深川の庵を叩き、師弟契約のはじめなり。(俳諧問答)

兎も角も、ならでや、雪の、枯尾華

庵再々興迄

此の冬は、橘町に居たことは「栖去之辨」(後に引く)に明かであるが、又番町に居たともいふ。番町では支考と共に住つたといふ。(削掛けの返詞)橘町は彦右衞門の家(庵の燒失の條參看)に居たのかも知れぬ

元祿五年四十九歲の春は橘町で迎へた。「鶯や餠に糞する椽の先」「起きよ〳〵我が友にせん寢る小蝶」(此の句一說に貞享四年)「衰へや齒に喰ひあてし海苔の砂」など、此の頃の吟である。「栖去辭」は、此の春の頃に成つたものであらう。

風雅の魔神

此處かしこに浮れありきて、橘町といふ處に冬籠りして、睦月如月になりぬ。風雅もよしや是迄にして、口を閉ぢんとすれば、風情胸中を誘ひて、物のちらめくや、風雅の魔神なるべし。家を放下して栖を去り、腰にたゞ百錢を貯へて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情、遂に菰をかぶらんとは。

是等も實情で、例の遠慮深さから、人に厄介をかけまいとし、窮迫の餘、俳諧などは擲たうかと思うたり、乞食的生活をしたりしたのであらう、而してせん方無く門人筋の家などを、やう〳〵に食ひ廻つてゐたのであらう。芭蕉が若し世の常の人であつて、其の名聲を利用する氣があつたならば、何時でも相當に立派な生活が出來たであらう。それをしなかつた處に彼の眞面目がある。「時鳥啼くや五尺のあやめ草」「五月雨や蠶煩ふ桑の畑」(一說に六年)「窓なりに晝寢の臺や竹むしろ」など、此の頃の吟である。

芭蕉庵再々興

芭蕉の舊庵は、奥羽行脚の時人に讓つて出たので、右の如く暫く宿無しでゐたのであるが、此の度新

山」などの方を喜ぶ。しかし佳い句である。

舍を出てから

落柹舍を出てからは、大方京都江州の間を往來してゐたものであらう。「川風や薄柹着たる夕涼み」（四條川涼）「ひら〳〵と擧ぐる扇や雲の峰」（大津丹埜亭）「月代や膝に手を置く宵の宿」（正秀亭）などあつた。

石山の月見？

『西の雲集』に支考の「石山參詣の序」といふのがあつて、是に據れば、此の年閏八月十八日に、芭蕉珍碩支考楚口等、相携へて石山寺に月を賞し、芭蕉に「名月や二つ有ても瀨田の月」の句があつたといふ。（句選年考に依る）「乳麵の下焚立つる夜寒哉」。（曲水亭）

第十二節　最後の江戸住

江戸へ

元祿二年三月江戸を出て、奧州に下り、美濃に囘つてからは、京都江州邊に滯在してゐたが、それから三年目の、同四年冬に、美濃尾張を經て、東海道を江戸に下つた。「尊とかる淚や染めて散る紅葉」（李由が許へ）「百年の景色を庭の落葉哉」。（同）此の行には姪の桃隣と支考とを伴うた。大垣では千川を訪うた。名古屋に立寄つた時、月空庵露川坊が入門した。（削りかけの詞）熱田では梅人亭に宿つたといふことである。「京に倦きて此の風や冬住ひ」（三河新城菅沼氏宅）「夜着ひとつ祈り出して旅寢哉」（鳳林寺）「宿借りて名を名乘らする時雨哉」。（島田塚本如舟宅）十一月初めに江戸に着いた。「都出て神も旅寢の日數哉」。此の句一説に沼津窪田氏亭での吟といふが、句選には「霜月深川の舊草に歸りて」とあり、『陸奧衛』にも東武に赴き云々」とあるから、江戸での句なることは確かである。

諸門人の來訪

杜國を夢む

日記中の句

如何に門人達から、眞の慈父のやうに慕はれてゐたかは、此の邊の記事を讀んでもよく判る。中々骨肉でも是程には行かぬのが世の常である。流石に芭蕉も、此の句は固より、我が住み捨てた舊廬を想ひ出して懷しく思うたことであらう。千那、史邦、丈草、乙州其の他の人々も、訪ねて來た。堅田の李由も又日記には名は見えぬが越中の浪化も此の時始めて面謁して入門したのであるといふ（歷代滑稽傳砥並山序）支考の日記に依れば、支考も訪うたといふが、如何であるか。

憂き我を寂しがらせよ閑子鳥

など詠んでも、人々の訪問やら、消息やらで、一向寂しからぬ樣子であつた。「夢に杜國がことを言出して、涕泣して覺る。心氣相交る時は夢をなす。陰盡きて火を夢み、陽衰へて水を見る云々。誠に此事を夢見るこそ、所謂念夢なれ。我に志深く、伊陽の舊里迄慕ひ來りて（芳野紀行の條參看）夜は床を同じくし、起臥行脚の勞を助けて、百日が程影のごとく伴ふ。片時も離れず。或時は戲れ、或時は悲しみ、吾が心裏に染みて、忘るゝことも無ければなるべし。覺めて又袂をしぼる」とあるなど、杜國を愛し、之を追思すること如何に深かつたかゞ想はれる。杜國は前年の元祿三年に亡くなつたのである。大堰川に舟を浮べた日もある。日記中の發句では、「子規大竹原を洩る月夜」「手を打てば木魂に明くる夏の月」「竹の子や幼き時の繪のすさび」「能無しのねぶたし我を行々子」「五月雨や色紙へぎたる壁の痕」など、多く知られた好句である。「子規」の句は、子規氏なども激賞してゐるが、自分は却て「六月や峰に雲おく嵐

庵中の調度

に歸つた。「予は暫く留むべき由にて、障子つゞくり、葎引きかなぐり、舍中の片隅一間なる所を臥處と定む。机一つ、硯、文庫、白氏文集、本朝百人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集」(松葉集は例の俗曲集の松之葉のことではなく、歌集に此の名の書がある)とあるなども、いづれ皆去來の物であらう。唐の蒔繪を描いた五重の器に、さま〴〵の菓子を盛り、名酒一壺をさへ添へてある。夜の衾、調菜の物共、京から持つて來て、不自由は無い。「我が貧賤を忘れて淸閑を樂しむ」とある如く、芭蕉としては、一代に先づ是以上の贅澤は無かつたであらう。而して是等の調度も、酒食も、悉く去來からの貢であるは言ふ迄もあるまい。去來凡兆は折々訪ねて來た。二十日の夜などは、去來と其の兄の使(?)と凡兆及び其の妻(?)羽紅と、芭蕉と五人して一張の蚊帳の中に寢は寢たものゝ、兎角寢苦しくて眠られぬので、夜半過から皆で起き出て、晝の殘りの菓子など取出して、曉近く迄話し合うたなどは、師弟の情交の如何に濕かであつたか、想ひやるさへ羨ましさの限りである。「去年の夏、凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四箇國の人臥したり。思ふ事四つにして、夢も亦四種と書て捨て」たことなど言出して、互に笑ひ合うた。是等は去來の「落柹舍制札」に「雜魚寢には心得あるべし。大鼾をかくべからず」とあることなど想ひ合されてまことにをかしい。

五人雜魚寢

乙州が江戸から歸るとて、芭蕉の知人や門人などからこと付かつて來た數多の手紙を届けて呉れた。其の中の曲水からの消息には、芭蕉庵を訪ねて、例の隣庵の宗波(鹿島紀行の項參看)に會ひ「昔誰れ小鍋洗ひし菫草」と詠んだことなども書いてあつた。芭蕉が

江戸からの消息共

落柿舍はもと金持の別莊でもあつた

に繋がれ、後身の明りが立つて出獄はしたが、世を果敢無んで遂に亡命し、行方不明になつたといふ。(俳家奇人談)或は和蘭貿易船の事に座したのだともいふ。何れにもせよ才氣の非凡な處があつて、或は其の才氣の爲に謬まられたのかも知れぬ。例の才人杜國と共に、蕉門の二薄命者と謂ふべきである。芭蕉が此の二人を深く愛したことは、「嵯峨日記」を見れば判る。一度凡兆の秀でた作句を閲した者は、何人も其の才高くして運命の拙なかつたことを悲しまずに居れぬであらう。(或人が凡兆の事に就いていろ〱調べてゐるから、其の内には、も少し立入つたことが判るかも知れぬ)

「嵯峨日記」は、此の年(元祿四)の四月十八日から、五月五日迄、半月餘の間、去來の嵯峨の別墅落柿舍に滯在した時の日記である。落柿舍は、同日記に、「昔の主の造れるまゝにして、處々頽破す。中々に造り磨かれたる昔の樣より、今のあはれなるさまこそ、心留まれ。彫せし梁、畫ける壁も風に破れ」云々などあり、又「柚の花に昔忍ばん料理の間」などもあつたり、「色紙剝ぎたる壁の跡」があつたりした處から察すると、誰か金持の別莊か何かであつたのが、後に頽破したのを、去來が買受けたか何かで、自分の別墅にしたものでないかと思ふ。「昔の主」などいふ語からが、去來を指したものらしくない。例の文曉の『凡兆日記』に、もと三井秋風の隱宅であつたのを、去來が廉く買取つたのだとあるが、何か據所があつて記したのかどうか。又或人の話に、舍は小堀遠州の建築で、もと京都に在つたのを、去來の父元升が手に入れて、嵯峨に移したのだとある。(某雜誌)入舍の日には、去來凡兆が訪ねて來たが、夕す

空前絶後の名編

季吟と傳はり、當時芭蕉が預つてゐた有名な鳥羽（一説に鳥羽）の文臺を、江戸深川から態々取寄せて用ひたといふ說もある。但し此の事は例の『花屋日記』（其の項參看）の、去來から芭蕉の兄に遣つた書翰に見えてゐるのであるから、眞僞は判らぬ。どちらかといへば、實らしくない。さ樣な事は先づ措いて、芭蕉の愛弟子去來が、奇才凡兆と共に、畢生の心血を注いで撰集したものであらうから、芭蕉も相應に力瘤を入れたであらう。さうと見えて、第一連句が際立つてよく出來てゐる發句も佳句累々として相連なり、一度繙く者をして卷を措くを知らざらしむるものがある。江戸では其嵐の二大家が居然として構へてゐたに拘はらず、撰集としては、此の右に出るものは無かつたのである。此の集では、『奧之細道』中の句が採り入れられてあるので、一層引立たしめてゐる。

凡兆

　本集中の凡兆の句のことは、後編に改めていふが、凡兆の爲人に就いてだけ一言して置かう。此の人の句は本集中に見えたものゝ外は、數句しか遺つてゐぬが、才氣の餘程優れた人であつたことは、是等の句を見て知ることが出來る。然るに、此の人の事は、芭蕉の『嵯峨日記』に噂が見え、外に芭蕉が此の人に宛てた消息など二三あるのみで、此の前後に芭蕉に接近してゐたことの外には、經歷などもよく判らぬ。妻として才女羽紅を有し（是に就き異説もある）蕉風の最傑作『猿蓑』の撰者の一人となり、集中でも最要の地位を占めてゐる人であり乍ら、行狀の詳しく知れぬといふは訝かしい。もと金澤の人（別號加生は、越人の號の類で加賀の人の義にや）で、京都に出て醫を業としてゐたが、ある罪に座して獄

よ花に五器一具」(一説に五年といふが或は是か)又京では、「京にても京なつかしや子規」「うき節や竹の子となる人の果」。(嵯峨日記へつゞく)

『消息集』に、此の春頃(乙州江戸へ立候云々とあるから、さう想はれる)に、曲水等に遣つたらしい書翰が載せてある。其れに「粟津草庵の事、先は御深切の至、忝存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如レ此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候樣に、御取持奉レ賴候。必これにつながれ、心をうつし過ざる樣の事ならば、如何樣とも御指圖可レ忝候。しばらく足のとゞまる所は、蜘蛛のあみの風の間に〳〵と存候へば、足駄の藏も藏ならず候(?)さすがの御人々、申すもくどく候へば、打まかせ候」とある。芭蕉は必ず人々が、多分何時迄も其の邊に芭蕉を置き度いとの念から、草庵の修理や何かの事も、あまり丁寧にして呉れるので、却て多少難有迷惑を感じたのではないかと思ふ。特に昨年は、幻住庵を修理して、入つたばかりで直に出たといふやうな事もあり、出來るだけ人に迷惑を懸けず、隨つて進退の飽迄自由ならんを欲したのであらう。右の書翰だけで、あまり深入した想像も如何と思ふが、何と無く、そんな風の意味を含んでゐるやうに取れる。

『猿蓑』は、元祿四年の五月に、京の去來凡兆が編輯したもので、發句付合共に芭蕉關係の撰集中では最圓熟時代を代表するものであるから、隨つて古今俳書中の最傑作であるは言ふを須たぬ。芭蕉自身も此の集の出來たのを、非常に喜び、無名庵で始めて此の集を披講する時、細川玄旨法印から、紹巴貞室

何處やら寒き置炬燵

明けて月さし入れよ浮御堂」「名月や潮水に浮ぶ七小町」「病雁の夜寒に落ちて旅寢哉」（堅田）「稻妻や顔の處が薄の穗」（髑骨の讃）「こちら向け我も寂しき秋の暮」（雲竹自畫像の讃）「三尺の庭も嵐の木の葉哉」（大津）「辛鮭も空也の痩も寒の內」「人に家を買はせて我は年忘」（乙州を訪うて）などあつた。又「去ね〳〵と人に言はれても、猶食荒らす旅の宿り、どこやう寒き居心を佗びて」、「住みつかぬ旅の心や置炬燵」（勸進牒）（曲水に對しての句らしい）などは、其のまゝの實境であらう。此の句の前書に、なほ「一日曲水を訪ひ、やくに立たぬ事ども云あかりて、心細く成行きしに、膳所の文とて持て來り、とり〳〵開き見るに」の數語が付いてある。芭蕉の自序かどうか判らぬが、此の時曲水との間に、何かあつたものと見える。其角の「雜炊の名所ならば冬籠」「此木戸や鎖のさゝれて冬の月」は、幻住庵の留守を訪うての句との說もある（袖草紙の如き）が、前者は『猿蓑』に「翁の堅田に閑居を聞て」と前書があるから、江戸での句のやうに思はれる。又後者は『五元集』に「幻住庵にて」と前書があるが、何時の句か明かでない。（其角の再西遊は、みゝな草に依れば、元祿元年秋から、翌年夏にかけてゞある）「堅田に閑居」は李由の寺にでも居候してゐたのか。

元祿四年四十八歲の春は無名庵で迎へて、「大津繪の筆のはじめは何佛」。乙州が東下を餞して「梅若菜丸子の宿のとろゝ汁」。之を立句の歌仙一卷（猿蓑）（一葉附三ノ六九オ）は佳作である。京都に遊んで、相國寺に「鶯に感ある竹の林かな」。嵐山では「花の山二町登れば大悲閣」支考が東遊を餞して、「此の心推せ

八景の大方は遙かに眺め得られる。但だ現今は、周圍の雜木があまりに繁茂してゐる爲に、展望が妨げられる迄である。

庵の其の後

庵は元祿九年(か)に門人等が相議して、膳所に徙した。『有磯海』に「幻住庵を預り侍りければ」と題して「初雪や去年も山で燒豆腐。膳所靈椿」とあるは、庵が國分山に在つた時のであらう。寶永年間に又別保村に徙した。それから醫が居たり、寶山といふ禪老が居たり、千丈和尚のものになつたり、若州の大亮禪尼が住んだり、幾多の變遷があつて、今も形だけは遺つてゐる。

國分山の遺趾碑は、蝶夢が安永二年(或說に明和九年とあるは誤りであらう。蝶夢は繪詞傳に、翁の八十回忌に建てたと記してゐる。碑の年月は今は讀めぬやうである)に建てたのである。(名著文庫本の繪詞傳の幸田露伴氏の序に、蝶夢は「かつて粟津の義仲寺なる芭蕉堂の頹破せるを再建し、又石山の幻住庵を守りしこともありきといふ」とあるが、義仲寺の芭蕉堂は、蝶夢が繪詞傳の終りの處に自ら「蕉翁八十年の昔、おのれ蝶夢造立し」と云うてゐる如く、蝶夢が創建したのであらう。又幻住庵を守りし云々は建碑の事の誤聞でないかと思ふ)經塚碑は、芭蕉の一字一石の寫經を埋めた跡(?)に建てたのであるといふ。支考門の渡邊雲裡坊といふ者が、延享五年に再興したといふのは、此の庵址に建てたのであるといふ。それも永くは遺らなかつたのであらう。

無名庵に歸つてから

木曾塚無名庵に入つた頃の句として、「米呉るゝ友を今宵の月の客」「三井寺の門叩かばや今日の月」「鎖

露骨で、餘韻が無い。「御膳はよいぞ」は、よく前句の匂ひを取つてゐつて、甚だ好いが、「松風ぞ吹く」などは、少々訝しい。こんな胡麻かしたやうな句を、芭蕉が賞したかどうか疑はしい。此の一段は、前にもいふ如く、鬼貫の記事から附會したものでもあらう。但し同書の此の譚の一段は、蕉風の付句の手段を知らんとする者の爲には、多少の參考となる。（なほ芭蕉談のことは、附編にいふ）

幻住庵址は今も碑が建つて遺つてゐる。今の石山電車終點から、西北へ十町餘を行くと、國分村があつて、其處を過ぎ、村を稍〻離れると、所謂「細き流れ」がある。其れを渡ると國分山で、所謂三曲二百歩許を登ると、國分神社卽ち八幡宮がある。其れに向つて左方が卽ち庵址で、「芭蕉翁幻住庵舊趾」と刻した碑（後にいふ）と、外に「先づ頼む」の句碑と、經塚碑（勢田の雨橋扇律等建）とが、やゝ土に埋れかけて立つてゐる。其の後ろの谷間を十步許下りた處に、「とく〳〵の雫」の淸水が、今も澄んだ水を湛へて遺つてゐる。庵記にある千丈ヶ峰は、國分山の後ろの高峰を指すのであらうか。土地の人は今此の峰をセンズと呼んでゐる。三上山も田上山も前に見える。黑津の里は國分村の東南の方に少しく隔つた村である。『東海道名所圖會』に「さゝほが嶽は幻住菴より東の方谷上山（〇田上山）のつゞき也。千丈ヶ嶽といふは、坤の方にして、此ほとりの高山、北千丈南千丈の二峰あり。袴腰は千丈ヶ嶽より一里南にして勢田川（〇宇治川）より西也」云々とある。上出の地名は、何れも庵記に見えてゐるものである。或書には、庵の邊からは琵琶湖の風景はよく見えぬなどあるが、其れは誤りで、木の間から瀨田の橋も、湖も

山庵の雲霧に痛み

の加賀の牧童に與へた書に、「拙者儀、山庵秋至候ては、雲霧に痛候而、病氣障り候故、近日出庵致し、名月過には、何處方へなり共風に任せ可レ申と存候。去乍ら去年遠路に疲れ候て、下血など度々走り、迷惑致候而、遠境羇旅不レ叶候」(消息集)とあるから、八月頃には既に山庵を捨てたものと見える。下血は例の持病で、始終苦しめられてゐたが、此の頃特に劇しかつたのであらう。是から暫らくは、此の邊や京あたりをまごついて歩いてゐたのである。

鬼貫との逸話

前出の『俳諧芭蕉談』に、鬼貫が幻住庵を訪うた時の譚として、こんな事が記してある。「吾に喰はせ」を立句に、芭蕉の老鶯の脇句で、兩吟を始め、半ばに及んだ頃、丈草と正秀とが來た。蕉翁の句に「うす〱と色を見せたる村紅葉」と出たのに鬼貫が「上手も下手も染屋してゐる」と付けた。芭蕉が面白くないと云ふので、「田を刈りあげて馬牽いて行く」と付け直した。まだ面白くないと謂ふので、「田を刈りあげて烏鳴く也」と改めた。それでもと芭蕉が云ふので、鬼貫も持て餘して正秀に讓つたので、秀は「嫁入沙汰のありて耻かし」と付けた。芭蕉がなほ首肯せぬので、最後に丈草が「御膳がよいと松風の吹く」と付けた。芭蕉が始めて莞爾として嘉納した。鬼貫も始めて俳諧の無心所着(萬葉に出でゐて無意味の歌をいふのであるが、後には不即不離の味の付句をいふ)の附樣を知つたと喜んだ。といふのが此の話の大要である。鬼貫の初めの付句は言ふ迄も無く檀林風の取倣付で、だん〲蕉風に近い句に改めてはゐ

匂ひ

るが「其の場」の心付に過ぎぬ。正秀のは「色を見せたる」の趣を「耻かし」に取つたのであるが、あまりに

らう。『俳諧芭蕉談』の鬼貫が同庵を訪うての逸話は、鬼貫の此の記事からでも附會したものと見える。

門人の出入

又『花屋日記』に、芭蕉臨終の際も訪うた由に記してあるが、是も事實かどうか。野徑が「思ふこと紙帳に書けと贈りけり」とて紙張を贈り、之道（後に諷竹と改めた難波俳壇の名士）が、「一袋是や鳥羽田の今年麥」とて、麥粉を贈つたことなども、傳はつてゐる。いづれ門人達の貢ぎで口を糊してゐたこと言ふ迄もあるまい。李由去來の二人に「蒟蒻と柿と嬉しき草の庵」とあるのも、二人から此の品を貰うての句であらう。而して柿は去來、蒟蒻は李由の贈物でもあらう。支考は此の時隨侍して、薪水の勞を取つたといふ（削掛の返詞）が、實否は如何であるか。乙州なども始終來たといふは、ありさうな事である。『卯辰集』に「幻住庵の夕を尋ねて」と題して、「水汲にあとや先やの螢哉」の句が出てゐる。又幻住庵の三字の額は、芭蕉の書道の師北向雲竹の師藤木敦直の子筑後高良山の僧一如が、當時恰も在京中であつたので、請うて書いて貰うたといふ。（庵記）

庵を出る

斯く餘程氣に入つて住うては見たものゝ、弱い身體には、山中の冷氣が適する筈無く、且人里離れてゐる爲に、萬につけて不自由で、恐らくば、第一弟子達から訪はれたり貢がれたりするにも至つて不便であつたので、例の遠慮深い性質も手傳うて、やがて暫くで山を出た。「旅癖や寢冷患ふ秋の山」は、山中の夜風に中てられての句であらう。盆の頃には木曾塚無名庵に移つたものと見え、同庵で（？）魂祭の句（發句集）がある。斯くて暫くは山に歸つたり木曾塚に出たりなどしてゐたのであらう。七月十七日附

景色は見えず蟬の聲」。此の句などは例の人をして懼然として醒めしむるもので、「秋の鳥の人喰ひに行く」などゝ同手段である。此の秋之坊も中々面白い人であつたと見え、臨終の奇拔であつたことが『俳諧世說』に出てゐる。鬼貫の『禁足之旅記』九月廿一日の條に、鬼貫が訪うて、

我に喰はせ椎の木もあり夏木立　　鬼貫

といふ芭蕉の句を初五だけ入れ代へた季の違うた妙な句を詠んだことが記してある。架空の記事ではあるが、當時芭蕉の幻住庵に入つたことが、よく知れ渡つてゐたことを察すべき一例とな



幻住庵跡附近圖

移り來し拙なき身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一度は佛籬祖室の扉に入らんとせしも便り無き風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無藝にして、此一筋に繫がる。樂天は五臟の神を傷り、老杜は痩せたり。賢愚文質の等しからざるも、何れか幻の住處ならずやと、思ひ捨てゝ臥しぬ。

先づ賴む椎の木もあり夏木立

「仕官懸命の地を羨み」は、前にも引いたやうに、一度は俗世間の功名に心を勞したことを率直に告白してゐるものと見るべきである。「佛籬祖室の扉云々」も、一度は佛門に入つて和尚とならうとしたことを語つてゐる。而して「樂天は」以下は、かの曲翠に與へて俳諧の三等を論じた(芭蕉の俳論の項參看)意と全く同じく、樂天老杜の苦索を以て自ら責めたので、抱負と自信とは、自づから其の裏に在りと謂ふべきである。

庵記は、芭蕉の眞蹟も往々傳はり、又眞蹟を板下に上木したものもあり、文句も、少異ではあるが皆同一といふ譯ではない。『眞蹟集拾遺』のなどは、流布の記と大分異つた處がある。それ故、本文は芭蕉生前に出板した『猿蓑』のに依つて置くのが、先づは安全であらう。

加賀の秋之坊が訪ねて來て、二泊した。「我が宿は蚊の小さきを馳走かな」とあるが、實際はどうであつたか、隨分藪蚊に困められたのではないかと思ふ。歸りは麓迄見送つて、無常迅速の意を、「やがて死ぬ

漢文影響

一爐の備へいと輕し

俳諧生活

石山の奥、岩間の後ろに山あり。國分山と云ふ。其の上國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。（〇中略）日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物靜かなる傍に、住み捨てし草の戸あり。（〇中略）鳰の浮巢の流れ留まるべき蘆の一もとの陰頼もしく、軒端葺き改め、垣根結ひ添へなどして、卯月の初め、いと假そめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず、躑躅花咲き殘り、山藤松にかゝりて郭公しば〳〵過ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木啄のつゝく共厭はじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。（〇中略、此の間庵よりの眺望を詳敍してある）かの海棠に巢を營び、主簿峰に庵を結べる玉翁徐佺が徒にはあらず。只睡癖山民となりて、孱顏に足を投げ出し空山に虱をひねりて座す。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫をわびて、一爐の備へいと輕し。將た昔住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物好も無し。持佛一間を隔て、夜の物藏むべき所など聊かしつらへり。（〇中略）木曾の檜笠、越の菅簑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれ〳〵訪ふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男共入り來りて、猪の稻食ひ荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞き知らぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待てば、影を伴ひ、燈を取ては、罔兩に是非をこらす。斯くいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隱さんとには非ず。やゝ病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の

どうしても山に入つた
近古を追懐した
文意である。

幻住庵在庵

何聽くかと、文でいうて遣ると、返事に「紅葉ならば酒をこそ飮むべけれ」と云うて來て、芭蕉を感ぜしめたとある。後に『深川集』をも編してゐる。(其の項を看よ)此の人は後に大阪に住してゐるから、其の地に蕉風を弘めるに少なからず與つて力があつたであらう。是等の外にも撰集を出してゐる。『比左古』は後に七部集中にも入れられた程に名高かつた。(珍碩は珍夕とも書いた)

此の年(元祿三)の夏四月に、石山の奥なる國分山の幻住庵を修繕して其處に入つた。此の庵は、膳所の曲水の伯父に當る本多探山號幻住老人といふ奇人の棲み捨てた跡であつたが、八年前に、老人の逝去した後は、荒壞に委せてあつたのを、此の度芭蕉が借り受け、修理して入つたのである。是より先、二月中に、曲水に與へた手簡に、

幻住庵上葺彼ニ仰付ヶ候由、珍重候。浮世の沙汰少々遠きは、此山の事と、折々の寢覺難ㇾ忘候。露命にかゝり候はゞ、再び薄雪の曙をと彼ㇾ存候。(一葉集等には、雪が雲となつてゐる)

の文句がある。此の時は修理中であつたものと見える。「寢覺難ㇾ忘」は、早く入庵し度く、始終思ひ出してゐるの意で、又「薄雪の曙」は、恐らくは「浮雲の境」などの誤りで、若し入庵して、病氣にでも取付かれたら、再び放浪生活に入らうとの意でもあらうと思はれるが、『三等之文』に載つてゐる眞蹟といふのを見ると、矢張右のまゝになつてゐる。庵に入つた時、有名な「幻住庵記」があつて、『猿蓑』に收めてある。

はなほ山田に居たので、後間も無く大阪に移住したのである。「紙衣の濡る共折らん雨の花」は、此の時の吟との說（袖草紙）もあるが、如何であるか。伊賀に歸つて、花垣の莊を訪ひ、「一里は皆花守の子孫かや」。それから「芋種や花の盛りを賣り歩く」の、土芳半殘等との一卷（一葉附三ノ四八ウ）は此の頃のものであらう。「畠打つ音や嵐の櫻麻」（木白亭）「土手の松花や木深き殿造り」（藤堂喬木亭）

又江州へ

又大津に濱田珍碩（後出）を訪ひ、「洒落堂記」（文集始め諸書に出てゐる）を書いて「四方より花吹き入れて鳰の海」。「木の下に汁も膾も櫻哉」。是を立句の珍碩曲水等との一卷（一葉附三ノ四五ウ）は『比左古』にも收められて、有數の佳卷である。惜春を「行春を近江の人と惜みけり」。しばらく無名庵に在庵した。曲水正秀珍碩支考等の入門したのは、多分此の頃であらう。（幻住庵在庵につゞく）

比左古（瓢）と珍碩

『比左古』（瓢）は、此の年の六月に、江州瀬田の濱田珍碩（洒堂又は洒落堂と號す）が編輯したもので、作者は珍碩を始め、曲水、路通、乙州正秀等の湖畔俳人で、尾張の荷兮越人が之を助けてゐる。此の集で、始めて芭蕉を「翁」と署名し、（芭蕉翁と書いた例は前にもあるが）それから他にも此く稱したものも出たが、其れで芭蕉が後に小言を云うて、其の後の撰集には、必ず翁と書いてはならぬと誡めてゐる。（湖東問答等）序は越人が書いてゐる。收めてあるは連句だけで、發句は無い。集の內容に就いては、後編にいふ。珍碩は、發句はあまり優れても見えぬが、連句は餘程得意であつたらしく、中々考巧な處があつたやうである。支考の『葛の松原』に、ある時芭蕉が（？）「蔦の葉は茶を飲む人を慰めて」を珍碩に如

來が不易の例として擧げてゐる。(去來抄等)それ程太した句とも思はれぬが、所謂寂栞のある句として去來を感服せしめたものと見える。又玄が家を訪うて、「月さびよ明智が妻の話せん」。玄冬の頃、伊賀の長尾峠を越えて奈良に行く途上、

猿も小蓑を

　　初時雨猿も小蓑を欲しげ也

此の句は『猿蓑』の名の由つて出た所で、名高い句である。其角の同集の序に「只俳諧に魂の入りたらんにこそとて、我翁行脚の頃、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、俳諧の神を入れ給ひければ、忽ち斷腸の思ひを叫びけん。あだに懼るべき幻術也」など持て囃したので、一層喧ましい句になつた。

洛江を巡る

奈良では「初雪や何時大佛の柱立」。それから京都に趣く途上「嚴めしき音や霰の檜笠」。京では嵯峨の落柿舍に遊び、(十二月二十四日)鉢叩を見たことがないから、見たいとて、終夜待つたら、曉方になつて來たので「長嘯の塚も巡るか鉢叩」。鉢叩が聽き度いとて寢ずに待つなどは、例の痼癖で、をかしさの限りである。此の時去來に「鉢叩辭」(風俗文選)があり、「箒こせ眞似ても見せん鉢叩」などゝ戯れた。こんな句を讀むと、其の鉢叩といふものが聽き度くなる。臘月の頃、膳所に行き、此處で年を迎へるとて、「何に此の師走の市に行く烏」。

又伊勢伊賀へ

元祿三年四十七歳の春を此の邊で迎へて「誰人か菰着ています花の春」。此の頃伊勢に遊び、園女亭を訪うて「暖簾の奥物ゆかし北の梅」。此の時園女に「時雨てや花迄殘る檜笠」の句があつた。園女は此の時

紀行の文章

瑕疵もある

勢和地方を彷徨ふ

である。此の美濃滯在前後の芭蕉や人々の句を集めたものに、如行編の『後之旅』（元祿八年、追悼を兼ねた集）がある。かの喧ましい不易流行の説は、去來の言に依れば、此の旅行から歸つて後に言出したのだといふ。此の事はなほ後にいはう。

『奥之細道』は、芭蕉一代の大文章であるのみならず、古今の俳文中にも、亦希有の名作である。但し芭蕉は天性が詩人であつた丈に、散文は、文章としては可なりに瑕疵が多い。それだけに亦詩趣が豐富で、無限の感興を藏し、中にも此の文は、特に芭蕉の本色が最もよく顯はれてゐて、雄厚にして又深沈高渾にして又瀟洒な特得の風格は、到底他人の摹し得ざる一種のものがある。其の何處と無く人を引き着ける懷かし味、温か味の裏に、亦何とも言へぬ寂味雅味を含んだ思想と文章とは、蓋し芭蕉其の人の本性から、自づと生れ出たのである。たゞ一篇の長篇の詩である。若し之を單に文章として見る時は西鶴の文章などよりも、缺點が多い。散文としては決して完璧とは謂へぬ。芭蕉の作であるからとて、無暗に完全無缺無上なものゝやうに謂うたならば、芭蕉は却て迷惑に思ふであらう。拱璧の微瑕も、瑕は即ち瑕である。予は芭蕉の作を通じて、其の技倆を、第一連俳、第二發句、第三文章とする者である。尤も瑕疵が多いといふことは、價値に乏しいといふことではない。誤解してはならぬ。

第十一節　江洛地方滯在

外宮の遷宮に「尊とさに皆押しあひぬ御遷宮」。中村では、「秋の風伊勢の墓原なほ凄し」。此の句は去

等載を訪ふ　美濃に入る　記念の紙衾　伊勢に向ふ

迗つた脇であらう）永平寺に詣で、それから福井に入つて、舊知等載（等裁とも。櫻井玄輔門と云）を訪ね、其の家に宿つた。其の侘しげな有樣や、主は不在で、某の許に行つてゐるから、用があるなら其處を訪ね給へと、妻らしい婦の言うた處など、「昔物語にこそかゝる風情はあれ」と床しがるばかりであつた。敦賀では、氣比神社に詣でゝ、「月清し遊行の持てる砂の上」。又此の地で名月を賞して、「名月や北國日和定め無き」。種ヶ濱に遊んで、「浪の間や小貝にまじる萩の塵」。此の日の遊記は、等載に書かせて寺に遺した。路通は此處迄出迎へに來て、相伴うて共に美濃路に入り、大垣の如行が家に着いた。時に九月十三日であつた。斯くて大旅行も茲で一段落を告げたのである。

曾良も伊勢から來合せ、越人は馬を飛ばせて尾州から駈け付けた。前川荊口父子、其の外親しい人々が、日夜訪問して、何れも無事の再會を喜んだ。此の時如行の弟子の鍛冶竹戸といふ者、芭蕉の肩腰を按摩し、芭蕉が最上（新庄か）で得た紙衾を貰うて「首出して初雪見ばや此衾」と喜んだ。曾良は之を「疊み目は我が手の痕ぞ紙衾」と羨んだ。二句共『猿蓑』に出てゐる。（左比志遠理と題する書にも、雪之翁にも、是等に關する記事を輯め、又蓬萊島、本朝文鑑等には「紙衾之記」が收めてある）滯在僅に三日、六日には大神宮の遷宮を拜まうとて、木曾川を下つて伊勢に向うた。「蛤のふた見に別れ行く秋ぞ」。『奥之細道』の紀行は此處で終つてゐる。例の木因を訪うて「隱れ家や月と菊とに田三反」を遺し、又木因の迗別の句「秋の暮行く先々の苫屋哉」に「萩に寢ようか荻に寢ようか」の脇をしたのも、此の美濃滯在間の時

仆れ伏すとも

一夜の隔て千里に同じ

北枝と別る

行き〳〵てたふれ伏す共萩の原　　曾良

の名句は此の時の吟である。此の句後に『猿蓑』に入集の時、初五を「何處にか」と改めて、却て惡くしたやうである。「行き〳〵て」の語が聊か落付かぬ爲に改めたのであらうが、初作の方が好いやうに思はれる。（續雪丸げにも行き〳〵てとしてある）芭蕉の送別の句「今よりは書付消さん笠の露」。曾良を先に立たせたのは、曾良が何か芭蕉の旨に忤うた爲だなどの說もあるが、無論虛傳に過ぎまい。大聖寺城外のある寺（俳諧世說に全昌寺の由ある）に泊つた所、曾良も前夜此の寺に泊つて、

夜もすがら秋風聽くや裏の山

の好句を遺した。信に「一夜の隔て千里に同じ」であつた。此の句も曾良句集中の最佳作の一で、芭蕉の批を經ぬもの乍ら、芭蕉をも驚かす許の名句であるが、是等を爲り得たのも、旅行中に師翁の手硬い陶冶を經た賜であらう。芭蕉も若い僧達に後を逐はれて、「庭掃いて出づるや寺に散る柳」の一句を遺した越前では、吉崎入江で潮越え松を見、丸岡では、舊識天龍寺の長老を訪ねた。北枝は芭蕉を慕ひつゝ、とう〳〵此處迄見送つて來た。松岡の茶店で別れるとて「物書いて扇引割く別れ哉」。（此の句のことに言及した芭蕉から北枝に與へた消息があるが、それに依ると、初作は斯うではなかつたらしい）此の句は北枝の脇「笑うて霧にきほひ出でばや」があつた。（此の脇は、前記の消息に依れば、芭蕉が、目上の人に對して天爾波留の脇は好くないと北枝に返事してゐるものらしい。北枝から芭蕉へ、別れてから書いて

寂しき味な

「白露に寂しき味を忘るゝな」は此の時の句と云ふ。（一説に美濃での譚と云）又同書に、生駒萬子（金澤藩士、八百石取と云）が、芭蕉送別の席に後れたことを哀しみ、裸馬に乘つて後を追駈け、松任で追着いて、白衣一つと金三兩とを餞別として出したのを、芭蕉がどうしても取らなかつた譚も記してある是等は眞僞は判らぬが、萬更の作り譚でもなさゝうに思ふ。

其の他の逸話

又同書に、秋之坊と北枝とが、平生から餘り親し過ぎて、却て爭論が絶えず、芭蕉が來た時などは、特に始終睨み合うてゐた事なども記してあるいづれ金澤は、北國隨一の蕉風根據地であつたから、いろ〳〵な逸話もあつたことであらう。それから小松に出、「しほらしき名や小松ふく萩薄」。之を立句に北枝等と歌仙一卷（一葉附三ノ二二オ）あつた。又觀生亭では「濡れて行く人もをかしや雨の萩」を立句に、一卷あつた。（七月二十六日、一葉附三ノ二五オ）太田神社に詣で、實盛の冑錦の切を見て、「無殘やな冑の下のきり〴〵す」。（初作あな無殘やな）之を立句の、亭子鼓蟾との三吟（一葉附三ノ二七オ）は佳卷である。

山中

山中溫泉では、「山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ」。此の地では、北枝に語つた俳話を筆記したものと傳へられる『山中問答』と題するものを遺した。此の書のことは、附編に別にいふ。此の地での北枝曾良との三吟（卯辰集）（一葉附三ノ二九オ）は有數の名卷である。加賀での付合には、北枝は多く連座してゐる。

曾良に別る

山中で、同行曾良は、腹を痛めた爲に伊勢の長島に便るとて、先に立つた。曾良は曾て長島城主に仕へたことがあるといふから、其等の縁で、長島には知己があつたものと見える。或は云ふ、同地には曾良の叔父の僧某が居たと。

うしてある。又脇は、雪譜には「巻あぐる月」とある。發句脇共、雪譜の方が善いやうに思ふ。なほ雪丸げには、第四迄ある）

新潟の遊女

　市振之關では、伊勢參宮の新潟の遊女に、「行方知らぬ旅路の憂さ、あまりに覺束無う哀しく傳れば、見え隱れにも御跡を慕ひ侍らん。衣の上の御情に、大慈の惠みを垂れて、結緣させ給へ」と縋られたのを、やう／＼に慰め「神明の加護必ず恙無かるべし」と言捨てゝ、茲を立出るとて、「一つ家に遊女も寢たり萩と月」。それから加賀に入つて、

加賀に入る

　早稻の香や分入る右は荒磯海

此の句は『卯辰集』には、前書は「越中に入て」としてある。或は云ふ、越中那古浦での吟と。但し其角の『錦繡段』其の他には加州にてとしてある。『赤草紙』に、芭蕉が此の句を擧げて、若し大國に入つたら、其の心得で詠まねばならぬと示した由である。眞僞は判らぬが、實に氣象雄大、大國に適はしい名句である。又此の途中の吟「赤々と日はつれ無くも秋の風」は、北枝に「秋の山」として示して、其の才を試みたなど傳へられる（頭陀物語）喧ましい句である。金澤に入つて、小杉一笑（金澤の人、茶屋新七と稱すと云。此の人の臨終の狀に就き、其角の雜談集參看）の死を聞き、其の追善に會して「塚も動け我が泣く聲は秋の風」。『俳諧世說』に、金澤の小春亭で一夜俳席のあつた時、山海の珍味を陳ねて饗應したのを、芭蕉が、風雅の本意に背くとて誡め、其の後の會に茶漬を出されたので、大に滿足した譚が載せてある。

いふ寺で、僧を眠鷗というた由、似鳩覺書（句選年考に引く）にある。且「脇は眠鷗の書蹟なり」とあるが雪丸げ等には、脇左栗、第三曾良、第四眠鷗となつてゐる。眠鷗が此の寺の主ならば、此の人が脇をするのが當然であるが、或は役僧でもあつたものか。少不審）に泊つて「文月や六日も常の夜には似ず」（嵐雪の其袋に此の句の前書を「北國何とやらいふ崎に宿りて所の夷も押入りて句を望みけるに」としてある）を立句とした一卷（雪丸げ、奥細道拾遺）（一葉附三ノ二〇ォ、二十句だけ。外に雪丸げ及び一葉同二十一ォに中十三句を缺いた一卷も載せてある）があつた。

直江津での逸話

『祕問集』に、直江津で芭蕉がある寺へ添書を持つて行つて、一泊を賴んだが、斷わられ、竹風といふ者が泊めようといふのを謝辭し、曾良が腹を立てたのを宥めて、其の寺の片隅を借り、一夜を明したことを載せてゐる。芭蕉は佛前に端座し、曾良は次の間に畏まつた狀は、凡人とは見えなかつたとある。（句選年考參看）譚は中々面白く、芭蕉と曾良との面目が躍如として現はれてゐるが、眞僞は疑はしい。右の歌仙などのあつた所から見ても、どうもそんな事があつたらしくは想はれぬが、如何であるか。似た事位はあつたのかも知れぬが、其のまゝには請取れぬやうである。

細井昌庵

又高田では、醫師細川春庵（雪丸げに依る。北越雪譜には細井昌庵一に青庵俳號凍雲とある。句集にも細川春庵とあるのは、雪丸げに據つたのか。又雪丸げに、脇を棟雪一本棟芝ともしてあるのは、凍雲の誤りか。或書に鷺雪とあるのも誤りか）の家に宿り、「藥園のいづれの花を草枕」と詠んだ。春庵の脇「萩の簾をあけかける月」。（雪譜には「藥園の」は「藥欄に」とあつて、句集などもさ

天を支へ、其影映りて江に在り。西は有耶無耶の關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ路、遥かに海北に構へて、浪打入る處を、潮越といふ。江の縦横一里許。俤松島に通ひて、亦異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し、寂しさに悲しびを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施が合歡の花

一書に「象潟の雨や」とあるが、どちらが好からうか。「笑ふが如し」「怨むが如し」は、陽氣な男性的の風色と、陰氣な女性的の風色とを謂うたものであらう。「松島や雄島の磯も何ならず、たゞ象潟の秋の夜の月」(西行)と激賞された此の絶景も、今は全く亡びて、昔の面影は殆ど遺つてゐぬといふことである。其の風景を叙した詩文も少ないから、芭蕉の此の文などは、此の滅びた絶景を文字の上に千載に傳へるものゝ一となららう。美濃國の商人某の「蜑の家や戸板を敷いて夕涼み」(雪丸げには「象潟や蜑の戸を敷く夕涼み」とあるが、例の後に直したのであらう)を賞しなどして、やがて酒田に歸り、暫く逗留した。

酒田を出て、それから北陸路をを歸西の途に就いた。鼠ケ關を越え、越後に入り、海濱に沿うて、池るること九日間、此の間は「暑濕の勞に神を惱まし、病起りて、事を記さ」なかつた。併し新潟では「海に降る雨や戀しき浮身宿」の句が傳へられ、出雲崎(雪丸げ、銀河序、勸進牒)では、

荒海や佐渡に横たふ天の川

の名句を得た。『風俗文選』五に「銀河序」と題する此の句の序詞がある。直江津では、ある寺(聽心寺と

三山の句

鶴ヶ岡酒田

是が所謂三山の句で、氣象高渾並に此の紀行中でも有數の名句である。(三山雅集と題する寶永板の書もある筈。未見)それから鶴ヶ岡に出、長山氏重行の家に迎へられて、俳諧一卷(雪丸げ)(一葉附三ノ一オ)を卷いた。「珍らしや奥を出羽の初茄子」。(初作山を出羽の)川舟で酒田港に下り(赤川を下つたのであらう。或書に最上川を下つたとあるのはいかゞ)寺島令道(彦助)及び醫師淵庵不玉(伊藤玄順)等の許に宿り、各〻俳諧(雪丸げ)(一葉附三ノ一八ゥ)があつた。不玉は支考の『葛之松原』の編者で、又『繼尾集』(元祿五)其の他の撰者である。「暑き日を海に入れたり最上川」。(初作涼しさや)「あつみ山や吹浦かけて夕涼み」。

象潟に遊ぶ

それから今は既に滄海變じて桑田となつた出羽の絶勝象潟に遊んだ。

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひ、砂を踏みて、其際十里。日影やゝ傾く頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として、鳥海の山隱る。闇中に莫作(○摸索にや)して雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色また賴もしと、蜑の笘屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。其朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向うの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありしこと未だ聞かず。如何なる事にや。此寺の方丈に座して、簾を捲けば、風景一眼に盡きて、南に鳥海

んだのである。「集めて早し」の七文字に萬鈞の力があつて、子規氏なども激賞したやうに、雄拔無比の句と謂ふべきである。

六月三日羽黒山に圖司左吉を訪ねた。左吉は露丸（呂丸とも。陸奥衙に依れば、山麓の手向町の宿屋の主人であつたらしい。年四十に足らずして亡くなつたとある）と號し、後江戸に出、芭蕉庵にも逗留し、京都に來て桃花坊で亡くなつた。（笈日記祭ニ圖司ニ）芭蕉は弔句「當歸よりあはれは塚の菫草」を手向け、支考は墓誌（本朝文鑑）（笈日記祭ニ圖司ニと少異のみ）を爲つてゐる。『炭俵』に「哀しさの胸に打込む枯野哉」の悲痛哀切の句を載せて「羽黒亡人呂丸」と署名してあるのは、『猿蓑』に、「芥子の一重」（前出）を「亡人杜國」として載せてあるのと似て、句も共に何と無く死の影を伴うてゐるやうな趣がある。偖此の左吉の紹介で（？）別當代の會覺阿闍梨に謁し、旅情を勞はられ、四日には俳諧一卷（雪丸げ、花摘）（一葉附三ノ一五ウ）を興行した。「有難や雪を馨らす南谷」。（初作雪をめぐらす）會覺の送別の句「忘るなよ虹に蟬鳴なく山の雪」芭蕉の脇「松の繁みをかへりみ日月」（一葉集等）などもあつた。それから他の二山を巡拜した。

羽黒山に登る露丸

三山巡拜

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峰幾つ崩れて月の山
語られぬ湯殿に濡らす袂哉

わり無き一巻

それが川を下つて白絲之瀧(大石田よりも遙か下流にある)など過ぎた條の後に出してあるのは、單に、前に置くべきを、川の勢などを記す前に、先づ其れを詠んだ句を置くのが妙でないからに過ぎまい。此の例は芭蕉の紀行中に往々ある。因みに云ふ、『菅菰抄』の大石田の條の注に、「此時翁は大石田の川向ひの新庄といふ城下に至り、所々に俳諧あり」とあるのは、甚だ訝かしい。又湖中の『芭蕉略傳』に「新庄の山形町風流亭」としてあるが、新庄に山形町といふ字でもあるのか、不審である。又『雪丸げ』に、「盛信亭にて」と前書して、芭蕉の「風の香も南に近し最上川」を發句とした第三迄が收めてあるが、是も大石田での作であらう。(桃隣は、立石寺には立寄らずに、尾花澤から直に大石田に出、最上川を下り立石寺の方には、後で廻つてゐる)

兎も角も最上川を下らうとて、大石田に日和を待つ内、所の篤志の人々の懇望に任せ、所謂「わり無き一巻」(無理に望まれて、已むを得ずに相手になつて詠んだことをいうたのであらう)を殘した。而して「此度の風流爰に至れり」などをかしがつた。(此の語を蕉風宣傳の爲に喜んだ意に解くのは如何かと思ふ)

五月雨を集めて早し最上川

初作は「集めて涼し」としたやうであるが、「早し」と改めて、尋常な句が希有の名句になつた。此の句が右の興行の發句で、前述の如く、川を下る前に、其の所謂日本三急流の一の滔々たる水勢を眺めて、詠

大石田さ五月雨の句

て返」すことにもなる。錦江の『奥細道通解』にも「象潟へ趣かんとす。故に尾花澤より取て返しとは記されしなるべし。再び山形に至るにはあらざるべし」とある其の通りであらう。且言ふ迄も無く「五月雨」の一巻は『雪丸げ』に「大石田高野平右衞門亭にて」(後にもいふ)とあるのが正しいので、是が紀行の本文に「大石田といふ所に日和を待つ云々。わり無き一巻殘しぬ」とあるものに相當するのである。一榮が大石田の人であることは、大淀三千風の『行脚文集』にも「羽州大石田鷹野氏一榮」(高野、鷹野どちらが正しいか)とあるので確かであらう。(句選年考にも「或行脚の者云、大石田の住只狂と云者所持の翁眞蹟に、五月雨を集めて涼しとありとぞ」とある)又「五月雨を」の句は、最上川を舟で下つた段の後にあるが、無論舟に乘らぬ前の句でなければならぬ。が



〔一葉附三ノ一一オ同一二ウ〕を得た。それから立石寺（山寺）に詣で、「閑かさや岩に沁み入る蟬の聲」

出羽に入る前後の道筋

さて此の前後の道筋を『奥之細道』の本文から推すと、先づ前述のやうになる。即ち平泉から鳴子を經尿前之關にかゝつて、出羽に越し、それから先づ新庄に入つたものゝやうである。『雪丸げ』に前出の「御尋ねの」の卷を「新庄風流亭」としてあるのが先づ一證である。それから、紀行の本文から考へても『大日本地名辭書』にも云うてゐるやうに、「奥之細道に、出羽の國に、大山を隔てゝ、道定かならずとあるは、小國より最上への嶮岨、瀬見龜割の山路」で、此の山路を越えた處は即ち新庄（本文に「最上の庄」とあるのが新庄を指したのであらう）である。『陸奥衛』に依れば、後年天野桃隣（芭蕉門、前にも出した）も亦此の經路で進んでゐる。桃隣は大抵芭蕉の辿つた路を辿つて歩いたのである。同書に關屋とあるのは、言ふ迄も無く新庄の關屋であらう。それから芭蕉は、知人の清風を尾花澤に訪ねたので、是も自然の順路である。

新庄には寄つたが山形には寄らぬらしい

然るに、それから立石寺へ行く條に、「尾花澤より取つて返し」とあるのが、聊か紛らはしい書き振である。新庄から南下して尾花澤と來れば、立石寺は山形附近であるから、なほ南で、「取て返す」必要はないのである。加之、此の時芭蕉は山形にも立寄つたと言傳へられてゐたと見え、「五月雨を集めて早し」（後出）を立句とした一卷を蓼太の『奥細道拾遺』には「山形町にて」と前書してある。それで事に依ると、紀行の本文から、山形に立寄つた條がどうかして脱けたのでないかとも考へられるが、どうもさうではないらしい。仙臺から平泉を經て來たのであるから、仙臺の方から大きくいへば、「取つ

森は今も木深く見えたり」と、見たやうに書いてゐるのは、訝かしい。但し又天野桃隣は、岩手山町に回り、岩手の關茲なりなど云うてゐるから、芭蕉も此の町に回つたかも知れぬ。且古歌の岩手は悉く此の地との俗傳などもあつたのかも知れぬ）小黑崎、美豆の小島、（二名所共鍛冶谷澤附近）鳴子を經て、尿前之關（跡は今の鳴子驛の西二十町にあると）にかゝり、封人（堺守）の家に宿り、風雨に障げられて、三日間空しく逗留した。「蚤虱馬の尿する枕もと」。

出羽に越ゆ

それから出羽に越えて、先づ新庄に風流といふ者を訪ね、風流の「御尋ねの我が宿狹し破れ蚊帳」を立句に、歌仙一卷（雪丸げ、奥細道拾遺）（一葉附三ノ九オ、佳作）又別に、芭蕉の「水の奥氷室尋ぬる柳かな」の發句で、第三迄もあつた。

尾花澤

それから最上街道を南下して、尾花澤に出、鈴木清風を訪ひ、其の家に逗留し、暫く旅の疲れを醫した。清風は「富める者なれども、志卑しからず。都にも折々通ひて、流石に旅の情をも知」る者であつた。（清風は、延寶九年後雙六を編し、桃靑の「蜀魂招くか」の句一句だけを入集させてゐる。其の他にも選集がある。芭蕉とは親交があつた。「涼しさの卷」の清風も、此の人か菅菰抄附錄に、清風が蕉風に歸した逸話が載せてあるが、事實に合はぬ點もある）「富める者なれども」とは聊かの冷語と謂ふべきである。芭蕉の「涼しさを我が宿にしてねまる也」（ねまるは越後邊では座るの方言であるが、之を寢る意に用ひたのは長唄「越後獅子」はじめ、例が多い。多分誤用であらう。但し尾花澤地方で寢るをかくいふ由、句選年考に辯じてゐる）及び清風の「起臥の云々」を立句に、歌仙二卷

宿貸す家の無いのに困つたが、やう〳〵貧家を頼んで、一夜の雨露を凌いだ。翌日は袖之渡、尾斑之牧眞野之萱原など餘所目に見つゝ戸伊摩（登米で、石之卷から北上川に沿うて辿つたのであらう。本文に心細き長沼に添ひてとあるは、今もある長沼ことではなくて、北上川沿岸の沮洳地を云うたものと見える。ある註釋に長沼は佐沼に近き處云々とあるが、それでは道順が合はぬ。或は芭蕉の記憶が前後したのであるか）に一宿した。而して明けて三日目に、辛くも目ざす平泉に辿り着いた。やがて中尊寺を拜觀し「三代の榮耀一睡の中にして、功名の一時の叢とな」つた跡を徘徊しつゝ、名句

夏草や兵共が夢の跡

を遺した。句は杜甫の國破山河在、城春草木深に依つたものであるが、亦別に杜句などに得られぬ妙味がある。光堂では「七寶散らされて珠の屛風破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに圍ひて、甍を覆ひて風雨を凌ぐ。しばらく千歳の記念となれり」（金色堂の套堂の建てられたのは正應元年と云。茲に新たにとあるから、元祿頃に修繕でもしたものか）と感歎した。それから「南部道遙かに見やり」つゝ、岩手の里に宿つた。（岩手は岩井の誤りかも知れぬと思ふ。今の岩手山町のことかとも思はれるが、其處は順路に當つてゐぬし、又「南部道遙かに見やりて」から續く文勢上岩井邊が適はしい。他には其の邊に岩手の名は見えぬやうである。菅菰抄に、岩手の里には岩出山岩手の森岩手の關など何れも古歌あり。など注してゐるのは、陸中岩手郡のと間違へたのらしい。しかし「岩手の

ゐるといふに、延寶は洞巖の二十歲から二十五歲頃に當り、此の人が晩學で、中年以後から學に志したといふことゝやゝ合はぬやうである。芭蕉の見た元祿二年は、洞巖が學に志したといふ三十六歲の翌年である。兎に角芭蕉の記事が、西鶴の同年刊行の『一目玉鉾』の記事と共に、同碑に關する明確な記事の最古のものとして、學者に引用されるに至つたのは、奇とも謂ふべきである）野田之玉川沖之石、末之松山も見遺さず、やがて鹽釜の浦に出た。明神に詣で、泉三郎が寄進の寶燈を珍らしと見、其處から舟を假りて松島を巡覽した。

松島

抑も、事古りにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に恥ぢず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたゝふ、島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波にはらばふ或は二重に重なり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり。兒孫愛するが如し。松の綠細やかに、枝葉潮風に吹き撓みて、屈曲おのづから撓めたるが如し。其氣色窅然として、美人の顏を裝ふ。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。

斯くて曾良には「松島や鶴に身をかれ子規」の句があつたが、芭蕉は吉野の時と同じく、口を閉ぢて一句も無かつた。

途に迷うて石之卷へ

それから陸中を志して進んだが、茲で途に迷うて、方角違ひの石之卷に出た。金華山を海上に眺め、

持病を起す

仙臺に入る

多賀城碑

繼信、忠信が跡を訪ねて、涙を落し、傍なる古寺で、義經の太刀、辨慶の笈などいふ物を覽て、飯塚溫泉に一浴し、蚤蚊に攻められて、持病さへ起しだ。「遙かなる行末をかゝへて、斯る病覺束無しといへど羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、是れ天命なりと（○所謂「古人も旅に死せるあり」と覺悟したのは、茲のことであらう）氣聊か取り直し、道縱橫に踏んで、伊達の大木戸を越」した。白石城を過ぎて、笠島郡に入り、實方中將の塚は餘所乍ら眺め過ぎて、「笠島は何處五月のぬかり路」。（笠島は、一に笠島やに作る。はの方優るか）岩沼に武隈の松を見、擧白（草壁氏、芭蕉門、虛栗等の作者）の餞別を受け、名取川を渡つて、仙臺に入つたのは、恰も端午の日であつた。或書に、芭蕉が仙臺であまり歡迎されなかつたのは、是より先、大淀三千風が巡つて、其の根を据ゑて置いたからであるとあるが實否は如何であるか。四五日逗留して、附近の名所を巡り、畫工加右衞門といふ者から、松島鹽釜の繪圖と、紺の染緒の草鞋二足を餞別され「さればこそ風流のしれ者、是に至りて其實を顯はす」と驚悅したそれから十符（符はアテ字）の菅菰を一見し、多賀城碑を訪うて「行脚の一德、存命の悅び、羇旅の勞を忘れて、涙を落すばかり」に感喜した。（此の碑に就いては、近來僞作說と非僞作說とが出、學者は多く僞作說に傾いてゐるやうである。但し佐久間洞巖が仙臺侯と共謀して僞作したとの說には、多少の不審がある。新井白石の『同文通考』に此の碑の發見されたのは、萬治寬文頃だとあるのを實とすると、洞巖の十歲未滿の頃に當つてゐる。是を白石の傳聞の誤りとしても、延寶の記錄には此の碑の事が見えて

白河之關を越ゆ

栗の樹蔭の僧

青楓(角左衞門)が家に宿つて、「落ち來るや高久の宿の子規」。夫の噴ましい「芭蕉行脚之掟」は、僞作らしく思はれるが、後に此の家から出たと傳へられたものである。(隨齋諧話)此の家は今も連綿として存つてゐると云ふ。蘆野といふ處で、西行の「清水流るゝ柳」(諷物の俗説に據つた古蹟)を見て「田一枚植ゑて立去る柳哉」。淨法寺氏の弟桃翠(鹿子畑善太夫、陸奥衞等 據れば、桃翠は翠桃の誤りで、又兄は桃雪と號したらしい)の亭で、芭蕉の「秣負ふ人を栞の夏野哉」を立句に歌仙一卷(陸奥衞)(一葉附三ノ四オ)あつた。白河の關にかゝつて、曾良に「卯の花をかざしに關の晴着哉」の句があつた。須賀川では等躬を訪ねた。等躬は相樂氏、通稱伊右衞門(雪丸げ)須賀川の驛長で、嘗て江戸に出て俳諧を石田未得に學んだ人であるといふ。白河の關如何越えられたかと問はれて「風流の初めや奥の田植唄」。此の句の「風流」を普通名詞に解するのは當らぬやうである。故子規氏などは、さう解して、此の句を貶してゐるが、或説(説叢の如き)のやうに、諷物の名と解するが穩かで、さう解せぬと、意味がよく通らぬかと思ふ。此の句を立句として、歌仙一卷(袋表紙、雪丸げ、奥細道拾遺)(一葉附三ノ六オ)を遺した。此の宿の傍に、栗の樹蔭を賴んで世を厭ふ奇僧可伸〔仲イ〕(一葉集)といふ者があつた。「隱れ家や目立たぬ花を軒の栗」(奥之細道には「世の人の見付けぬ花や軒の栗」とあるが、後に改めたのであらう)を立句として、歌仙一卷(伊達衣)(一葉附三ノ七オ)あつた。淺香の沼に花がつみを尋ね、二本松を右に、黑塚を一見し、福島から、忍ぶ文字摺の石を尋ねて、「早苗取る手元や昔忍ぶ摺」。(初作早苗つかむ)丸山といふ處に、佐藤

前途三千里の思に、先づ胸を塞がれたとは、此の度は知らぬ地への長旅であるから、さもあらう。「行春や鳥啼き魚の目は涙」。其の夜は草加に宿つた。初めての奥州旅行とて、未だ見ぬ境を踏む嬉しさに、心は浮き立ち乍ら、身輕には出立つたものゝ、夜の用具の紙子一衣、浴衣、雨具、墨、筆、餞別の品々などが、荷物になつて、疲骨の肩を惱ました。

日光より那須野へ

下野に入つて、室の八島に詣で、日光を拜して「あら尊と青葉若葉の日の光」。佛五左衛門といふ者の家に宿つて、主の無智無分別な正直偏固を喜んだ。黒髪山では、曾良が「剃り捨てゝ黒髪山に衣更」と詠んだのを、「衣更の二字力ありて聞ゆ」と評したのは、髪剃り捨てゝ、新らしい生涯に入らん衣更だからである。裏見の瀧を見、それから那須野にかゝつて、黒羽根に出た。此の途中で、農夫の馬の脊を借り、此の老馬に導びかれて、野を越えた。馬方代りに跟いて來た二人の稚子の內、一人は少女で、名を「かさね」と云うた。「かさねとは八重撫子の名なるべし」。黒羽根の城代淨法寺某(大關家の家老と云)の家に暫く滯在し、玉藻前の古墳を見、那須八幡宮に詣でなどした。

佛頂和尚の庵跡

光明寺、雲岸寺も巡拜した。雲岸寺には、例の佛頂和尚(修禪の項參考)山居の跡があつて、其處の岩石に「竪横の五尺に足らぬ草の庵、結ぶも悔やし雨無かりせば」と、松の炭で書き付けられたと、豫て聞いてゐたので、其れを見に行つたのである。「啄木鳥も庵は破らず夏木立」。なほ句鑑等には此の時の句「留守に來て棚さがしする藤の花」が出てゐるから、當時も此の庵に佛頂は居たのであるが、恰も此の時は不在であつたのであらう。殺生石を見に行く途上、「野を橫に馬牽き向けよ時鳥」。高久の宿では、

漂泊の思ひ止ます

れ、春立てる霞の空に、白河の關越えんと、そゞろ神の物に憑きて、心を狂はせ、道祖神の招きに會ひて、取る物手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒着け替へて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

草の戸も棲みかはる代ぞ雛の家

玆に「人に讓り」とあるは、支考の『笈日記』に「俗なる人に讓りて」とある。或は右の「雛の家」の句に依つて、雛屋に讓つたとの說もあるといふ(菅菰抄)が、如何であるか。此の後更に江戸に出た時に、其の附近に別に新庵を營んだのである。(後にいふ)杉風が別墅とは、言ふ迄も無く平野町の採茶庵のことであらう。

放浪癖

芭蕉は古への宗祇や西行と等しく、強い漂泊性を有つた詩人であつた。「片雲の風に誘はれて漂泊の思止まず」、旅に出ようと思ひ立つと、早「そゞろ神の物に憑きて」矢も盾もたまらず、居ても立つてもゐられぬやうな天性の人であつた。『去來抄』に、芭蕉の「蓬萊に聞かばや伊勢の初便」を評して、「神代を想ひ出でゝ、便聞かばやと、道祖神の早胸中を騷がしたまふかとこそ承はり侍れ」など云うたのも、善く芭蕉の性癖を會得しての言である。庵を人に讓つた所を見れば、何處でも行たふれる用意のあつたことがよく察せられる。草の戸を發句に、表八句(今傳はてゐぬやうである)を庵の柱に懸け置いて、彌生の

千住迄送らる

二十七日の早曉、江戸を出た。千住迄は舟で、人々に見送られ、玆で舟を捨て、やがて人々と別れた。

栗』(貞享四年)に、芭蕉の「君火を焚けよき物見せん雪丸げ」は對二友人一と前書してあるが『雲丸げ』(後にいふ)には、當時曾良は芭蕉の附近に棲んでゐて、折々來ては薪水の勞を助けた頃の句とある。此の度の奥州行脚に伴ふことゝなり、旅立の曉に、剃髪して墨染に身を更へ、名を宗悟と改めた。(奥之細道)曾良の歿後、其の反故の中から、姪の周德(信州の人と云ふ。曾良の郷里の人か)といふ者が、拾ひ出して輯めた『雪丸げ』(元文二年刊)は、大部分此の旅行中に得た句共を收めてあるから、『奥之細道』と併せて一讀せねばならぬ。又柴立園莎青の輯めた『奥細道拾遺』(寛保三年寫本、板本もあるか)は、紀行に洩れた句なども集めてあつて、便利である。又蓼太の輯めた同名の書(延享元年刊)もあるが、是は誤りが多い。又芭蕉の姪で且其の愛弟子の一人であつた天野桃隣の『陸奥衛』(元祿十)は、桃隣が芭蕉の奥羽行脚の跡を辿つて歩いた紀行を骨子とし、芭蕉の句なども收めて編述したもので、是は必ず參考せねばならぬ重要な資料である。又梨一の『奥細道菅菰抄附錄』も參考になるが、此の書のことは附編にいはう。

此の紀行の發端は、宗祇の『筑紫紀行』の發端と、骨氣のよく似通うた處があつて、其等から脱化したらしく思はれる點もあるが、要するに芭蕉獨得のものである。

月日は百代の過客にして、行き代ふ年も亦旅人也。船の上に生涯を浮べ、馬の口捕へて老を迎ふる者は、日々旅にして、旅を棲處とす。古人も旅に死せるあり。予も何れの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮

奥羽行脚は芭蕉一代の旅行中の最大旅行であつた。元祿二年四十六歳の三月下旬江戸を出、奥州街道を日光に、それから那須、白河關、二本松、福島、白河、仙臺、松島、平泉を經て、出羽にまはり、新庄、出羽三山、象潟、酒田等を巡つて、越後にかゝり、海岸通りを越中に出、加賀越前を經て、九月三日美濃の大垣に着いた。日を費すこと五個月餘、行程大凡六百餘里であつたといふ。是には紀行文『奥之細道』があつて、芭蕉が素龍に淸書させて置いたものを、芭蕉歿後大阪の客舎で其角が芭蕉の眞蹟本を以て校正して上木したものであるといふ。但し支考の『古今抄』には、素龍淸書本を、芭蕉歿後六年の秋に、去來が奉行して出板したものだとある。どちらが實を得てゐるのであるか。是が即ち普通本である。此の外其角自筆の同書といふを板下にして、老鼠堂永機が註を加へて明治十八年に出した本もある(此の書の永機の注は誤りが隨分多い)又『百家交筆奥之細道』(文化十二年板)もあるが、是はテキストとしてよりは、裝飾的に面白いものである。注も新古いろ〳〵あるが、事實や地理などを間違へたものが多く、あまり參考にはならぬ。

此の行脚に同行したのは、河合曾良(句選年考の頭書にソラウと訓むべしとある)で、曾良は信州の上諏訪表上町の人、初姓岩波氏、庄左衞門正字と稱す。寶永七年五月二十二日壹岐勝本にて歿す。年六十二(曾良五十回追善乞食嚢)通稱惣五郎武家の浪人(『鹿島紀行』とあるは、江戸に出てからの事であらう。(句選年考の頭書に、小日向築土下武家に奉公すとある。江戸で武家奉公し、後浪人したものか)『續虚

失敗の撰集

此の集が、蕉風の特色たる、閑寂幽遠の趣をよく現はしてゐるなど論じてゐる。しかし是等は、此の集を餘りに重く見過ぎたので、實は撰集としては、確かに失敗のもので、内容の整頓から謂へば、或は『續猿蓑』にすら劣つてゐぬかと思はれる程である。『冬之日』等は、蕉風の最も華やかな時期を代表してゐるので、純蕉風からすれば、聊か調子に乗り過ぎたやうに思はれる處もあるが、それにしても、蕉風の際立つた特色をよく現はしてゐて、他流などでは、迚も及びもつかぬ處があるが、此の集は、其の樣な特色に甚だ乏しい。句は蕉門の宏量を示さうとでも思うたものが、貞室、信德、季吟、さては宗鑑守武玄旨法師、まだ〳〵宗祇迄も取込んだのも好いが、其等の人々の句は、何れも古風の、蕉風とは似ても似つかぬものばかりである。

連句は深川之夜の外は見るに足らぬ

それから連俳も、越人芭蕉兩吟の「深川之夜」一卷を除けば、駄作ばかりで『冬之日』と風は異ふといふものゝ、總じて甚く劣つてゐる。要するに此の集は、蕉風の特色を飽迄發揮しようとか、維持しようとかいふ意氣と誠意とに乏しく、徒らに句數や作者の多きをのみ貪つた爲に、特色の無い、雜駁にして散漫なものとなり了つたのであらう。たゞ芭蕉の『笈之小文』中の句を收めてあるので、聊か寂寞を破つてゐる迄である。なほ内容に就いては、別に後編にもいはう。兎に角七部集中では、最も拙い集め方をしたものゝやうに思はれる。編纂の體裁だけは可なりに整うてゐるが、肝腎な處は體裁よりも内容に在る。

第十節　奥羽行脚（奥之細道紀行）

には、最後の江戸住の頃に成つたものらしく記してゐる。又『枯尾華』最後の行脚の條には、伊賀の故鄕に庵を構へ、三日月日記有り」とあるが、是に依ると、晩年の頃のものゝやうに聞える。又或書には、三日月日記は伊賀にある由翁遺狀に云々などゝもある。どうも合點が行かぬ。支考のは「三日月」の名は集中に三日月の句が主要を爲してゐるからのやうにしてある。而して「涼しやほの三日月の羽黑山」の吟を始め、元祿四五年頃迄の句をも入れてあるから、是より後のものといふだけは確かであらう。鄕里で云々の書と、是との關係は、どう解釋すべきであるか。又此の一書には、彼の素堂との和漢が出てゐるが、是を『句選年考』は、貞享三年に仕懸け、元祿五年夏滿尾したのであらうと云うてゐるのも、聊か覺束無い。どうも支考の編纂でないかと想ふ。

貞享五年は九月に元祿と改元、明ければ元祿二年四十六歲の新春は、深川の草庵で迎へた。「敍盧にて賑ふ春や庭竈」。此の春奥州行脚に出かけたのである。

『曠野』は、此の元祿二年の三月に、名古屋の櫨木堂荷兮の編輯したものである。此の集の芭蕉の序に『冬之日』も『春之日』も、此の地で出來たものであるが、「寶にや衣更着の彌生の空の景色、柳櫻の錦を爭ひ、蝶鳥の己がさま〴〵なる風情につきて、聊か實を傷ふものもあればにや、絲ゆふのいと幽かなる心のはしの、有るか無きかに辿りて」道しるべしようとて、此の集を編んだのであらうとあるので『冬之日』『春之日』が、聊か浮華に流れ過ぎたので、此の集を出させたのであらうなどいふ者もある。而して

盗人に遭うた夜もあり

三日月日記

曾の疲もまだ癒らぬに後の月」など、當時の句であつた。「冬籠り又寄り添はん此柱」は、舊庵に閉籠つての句であらうが、面白い。「朝夜さを誰松島ぞ片心」などあつたのは、此の時既に松島の遊を思立つてゐたのであらう。「二人見し雪は今年も降りけるか」は越人への消息中に書いてやつたものとある。門下に對してのものなど、皆此の類で、哀々たる眞情を動かしてゐる。「盗人に遭うた夜もあり年の暮」は、芭蕉の句例から推せば、必ず自身の實歴を詠んだもので、盗難か盗人か、どちらかに嘗て遭うたことがあつたに違ひあるまい。『師走帒』に、昔は財寶を身に從へたゆゑ盗に逢うたこともあるが、今は世捨人で、盗まれる物も無いとの樂境を詠んだと解してゐる。此の解の當否は兎も角も、芭蕉は實歴以外は殆ど詠まなかつたのである。(後編參看)『一葉集』(句鑑等にも)に「大年の夜盗みにあひて」と前書して「梅干に通ふ黄鳥あはれなり」の句が出てゐるが、或は此盗難の事でも想うて詠んだのかも知れぬ。詩人高野蘭亭が、此の句の軸を床間に掛けて置いた譚が、何かに出てゐた。

三日月日記は、元祿の始めの頃、深川の庵中で、素堂の序文で、芭蕉が撰集しかけたのを、偶〻奥州行脚に出た爲に、其のまゝにして置いたが、旅行から歸つた後、圖司呂丸(奥州行脚の條參看)が、深川の庵に訪ねて來て、此の草稿を行脚の記念に貰うたのを、呂丸歿前に故郷に送つて置いたのだといふことである。それを出羽の竹江といふ者が持傳へたのを、享保年間になつて上木したのである。是には上記の意味の蓮二(支考の假名)の序があつて、支考の細工らしく思はれる處がある。素堂の序といふもの

誤りかも知れぬ。（猿蓑の如き撰集は、皆芭蕉が自ら監督したものゝやうにいふのは誤りらしく、芭蕉はあまり立入らなかつたものらしい。さう想はれる證跡はだん／＼ある）湖中は「信濃路を過るに」は「儲て書たまひしもの歟」（芭蕉略傳）と云うてゐるが、無理に冬の句とせぬでも可からうと思ふ。芭蕉が前書を假に設けて書くなどいふは、有り得べからざることである。或は（雪散るや）は、雪と散る薄の穂の譬とも思はれぬこともなからうが、無論實際の雪を詠んだものとせぬと、句の興味の大部分を減殺してしまふ。然るに、茲に又一説がある。『眞蹟集拾遺』に、此の句を出し、前書に「深川草庵亡甲信遊行、信濃を過ぐるとて」とあるので、沼波氏の『芭蕉全集』には、此の句を天和二年の作としてゐる。芭蕉の眞蹟とあれば、疑ふべきではないかも知れぬが、句の風調はたしかに天和頃のものではない。且是程の名句が、詠んでから十年間も何の集にも出なかつたといふも訝かしさの極みである。且「芒の刈殘し」の語も、前述の如く、なほ芒の刈殘しが靑く殘つてゐる狀のやうに想はれる。旁〻此の眞蹟は疑問の餘地があるであらう。

一異説

第九節　第三次の江戸住

歸庵後の半個年

江戸に歸つたのは、八月末か九月の初頃であらうから、僅かに半年ばかり江戸に居て、それから奥羽行脚に出かけたのである。歸庵當時は、庵での又は人に招かれての頻々たる會席に、旅の疲れを休める暇も無かつたらしい。十日素堂の觀菊宴に「いざよひのいづれか後に殘る菊」十三夜會に芭蕉庵の「木

江戸に歸る

善光寺に詣でゝ「月影や四門四宗もたゞ一つ」。淺間山を過ぎて「吹飛ばす石は淺間の野分哉」。越人を伴うたまゝ、秋もやゝ末に近い頃であらう、江戸は深川の舊廬に歸り着いた。路通智月尼等は、此の旅中に入門したのであらうといふ。素堂の「芭蕉庵に歸るを喜びて寄する詞」(素堂文集)は「五十三驛再び往來す。茶の羽折思へば主に秋も無し」などあるから、此の時のであらう。『甲子吟行』の時も、此の度も、其の好みの茶の羽織を着て歩いたので、「離婁の明も色を判つに由無」き迄に、色が褪めたものと見える。頭を丸めて茶の羽織を引掛け、頭陀袋を前に下げた格好は、成程馬子などに馬鹿にされるが物はあつたらう。江戸での知人や門人が、歸庵を喜んで、句會や慰勞の宴を處々で催したことは、言ふ迄も無い。

茶の羽織

雪散るやの句

『猿蓑』冬の部に、「信濃を過るに」と前書して、「雪散るや穂屋の芒の刈殘し」の佳句が出てゐる。穂屋は七月二十七日の諏訪の御射山祭の神事の御假屋である。然るに此の度の旅行では、芭蕉が若し諏訪を經たとすると、尾州から更科に行く途中でなければならぬ。(更科から善光寺、南へ淺間、それから碓氷を越えて江戸に歸つたものであらう)すると、それは八月頃でなければならぬから、恰も御射山祭の終つて間も無い時で、「芒の刈殘し」とは、よく合ふが、「雪散るや」を冬の句とすると、合ふべくもない。

秋の句か

是はどうしても秋の薄の句で、信濃は寒國であるから、其の頃に雪が降つた爲に、此の句を詠んだものとせねばならぬ。「刈殘し」の語から見ても、冬枯の芒とは思はれぬ。されば『猿蓑』が冬期に入れたのは

無常迅速　むつ／＼さした道心坊　蒔繪の大盃

も、斯る事にやと、無常迅速の忙はしさも、我が身に省みられて、阿波の鳴門に波風も無」かつたとは夫の木の股につい居て賀茂の祭を見物した法師（徒然草）も想はれて、をかしくも亦あはれである。途中から、六十許の道心坊の「面白げも無く、をかしげも無く、たゞむつ／＼とした」のと道連になつた。腰たわむ迄に物を負ひ、呼吸も吐けぬ程であつたのを、越人など、氣の毒に思うて、其の荷物と、皆の荷物とを一つにして、馬に着け、芭蕉を乘せた。夜の宿りでは、今日歴た道々の風景を想ひ出したり、句稿を取出しなどして、燈の下で芭蕉はしきりに頭をひねつた。すると此の道心坊が、何か心配事でもしてゐるものと合點したのは先づ好いが、慰め顔の親切氣から、己が巡拜した諸國の靈場の話を長々と語り出した。是には流石に遠慮深い芭蕉も大きに閉口して、果は句案も何も無茶苦茶になつたが、折しも壁の破れから、木の間隱れの月がさし入つて來た。引板の音、鹿逐ふ聲なども聞えて、まことに秋のあはれは身に沁むやうであつた。迚もの紛れに、酒盛でも始めようといふので、杯を持出させると、常の杯よりも一まはり大きくて、而も粗末乍ら蒔繪さへしてあつた。都の人は、此のやうなものは手にも觸れぬのであるが、處がらとて思ひもかけぬ興に入り、玉の巵の心地がせられた。などは芭蕉の趣味性の强さがよく現はれてゐて、をかしさの限りである。「あの中に蒔繪描き度し宿の月」。「棧や命をからむ蔦かづら」。姥捨山では「俤や姨ひとり泣く月の友」「十六夜もまだ更科の郡かな」。「ひよろ／＼と尚露けしや女郎花」「身に沁みて大根辛し秋の風」「木曾の橡うき世の人のみやげ哉」「送られつ送りつ果は木曾の旅」。

皆涼し」は、此の樓の眺望を詠んだのである。同じ人に招かれての句「山陰や身を養はん瓜畠」も此の頃の句かといふが、さもあらう。去來の妹千子（五月十五日に歿か）の亡くなつたことを聞いて「亡き人の小袖も今や土用干」と詠んだのも此の頃であらう。巳百長虹等が家、また田中の法藏寺、大曾根成就院鳴海等に遊び、知足が弟金右衞門の新宅を賀して、「良き家や雀喜ぶ背戸の粟」。名古屋に入り、野水が旅行に出るのを送つて、「見送りの後ろやさびし秋の暮」。七月十三日の、芭蕉の「初秋や海も青田の一綠」を立句とした鳴海での歌仙（一葉附二ノ七二ウ）同月二十日竹葉軒（名古屋か）興行の、芭蕉の「粟稗に乏しくもあらず草の庵」を立句の、荷兮越人等の連座した一卷（同二ノ七四オ）なども、此の時のであらう。但し六月十九日の蘆文の「蓮池」を立句とした一卷（同二ノ七〇ウ）は贋作で、且越人の「風引き給ふ聲の美くし」（此の句は深川之夜中にもある）の句があるなど、聊か合點の行かぬ卷である。

八月になつて、更科の月見にとて、名古屋を出た。此の時も紀行があつて、通行本は『笈之小文』に附刻されたものであるが、眞蹟を敷寫しにした尙白の跋のある本（予の見たのは酒竹文庫本）もある。是は草稿本で、推敲の痕も其のまゝに寫されてあるので、參考本として、中々面白いものである。

此の旅行の同行は越人で、荷兮が僕某を供に、木曾路を輕て、玉味噌の信濃に入つた。流石に山阪の險しい木曾のことであるから、危い崖道などを恐る〳〵進むに、彼の荷兮が僕は、一向氣にも留めず、馬の上に居睡りし乍ら、落ちかけたことも度々といふ風で過ぎた。「佛の御心に、衆生のうき世を見給ふ

見るごゝちあはれなる中に、敦盛の石塔にて涙をとゞめ兼候。磯近き道のはた、松風のさびしき陰に物古たるありさま、生年十六歳にして戰場にのぞみ、熊谷に組ていかめしき名を殘し侍る、其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速君わするゝなかれ。此一言梅軒子へも傳度候。須磨寺のさびしさ、口を閉たるばかり口（イに候）蟬折こま笛料足十疋（イの事）見るまでもなし。此海見たらんこそ、物にはかへられじと、あかしよりすまに歸りて泊る。二十一日布引の瀧に登る。山崎道にかゝりて、能因のつか、金龍寺の入相の鐘を見る。花に散けるといひし櫻も若葉に見えて、又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衛どのゝ宗かんがすがたを見れば餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て、

有難きすがた拜まんかきつばた

と心のうちに云て、卯月二十三日京へ入。(以上、本ノマヽ寫す。誤字と思はれるものもあるが、私意を以て改めず、又讀めぬ字は、缺字として置いた。校合は勝峯氏が其の所藏の二部を以てされたのである)

此の書翰に就いては、なほ『笈之小文』や其の他と對照して、精細に調べて見るつもりであるが、今は單に材料のまゝ載せるに止めて置く。

それから岐阜に出、秋芳軒宜白が家に客となり、長良川に鵜飼を見て「面白うてやがて哀しき鵜舟哉」と詠み、賀島氏(落梧か)の水樓に遊んで、「十八樓記」(風俗文選)を遺した。「此のあたり目に見ゆるもの

のあたひは、彼におくりて過り。おもしろきおかしきも、かりのたはふれにこそあれ。實のかくれぬものを見ては、身の罪かぞへられて、萬菊も暫落涙おさへかねられ候。當麻に詣てゝ、萬のたつときも、いまをみるまでの事にこそあなれど、雨の降出る日を幸に、そこ〳〵に過て、駕籠にて太子に着譽田八幡にとまりて、道明寺藤井寺をめぐりて、つの國大江の岸にやどる。今の八軒屋久左あたり也

杜若かたるも旅のひとつかな　愚句

山路の花の殘る笠の香　一笑

朝月夜紙干板に明初て　萬菊

二十四句にてやむ。十九日あまが崎出船、兵庫に夜泊、相國入道の心をつくされたる經の島、わだのみ崎、わだの笠松、内裏やしき、本間が遠箭を射て名をほこりたる跡などきゝて、行平の松風村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡、かなしげに過て、西須磨に入て、幾夜ね覺ぬとかや關屋の跡も心とまり、一の谷逆落し、鐘懸松、義經の武功おどろかれて、てつかひが峰に昇れば、須磨あかし左右にわかれ、あはぢ島、丹波山、かの海士の古里田井の畑村など、めの下に見おろし天皇の皇居はすまの上のと云り。其代のありさま心に移りて、女院おいかゝへて舟にうつし、天皇を二位どのゝ御袖によこ抱いだき奉りて、寶劒内侍所あはたゞしくはこび入、或は下々の女官は、くし箱油つぼをかゝへて、指くし根卷を落しながら、緋の袴にけつまづき、臥轉びたるらん面影、さすがに

竹人の芭蕉傳に、附錄として、芭蕉が京から伊賀の鄕里の猿雖への返書といふものを載せてある。眞僞は問題として遺して置くが、此の旅行の記事と併せ讀むべきものであるから、少しく長過ぎるが、全文を掲げる。他書には見えぬ材料だからである。

大阪迄御狀辱拜見、此度南部の再會大望、生々の樂ことはにあまり、離別の恨の筆に不被盡候。我たのもし人にしたる奴僕六にたに別れて、彌おもき物打かけ候而、我等一里來る時は、人々一里可行也三里過る時は、各今や三里可行也。いまたしや、梅軒何かしの、足の重きも道連の愁たるべきと、墨賣がおかしかりし事なども云々。石の上有（イ在）原寺井筒の井の深草生たるなど尋て、布留の社に詣。神杉など拜みて、ころばかりこそむかしなりけれと詠じ、郭公の比にさへなりければ、おもしろくて、瀧山に昇る。帝の御覽に入たる事古て、（イ今）集に傳れば猶なつかしきまゝに、二十五丁わけのぼる。瀧の氣色言葉なし。丹波市やき（イ八木）と云所、耳なし山の東に泊る。ほとゝぎす宿かる頃の藤の花と云て、なほおほつかなきたそかれに、哀なるむまやに至る。今は人々舊里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなどして、大佛の法事のはなしとり〴〵なるべき。市兵衛は草臥ながら、梅額子へ卷ひけらかしに可被行。梅軒子は、孫との（イなどの）にみやけねたられておはしけむなど、草のまくらのつれ〴〵に、ふたりかたり慰て、十二日竹の内いまか（イ八原カ八兵衛ナドニヤ）茅舍に入。うなき汲入たる水瓶もいまだ殘りて、わらのむしろの上にて、茶酒もてなし、かの布子うりたしと云けん萬菊のきる物

りて云々。百日が程影の如く伴ふ」とあるからである。尤も前にもいうたやうに、伊勢から杜國と共に一たん鄕里に歸り、改めて吉野に向うたやうであるから、其の時のことを云うたのかも知れぬが、それにしては、「舊里迄慕ひ來りて」云々の文意が聊か適はぬやうにも思ふ。杜國も三州の方へ歸つたものとすれば、伊賀に立寄つても、廻り路といふ程でもないから、芭蕉を鄕里迄見送つたのかも知れぬ。（竹人の芭蕉傳には、杜國は芭蕉と京で別れて伊賀にまはり、猿雖の家に宿つて、六月二十五日に歸鄕したとあるが、實かどうか）

餅の圖

芭蕉が萬菊丸の大餅に困つて、戯れに餅の圖を畫いて示したといふのは、此の旅行の時の事といふ。さうであらう。『伊賀實錄』（附編參照）には猿雖の宅での事としてある。此の圖は竹二房の芭蕉傳『枇杷園隨筆』『花はさくら』等に載つてゐる圖が、皆多少違うてゐるが、傳寫の際寫し違へたものか、或は始めから幾通りも畫いたものか、恐らくば前者であらう。支考なども寫しを持つてゐて、人に見せたりしてゐた。（伊賀實錄）（大和で孝子某に旅費を與へた譚もあるが、未だ確かな出處を見出さぬ）

山城を經て東へ

さて播州路から引返して、山城に出、山崎で宗鑑が遺跡を見て「有難き姿拜まん餓鬼つばた」。是は「宗鑑が姿を見れば餓鬼つばた」に依つたのである。それから江州を經て、「五月雨に隱れぬものや瀨田の橋」の句を得、再び鄕里に寄つたものかも知れぬは、前述の通りである。但し竹人の芭蕉傳には、京から直に東武に出たとしてある。或はさうかも知れぬ。

寺に鑑眞和尚の盲目の御像を拜して、「若葉して御目の雫拭はゞや」。大阪では、ある人の許で、「杜若語るも旅の一つかな」。

播州めぐり

それから播州名所を巡覽して「月はあれど留守のやうなり須磨の夏」「海人の顔先づ見らるゝや罌粟の花」「須磨の海人の矢先に啼くや時鳥」「蛸壺や果敢無き夢を夏の月」。杜國には、先にも出した「似合はしき罌粟」の句があつたが、此の薄命の才人にも、まことに「似合はし」い句であつた。平家沒落の古へを懷ひ、「内侍局女嬬曹司の類ひ、さま〴〵の御調度持て扱ひ、琵琶なんど、褥蒲團にくるみて、船中に投げ入れ、供御はこぼれて鱗類の餌となり、櫛笥は亂れて蜑の捨草となりつゝ、千歳の哀しび、此浦に、素波の音にさへ、愁多く侍るや」と歎じて、此の紀行を結んでゐる。此の結末の一段の、榮枯盛衰に對する深い感慨は、當に『奥之細道』の平泉の項と併せ讀むべきである。

杜國は須磨迄同行

諸書(子規氏の俳人芭蕉なども)に、杜國と奈良で別れたとしてあるのは、紀行の文に「舊友と奈良にて別る」と前書して「鹿の角云々」の句があるので、推測したものらしいが、是は誤りであらう。『猿蓑』に「似合はしき」の句が「翁に供せられて、須磨明石に渡りて」との前書で載せてある。(鵲尾冠も參照)又或書に大阪山崎須磨と經たとしてあるのも如何かと思ふ。大阪から須磨、それから戻つて山崎、京都、大津と進むのが順路である。

郷里迄も隨從か

又『嵯峨日記』(其の項參看)に據ると、杜國は須磨明石から、なほ芭蕉が其の郷里に立寄る迄隨從してゐたのではないかと想はれる節がある。それは、同記に「伊陽の舊里迄慕ひ來

一の願たゞ二つ

やうである。吉野から高野に出、「父母のしきりに戀し雉子の聲」。又杜國は「散る花にたぶさ耻かし奥の院」と悲しんでゐる。和歌之浦に出たのは、春もやゝ暮れんとする頃であつた。「行春に和歌の浦にて追着きたり」。句選に「藤代のみさかといひけん云々」と題して「藤の實は」の句が出てゐるが、是は紀州の藤代での吟でなく、美濃での句である。「寛歩駕に代へ、晩食肉よりも甘し。泊るべき道に限り無く、立つべき朝に時無し。只一日の願二つのみ。今宵好き宿を取らん。草鞋の我が足に宜しきを求めんと計りは、聊かの思ひなり。時々に氣を轉じ、日々に情を改む。若し纔に風雅ある人に出會ひたる悦び、限り無し」など、此の翁から聽いて始めて限り無き「風雅」味を感ずるが、他人が此の樣な事を云うたならば却てうるさく感ずるであらう。「一つ脫いで後ろに負ひぬ衣更」などは、後の一茶の句風を想はせる。又杜國は「吉野出て布子賣りをし衣更」と詠んだ。此の「賣りをし」は句集等を始め、大抵の集には「賣りたし」となつてゐるが、「たし」は『一葉集』(紀行部)の如く「をし」とあり度い處である。「をし」は「惜し」で吉野の花の香を經ての布子ゆゑ、邪魔にはなるが流石に賣り惜しいの意であつて欲しい。「たし」ならば吉野出てから、やう〳〵暖かになつたので、賣り度いとの意でもあるか。それでは「吉野出て」があまり働かぬ。他に面白い取りやうがあれば格別、さうでなければ、「をし」の方が好いやうに思ふ。(曠野では賣をしとあるのが古いやうだ。或は賣るをしとした本もあるが、如何。賣り惜しは語を成さぬとの說もあるが、俳人の語には斯やうなのは幾らもある) 奈良の灌佛に「灌佛の日に生れ會ふ鹿の子哉」。唐招提

吉野では口を閉ぢて一句も出さず

吉野での吟と傳へられた句

と興あり」(などあるから、萬菊丸を杜國の幼名とした例の文曉等の說は如何かと思ふ）と芭蕉も戯れてゐる。丹波市では「草臥れて宿借る頃や藤の花」。初瀨では「春の夜や籠り人ゆかし堂の隅」。草尾村では「花の陰謠に似たる旅寢哉」。杜國も初瀨では「足駄穿く僧も見えけり花の雨」の好句を得た。(但し曠野には「木履穿く僧もありけり」とあるが、面白くないやうに思ふ）臍峠では「雲雀より上に休らふ峠かな」。西河では「ほろ〳〵と山吹散るか瀧の音」。「又某所では「櫻狩奇特や日々に五里六里」。『一葉集』(附二ノ六六オ）に「紙ぎぬの濡るとも折らん雨の花」を立句の、乙孝、一有、應宇、葛森等との卷があるが、是は是より先の伊勢での作であらう。(笈日記、一幅半等に路草亭にてとあつて、路草は乙孝の別號の由である）吉野では三日逗留し、とり〴〵の「哀れなる狀など心に迫り胸に充ち、言はん詞も無く、徒らに口を閉ぢ」て、遂に一句も無かつた。とあるから、此の時は吉野では句は無かつた筈である。斯る名所では、故らに耳立つ句でも詠んで、名聞を取らうとするのが、詞人などのやり口であるのに、却て口を閉ぢて一句も出さず、恭默退讓自ら持しつゝも、なほ「思ひ立ちたる風流嚴めしく侍れど、爰に至りて無興の事なり」と戯れ去つた此の翁の言草のをかしさ、あゝ何たる胸懷ぞや。然るに此の時吉野で「花盛山は日比の朝ぼらけ」。「暫くは花の上なる月夜哉」。の二句を詠んだやうに記したものもある。(袖草紙の如き）花盛の句は、二三の古書(小文庫、泊船集の如き)に、吉野と前書がしてあるが、無論信じられぬ。『句選年考』にも其の由辯じてある。又「暫くは」の句を、吉野での吟といふのは、何の據所も無い

杜國の句風

『冬之日』中の一員としての外、汚名を郷黨に傳へられる位に終つたであらう。即ち右にいふ『冬之日』の作者の一人で、又七部集其の他にも、野仁等の名でも、句が少なからず收められてゐる。「包み兼ねて月取り落す霞哉」「曙の人顔牡丹霞に開きけり」「嬉しさは葉隱れ梅の一つ哉」「馬は濡れ牛は夕日のむら時雨」「此頃の氷踏み割る名殘哉」（以上春之日）「麥畑の人見る者の堤哉」「霜の朝せんだんの實の零れけり」「八重霞奥迄見ゆる龍田哉」「木枯の落葉に破る小指哉」（以上曠野）「似合はしき芥子の一重や須磨の里」（猿蓑）など、其の句風は概して温雅で、やゝ巧緻の態を帶びてゐる。此の「芥子の一重」の句は、既に「亡人杜國」として入集してあるが、此の集の前年即ち行脚の翌々元祿三年の五月に亡くなつたのである

其の地位

越人は、江戸では「其角嵐雪、田舍にては杜國越人などを措いて、當流建立の趣意、爾等（〇支考露川等）如き者共の知る事にてなし」（不猫蛇）など氣を吐き、同門の人々にも、杜國は相應に尊重されてゐたやうであるが、弱年で歿したのは、惜むべきである。支考の『葛之松原』にも「杜國は志の男の子なるよし。阿叟も忌日覺え申されし」とある。芭蕉が此の人を深く愛したのは、其の境遇に同情したのが最大原因であらうと思ふ。若衆關係であつたらうなど云ふのは、固より何の據所も無いのである。

乾坤無住同行二人

旅立つとて、「此の程の花に禮いふ別れ哉」（竹人芭蕉傳等）は、郷里の兄にでも對しての句か。さて杜國の萬菊丸を伴うて、郷里を出るとて、二人の笠の内に「乾坤無住、同行二人、吉野にて櫻見せうぞ檜笠、吉野にて我も見せうぞ檜笠、萬菊丸」と書付けた。萬菊丸の名が「まことに童らしき名のさま、い

落梧は、『笈日記』の記事に依れば、元祿五年頃に死んだ筈であるから、なほ考ふべきである。春淺き意を「枯芝やや丶陽炎の一二寸」。阿波の大佛を拜觀して、「丈六に陽炎高し石の上」。それから伊勢神宮に詣で丶、「何の木の花とは知らず匂ひ哉」。此の句は、西行の「何事のおはしますかは」を其のま丶飜案したものであらう。是を發句は、益光又玄等との歌仙一卷（一葉附二ノ六五オ）あつた。「物の名を先づ問ふ蘆の若葉哉」「御子良子の一もと床し梅の花」「神垣や思ひもかけず涅槃像」。此處で豫て約束があつたものと見え、杜國が來合せてゐて、共に芳野に向うた。後にいふ「紙きぬの」の卷は、此の時伊勢で出來たのであらう。『笈之小文』には「さま〴〵の事」の句は「丈六に」の句と並べて出してあるが、湖中などの記してゐるやうに「さま〴〵の事」は、杜國を伴うて伊勢から一先づ鄕里に歸り、前述の如く、探丸公亭で花見の事があつて詠み、それから改めて芳野へ向うたものであらう。而して紀行から是等の記事を省いてしまうたのであらう。まことの芳野紀行は、實は是から始まつたのである。

萬菊丸の杜國

紀行の文中に本名は隱して萬菊丸と呼んで、芳野に同伴したのは、杜國である。杜國は俗稱餝屋（又壺屋、壺井）平兵衞（又庄兵衞、惣兵衞）といひ、罪に依つて死刑に當つたが、嘗て詠んだ「蓬萊や御國のかざり檜山」の句を感ぜられ、宥されて伊良古に流された（俳家奇人談等）と言傳へられ、又公米を扱ふ商人であつたので、それに關して不正事があつた由など噂されたが、詳しい事は判らぬ。此の人こそ蕉門の公治長とも謂ふべきであらう。中々の才人であつたらしい。若し芭蕉の慈眼に留まらなかつたら、

故郷に入る

る。それから郷里に入つて「古里や臍の緒に泣く年の暮」。此の句は『笈之小文』には前書が無いが、『芭蕉文集』に、なほ父母が存生されたならばと、慈愛の昔を思うての句の由前書がある。或書に是と並べて「さまぐ〜の事想ひ出す櫻哉」を擧げてあるが、是は此の翌年伊勢詣でして、一旦郷里に歸つた時の句であらう。『笈日記』には「主君蟬吟公の庭前にて」、又句集の方には「探丸君別莊に花見催させ給ひしに罷り（〇參上の意であらう）て、古き事など思ひ出で侍るに」と、共に前書がしてある。探丸公の事は、本編の初めにいうてある。此の句には探丸公の「春の日早く筆に暮れ行く」の脇があつた。（竹人芭蕉傳等）や、推量に過ぎてゐるかも知れぬが、前にもいうたやうに、芭蕉は郷里の事といふと、兎角に遠慮克に、何かと言ふことを控へたやうな氣味に見える。紀行から是等の句の前書を省いたのも、其の一例かとも想はれる。但し是は臆測迄に過ぎぬ。

瓜畠集の事

明くれば貞享五年（元祿元年）四十五歲の春は郷里で迎へた。大晦日の夜に、酒を飲んで、元日の朝は寢忘れたので、「二日にもぬかりはせじな花の春」。風麥（小川氏）亭に遊んで、「春立ちてまだ九日の野山哉」。又「山里は萬歲遲し梅の花」。（湖中芭蕉傳等）此の山里の句は、支考の『笈日記』中の、美濃の落梧の『瓜畠集』（續猿蓑の項も參看）に出てゐるが、或書に此の句を元祿四年に入れてある。けれども、此の集中の句は、元祿より以前の句と想はれるものゝみ入れてある所から察すると、此の時の句との說も一理あらう。因みに云ふ、此の集を『句選年考』に享貞五年としたのも、何か據所があるのかも知れぬ。但し

人に消息し置いて、路を引返し、越人を伴うて出かけた。吉田に宿つて、「寒けれど二人寢る夜ぞたのもしき」（曠野には「二人旅寢ぞ」とある）伊良古崎では「鷹一つ見付けて嬉し伊良古崎」と詠んだのは、杜國を索め得た喜びの意を寓してゐるとの解釋（花摘參照）もあるが、何さま時が時とて、さうらしく聞える「夢よりも現の鷹ぞたのもしき」の句もあつた。寒天の遠路を厭はで荊棘を分けつゝ、流人を其の配所に訪ねた此の翁の飽迄優しい懷胸には、今の吾々さへ感激を禁じ得ぬ。（黑田氏芭蕉翁傳に、此の時の越人の伊良胡紀行を收めてあるが、眞僞は請合はれぬ。僞作か。又越人の鵲尾冠猫耳集庭竈集等は併せ讀むべきである。蝶羅の二人旅寢は未見）それから熱田に出、宮に詣で「磨ぎ直す鏡も淸し雪の花」の句があつた。又其れを立句に桐葉との兩吟一卷（一葉附二ノ五五オ）もあつた。如行の「旅人と我見はやんさん笠の雪」を立句の、芭蕉桐葉との三吟（同四九ウ）も、此の時であらう。多度の權現を過ぎて、「宮人よ我が名を散らせ落葉川」。それから名古屋の人々、荷兮、野水、越人、舟泉等に迎へられ、暫く逗留する間、大垣岐阜などからも、好者共がだん／＼集まつて來て、「歌仙或は一折など、度々に及」（笈之小文）んだ。是等の卷は、『千鳥掛』（知足編、正德二年知足の子蝶羽刊）及び『一葉集』（附二ノ五二オ以下）に出てゐる。「箱根越す人もあるらし今朝の雪」「ためつけて雪見にまかる紙子かな」「いざゝらば雪見にまろぶ處迄」。名古屋から桑名に出る途中に「旅寢して見しや浮世の煤拂ひ」。杖突阪で、馬から落ちて、馬子に間抜な旅人ぞと叱られ乍ら、「歩行ならば杖突坂を落馬哉」。此の句は無季として名高く傳へられてゐ

も風雅に於けるもの、造化に從ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし。思ふ所月にあらずといふことなし。思ひ花にあらざる時は、夷狄に等し。心月にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化に從ひ、造化に還れとなり。

苦悶と自信

實に此の感慨は、芭蕉を知る上に大なる參考ともなり、又深い興趣をも感じ得るのである。「宗祇の連歌に於ける云々」と云つてゐる處などに、此の頃漸く俳諧を以て自己の一境を拓かうとした動かすべからざる自信の程がほの見えてゐる。又是迄の苦悶の心胸が「或時は倦みて云々」以下の數句に、其のまゝさらけ出されてある。何でもないことのやうであるが、實は芭蕉なればこそ、是だけのことをよくさらけ出し得たのである。

東海道

富士の句「一尾根は時雨るゝ雲か富士の雪」は此の紀行の時の吟といふが、前にもいうたやうに、確かでない。但し喧ましい句である。鳴海を經て「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」。「京迄はまだ中空や雪の雲」。此の二句を發句に、千代倉知足(句選年考に、知足は鳴海の酒造家にて、今に風流盛なり。一家三人門人となる。知足蝶羽龜世。今龜世が子の代なり。知菊、蝶羅云々。芭蕉の眞蹟等數多藏す。今に他門に依らず。鳴海一風と云。とある。又同書頭注に、蝶羽後寂照庵龜世後鐵叟とあるが、千鳥掛には寂照庵知足とある。代々の庵號にや)本陣の寺島業言等との歌仙二卷(千鳥掛)(一葉附二の五〇ウ、同五三ウ)があつた。

杜國を訪ふ

三河國保美といふ處に、杜國(の事は後にいふ)が忍んでゐるのを訪はうとて、先づ越

（○中略）無事到二故園一、先傳二平安東一、佳景幽勝地、只恐久認レ蹤、從レ今花與レ月、獨吟望二蒼穹一 など切々の情を寄せてゐる。素堂には弱笠疲節寄二一身一、離筵囘レ首惱二吟身一、河邊楊柳無レ由レ折、早動二翠條一迎二老身一などあつた。和歌では安適の「たちかへる浪を心に忘るなよ、世を海しらぬ國に行くとも」などが氣が利いてゐる。發句では、不卜の「留守のうち猶瘦せぬべし冬の菊」嵐雪の「凩の吹きゆくうしろ姿哉」などが面白い。大抵皆慈父か骨肉にでも對するやうな惜別の情を輸してゐる。此の一書のみに依つても、芭蕉が多くの人々に如何ばかり愛慕されてゐたかをよく髣髴し得る。

發端

此の紀行の發端は、よく引かれる文句であるが、予は亦少しく別な意味から、是を掲げて置かうと思ふ。それは、此の文句が芭蕉の經歷の一部分を、抽象的乍ら、語つてゐるからである。風羅坊の號も此の時に始めて稱したとの證にも、此の文句は引かれるが、其れは、此の文句だけでは、確かとは謂へぬやうである。

風羅坊の號

百骸九竅の中に物あり。假に名づけて風羅坊といふ。寔に薄ものゝ風に破れ易からんことをいふにや彼狂句を好むこと久し。終に生涯の謀とす。或時は倦みて放擲せんことを思ひ、或時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に戰うて、是が爲に身安からず。暫く身を立てんことを願へども、是が爲に障へられ、暫く學んで愚を喩さんことを思へども、是が爲に破られ、終に無能無藝にして唯此一筋に繫がる。宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、其貫通するものは一也。而

鹿島紀行の翌々十月に、更に旅裝を調へて、西行の旅に出かけた。此の時の紀行を『笈之小文』（此の名は始めから此の紀行に名づけたものかどうか。去來抄に、芭蕉自撰の句集で笈之小文と題する草稿があつた筈だとある。笈日記の序の意では、芭蕉が思つたが實行しなかつたものらしいが。五元集拾遺等も參看）とも『卯辰紀行』（卯辰兩年に亙つた行脚ゆゑ稱す）とも、又『芳野紀行』（露沾公の餞前の句に「芳野を込めし」などあるから、始めから芳野を志して出かけたのであらう。さすれば此の稱は適はしい）とも呼んでゐる。今行はれてゐる『笈之小文』は、寶永六年に乙州が上木したもので、更科紀行も附刻してある。是が最初の板本かと思はれる。庵を出る時擧白に留守居を賴んだと或書にあるは、擧白の餞別の句「時雨々々に鎰かり置かん草の庵」（句餞別）に依つてゞあるか、又他に記したものがあるのであるか。若し此の句だけならば、庵を擧白に預けたと迄はいひ得ぬやうである。「鎰云々」とあるから、多分誰も留守居は置かずに、折々の見回りを擧白に賴んだといふやうな事であらう。

此の時は、芭蕉の名聲が既に皇都に轟いてゐたので、方々で送別の宴もあつたり、餞別の詩歌俳句を多くの人々から贈られなどした。是等の詩歌俳句は、一纏めになつて『句餞別』（又は伊賀餞別）と題した板本（數種あつて、芭蕉の自筆を板下にしたといふのもある）となつて世に遺されてゐる。是を見ると、中々盛であつたことが判る。即ち詩九首七人、和歌三首二人、俳諧發句三十五句、三十五人とある。其の中の一二を擧げて見よう。嵐蘭の別詩には、逆想多病軀、長路豈無レ忡、飃然一囊子、句夫任二天工一

山」の句など口ずさみ、夕刻に利根河畔の布佐に出た。其處に小憩してゐる內に、雲が霽れたので、月に乘じて、夜舟で鹿島に下つた。さて佛頂和尚の隱棲を訪ねて、宿つたが、折惡しく雨天で、月を十分に賞することが出來なかつた。「月早し梢は雨を持ち乍ら」「寺に寢てまこと顏なる月見かな」。佛頂和尚にも「折々變らぬ空の月影も、千々の眺めは雲の間に〱」の歌があつた。「此の松の實生えせし世や神の秋」(神前)「萩原や一夜は宿せ山の犬」等も此の紀行中の句である。尋常の人ならば、紀行が書けたら直に出板でもする處を、草稿を其のまゝ宿つた家の主人に與へて顧みぬなどは、流石に芭蕉のをかしい處である。

『續虛栗』は此の年十一月其角の編で、芭蕉の句では、「誰やらが姿に似たり今朝の春」「花の雲鐘は上野か淺草か」「鸛の巢も見らるゝ花の葉越哉」「蜀魂鳴き〱飛ぶぞ閙はし」「電を手に取る闇の紙燭哉」(寄李下)「蓑虫の音を聽きに來よ草の庵」(聽閑)「初雪や幸ひ庵に罷り在る」「月雪とのさばりけらし年の暮」(此の句は前年冬の吟か)などがある。又集中に「甲斐山中」と題して「山賤のおとがひ閉づる葎哉」とあるは、芭蕉庵燒失後甲斐に旅行した時の句であらうもいふが、甲子吟行歸途の吟であらう。併し是等の外に、江戸から一寸甲州に旅行したことが無いとも謂へぬ。又曾良に對しての句「君火を焚けよき物見せん雪丸げ」は此の初冬の作か、其の前年冬のか、どちらかであらう。

第八節　卯辰紀行(芳野紀行)及び更科紀行

禪話でも聽きに出かけたのかも知れぬ。此の時『鹿島紀行』があつた。此の紀行は、予の見た本は三通り程あつた。一は、『鹿島詣』と題した芭蕉自筆板本で、前にも一寸いうた小川村の本間家の自準（句選年考頭書に、鹿島詣眞蹟小川里自準家に有り、自準道節、俗名本間道意云々とあるが、自準道節は畫江の事で且自準は代々の通稱で、自準道意は畫工の祖父でもあるらしい。畫江は其の自準の孫で柳居の門人の由）の許にあつたのを、秋瓜といふ者が得て、其のまゝ寫し取つて其れを板下に上木したといふものである（寛保板、一說に寶暦二年板？）是は芭蕉の筆意が可なりによく現はれてゐて、多少の風韻もある。又『鹿島紀行』と題したものは、是も宗拱（安房の人か）といふ者の家に傳はつた芭蕉自筆本を模刻したものゝ由同人の序にあつて、寛政二年梅人の板である。此の他に文化年中（？）板にしたものがある。發端に「月は三五夜中納言」などあるから、名月を觀に行つたやうに聞えるが、さうではなく、江戶の草庵で、既に前出の「名月や池をめぐりて」の句があつたから、鹿島に出かけたのは、其の後でなければならぬ。それで十六七日頃と想はれるのであるが、確かな日は判らぬやうである。「門より船に乘りて」とあるから、六間堀から直に、行德行の船で、小名木川を溯つたのである。

芭蕉は此の時の自分の姿を形容して、「僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶり（〇被ぶり、蝙蝠）の、鳥無き島にも渡りぬべくて」と戲れてゐる。（野ざらし紀行伊勢の項も參看）行德で舟を捨て、八幡あたりを過ぎつゝ、筑波山に連歌の古き道を想ひ、門人嵐雪の「雪は申さず先づ紫の筑波

蕪村風の二句

猪も共に吹かるゝ野分哉

硯好む奈良の法師が炬燵哉

など、此の年の句と傳へられてゐるが、確かではない。但し共に名句で、又共に蕪村の句集中にでもありさうな句風である。此の類の句は、芭蕉としては寧ろ少ないが、所謂諸體具はらざる莫き名家の本色は、是等の句にも露はれてゐる。此の暮の句「年の市線香買ひに出でばやな」。

池をめぐりて

貞享四年四十四歳の春も、深川の草庵で迎へた。後にいふ『續虚栗』中の句は、多く此の年の吟である是は後に出す。此の年の中秋には、

名月や池をめぐりて夜もすがら

の句があつて、『續虚栗』には、「草庵の月見」と題してある。或書に、此の句を、大橋邊に舟を浮べての月見の後に、庵に歸つてからの吟としてあるが、其角の『雜談集』に記してゐる所と違ふ。同書の意では舟出の前の句で、『續虚栗』の前書にも「芭蕉庵の月見んとて、舟催して參りたれば」とある。此の池は即ち例の古池であらう。而して舟を直ぐに庵の前に横付にでもして芭蕉を迎へたのであらう。

鹿島紀行

此の年の八月十六七日頃であらう、河合曾良(奥羽行脚の條參看)及び隣庵の宗波を伴ひ、山家の月を賞しようとて、かの蒟蒻の鹿島に遊んだ。鹿島には例の佛頂和尚(修禪と佛頂和尚の項參看)が居るので道伴は、此の後間もなく剃髮した曾良と僧宗波とであるから、月見がてら、芳野紀行の暇乞を兼ねて、

のは、一は醫を學ぶ爲に度々訪うた爲かも知れぬ。但し前掲の誓紙は、桃靑と號を書いてあるのも變で又見た人の說では、疑はしいものだといふ。僞作か、或は寫しか。寫しならば眞物があつた筈であるがいづれとも判斷がつき兼ねる。又冠山族の芭蕉傳に、芭蕉が亡命後在京した頃に、醫術を三條の某に學び、之を業とし、又東下後、小澤卜尺（か）の中風を療治したとあるが、是等も確かゝどうか。（自脉は白脉の誤りかも知れぬ）

『雪丸げ』に「深川八貧のうち」と題して、

米買ひに雪の袋や投頭巾　　芭蕉
雪の夜は取わき佐野の薪買はん（其薪買）　　依水
酒や好き雪踏み立てし門の前（其酒買）　　苔翠
炭一升雪にかざすや山折敷（其炭買）　　泥芹
雪にかふはやしことせよちやん傒（同茶買）　　夕菊
手に据ゑし豆腐を照せ雪の月（同豆腐買）　　友五

等の句が出てゐる。同書の此の後に、芭蕉の「さゝ籠る葎の友か冬菜賣」杉風の「さりとては寒きもの也枯すゝき」などあるのは、八貧中の句がどうか判らぬ。八貧を『句選年考』に、貞享三年か元祿三（元の誤りか）年かのものであらうと云うてゐるが、どちらであらうか。兎に角此の頃のものに違ひあるまじく、芭蕉庵の生活の一面が寫されてゐて、興味が深い。

松江の(道意の號にや)家に傳はつたと稱するものゝ寫しを載せてある、其の文、

相傳醫術啓迪院一流秘書秘語、那豈漏レ佗乎。若於ニ違背ニ者、大小神祇、別而生緣氏神可レ蒙ニ神罰ニ者也。仍而起請文如レ件。

貞享三年丙寅四月十二日

物部道意

松尾桃青

本間道悅様

道意は道悅の子でもあるか。此の家とは芭蕉は深い關係があつたものと見え、芭蕉自筆の『鹿島詣』(後にいふ)も此の家から出てゐる。又芭蕉留錫の頃、毎に食をすゝめた古五器二具を所藏したなどいふこともある。(隨齋諧話)是等の關係から、或は芭蕉が、鹿島の佛頂和尚を訪問する途次にでも、此の家に立寄つて、醫術を受けたのかも知れぬ。後にも、身を立てんことを希うたとか、學んでどうしようと思うたとか云うてゐるのは、或は是等の事をも指したのかも知れぬ。例の遠慮深い性質であつたから、人の世話で暮してゐることを、始終苦に病んでゐたらしく、或は鬼貫が導引で口を糊した(?)と同じやうな思ひ付きで、事によると、自ら比した例の藪醫の竹齋氣取か何で、間に合せの按摩醫者にでもならうとしたなどは、あり得ぬことでなからう。「髮生て容顏青し五月雨」は、此の翌年の『續虛栗』に出てゐるが、句集には前書を「病中自脈」としてあつて、是等も參考すべきである。本間の家と深い關係のあつた

一種の地位

あるが、是も當らぬやうである。古池の句に對すると、伐木の句に對すると、感じが甚く違ふ。又正岡子規氏等は、芭蕉が何か知ら一風を創めようと、いろ／＼工夫して出した句のやうに謂うてゐるが、是等も多分右の『花屋日記』の記事にでも謬まられた例の獨り斷めであらう。又或書に、此の句は春の句であるが、寧ろ秋のやうな感じがすると謂うたのは、面白いが、寂味を宗とした芭蕉としては、此の句に限らず、他にも斯樣な例が多い。兎に角此の句は、巧いやうな巧くないやうな、味の有るやうな無いやうな、芭蕉の句集中に有つても無くても可いやうな、又無くてはならぬやうな、一種の妙な地位に在る句である。是が卽ち禪味と謂はれた所であらう。

初懷紙と花故事

『初懷紙』(春百韻とも、鶴之歩とも鶴百韻とも)は其角の、「日の春を流石に鶴の歩み哉」を發句に、芭蕉及び門下の江戸の連衆で卷いた百韻で、餘程優れた名卷であるのみならず、芭蕉の蕉風以後の殆ど唯一の百韻とも稱すべく、(凉しさの卷は貞享以後のものではあるまじきことは、前にいうた。其の他にも芭蕉の作として傳はつてゐる百韻もあるが、何れも眞僞不明である)又無論俳諧百韻中では、無類の傑作である。此の百韻の前五十句だけを註釋した『花故事(はなのふるごと)』と題する書(寶暦十三年蘭叓刊、單行本は未見)があつて、芭蕉の自注と傳へられてゐるが、無論自注ではあるまい。但し實によく出來てゐる。なほ此の百韻及び註釋の内容に就いては別に後編にいはう。

醫術を學ぶ

此の頃常陸の本間道悅に就いて醫を學んだとの言傳へがある。『隨齋諧話』に、其の時の誓紙とて本間

古池の句の地位

疑ふべき傳へが多い

七部集にも入れられ、中の連句は『冬之日』の翌年春に成つたもので、二者は姉妹篇とも謂ふべく、『春之日』の方が少なからず劣つてはゐるが、なは有數の名撰集たるを失はぬ。（後編參看）

古池の句は、淡泊無味の裏に閑寂幽渺の趣を具へた佳句であるが、芭蕉の句としては、太した名作とも思はれぬ。但し亦其の可も無く不可も無いやうな處が、却て芭蕉も我が家の正宗として適當と思うたかも知れぬ。支考の『葛之松原』（元祿五年の編といふが、確かでない）に下のやうに記してゐる。芭蕉が恰も風雅の變中に、必ず中間の一理があらうと思うてゐる頃のある夜、蛙の水に飛入るのを聽いて、先づ「蛙飛込む水の音」の七五を得た。其角が傍に在つて「山吹や」の初五を付け試みたが、遂に「古池や」と定めた（以上）と。此の傳へは、確かとは謂へぬであらうが、茲に中間の一理とは、即ち可も無く不可も無い處を指したものであらう。又此の句を、禪意だの祕事口傳だのといろ／＼難かしい理窟を付けるのは、固より當るまいが、兎に角一種の無味の味を有つた、禪家などの喜びさうな句である。但し『花屋日記』に、此の句を詠んで一風を始めてからの句は、皆辭世だなどゝ、芭蕉が此の句に特別の重味を有たせたやうに記してゐるのは、實らしくない。芭蕉が特に此の句を我が家の宗句として持囘つたかさへも疑問である。又是を動中靜の意を現はしてゐると說くのも如何と思ふ。句の表は成程古池の靜と、蛙の音の動とであるが、此の句に對して起るのは、寧ろ幽寂の感である。靜中動などいふならば、却て「靜かさや岩に沁み入る蟬の聲」などが當つてゐるやうに思ふ。又杜句の伐木丁々山更幽から出たとの說も

乞食

此の事は後編に改めていはう。風瀑を送つて「忘れずば佐夜の中山にて涼め」。又「乞うて食ひ、貰うて食ひ、流石に年の暮れければ」と前書しての「めで度き人の數にも入らん老の暮」の句は、此の頃のといふことである。(發句集、袖草紙等)句は前書共『陸奥衛』にも見えてゐるから、確かであらう。而して當時の芭蕉の實境であつたものと想はれる。陶淵明の乞食の詩(淵明の作ではないとの説もあるが)などゝ想ひ合されて、人をして悶々の情に堪へざらしめる。文章や短冊を上手に賣つて、食うたり遊んだりする手段を敢てし得なかつた芭蕉には、乞食でもする外には、方法が無かつたのであらう。尤も乞食というても、正か托鉢して歩いた譯でもあるまいと想ふが、それもどうか。

貞享三年四十三歳の春は、深川の草庵で迎へた。「伊勢が賣る家にも來たり千代の春」。「幾霜に心芭蕉の松飾り」。隣庵の僧宗波の旅立を送つて、「古巣たゞあはれなるべき隣哉」。此の宗波も多分芭蕉の感化に依つての俳人で、芭蕉庵の側近くに庵居してゐたものと見え、芭蕉の晩年頃迄は、茲に居たことは明らかである。なほ後にもいふ。

古池の句

古池や蛙飛込む水の音

は、此の春の作である。天和年間の作との説(支考)は固より誤りであらうし、又貞享二年作との説は成立たぬ。芭蕉が江戸に歸つたのは、二年の四月で、蛙は春であるから、此の年に芭蕉庵で蛙の句のありやうがない。句は此の年の春の『蛙合』に始めて出、又同年八月に出た『春之日』にも出てゐる。此の集は

春之日

惡くなく、參考すべき書である。他にも一二あるが、好くない。

熱田三歌仙

『熱田三歌仙』は「海暮れて」「何とは無しに」「つく〴〵と」の三歌仙を以て名づけたので、此の書は右三卷の外に「遊び來ぬ鰒(一本鈍)釣り兼ねて七里迄」(桑名より熱田に至る途にて)「此海に草鞋を捨てん」(前出桐葉亭に暫く留まるとて)及び「しのぶさへ」「馬をさへ」「磨直す」「思ひ出す木曾や」「牡丹蘂深く」、外に桐葉の句など數句を收めたもので、安永頃の曉臺板本もある。『冬之日』に併せて、此の旅行中での收獲の一として相當な地位に置かねばならぬ。

芭蕉の不在中

芭蕉庵の留守居は、誰がしてゐたものか、未だ其れに關する材料を見出さぬ。壽貞が早くから江戸に來てゐたものであれば、後の例もあり、或は壽貞などが留守居をしたのでないかとの想像も付け得るが壽貞が東下した時期も、未だ判つてゐぬし、其の他、庵に關する此の間の事は、明らかでない。後には次郎兵衛が芭蕉の用を勤めてゐたやうであるが、此の頃はどうであつたか、是等もよく判らぬ。

第七節　歸東後の江戸住及び鹿島紀行

貞享二年四月江戸に歸つてからは、暫らく平穩な生活を送つたと見え、別段に記すべき事も無い。是から二個年餘りは、深川の草廬に留まつてゐたのである。

涼しさの卷

『一葉集』(附二ノ一八オ)に「同年(貞享二)六月二日東武於小石川興行」と題して「涼しさの凝砕くるか水車」(清風)を發句に、嵐雪其角等との百韻を載せてあるが、果して此の年の作であるか、疑はしい。

蛭ヶ小島の僧

は、二十年前の故人に邂逅して、「命二つ中に活けたる櫻かな」。（竹人の芭蕉傳に、此の句は土芳が、水口迄跡を追うて來て、同宿した時の句としてある。而して翌日中村柳軒といふ醫に招かれて、又此の句で挨拶したとある。なほ可ㇾ考）伊豆蛭ヶ小島の僧某が、去年の秋から行脚してゐたが、芭蕉を慕うて草枕を共にし度いとて、態々尾張から尋ねて來た。などは、芭蕉が當時佛徒にすら既に高僧の如く景慕されてゐた一例であらう。芭蕉は「いざ共に穗麥食はん草枕」など戲れた。善美を極めた人格の光りは隨處に輝いてゐる。

大顛の遷化を聞く

此の僧から其角の禪道の師鎌倉の大顛和尚（前出）が今年正月三日に遷化されたことを聞いて、「梅戀うて卯の花拜む涙哉」と詠んで、其角に贈つた。（新山家）又杜國が許へ、「白芥子に羽もぐ蝶の形見哉」。更に熱田の桐葉方に歸り、やがて東下するとて「牡丹蘂深く分け出づる蜂の名殘哉」（初作、分けて這出づる蜂の）之を立句に桐葉叩端との三吟一卷があり、是より先にも桐葉の發句で一卷（一葉附二ノ一四ゥ以下）あつた。外に芭蕉の「思ひ立つ木曾や四月の櫻狩」を發句に、歌仙の仕懸（十二句だけ、一葉附二ノ一七ゥ以下）もあつた。尾州を出て甲州を經、ある山家に立寄り、「行く駒の麥に慰む宿り哉」。

江戸に歸る

四月の末、深川の草庵に歸つて、「夏衣未だ虱を取り盡さず」。

三大紀行

『甲子吟行』は茲で終つてゐる。此の紀行と『卯辰紀行』と『奥之細道』とを合せて芭蕉の三大紀行と稱すべく、文章としても、年代としても此の順序で、後のもの程だん／＼進境が見えてゐるやうである。此の紀行には、積翠園の注（刊本）があつて、餘りよく出來てもゐぬやうであるが、此の人の著書は概して

富人秋風を訪ふ

何やらゆかし菫草

松は花より朧にて

て、「水取やこもりの僧の沓の音」。京都に上り、富人三井秋風が鳴瀧の別亭（此の亭に就いては、附編の凡兆日記の解題にいはう）に招かれて、「梅白し昨日や鶴を盗まれし」。此の句は阿諛の意があるご或人の評したのを、『去來抄』は彼是辯じてある。芭蕉は門人の兎角の噂を聞いた爲か、後に再び秋風を訪はなかつたと傳へられてゐる。又此の時季吟を訪うたといひ、又千那（芭蕉庵春秋に不角の千那遠忌文を引いて、六條の旅舍にて、正風の奥義を尋ぬ云々とある）尙白が入門したといふ。是等は實であらう又ある人の山家を訪ねて、「樫の木の花に構はぬ姿かな」。伏見西岸寺に任口上人（藤堂任口とは別な人で、西岸寺三世寶譽のことである。貞享三年四月寂す。年八十餘。紀州出身の人らしい）を訪うて、「我が衣に伏見の桃の雫せよ」。大津に出る山路で、

山路來て何やらゆかし菫草

此の句は初五を「何とは無しに」として、「編笠敷いて蛙聽き居る」の叩端の脇で、歌仙一卷（一葉附二ノ一三オ）があつて、佳卷である。後に熱田に出ての付合であらう。『芭蕉全集』（沼波氏）に「鶴の巣も見らるゝ花の葉越哉」を、右の句と並べて出してあるが、如何かと思ふ。此の句は『續虛栗』に見えてゐる堅田の本福寺に千那を訪うて、唐崎遠望を「唐崎の松は花より朧にて」。是は切字が無いので、後に口訣だの祕傳だのと、喧ましく議論された句である。千那脇「山は櫻をしぼる春雨」。ある茶店に憩うて「躑躅花活けて其の蔭に干鱈割く女」。是は芭蕉の發句としては、甚だ珍らしく且風變りの句である。水口で

年暮れぬ笠着て草鞋穿き乍ら

奈良京都に遊ぶ

れ賣らん笠の雪」、臨「酒の戸叩く鞭の枯梅」(抱月)とあるが、最初に擧げたのが好いやうである。是には杜國の「朝顔に先立つ母衣を引張りて」の第三迄あつた。(赤雙紙等)「馬をさへ眺むる雪の朝哉」も此の頃の句である。「茲に草鞋を解き、かしこに杖を捨て、旅寢乍らに年の暮れ」たので、

年暮れぬ笠着て草鞋穿き乍ら

此の句は、後に蕪村が「芭蕉去つて其の後未だ年暮れず」と和した名句で、芭蕉の一生涯は實に此の一句に縮寫されてゐる。句選に「病中」と題して「藥飲むさらでも霜の枕哉」(笈日記にも)の句があるが、是も此の頃の吟との說もある。(袖草紙等)又「仲惡しき人を取繕ひて、「雪と雪今宵師走の名月か」は、『笈日記』に「杜國亭にて」とあるが、是も此の頃の句といふ。(同)但し又芳野紀行の時のだとの說もある。(句選年考)未だ孰れが是かを定める材料を得ぬが、兎に角此の頃は此の附近の門人達の家を、此處で三泊彼處で五泊とさすらひ歩いてゐたものらしく、其の間には、持病に苦しめられたこともあらう。芭蕉は常に腸が惡く、下血などの持病を有つてゐたのである。

貞享二年四十二歲の春は、山家(此の山家は何處をいうたものか明らかでない。或は竹人の芭蕉傳にいうてゐる如く、鄉里邊のことかとも想はれるが、よく判らぬ)に迎へて、「誰が聟ぞ齒朶に餅負ふ丑の年」。奈良に遊ぶとて出かけ、途中で「春なれや名も無き山の朝霞」。又「奈良七重七堂伽藍八重櫻」は、句集には此の時のとし、又前年の作との說もあるが、果して此の頃のかどうか疑問である。二月堂に籠つ

藁一束ね足包み行く

名古屋に入る　身は竹齋に

冬之日

に、桐葉等との四吟一巻（一葉附二ノ九ゥ佳作）もあつた。「檜笠雪を命の宿り哉」（桐葉）「藁一束ね足包み行く」（芭蕉）は、此の時の訣別らしいが是も芭蕉の實境其のまゝであらう。熱田の御社に詣で、「しのぶさへ枯れて餅かふ宿り哉」は『熱田三歌仙』（後にいふ）には「神前の茶店にて」と前書があるが、是も難解な句である。芭蕉の句集中、難解なものは、檀林風時代のを除けば、此の頃のに最も多い。此の前後は、熱田名古屋附近を來去彷徨してゐたのであらう。名古屋に入つて、

狂句凩の身は竹齋に似たる哉

此の狂句の二字は、多分此の句の風が狂句（笈之小文に狂句を好むこと久しとある狂句のやうな意味での）じみてゐるので、斷り書に附けて置いたのを、句中の語と誤解されたのであらう。尤も「僧朝顔」などゝ續けた時代の句ゆゑ、隨分「狂句凩の」とも言ひ兼ねぬかも知れぬが、それにしても、「狂句凩の」では、意味の取りやうがない。二字は多分句中の語ではあるまい。『泊船集』には、後に芭蕉自ら此の二字を省いた由とて、二字を除いて入れてあるが、始めから句中に入るべきではなかつたらうと思ふ。此の句を巻頭に置いて、杜國、荷兮、野水、重五、（松井半七、足尾村の人と云）正平等を相手に興行したのが、有名な『冬之日』（尾張五歌仙とも）である。此の集の内容に就いては、別に後編にいふ。是等の人々は、大抵此の時入門したのであらう。雪見に、「市人にいで是れ賣らん雪の傘」。此の句は、此の紀行の一本には「市人よ此の笠賣らう雪の傘」とある。又『笈日記』には「抱月亭」と前書があつて、「市人にいで是

江尾行脚

古人かやうの夜の凩

候へば、得なす間舗も候以上」は、此の吉野行脚の時のでないかと思ふ。沼波氏の『芭蕉全集』なども、貞享三年に入れてゐるが、其の吉野行脚(後にいふ)の時は、旅費等も豊かであつた筈だから、二分位の金に困つたとは思はれぬ。特に杜國を伴うて播州巡り迄したのであるから、尙更さう思はれるが如何であるか。尤も此の手簡の眞僞は亦別問題である。

大和から山城を經、近江を過ぎて、美濃に入つた。今須山中常盤御前の塚を見て、守武の句に本づいて「義朝の心に似たり秋の風」。此の句の意味はいろ〳〵に取れるが、兎に角芭蕉の思想を推量る上に興味ある者である。不破之關では「秋風や藪も畑も不破の關」。大垣では、谷木因が家に客となつた。木因は、抗瀬川の翁と稱せられ、船問屋で、通稱を善太夫といひ、木端又白櫻叟と號した。季吟の門人で、博覽を以て聞え、芭蕉が「鳶のゐる」の附句の出處を聽いた話などもある。「死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮」。『春之日』に、如行(近藤氏)の「霜寒き旅寢に蚊屋を着せ申す」。(芭蕉の脇「古人かやうの夜の凩」は風人としての芭蕉の眞面目を最もよく現はしてゐるものゝ一である)は「芭蕉を宿し侍りて」と前書があつて、矢張此の時のことであらう。(如行の名の上に大坂住とあるから、春之日の頃には如行は大坂に住んでゐたのであらう)桑名本當(一に統に作る)寺では、「冬牡丹千鳥よ雪の子規」といふ難解な句を得た。それから尾州熱田の林桐葉を訪ねて、「此の海に草鞋を捨てん笠時雨」の句と、是を立句としての桐葉等との表六句とがあつた。又是より少しく後の十二月十九日に「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」を立句

を出して、發句を望んだので、「蘭の香や蝶の翅に薰物す」。此の句は發句集には長い前書があつて、蝶はもと遊女であつたといふことで、奥州行脚の時、市振で「一つ家に」の句を詠んだ時の譚と好一對の佳話とされてゐる。

古郷に歸る

九月の初めに古郷に歸つて見ると「北堂の萱艸も霜枯れ果てゝ、今は跡だに無し。何事も昔に變りて同胞の鬢白く、眉皺寄つて、たゞ命ありてとのみ言ひて、詞は無きに、(〇などあるので、可なり永い間鄕里に歸らなかつたことが判る) 兄の、守袋をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、暫らく泣きて」(和漢文操に、此の文を「家は皆杖に白髮の墓參り」の序としたのは例の支考の細工か。なほ可レ考)「手に取らば消えん淚ぞ熱き秋の霜」。此の時兄の家の後園に無名庵を結んだとの說もある。(延寶年間歸鄕說の項參看)

大和巡り

それから大和巡りの旅に出かけて、千里が故鄕の葛下郡竹之内といふ處に滯留し、暫らく足休めをした。「綿弓や琵琶に慰む竹の奥」。二上山當麻寺に詣で、庭上の古松を見て、「僧朝顏幾死にかへる法の松」。此の句は、僧や朝顏は幾度も死に變つたが、松のみは永らへてゐるの意であらう。隨分難かしい言ひ方をしたものである。吉野の奥を辿り、麓のある妻帶の坊に宿つて、「砧打つて我に聽かせよ坊が妻」。西行上人のとく〳〵の淸水の跡を見て、「露とく〳〵試みに浮世すゝがばや」。後醍醐天皇御廟を拜し「御廟年を經て偲ぶは何を忍ぶ草」。『芭蕉消息集』の去來宛の手簡「近日芳野行脚存立候間、金子二歩御貸可レ給候。抑付貰ひ溜め、返濟可レ申候。されど、我等事に

伊勢に入る半僧半俗の風

霜の髭

出る抗は打たれる意だとしたのは、隨分困つた解釋である。是等は實に芭蕉を誣ふること甚だしいものでないかと思ふ。芭蕉ともあらう者が、そんな淺陋至極な理屈を句にする筈はあり得ぬ。此の句は、盛り短い花である上に、道の邊なるは、馬にさへ食はれたことよの意(白詩の槿花一日自爲榮の槿は、朝顏のことらしいが、それをムクゲとしての句であらう)と解すべきである。(俳人百家選に、此の句を越後柿崎で、氣儘息子を誡めて、出張つた爲に食はれたの意に詠んだとしたのは、更に奇拔である)早曉の出立に、「馬に寢て殘夢月遠し茶の煙」などは、虛栗調の漢詩崩しであるが、一種の風韻があつて、一寸面白い。松葉屋風瀑といふ者を伊勢(山田か)に訪ねて、十日許逗留した。「腰間に寸鐵を帶びず。襟に一嚢を繫けて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に似て髮なし。我僧に非ずと雖も、浮屠の屬に類へて、神前に入ることを許さず」とあつて、半僧半俗の行裝が、出家に似てゐるので、大廟の鳥居內へは入れられなかつたものと見える。芭蕉の半僧半俗の風は、『鹿島紀行』にも見えてゐる。外宮では「晦日月なし千年の杉を抱く嵐」。西行谷の麓で、芋洗ふ女共を見て、「芋洗ふ女西行ならば歌詠まん」。山田の雷枝を訪ふと、此の句を面白がつたと見え「宿參らせん西行ならば秋の暮」と詠んだので、芭蕉は「芭蕉と答ふ風の破れ笠」と應へた。又嗒山を訪うて「師の櫻昔拾はん木葉哉」の句に答へて、「薄に霜の髭四十一」といふてゐるので當時既に髭が白かつたとの說を證してゐる。又此の付句は、此の年に芭蕉が四十一歲であつた證據としても引かれる重要な句である。ある茶店に立寄ると、蝶といふ名の女が、白絹

には千りなどあるから、チリと訓むのである。通稱油屋喜左衞門、陸奥衞に薙髮の時の歌「一筋に思ひ入る日の影法師、あるをあり共なきをなき共」又偈なども あつた)といふ者を伴うた。千里の句「深川や芭蕉を富士に預け行く」。箱根にかゝつた日は、富士が霧に隱れて見えなかつたので、「霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き」。芭蕉は生涯富士の句を詠まなかつたと言傳へられてゐる(東山墨直)(句選年考に引く)が、「一尾根は時雨るゝ雲か富士の雪」の句もあつた。但し是は果して芭蕉の句かどうか疑問の句で、又「霧時雨」は、富士を詠んだとも謂へぬ句であるから、言傳へは或は實かも知れぬ。「目にかゝる時やことさら五月富士」といふ晩年の句もあるが、是とても、其の景を叙した句ではない。富士川の邊りで、三歳許の捨子を見て、「猿を聽く人捨子に秋の風如何に」。「如何にぞや汝父に憎まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を憎むにあらじ。母は汝を疎むにあらじ。唯是れ汝が性の拙なきを泣け」と言ひつゝ、食物を投げ與へて過ぎた。此の語を、人情に遠い似而非悟道の辯だなどゝ甚く貶す者もあるが、其れは思ひ違ひであらう。芭蕉のやうな、痛々しい迄に弱く脆い感情の持主には、斯ういふ風にでも言うて、强ひて諦めねば、殆ど自ら堪へ得なかつたのであらう。此の冷語の裏には、却て通り一遍の「あゝ氣の毒な」などいふ間に合せ詞の、迚も及びもつかぬ、愛憐の極悲愴の極の眞情が動いてゐたのであらう。自分だけは斯く解せざるを得ぬ。馬上吟、「道の邊の槿は馬に食はれけり」。素堂の跋での評に、此の句「山路來て」の吟と共に、此の紀行中の秀逸とある如く、有數の名句である。子規氏などが、ある説に依つて

旅行の所得

と共に一讀すべきものであるが、是は多分芭蕉の草稿本にでも付けたものであらう。

芭蕉は旅行毎に多くの傑作を得るのが例であつたが、此の最初の旅行でも、其の俳歴に殆ど一時期を劃する程重要な意義のある作を遺した。即ち蕉風の初聲と稱せられるのみならず、前後其比類を絶し最も著い特色を有つた傑作『冬之日』を得た。此の集のことは後編に別にいふ。それから、後の蕉風の傳播の一中心地となつた濃尾方を始め、江州、郷里等に蕉風の種を播き、根を据ゑたので、其の効果は實に大なるものであつた。但し是等の旅行を、芭蕉が自分の俳風を宣傳せん爲であつたやうに謂ふのは如何かと思ふ。結果が自然にさうなつたといふ迄で、芭蕉自身は、單だ風狂癖に驅られたか、故郷に用があつたかに過ぎまい。以下記する所は、紀行の文を骨子とし、句集等で補うて行くのである。以後の紀行も其の通りにする。草庵を出るとて、

野ざらしを心に

野ざらしを心に風の沁む身哉

紀行の一名を「野ざらし」と稱したのは、此の句に依つたのであらう。又「秋十とせ却りて江戸をさす故郷」。一說に從へば、江戸に出てから、一度延寶四年頃に歸つた筈であるから、今年四十一歲迄は足かけ九年目で故郷に歸るので、「秋十とせ」と略ぼ合ふ譯である。(此の句に見ても今度の歸郷が十年目程であつたことが判る)十年は、例の賈島の客舍幷州已十霜云々、却望二幷州一是故郷の詩に依つたのであるから、丁度十年目でなくても一向差支ない譯である。此の旅行には千里(枯尾華には知利とあり、又他書

九年目の歸郷か

同行千里

遠慮したのかも知れぬ。こんな物迄正か僞作する者もあるまいから、(但し隨分念の入つた僞作もあるか
ら、一概には謂はれぬが)正しい材料と見ても可からう。

『虚栗』は天和三年卽ち火災の翌年五月に其角が出したもので、蕉門の撰集としては、やゝ形の整うた最初のものである。內容のことは、後編にいふが、中の句は、調子の佶屈聱牙を以てよく知られてゐる此の集の頃に至つて始めて多少檀林風と異なつた特色を現はしてゐるが、それも太したことはない。但し芭蕉一派の風を世に知らしむるには、可なり力のあつた集のやうである。

第六節　野ざらし紀行

貞享元年四十一歲卽ち芭蕉庵再興の翌年の八月に江戶を出て、東海道を經、伊勢に參宮し、九月鄕里伊賀に入り、それから大和巡りして吉野に出、江州に廻り、濃美を過ぎて甲州路にかゝり、翌二年四月に江戶に歸つた。此の時には紀行があつて、今ある單行本はもと『泊船集』(元祿十一年風國編、此の書には「芭蕉翁道の紀」と題してある)の中に收めてあつたのを、安永九年に、秋瓜の門人波靜といふ者が素堂の自筆の序を附刻して再板單行したのである(野晒紀行翠園抄等)本名を「草枕又は野ざらしの紀行」といふた由、許六の『歷代滑稽傳』に見えてゐる。又『芙蓉文集』に「野ざらしの序」と題して、此の紀行の序が收めてある。もと單行本があつたやうに云ふ者もあるが、如何かと思ふ。『芳野紀行』(笈之小文)も『奧之細道』も、皆芭蕉歿後の出板である。又素堂の此の紀行の跋(素堂文集)も序(前記)もあつて、紀行

なほ又『小文庫』の序や句集等に「木曾の情雪や生えぬく春の草」といふ句があつて、木曾路での吟との說と、粟津木曾塚での吟との說と兩說があるが、若し前說を是とすると、或は此の時の吟かも知れぬと思ふ。「木曾の情」とある所、恐らくば前說に從ふべきであらう。

芭蕉庵再興

天和三年の五月、其角等の招請に依つて、江戶に歸つた。乃で門人等相謀つて、燒跡に再び草庵を營んだ。（枯尾華）此の再建の勸化文は、俳友素堂の起草で、『隨齋諧話』に出てゐる。是は上州館林の松倉九皐の家から出たものだといふことで、寄附名簿も添うてあり、一寸面白いものである。

素堂の勸化文

芭蕉庵裂て（?）芭蕉庵を求む。力を二三生に賴まんや。惠みを數十生に待たんや。思ふに廣く求むるは、却て其心易きに似たり。甲を賴まず。乙を耻づること勿れ。各志の有所に任す。堂成るの外、亦何をか求めん。將た是をしかいふ。淸貧とせんや。將た狂貧とせんや。翁自らいふ。たゞ貧也と。貧之又貧、許子の貧それすら一瓢一軒の求めあり。雨を障へ、風を防ぐ備なくば、鳥にだも及ばず。誰か忍びざるの心なからんや。是れ草堂建立のより出づる所なり。天和三年秋九月潛汲二願主之旨一濺二筆於敗荷之下一。山素堂。（素堂文集の此の文も是から引いたのであらうが、字句に少異がある）

如何さま素堂の文らしく、僞作とは見えぬ。又寄附者としては、擧白、嵐雪、不卜、嵐竹、枳風、北鯤山店等の名が列記してある。たゞ聊か訝かしいのは、破扇一柄、嵐蘭なぞあることと、杉風、卜尺、其角等の名の見えぬことゝである。が、後者は、或は是等の人々も、前年火災に罹つたので、寄附勸誘を

州郡内谷村へも度々參られ、三十日或は五十日逗留す。又ある時は一晶など同道す」とある語氣から察すると、當時麋塒が此の谷村に居たものとしか想はれぬが、又同書に芭蕉の眞蹟を揭げて、「上野國館林高山氏藏」と記した處から見ると、少なくも子某の代には館林に家のあつたことだけは判る。すると其の父の麋塒を甲州住と一寸考へられなくなる。けれども右の文は、芭蕉が甲州へ行く序でに館林の高山氏宅に立寄つたの意味とは、どうしても取れぬやうであるが、如何であるか。或は當時麋塒が甲州に居住してゐたのでないかと想ふが、固より確かでない。兎も角も此の家などにも、芭蕉は行つて厄介になつたのであらう。然るに又『句選年考』に、或人の家藏の眞蹟の柏水宛の書翰といふを引いてあるが、それには、句は「馬ほく／＼我を繪に見る枯野哉」とあつて、木曾旅行中の淺間での句としてある。但し又ある芭蕉自筆の稿には、甲斐の郡内に至る途中の吟としてあるともいふ。(湖中芭蕉傳)眞蹟など稱するものは、往々此の類で、どちらかゞ僞筆に決つてゐる。又『續虛栗』(貞享四年)に「山賤の頤閉づる葎哉」の句があつて、前書に「甲斐山中」としてあるが、是も此の時の句との說もある。しかし是は疑はしい。又「雪散るや」の諏訪での句(後にいふ)も、此の時のとの說があつて、是を冬の句とすると、「馬ほく／＼」を「枯野哉」として、信州旅行の冬の句とするのと、合はぬこともないが、其れにしても聊か訝かしい節もある。それはなほ後にいはう。併し甲州に行つた序でに諏訪や淺間を巡るなどは、ありさうなことで此の事實迄を疑ふには及ばぬ。句鑑には「洗馬にて」と題した「梅雨ばれの私雨や雲ちぎれ」の句もある。

六祖五兵衞

扨又甲州では、誰を使つたかに就いては、『隨齋諧話』や湖中の芭蕉傳等には、佛頂和尙の下僕で、目に一丁字は無かつたが、得悟が甚だ優れて、六祖と渾名されてゐた五兵衞といふ者を、同門の緣りで、甲州の山棲に訪ねたのであるとある。是等は他に徵すべき材料が無いので、確かとも謂ひ兼ねるが、亦疑ふべき理由も無いやうである。又或傳(名を逸す)に甲州郡內谷村に白瀧とて名高い名所があり、其處に芭蕉は居たとあり、又其の地には磯部源左衞門といふ旗本が居て、芭蕉を世話したとある。又或說では、甲州の郡內谷村と初雁村とにも逗留し、初雁村の等力山萬福寺といふ寺に、芭蕉の書いたものが多く遺つてゐたともいふ。(湖中芭蕉傳)是も實かも知れぬ。或は又初雁村に杉風の姉が居たので、其處を便つたのであらうともいふ。(同)是もありさうな事であるが、確かゝどうか。

馬ほくほくの吟

又此の旅行の途中の吟として「馬ほく〳〵我を繪に見る夏野哉」が傳はつてゐる。此の句は句選には「枯野哉」とあつて、此の方が可いとの說(句解參考の如き)もあるが、『一葉集』には「夏馬の遲行我を繪に見る心哉」となつて、是を立句とし、脇は瀧の句(即ち夏)で、麋塒(高山氏)一晶との三吟歌仙(一葉附一ノ六〇ウ)がある。又「胡艸垣穗に木瓜も無き家哉」の麋塒の發句「笠面白や卯の實むら雨」の一晶の脇で、芭蕉との三吟歌仙(同六二オ)もあるが、後者の句意から察すると、麋塒が、一晶及び芭蕉を我が家に宿しての挨拶の句らしい

麋塒及び其の家

乃で麋塒は當時甲州の住人であつたとすると事實がよく疏通するのであるが、又疑問もある。前にも引いたことのある『眞澄鏡』に、麋塒の子某の語として「亡父幻世(○麋塒晩年の號)懇(○芭蕉と)にて、甲

蕉全集』には、之を「天和三年か」としてあるが、文中に「春は其角集あみ申候間」とあるは、天和三年の『虚栗』の事で、「私は宿は橘町彦右衛門と申もの店にて」とあるから、火災後一時此の宿に居た時の手簡ではあるまいか。さうとすると、火災は此の日附の十一月十八日より以前となり、又此の手簡は天和二年のといふことになるのであるが、如何であるか。兎に角天和三年のとは何に據つたのであるか。元祿五年冬に橘町に居たことは明らかであるが、なほ天和頃のものであらう。橘町は芭蕉と因緣の深かつた處と見え、一茶の「なにぶくろの序」にも「橘町といふ所は、芭蕉翁の袖の香（〇橘の緣で、昔の人の云々の歌に依つて斯くいうたのであらう）懷かしとて、元夢法師其處に今日庵といふを營みて、」とある。

甲州滯在

火災後直に甲州に出かけたのか、又翌年春になつて出かけたのか、疑問であるが、兎も角も、それから五月頃迄甲州に滯在してゐたものと見える。『枯尾華』に「甲斐が根に暮して、富士の雪のみつれなければ」とあり、又後年加賀の北枝に與へた消息中にも「池魚の災承り、我も甲斐の山里に引移り、さま〴〵苦勞致し候へば、御難儀の程察し申され候」とある。別に甲斐の名家に便つたといふやうな事も見えぬから、甲州に行つては、いろ〳〵苦勞したものであらう。憶ふに、例の至つて遠慮深い性質から、

江戸は火炎後の取込

火災後は知人の厄介になるのも心苦しく、特に江戸は、火災後の取込みで、ごた〳〵してゐたことでもあらうから、態と甲州に身を避けたのかも知れぬ。庵の燒失が、お七の火事の時でないとしても、略ぼ同じ頃にあつた筈であるから、大方そんな事であつたらう。

私宿は橋町？

年夏の出板で、火災を天和二年冬とすると、其の翌年春から夏にかけて出來たものであるのに、一言も此の火災の噂が見えてゐぬ。庵の燒失は、其角も「是ぞ玉の緒の果敢無き初め也」と云うてゐるやうに、芭蕉に取つては可なりの大事の筈であるのに、見舞の句一句すら見えてゐぬ。是は今から考へると、隨分訝かしいことである。但し仲間で他に燒けた者もあつて、芭蕉庵の事のみ言はれなかつたかも知れず又ふ庵の燒失位は、人々の念頭に置かなかつたのかも知れぬ。次に又庵燒失後芭蕉は甲州に行つて、翌年夏迄滯在してゐた筈であるのに、芭蕉の「花に浮世我が酒白く飯黑し」を立句とした、一晶嵐雪其角等との歌仙が同書に出てゐる。但し是も或は前年春の作かも知れず、或は又、芭蕉が江戸を出たのは、前年冬ではなくて、春になつてからかも知れぬ。又『虛栗』の芭蕉の跋は、此の年仲夏日卽ち五月であるが是は江戸に歸つてから書いたとすればよろしい。(されば桐雨筆記に、甲州滯在を夏の末迄としたのは誤りとなる譯である) 又本鄕邊から出た火事に、如何に大風でも、深川迄延燒して行く間には、易々と避難出來さうなものであるのに、「急火に圍まれ」命からぐ\遁げたといふのも訝かしい。併し是等も、此の大火の時に燒けたとするから訝かしくなるので、實は近所から火事が出たのでないかと思ふ。『繪詞傳』にも「庵の邊近く火起りて、前後の家共めらく\と燒くるに」と記してゐる。此の方が實かも知れぬ。斯く解釋すると、是等の疑問は大方始末がつくのである。

『眞蹟集拾遺』に、霜月十八日の日附で、桃青が中尾濱兩人宛てた手簡が載せてあつて、沼波氏の『芭

近年の通說では、芭蕉庵燒失を天和二年冬としてゐる。此の冬十二月二十八日未の下刻に、駒込大圓寺から火を發し、本郷下谷神田日本橋淺草等の大部分、又は一部分を燒いて、兩國橋をも燒き落し、火は本所深川に飛んで、夜に入つてやう〳〵鎭火した。（武江年表）俗に此の火を八百屋お七の火事と呼んでゐる。芭蕉庵の燒けたのも此の時であらうといふ。（同）『枯尾華』其の他の古い芭蕉傳で、庵の燒失を天和三年冬としたものも少なくないが、芭蕉庵の再興が天和三年九月（後に引く素堂の勸化文參看）とあり、又其の翌貞享元年八月には、甲子吟行の旅に出かけてゐるし、旁〻天和二年冬といふが實らしいので、『桐雨筆記』『句選年考』等は此の說を取つてゐる。三年說よりも二年說の方が可能が多い。多分此の方が正しいであらう。『枯尾華』にも、庵は芭蕉が江戸に歸つてから、門人達が再興したとあり、又庵に暫らく滯留してから、更に甲子吟行の旅に出たらしい氣味合に記してあるのとも一致する。又「霰聽く此の身はもとの古柏」の句は、句鑑に「再び芭蕉庵をつくり營みて」との前書があつて、是を秋再興に着手し、冬落成して入庵した時の句とすると、最もよく合ふ。若し天和三年說に從ふと、其の翌年五月頃甲州から歸り、庵を造つて入り、其の八月には早くも旅に出たことになるので、あまりに無理となる。二年冬に火け、三年夏江戸に歸り、翌年八月迄新庵に滯留し、それから甲子吟行に出かけたとすると、すべてが自然で、一通りよく解釋がつくのである。

然るに此の說にも、亦多少の合點の行き兼ねる點が無いでもない。其角編の有名な『虛栗』は、天和三

るか。意味も此の方がよく通り、「ふる」も無理とはならず、笠とも緣が付き、所載の書は芭蕉歿後のものであるから、確かとは謂ひ兼ねるが、句としては此の方が整うてゐる。因みにいふ『吉野拾遺』に後村上帝の御製として右の宗祇の句などが入つてゐるので、此の書は僞作とされてゐるが、それは兎に角に、芭蕉の此の句を、御製に擬した作だとて、『愚雜俎』に桃青を難じてゐるが、固より取るに足らぬ。素堂には、此の句に依つた「旅の旅つひに宗祇の時雨哉」の句があつた。

『枯尾華』に、此の頃圓覺寺の大顚和尙（其角の禪の師で俳號幻吁）が、易に詳しいといふので、芭蕉が占て貰うたことを記してある。此の時萃の卦䷬（彖曰聚也、王註云聚乃通也）を得た。此の卦は「一もとの薄の風に吹かれ、雨にしをれて、憂き事の數繁く成るめれど、命つれなく、辛うじて世に在るさまに譬へたり。されど、あつまると訓みて、其の身は潛かならんとすれども、彼方此方より事集ひて、志を安んずることなしとかや」とあつた。實に其の通りに、德を慕うて聚まつて來る人は、日に〳〵多くなつたが、何れも「兎にも角にも慰むれば、所得たる哉」といふ有樣であつたと其角は記してゐる。此の辭は、或は芭蕉の人と爲りから見て立てたのかも知れぬが、信によく中つてゐた譯である。其角が態々之を記してゐる處を見ると、其角も此の卦占には大なる興味を感じたのであらうと思はれる。而して大顚も亦芭蕉の爲人に深く注意した狀を、宛ら髣髴し得るのである。

第五節　庵の燒失と再興

門の歸春五英が營み、其の碑も建てゝある。二百回忌は麥林舍雨靜が營み、是も碑がある。(守墨庵柳眠居士卽ち柳居の碑もあるが、是は墓ではない筈) 又二世深川湖十の墓もある。(船窗の墓もあるといふが、予は見なかつた)『墨水消夏錄』(燕石本)に「長慶寺句塚碑云々、鵜殿士寧文を作り、東江源鱗之を書す。板本となりて世に傳ふ」とあるが、さういふものもあつたと見える。

此の頃であらう、自ら笠作りの翁と名乘り、手づから笠を製つた。竹を割つて之を削り、笠に編んで紙を張つては澁を塗り、塗つては又張り、二十日程かゝつて、やう／＼出來揚つた。「其形裏の方に卷き入り、外ざまに吹返り、荷葉の半ば開くるに似て、なか／＼をかしき形」であつた。笠の內に書き付けた句、

世にふるは更に宗祇の宿り哉

此の文は『雪丸げ』に見えてゐる。句は初五「世にふるも」として『虛栗』に見えてゐる。宗祇の「世にふるは更に時雨の宿り哉」に依つたので、宗祇のは「ふる」は降るに「世に經る」の意を持たせたのである。(新古今の二條院讚岐の、世にふるは苦しきものをの歌に依るか) 芭蕉のは「ふる」が隨分無理な使ひ方であるが、宗祇の句に對し、感慨の情に堪へずして、自づと斯く迸り出たのであらう。自から笠を作つて、其の奇形に會心の笑を洩らすなど、何ぼうをかしき翁ぞや。此の句一說には、初五「世の中は」とあるが、如何かと思ふ。又『泊船集』には、「世にふるも更に宗祇の時雨哉」としてあるが、例の後に直したのであ

蕉が深川隱遁以前から坐興庵と號してゐたので、深川に移つてからも、此の庵號をも用ひたといふやうなことでないかと想ふ。

長慶寺

森下町の長慶（深、桂とも）寺と芭蕉と何かの關係のあつたことは、『笈日記』に「阿叟の生前に賴み申されし寺也」などあるので、明らかであるが、どんな關係であつたか、詳しいことは判らぬ。史邦の『小文庫』の序に「長溪寺の禪師は、亡師年比睦び語らはれければ」とあるが、或は單に是だけの關係であつたのかも知れぬ。臨川寺も佛頂も臨濟宗であるのに、長慶寺は古くから曹洞宗であり、又佛頂と關係のあつた記錄も傳說も一切無いといふから、長慶寺と佛頂とは關係がなかつたと見るのが穩かゝと思ふ

佛頂と關係はあるまい

但し或書共には佛頂が嘗て此の寺に居たこともあるとしたり、長慶寺の住職佛頂と書いたりしてゐる。是は臨川寺の誤りと見るべきではあるまいか。禪宗は、古くから特に傳統や血脈を重んずる宗旨であつたから、他派の長慶寺に佛頂が住したとはどうも信ぜられぬ。或は其の寺の住職と懇意であつたといふことが、佛頂と混同された原かも知れぬ。但し是等も徵すべき確かな材料がないので、問題として遺して置くの外はない。

時雨塚

此の寺に、芭蕉歿後杉風が、「世にふるは」の句を埋めて、句塚を建てたことは、『小文庫』の序『笈日記』『頭陀物語』などに見えてゐる。（後の書にも多く見えてゐる）又芭蕉の五十回忌に柳居が此の塚を再興したことは『伊賀實錄』や『朱紫』等に見えてゐる。（他にも當時の記錄があらう）それから百年忌は柳居

は輕き我が世哉」の句もあるから、是も此の瓢の銘と思はれるが、瓢は大小二つあつたから、どちらの銘であるか、確かにはいへぬ。(内田氏の芭蕉後傳に「曾て是眞が原形の大きさのまゝ寫生せしを見たるに、高さ二尺三四寸、直徑五寸ほどの、細長き形にして、素堂の銘は朱漆に認められ、其背部に黒漆を以て塗りたる鐵環あり。其圖は寸錦雜綴に見えたり」とある)四十歲前後に六十餘に見えたといふのも事實らしく、當時既に髭さへ霜を帶びてゐた程であつた。「氣詰りて面白からぬ」とあるので、如何に當時から謹嚴の一面を具へてゐたかゞ想はれる。衣服では、羽織なども茶色を好んで常に用ひたことが、諸書に記されてゐる。出山の釋迦は、終焉後の遺物中にも見えてゐて、(寃日記)旅行の際は之を持佛として御守申して歩いたものでもあらう。發句に「文鱗生出山の御かたちを贈りけるを安置して」と題して「南も佛草も臺も涼しかれ」とあるのが、此の佛かと想はれる。

「杉風祕記」に、芭蕉庵は元祿十一年に他に移したとある。是は新庵のことであらう。移した場處に就いては、未だ材料を得ぬ。なほ又芭蕉庵は、一名坐興庵とも稱したやうにも傳へられ、嵐雪に「霜時雨それも昔や坐興庵」などの句もある。但し坐興庵が杉風所有當時からの本名であつたやうに考へてゐる者もあるが、さうではあるまい。若しさうとすると、矢張芭蕉入庵以前から庵號を有つてゐたことになるのであるが、實は芭蕉の方が深川入庵以前に既に此の號を稱してゐたらしい。延寶六年冬の『六番及び十二番句合』の寫本に坐興庵桃青と署名してある。此の一書だけでは、確かと斷言出來ぬが、或は芭

桃青深川の芭蕉庵、竈二つありて、臺所の柱に瓢を懸けてあり。二升四合も入るべき米入なり。杉風文鱗弟子の貢にて、米なくなれば、又入れてあり。若し弟子よりの米間違つて遲き時、瓢空けば、自ら求めに出でられしが、其頃笠翁子(○破笠)は二十三か二十四の時の由、翁は六十有餘の老人と見えし由、其頃翁は四十前後の人歟。笠翁子も、嵐雪居士もどらにて、照降町足駄屋の裏、其角翁の處に出居衆に、笠翁は居られ、嵐雪も繋り人にて、三人居られ候由。(○みゝな草貞享二年の條に、當時其角は深川木場邊に父と別居し、嵐雪破笠も同居してゐた由ある。玆の記事とよく合ふ)嵐雪なども、俳情の外は翁を外し逃げなど致し候由、殊の外氣詰り、面白からぬ故也。左右翁は德の高き人也。今大樣翁の像に衣を着せ候へ共、笠翁よく覺え候由、常に茶の紬の八德のみ着申され候。其頃其角嵐雪は、夜具などもなき蕩樂なる生活の由。翁の佛壇は、壁を圓く掘抜き、內に砂利を敷き、出山の釋迦の像を安置せられし由。目のあたり見たりとの笠翁物語。其頃其角嵐雪なども　文鱗(○其角の親友らしく、鳥居氏、虛無齋と號すと云)杉風などの見次の由。(○下略)

右記中の大瓢は、芭蕉庵再興の時の寄附帖に、一、大瓠一壺北鯤とあるのが其れであらう。是には素堂の銘で、一瓢重二岱山一、自笑稱二箕山一、莫レ習二首陽山一這中飯顆山(是に依つて瓢を四山と名けた)が書いてあつて、所謂芭蕉庵六物の一つである。二升四合云々は、芭蕉の瓢の辭に「大さ五升許」とあり、「年立つや新年古き米五升」の句などもあるから、五升許といふが實であらう。又「瓢の銘」と題して「物一つ瓢

る。芭蕉が夙くから杜詩に親しんだことは、其の句や文に杜句をよく引いてゐるのでも判るが、「熱田三歌仙」中の付句の「三股の舟深川の夜（芭蕉）庵住や獨り杜律を味ひて（叩端）」などは、どうも芭蕉に該てた句らしい。（連句は、脇句を除けば、通則として、作者の實境などを詠まぬものであるが、稀に例外として、之を詠んだらしい句もある。「芭蕉あるじの蝶叩く見よ」などもさうらしい）三股は芭蕉庵近くの當時隅田川が三つに分流してゐた分岐點をいうたので、今でも其の名が遺つてゐる。（但し寛文頃の地圖には、もつと下流に三ツ股の名を附してある）此の邊を往來する舟は、多分萬年橋の附近や、六間堀などに入れ、大川の本流を避けて碇泊したであらうから、庵附近には何時も幾許の舟が輻湊してゐたことであらう。『虛栗』に赴泊船堂途中感と題する揚水の二句が出てゐるが、是は芭蕉庵を指したのであらうと思ふ。其の句は「波道黑し夕日や埋む水小舟」などあつて、庵附近にも適はしい。伊賀の上野や京都東山で泊船堂の號は如何にも適はしくない。『續扶桑隱逸傳』の芭蕉傳にも、造廬於深川扁號泊船堂とあるが、何に據つたのであるか。古い傳にも此の説は往々記してある。

芭蕉の庵居の模樣など、詳しいことは判らぬが、いづれ番小屋を直したのでないとしても、ほんの膝を容るゝに足るだけの陋屋であつたに違ひない。市川柏筵（二代目團十郎）の『老之樂』に、庵の生活の樣子を記した處がある。是は破笠（即ち笠翁、小川氏、延享四年歿す、年八十五。畫も出來、又細工物では有名な人で、中々の奇人であつた）の物語を聽いて記したのである。

門にさし來る潮がしら」の句があつたり、門前から直に舟に乘つた(鹿島紀行)とあつたり、且もと其處が前述のやうな渠であつたりした諸點から想像したのである。此の庵の附近には、宗波の例の隣庵もあつた筈で、又奥州行脚の時、芭蕉庵は「人に讓り」、其の後復た江戸に出た時、舊庵の附近に、矢張池に臨んで三間の新庵を營んだ筈である。此の新庵の樣子は、移二芭蕉一辭」で大體は判る。因みに云ふ、『竹橋甕簡抄』(曲山人)といふ書に、杉風は、天和二年には火災に罹り、又貞享四年には、是迄有つてゐた常陸牛渡村入海の魚鳥捕獲權を、其の年魚鳥生け置く事を禁制され、常陸で獲つた物を江戸で貯へ置くこと叶はぬ爲に、遂に放棄し、其の頃から家道が衰へたといふやうな事が記してある。是が實ならば、此の貞享四年頃迄、矢張深川の欒は使つてゐたのであらうといふことになるのであるが、諸書には、芭蕉入庵の頃には既に廢池になつてゐたともあり、且貞享三年には「古池や」の句があつた程であるから、欒の廢された時期に就いては、なほ考證を要する。又泊船堂の號は、出奔後京都東山邊に草庵を結んでゐた時に稱したとか、鄕里で稱したとかの說もあるが、確かではない。それで泊船の名から想像して、一說に從つて、矢張り此の庵の別號と見度いのである。船は、杜甫の窗含西嶺千年雪、門泊東呉萬里船などから思ひ付いたのかも知れぬ。若しさうとすると、泊船のみならず、含雪迄が深川の庵によく適うてゐる。芭蕉庵から富士のよく見えたことは「深川や芭蕉を富士に預け行く」の句からでも推することが出來るし、又「幻住庵記」にも、「中にも三上山は士峰の俤に通ひて武藏野の古き住處も思ひ出でられ」とあ

素堂亭等

れてゐる。山口素堂の所謂阿武の亭は、小名木川の流れに沿うて芭蕉庵とは程遠からぬ處にあつたのであらうが、位地はよく判らぬ。又長溪寺（長慶寺とも）といふ、是も佛頂と關係があつたかとも傳へられる寺は、芭蕉が生前「頼み申され」た由で、芭蕉の歿した翌年、支考が桃隣と共に此の寺で忌日を營んでゐる。（笈日記）なほ此の寺の事も後にいふ。（此の一項の大意は、甞て藝文に載せた）

庵の跡

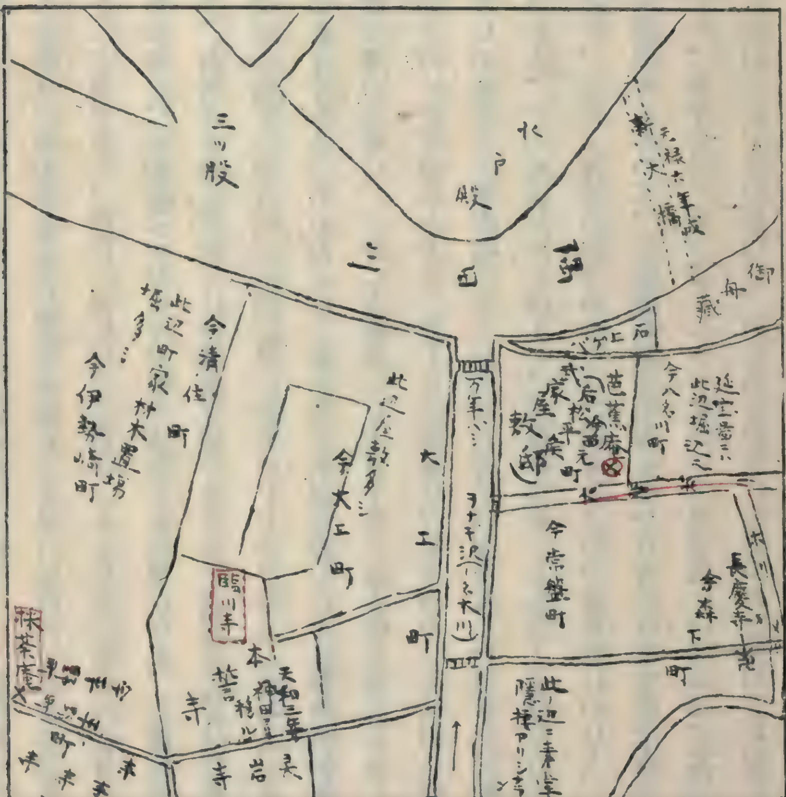
芭蕉庵の遺跡は、其の後著者自身之を探つて、今もなほ形ばかり遺つてゐることを確かめた。それは今の西元町の萬年橋と猿子橋との間で、六間堀に面した通りの、能登屋といふ下宿屋の中庭に、古井のやうな形のものとなつて保存されてゐる。「古池」は、言ふ迄もなく池で、もとは可なりに大きなものであつたらしいが、それが町家が殖えると共に、だん／＼塡め狹められて、遂に此の形ばかりの井戸様のものとなつて殘されたのであらう。尤も此の古井が、古くからの其のまゝであるか、又は掘り替へなどしたものか、疑問も無いではないが、其の地點だけは、予の想定した地と全く一致し、先づ確かと認めて可からうと思ふ。元祿頃の古圖を見ると、萬年橋の北詰の邊は、松平某、伊那某、尾張殿、太田攝津などの屋敷になつてゐる。（大抵別邸であらう）芭蕉庵は此の北の邊で、多分六間堀と水を通じた所謂古池を控へた處にあつたものと想はれる。而して其の池は、前にもいうた通りの、もと六間堀から大きく掘り込まれた渠の名殘であつたらしく想はれるから、庵は此の池と屋敷の間の邊に在つたものと推定されるので、それは丁度今の能登屋邊に相當するのである。池水が堀の水と通じてゐたといふは、「名月や

古圖とも略ぼ合ふ

池の埋木を掘出して花器に造りなどしてゐる。蝶夢の『俳諧十論發蒙』其の他にも同じやうな記事がある是は古い記事ともよく合ふので、其の位置は、新大橋（元祿六年成）の少しく下で、隅田川の本流と、小名木川と、六間堀とに、三面水に圍まれた處である。圖會に據れば、其處は、もと杉風の商賣物の魚を貯へる欒屋敷であつて、後魚屋を廢めた爲に、不用になつたので、池も水草などに覆はれて、古池になつたのだとある。是も實らしい傳へで、如何さま欒など造るには適當な地であつた。『類聚名物考』に黒露（素堂の甥）の言を引いて「今の六間堀の裏と、御舟藏との間の程に鯉魚のいけすを持ちし者あり。其處に住みけりといふ」と云うてあるのもよく合ふ。古い圖には、其の地の大川に面した方に御舟藏が記されてある。延寶頃の圖を見ると、其の邊の北部は、一帶に六間堀から大きく掘り込まれた渠になつてゐて、欒は其の一部分を利用したものでないかと想はしめる。而して芭蕉庵は、是も確かにとは謂へぬが、多分欒の番小屋でも繕うたのでないかと想ふ。商賣物の魚を餌ふ池の邊に別墅も訝しいではないか尤も欒を廢めたのは、もつと前であるから、芭蕉入庵以前に繕うて、杉風が別庵として使うてゐたのでないとも謂へぬ。或は坐興庵といふのが、芭蕉入庵前の號であつたとの說もあるが、是は後にいはう。それから採茶庵の跡は、圖會に據れば平野町とあつて、芭蕉庵の東南數町を隔つた昔の寺町の邊である杉風の本店は日本橋小田原町にあつたが、晩年は多く玆で暮したさうである。又兩庵の中間の邊に本誓寺（天和三年玆に移轉）があつて、後の地圖には、其の域内に、例の佛頂和尚に關係のある臨川寺が劃さ

説を採り度いのである。

偖又芭蕉庵の位地は今の深川區西元町であつたことは確かである『江戸名所圖會』に依ると、圖會の當時は、萬年橋の北詰の松平遠江守の邸内に其の跡があつて、例の古池の形も存つてゐたとある。此の松平侯は、尼ケ崎櫻井侯で、檀林派の俳人で、句集（一櫻井發句集、未見）もあり、俳名を一櫻井鵜文といひ、（文化二年卒す、年六十四）梅人の『續深川集』（寛政三年）の此の侯の序にも、「古池云々其池は今予が別業の内になして、ますく〜古池となれり」とあり、



ふ）と號する別墅があつたが、芭蕉庵も杉風のであつたといひ、其の證據として、杉風は芭蕉庵とも號したといふのである。成程杉風の句集には、芭蕉庵杉風としてあるが、是は天明年間に出板された書で又杉風は芭蕉歿後も長生した人である。芭蕉歿後自づと庵が杉風の手に歸した爲に、杉風が却て茲にも居り、師を慕ふの餘り、芭蕉庵と號するといふは、あり得ぬことであらうか。芭蕉が人の庵を貰うて住み乍ら、人の號を取つて自分の號としたといふことは、其の人と爲りから推しても考へられぬことである。又芭蕉庵の號が、前からあつたものと考へられぬことは、若し其の號が前からあつたものならば、芭蕉が庵にあつた爲とせばなるまいのに、芭蕉は、桃青が入庵後に始めて植ゑたものらしい點にも在るさうでなくては第一「芭蕉植ゑて」（前出）の句の語勢が協はぬ。此の句は李下から芭蕉を貰うて植ゑた時の句である。有名な「移芭蕉辭」（此の文は諸書に引いてあつて、僞作とは思はれぬ）にも「栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植う云々。人呼んで草庵の名とす」と明らかに云うてゐる。其角の「枯尾華」にも庵に芭蕉を植ゑたので、人が自から芭蕉翁と呼んだとある。（其角の此の書の此の記の邊は、事實の前後等を混同した處もあるが、是等の事は信じて可からうと思ふ）又杉風が、富有な御用商人であつたとしても、又眞の草庵に過ぎなかつたとしても、町人が庵號を附けた別墅を二つ迄有つてゐたといふのも、聊か贅過ぎるやうにも思はれる。況や芭蕉庵は、實は杉風が、商賣物の魚を貯へた池の番小屋でもあつたらしいのである。（後にいふ）是等から予は、芭蕉の號は、入庵以後、庵に芭蕉植ゑたからの稱との

であるから、入庵は遲くも天和元年秋以前でなければならぬ。野分は秋で、同集も秋の部に入れてゐる(俳人芭蕉に冬の作としてゐるのは、何に依つたものか)偖又かの「櫓の聲浪を打つて腸氷る夜は涙」及び前出の「草の戶に茶を」外「句の前書に「冬日江戶に居をうつして、寒を佗る茅舍の三句」(眞蹟集拾遺)とあるのに依れば、入庵は冬であつたと見える。此の冬入庵は、他に反證の無い間は、實と假定して置いても可い。若し是を實とすれば、天和元年冬でないことだけは明らかである。後にいふ『桃青二十歌仙』も、延寶八年冬頃に出たものらしくも想はれる(推測に過ぎぬが)のであるが、是にも「櫓の聲」の句が收めてあつたらしい。(歷代滑稽傳)又芭蕉は、植ゑたのが野分したなどの句を詠んだことから想うても、遲くも其の年の春の頃には植ゑたのであらう。(前から芭蕉があつたものとは見られぬことは後にいふ)植ゑた時が春であることは、「芭蕉植ゑて先づ憎む荻の二葉哉」の句から推される。斯くて延寶八年冬入庵、翌九年(天和元)春芭蕉を植ゑ、其の秋右の野分の句を詠んだとすれば、事實は疏通する譯である。是等の諸點から予は假に、入庵を三十七歲延寶八年の冬と定めて置き度いのである。無論是も確かとは謂へぬが、從來の諸說に比べれば、最も實に近いやうに思ふ。(扶桑名畫傳、好古類纂等も薙髮又は入庵を三十七としてある)

偖又芭蕉庵は、もと杉風の別墅で、以前から芭蕉庵と號してゐたとの古くからの說もあるが、(內田氏芭蕉傳、俳人芭蕉其の他此の說を採る者も多い)是は遽かに同意し難い。杉風には別に採茶庵(後にい

最も有力な證

天和元年冬說は非

る。當時深川はなほ市外の半田舍で、風瀑の所謂「深川は菫咲く野も野分哉」（貞享四年頃か）といふ風であつたのである。又素堂の言に、芭蕉と「十暑市中に風月を語り」（野ざらしの序、葛飾序にも）とあるのは、芭蕉が江戸に出てから隱遁迄の間をいうてゐるのであらう。是等から、深川入庵が、三十六七八歲頃卽ち延寶七八九年頃であつたことは、先づ殆ど動くまいと思ふ。「葛飾序」に「七霜葛飾の隱れ家に伴ふ」とあるは、入庵後の正味の年月の概數をいうたのであらう。延寶八年冬から數へると、最後に深川を出る迄、丁度七年間餘になる。延寶七年からとすると、八年餘になる。併し是等はなほ概數だけで確かな年數を指してはゐぬが、茲に一の注意すべき芭蕉の自記の語がある。「草の戸に茶を木の葉かく嵐哉」の前書に「九年の春秋を市中に住み詫びて、居を深川の邊に移す」（續深川集、芭蕉翁句鑑等）とある茲に九年とあるは、概數ではなく、正しく九個年と見るべきで、芭蕉の東下後九年目は三十七歲の延寶八年に當つてゐる。佐々醒雪氏や沼波瓊音氏が、天和元年說（沼波氏の芭蕉全集が年譜には天和元年入庵とし乍ら「はせを」の署名ある書翰を延寶六、七年に入れてあるのは不可解である）を取つて居られるのは、何に據つたのか知らぬが、『俳人芭蕉』（山崎藤吉氏）に、素蓮の說（芭蕉庵春秋に見えてゐるが、是は冠山侯の芭蕉傳に依つたのかも知れぬ。侯のは此の說である）に依つて、天和元年冬入庵としてゐるのは、明らかに誤りである。例の「茅舍の感」と題する「芭蕉野分して盥に雨を聽く夜哉」の句は、其の翌天和二年三月に出た『武藏曲』に收めてあつて、此の句は言ふ迄も無く芭蕉庵での吟と見るべきもの

三十七歳説が是か

である。第一江戸に來たのが二十九歳の一昨年であるのに、其の後仕官を心懸けたり、水道工事に從事したりして、早此の年には剃髪して、大江戸の一宗匠として、人に庵室を提供されるといふは、餘りに早過ぎる。芭蕉の直弟子の書には大抵三十六七歳以後の事としてある。『桐雨筆記』には、延寶六年（年三十三とあるのは、三十五の誤りであらう）入庵して俳諧を業としたとあり、『風俗文選』の作者傳（是は前にもいうたやうに割合に確かなものである）には入二深川芭蕉庵一出家、年三十七とある。『野史』の芭蕉傳に結二庵於深川一剃髪、號二天々軒桃青一時延寶八年歳三十七也としたのも、何か據處があつたに違ひ無いが、（雜談とあるが雜談集のことではあるまい。尙可レ考）直弟子などのものに據つたのかどうか。（天々軒云々は事實が違うてゐる）又『墨水消夏錄』（燕石本）に、延寶八年江戸に來り、剃髪して桃青と號し、庵を深川に結ぶ。年三十七。とあるのも、入庵と他の事とを混同し乍らも、何か正しい據處のあつた記事でないかと思ふ。石倉重繼氏の『北村季吟傳』の年譜延寶八年の條に、松尾桃青來二江戸一薙髪而號二芭蕉翁一とあるのも、同じい傳へに依つたものと見える。

三十七歳説の諸證

支考等の説はまち〳〵で、三十六歳入庵隱遯（十論爲辯抄第一段）とも、「年四十を待たず、深川に世を遁る」（芭蕉翁石碑銘序）とも、「天和の初（○天和元年は年三十八に當る）ならん、武江深川に隱遁して」（十論第一）ともしてゐるが、何れも三十一歳説とは遠い。（是等の内三十六歳説が可なり多いやうである）尙「幻住庵記」は四十七歳の時のであるが、其れに「予又市中を去ること十年許にして」とあつて、是は深川に隱遯してから十年許經つの意と聞え

る。それは、寫本では可なり古くから『延寶二十歌仙』が『桃青二十歌仙』と題して行はれてゐたので、曉臺は其れに依つたのでないかとも考へられるからである。芭蕉の獨吟は甚だ稀であつたが、『雪丸げ』や其の他にも出て居り、眞僞は一寸判らぬが、少しはあつたやうである。沼波氏の『芭蕉全集』に、右の「艪の聲」の句を擧げ、校注に「桃青二十歌仙に夜は涙とあり」とあるのは、此の佚した書を見たやうな注であるが、如何であるか。同書の年譜の方には「延寶二十歌仙別名桃青二十歌仙」とあるから、どちらであるか判らぬ。校註は『句選年考』の説を其のまゝ入れたのではなからうか。

右の疑ひは、單に疑ひ迄で、『桃青二十歌仙』が別に確かにあつたと主張するのではない。或は滑稽傳の記事が誤りでないとも限らぬが、それにしても、あまりに明白に記してある。中に引用してある句共が、他の人の句であるといふやうな反證の出る迄は暫らく疑を存して置く。

延寶八年は、芭蕉に取つて事の多かつた年である。深川芭蕉庵に入庵したのは、後にいふ如く、此の年の冬との説が有力であるが、『田舍之句合』は此の年の八月、『常盤屋之句合』は九月に出たのである。(後編參看)

第四節　芭蕉庵入庵

三十一歲説は誤り

桃青が芭蕉庵に入庵した時期に就いては、諸説まち〳〵である。從來の通說では、三十一歲の延寶二年入庵剃髮といふことになつてゐるが、(武江年表など迄此の說に據つてゐる)此の說は誤りと見るべき

「桃青忠右エ門、今年薙髪して風羅坊、深川に庵を結びて住す。芭蕉一株を栽、世人芭蕉庵といふ」

十歌仙一部なり。」とある。『俳諧獨稽古』にも、延寶二十歌仙に云々として是等の句を出してあるが、是は右の滑稽傳に依つたかの疑ひがあるから、暫く證とせぬ。是等の句の内「艪聲波を」だけは「深川冬夜感」と前書があつて『武藏曲』に出てゐる。(夜や涙とある)前出の『延寶二十歌仙』には、是等の句は無論一句も見えないのみならず、桃青の名も、延寶板の本編何處にも見えてゐぬ。『桃青二十歌仙』とも呼ばれる程の撰集に桃青の名の見えぬのは訝かしいではないか。且右の許六の言に「前後名を出したる云々」と、明白に云うてゐる處から推せば、許六の見た本には確かに桃青の名を露はしてあつたものと見える又右に擧げた句共は、其の歌仙共の發句であつたに違ひ無い。第一前出の『延寶二十歌仙』のやうな、桃青とは表向何の關係も無い書を、『桃青二十歌仙』とは、特に名聞らしいことを厭うた桃青としては、全く請取れぬやうに思ふ。作者が皆桃青の門下だからとて、それならば、『桃青門人二十歌仙』とでも呼びさうな筈である。それで予は、『延寶二十歌仙』とは別に、桃青獨吟の『桃青二十歌仙』又は『桃青獨吟二十歌仙』など題したものがあつたのが、(許六の語氣から推すと、出板されたのかも知れぬと思ふ)後亡びて傳はらなかつたのではないかと思ふ。淡々の出した其角自筆の年譜にも、二者を同じものにしてゐるが、其角自筆に相違無いものかどうか。又相違無いものとしても、其角はよく事實を混同したりする人ゆゑ、此の記事のみに依つて上述の疑ひを釋くことは出來ぬ。延寶板に桃青の名の出てゐぬことが第一の疑ひの種である。又曉臺板が此の延寶板に依らずに、寫本に依つたらしいことも、疑ひの一理由とな

も隨分難解であるが、幾分か解し得るやうになつた。

偖又此の集中の作者は、皆桃青の門下の人々といふことで、其の名を擧げると、杉風、杉化、巖泉、巖翁、仙松、岡松、嵐亭治助、嵐窓、嵐蘭、嵐竹、踞齋卜尺、卜宅、一山、緑系子、白豚、木鶴、揚水之、螺舍、北鯤、吟桃(追加館子)の二十名である。是等の内、後に聞えたのは杉風、卜尺、卜宅、嵐蘭嵐竹、嵐窓、治助の嵐雪、螺舍の其角、北鯤(山店の兄)巖翁、等で、其の他は他書には餘り見えぬ人々のやうである。尤も見遺しもあるかも知れぬ。或は是等の作者の内本號以外に假號を用ひたのもあつて實は二十名ではなかつたのかも知れぬと思ふのである。但し是は全くの想像に過ぎず、或は二十人悉く別な人で、博捜したら皆出て來るかも知れぬ。又最後に吟桃の卷が入つてゐるが、是は事に依ると、桃青の假號ではあるまいかと思ふ。兎も角も此の卷だけは、他の卷よりも要領を得てゐるやうである。或は館子の追加が桃青の作だとの說(冠山矦芭蕉傳)もあるやうだが、是は寧ろ其角か嵐雪の作風に近いやうに思はれる。但し是も全くの臆測に過ぎぬ。

偖又茲に一つ甚だ合點の行き兼ねる事がある。右の歌仙は、前述の如く從來『桃青二十歌仙』と同じものといふことになつてゐたが、どうもさうでないらしく思はれる所がある。許六の『歷代滑稽傳』に、「(〇前略) 桃青二十歌仙といふ俳書を著す。艪聲波を打つて腸氷る夜は涙。子を思ふ鯨の其聲悲し。第一第二の絃はじよき／＼として午房を刻む。下女廟の花は紅絹よりも紅なり。前後名を出したる撰集は、二

延寶二十歌仙と桃青二十歌仙

棒哉」と同じやうに、禪意で解するなどは、無論一顧の値もあるまいが、故らに禪意を有たせたもの迄を、無理に他の意で解釋するやうな偏見も、亦避けねばならぬ。尤も是は、玆に擧げた例が、皆故らに禪意を有たせたものだと速斷していふ譯ではない。

俳諧に禪意を含ませるなどいふと、今の人は何か奇怪な事のやうにでも考へる者もあるが、元來連歌には禪は付物であつたことは、專門の連歌師が殆ど悉く法體の禪門であつたことを考へても判る。連歌の會で、例の「御座敷を見ればいづれもかみな（髪無神無）月」の中に、神主の荒木田守武のみが「ひとり時雨のふり烏帽子着て」ゐたといふやうなが、當時の實際であつた。其の後身たる俳諧が、禪と親しみのあつたのは當然で、芭蕉などは寧ろ其の臭味から遠ざかつた方であつた。

從來『延寶二十歌仙』は一名『桃青二十歌仙』といふことで、何人も疑ひを挾む者も無かつた。『延寶二十歌仙』は芭蕉門下の歌仙二十卷を收めたもので、延寶四年又は五年の編とも傳へられてゐる（此の誤傳のあつたことが、既に延寶板が早くから希であつたのを證する）が、確かに延寶八年のもので、風調は其の頃のものである。延寶板の本にも延寶八年としてあつて明らかである。此の延寶板のは世に稀な珍本で、曉臺が再刻出板した時には、此の刊本を得られずに、寫本に依つたものゝ如く、標題を『桃青二十歌仙』としてあり、本文も兩者少しく異うてゐる。例へば「月花を醫す寒晒野分の名あり」など、何の事か薩張見當が付かなかつたが、延寶板に「月花を醫す閑素幽栖の野巫の子有り」とあるので、是で

禪意を有つた句の例

である。芭蕉の天和頃の連句には、禪意を含めたものが多いが、是は態とふざけ氣味であやしたのであるから、先づ差措く。併し蕉風時代のものでも、明らかに禪意を持たせた句が少なからずある。「いろ〳〵の名も六かしや春の草（珍碩）打たれて蝶の夢は覺めぬる（芭蕉）」是は『比左古』中の發句脇で、或本には「名も紛らはし」「目を覺ましぬる」とあるが、意は變らぬ。句の表は、春の草に蝶を付けたに過ぎぬが、裏には「名も六かしや」を一種の意に取つて、脇は一棒を喫して豁然としたとの意を持たせたのである。脇は發句に對して、常に挨拶の意があつて、是も珍碩の句の、何と無く底意のありさうなのに對して、「さう言はれて悟る所もあつた」との應答の意を含めたのである。是を反對に、珍碩の方が覺つたとやうに解するのは、固より首肯し得ぬ。「形ばかりに蛙聲無き（夕市）一棒に打たれて拜む三日の月（芭蕉）」などは、言ふ迄も無く禪意は明らかである。「蝸牛の殼を蹈みつぶす音（呂丸）身は蟻のあな憂と夢や寤めつらん（芭蕉）」「月花の兩の袂の色香かな（露沾）蛙の殼に身を入るゝ聲（芭蕉）」「見るばかり細工過ぎたる糭佛（楚江）湖水を呑んで胸にさはらず（芭蕉）」なども、句の裏に幾分の禪意を含めてあるやうに思はれる。「蛙の殼」も挨拶の句で、又「湖水を」は前句の極小を極大もて應じたのである。「死なずば人の何となるべき（土芳）神風や吹き起されてかい覺めぬ」なども、多少其の氣味があるやうに聞える。發句では、「稻妻に悟らぬ人の尊とさよ」。「稻妻を手に取る闇の紙燭哉」。「庭掃いて雪を忘るゝ箒哉」の類は、禪意を以てせぬでは、到底解釋が付くまいと思ふ。例の古池の句を、鬼貫の「庭前に白く咲いたる

（〇寺傳の二十八日が眞であらう）寂す、年八十七とあるが、何か確かな徵據があつたのであらう。臨川寺は白隱和尚なども嘗て訪うたことがあるといふ。境內には延享年間の所謂墨直碑（玄武坊の徒の所建）文政頃に建てた開山塔などもあるが、記錄なども共に、あまり古いものゝ無いのは遺憾である。鹿島の根本寺と、那須の西岸寺とは、臨川寺と共に佛頂と深い關係のあつたこと、言ふ迄も無い。佛頂は越後の良寛などゝ似た本來の隱逸性を有つた高僧であつたやうに想はれる。其の作歌などの多く傳はらなかつたのは、或は佛頂の本意であるかも知れぬ。良寛の如く、晴れがましく世間に引き出されて、其の書などが、骨董屋の競利の目的物となるやうな事の無かつたのは、寧ろ甚だ幸福と謂ふべきであらう。

佛頂に關係の芭蕉の書翰

『枇杷園隨筆』に、佛頂に關係のある、芭蕉の或人宛の眞蹟の書翰を載せてある。中に「大眼悟哲の勢ひ驚入奉レ存候。和尚（〇佛頂を指す）の肝膽いまだしかと探られず候間、重而評判可ニ申進一候。和尚にも舊臘は寒ぬるく候故、持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて、一夕御入、大道の咄し止て、俳諧にて到ニ夜半一候。梅櫻みしも悔しや雪の花」などある。若し眞物ならば、面白い材料であるが、眞蹟を見ぬでは、卒かに信用する譯にも行かぬ。どうも怪しい處がある。

〇芭蕉句中の禪味

さて又芭蕉と禪との關係に就いては、相反した二樣の見方がある。一は芭蕉と禪との關係を無暗に深く見て、古池の句は固より、其の他の句でも、又行狀でも、兎角禪意からのみ解釋しようとしてゐる。又一は、芭蕉の俳諧と禪とは、全く無關係のやうに考へてゐる。但し此の二つは、共に當つてゐぬやう

（小名木川南岸一帶の舊稱）に假寓してゐたので、芭蕉庵とは、小名木川を隔てたばかりであつたから、互に往來したのであるといひ、又此の假寓の跡が即ち後に臨川寺となつたのであるといふ。（臨川寺傳）又桃青寺傳（内田氏芭蕉傳に依る）には、芭蕉は始め桃青寺默宗和尙に參禪したが、後其の紹介で、佛頂に見ゆるに至つたといひ、當時佛頂は、何か公事の件があつて、其の爲に臨川寺に永々滯在してゐたといふ。其の外なほいろ〳〵異傳もあるが、確かでないから略して置く。

佛頂と臨川寺

兎に角臨川寺と佛頂との關係のあつたことは確かである。寺傳に依れば、佛頂は此の寺の中興の開祖である。寺號を許されたのは、正德四年（？）のことで、それ迄は菴號か何かで呼んでゐたものらしい。（當時寺號を得ることは、本山や幕府との關係上、中々難かしかつたものだといふ）芭蕉が出入したり、其の會下に例の六祖五兵衛のあつたことなども、同寺の口碑として遺つてゐる。當時「引つ込町（〇其の頃の地の町字）の佛頂」とて、禪林の龍象として轟いてゐたといふのも、實であらう。蓮二坊（支考か）の『十論爲辨抄』に、當時播磨では盤珪、江戶では佛頂が、天下の龍虎の名智識で、且風流にも富み、佛頂の禪刹は芭蕉庵に近かつたとある。いづれにもせよ、芭蕉が佛頂に親近したのは、風流の交りが緣になつたので、恰も圓覺寺大顚と其角との關係と同じであつたのであらう。其角にしても、正規に參禪などしたものとは想はれぬ。佛頂と長慶寺との關係は後にいふ。『句選年考』の頭書に、佛頂は終焉の際には長慶寺（〇とあるが、臨川寺の誤りでないかと思ふが、確かでない）に歸つて、正德五年十二月十八日

江戶では佛頂

どあつて、是は佛徒とならうとしたの意味であるが、即ち嘗て禪道を以て「生涯の計」としようとも思うたことをいふのであらう。其角の『枯尾華』にも、「元來混(根とも)本寺佛頂和尚に嗣法して、ひとり開禪の法師と謂はれ、一氣鐵鑄生いきほひなりけれども」とあつて、佛頂和尚の鉗鎚を受けたことは確かと謂うて可い。但し禪に參じたと謂うても、正規に坐禪とか參窮とかをやつた譯では無く、相交つてゐる內に、互に法話などしてゐたのが、自然參禪と同じ結果を得たといふ位な處であつたらう。芭蕉は本來が宗教的な人で、又自然に修行を積んだ者と同じ境涯に居得るやうな天性の持主であつたやうに見える。即ち生れ乍らにして一種の禪機を具へたやうな人であつた。それ故、參禪などしてもせぬでも、芭

根本寺

蕉は矢張芭蕉であり得たであらう。根本寺は常陸國鹿島にあつて、貞享四年の『鹿島紀行』にも、佛頂和尚が隱棲してゐる此の寺の附近の草庵を訪ねたことが見えてゐる。(鹿島紀行の項參看)又奧州行脚の際にも、下野雲岸寺の奧に、佛頂和尚山居の跡を訪ねて「啄木鳥も」の句を遺してゐる。(其の條參看)尙又句集に「留守に來て棚さがしする藤の花」の前書は「那須雲岸寺佛頂禪師の小庵を訪ねて」としてある。

雲岸寺

(同)佛頂は、芭蕉が鹿島に訪ねた時も、「折々に」の歌を詠んでゐるし、又雲岸寺では、岩石に「竪橫の」の歌を書き付けてゐるといふ風で、尋常の緇流でなかつたことが判る。斯樣に、禪機といひ、風流といひ、優れた處があつた爲に、特に芭蕉が昵近してゐたのであらう。

佛頂との因緣

さて此の佛頂禪師に、どういふ因緣で近づいたかといふに、傳說に依れば、當時佛頂は、海邊大工町

宗因と會ふこと

頃には、既に隱然として相當な一家を成し得たのであらう。なほ當時の俳諧の內容に關しては、後編に述べる。

『俳諧年表』(大野氏)の延寶七年の項に、「芭蕉宗因と始めて相會す」としてあるのは、何に據つたのであるか、未だ出處を見出し得ぬ。又此の樣な傳說がある。宗因がある時市村竹之丞座の觀劇に行くと、芭蕉も居合せて、此の時始めて宗因に面會した。其の折恰も門人某が「子はまさりけり竹之丞」と詠んで五文字を置き兼ねて居たので、師匠の宗因に伺ふと、「おや〳〵〳〵」と置けと敎へた。芭蕉は其の奇才を嘆稱したといふのである。(『一葉集遺語部』)(谷素外の玉池雜藻に出てゐるといふが未見)實否は判らぬが桃青も一時檀林風に心醉して居り、一廉の宗匠でもあり、且恰も其の頃に宗因が江戸に下つてもゐるのであるから、會うたといふ位な事は、實際であらう。是より先にも、宗因に會うたともいふが、明らかでない。例の『次郎兵衞物語』に、若い時宗因と九州に同行したとあるのは、珍らしい傳へであるが、實らしくは思はれぬ。因みに云ふ、此の頃の四代目竹之丞は技藝容貌共に優れてゐたが、無常を觀じて二十五歲の時、西行の狂言を名殘として、舞臺から笈を脊負うて回國修行に出た(武江年表等)といふ變り物であつた。元祿時代は確かに斯樣な一面があつたので、芭蕉は此の一面を最もよく代表した一人であると、斯く見るのも亦一の見方である。

修禪と佛頂和尚

芭蕉が禪に親しんだことは、自記の「幻住庵記」(猿蓑)に「一度は佛籬祖室の扉に入らんとせしも」な

の頃と想はれるのであるが、桃青の號は、恰も其れと前後して用ひ始めたのであらう。桃青は、或說の如く、李白に對しての戲號であらうと想はれるが、さうとすると、號其のものが旣に檀林味を帶びてゐて、恰も檀林風心醉時代を通じて之を用ひたのと相應してゐる譯である。或書共には『白氏長慶集』を愛讀し、李白に對して云々とあるが、此の集は白樂天の集で、李白の集ではない。よく間違うてゐるから、一言して置く。『說叢大全』に、黑露(素堂の姪)の言を記して云ふ、桃青の名は京都の儒醫桐山正哲(俳名智機)から、芭蕉の祖姓桃井の音を取り、詩經桃夭の意に依つて付けて貰うたと。又支考の十論には、梅子未熟の禪意に取つて號したとある。是等は異說として記して置く。

芭蕉がやゝ專門の俳人として、相應の地位を占めるに至つたのは、延寶四五年の卅三四歲頃からであらう。それは、其の付合の傳はつてゐるのが、此の頃のからだからである。當時江戶では、田代松意が檀林風を弘めてゐたが、延寶三年に、大宗匠の西山宗因が江戶に下つて十百韻を興行するといふやうなことで、江戶は檀林風に風靡されて了うた。芭蕉も多分是等の華々しい有樣を目睹して、益々其の天性の俳癖を刺戟されたことであらう。芭蕉の連句で、今纏まつて遺つてゐるのは、延寶五年以後のものである。當時から延寶の末年三十七八歲頃迄は、純然たる檀林風心醉時代で、宗因一派の俳風に傾倒してゐたのである。しかし芭蕉の連句に於ける異能は、早くも此の時代から遺憾なく現はれてゐて、其の人物の、善く人と調和し、人に愛慕される天性を具へてゐたのと相待つて、門人もぼつ／＼出來、延寶の半ば

東下後一時素宜と名のつたことがあるとの傳へもある。是は『杉風祕記』(杉風句集に引く)に「松尾甚四郎殿伊賀よりはじめ此方へ被落着候。剃髪して素宜と改められし時、衣更着なば十德をこそ申すなれ、杉風、斯く申しおくりぬ」とあるのが本らしい。剃髪は、事實としては、芭蕉庵入庵の前後であるべきが自然であるが、據るべき材料が無いので、何時とも決められぬ。此の記事に依れば、東下後間も無くのやうにも聞えるが、果してさうであつたか。どうも頭を圓めての水道官吏は一寸考へられぬ。それで剃髪は、水道工事を前項の如くに假定すると、それを竣つた頃のことであるまいかと想ふのであるが如何であらうか。右の『杉風祕記』は、杉風の記したまゝのものではないから、其のまゝには據り難いのである。素宜と稱したことは事實であらうが、或は是は釋號で、俳人としては全く用ひなかつた爲に他には見えぬのであらう。釋號とすると、佛頂からでも貰うた名でもあらうか。

桃青の號も、江戸に出る前からの稱であるとの傳へもある。それに就き、いろ〳〵材料となるべきものも搜つて見たが、未だ見出し得ぬ。江戸に出てからの號とするのが實らしく思はれる。今遺つてゐる芭蕉の連句の纏まつたものは、延寶五年春からのであるが、是には桃青の號を用ひてゐるから、是より以前の號であることは判るが、何時頃からの號であるかは、判然せぬ。季吟の『續連珠』(延寶四年)には、宗房と桃青とを兩方用ひてゐるから、桃青の號は、是を距ること遠からぬ時代から用ひたものであらうといふ說(勝峰氏の說)は、尤もである。元來俳人として立派に世人に認められるやうになつたのが此

ならぬ。それが身體の弱かつたのと相合して、世務を捨てさせたものと想はれる。無論俳人としての才能を自分でも認めた結果も、之を助けてゐるべき筈である。唐の詩人杜甫なども、初めから詩人で終らうとは期してゐなかつた。否晩年迄政治家又は教育家として其の理想を行うて見度いと苦悶してゐたらしい。芭蕉の優れた人格に眩まされて、何事も皆豫定の行動のやうに見るのは、如何かと思ふ。始めから詩人や文士として世に立たうなどいふ人士は、却て、今はどうか知らぬが、古へは多くは薄志弱行か仕事嫌ひの横着な人であつたやうに見える。

當時の芭蕉の生活

通人趣味

此の間の桃青の實生活はどんな風であつたか。是が判ると、芭蕉研究の上に大なる資料となるのであるが、どうも判らぬ。たゞ當時の遺作からでも間接に想像するの外はない。而して此の想像に依れば芭蕉も人並の道樂位はやつたのでないかと想はしめる。例は後にも擧げるが、此の當時の連句の材料でも趣味でも、吉原とか揚屋とか、たはけ狂ひとか、當時の通人趣味のものが殆ど主部を成してゐたやうに見える。連句から直に其の實生活を推すことは出來ぬが、當時の一般の氣風といひ、門人に其角などの道樂者があつたことゝいひ、それこれから推して、芭蕉も是等の人々の付合位はした事であらうと思ふ。尤も四十歳にも滿たぬに、早くも翁など呼ばれて、後輩に尊信されたことから考へても、尋常の道樂者などでなかつたことは明らかである。前述の如く官金を拐帶したとの傳へもあるといふが、實らしくは思はれぬものゝ、亦其の詳を聽かずに、卒かに否定することも出來ぬであらうか。

て塚を建てたが、何時か其の傍に草庵を營んで、芭蕉の像など納めてあつた。（蓼太芭蕉庵再興集、茗荷集等）其の後變遷があつたが、今のは其の遺跡である。此の庵の上の邊りには、季吟の家居の跡もあつたといふ。（江戸名所圖會等）但し是は芭蕉の歿後の事である。此の邊の眺望は、今は全く變つてしまひ、町家が建ち續いて、湖南の風光を偲ぶなど思ひも寄らぬやうになつてゐる。

入庵迄の苦悶

憶ふに江戸に出てから、芭蕉庵入庵迄の八九年間は、恐らくば桃青の苦悶時代で、仕官出世して相當の地位にあり付かうと思うたり、天性がさういふ方面に適せぬことを覺つて、學問で飯を食はうかと思うたり、坊主にならうかと思うたり、いろ〳〵迷うたものと察せられる。前にもいうたやうな、藤堂家奉公時代の噂が、假に事實であつたとすると、假令冤罪としても、江戸にでも出て、再び出世雪辱の途を求め、それが爲に苦悶するといふは、素と武士であつた宗房としては、寔に自然のことゝ謂はねばならぬ。元來世間並の事務などは、白痴でもない限りは、多少の巧拙は兎も角も、たゞ忠實につかまつてさへ居れば、誰にでも出來る筈のものである。然るに其れが面白く行かぬといふは、一方に之と兎角に

詩魔に牽かれる

兩立し難い詩魔に強く牽かれる爲である。昔から詩人が大抵薄命に終るのは、運命を開く術を知らぬ爲ではなく、是よりも更に力強く誘ふものがある爲である。芭蕉も世事に疎い人であつたに相違ないが、非常識の人ではなかつた。否寧ろ常識に富み過ぎて困つた位に見える。努めれば世間並の事務位は何でもなかつたであらう。其れが終に俳諧師となり了つたのは、俳諧にあまりに強く牽かれた爲でなければ

結局不たしか

水道工事と五月雨

依れば、『俳家奇人談』が傭夫としたのなどは誤りで、相當な役をしたものと想はれる。（素蓮の芭蕉庵春秋内田氏の芭蕉傳等に、武江年表に、「神田上水御再修の時藤堂家より御手傳として松尾忠左衛門堀割の普請奉行たりしと云へり」とある由あるが、一二三の通行本中には未だ見出し得ぬ）因みに云ふ、『野史』は『大日本史』の續篇とも謂ふべき便利な書であるが、個人の編纂で、行屆かなかつたものか、材料の取方や記事に杜撰な處があつて、特に文學者の傳記などは、誤りが少なくない。

此の水道工事從事は、芭蕉傳中、大なる興味もあり、且大切な經歷の一であるが、詳しい事の判らぬのは、實に遺憾である。此の時桃青が官金を拐帶して、奉行所の處分を受けたと、喜多村信節の『過眼錄』にあるといふ（内田氏芭蕉傳）が、此の書は嘗て見たことがないから、何ともいへぬ。（過眼錄と題する書は見たが、信節の著でなく、又此の樣な記事もない）

關口の龍隱庵（此の寺今亡びたか）の五月雨塚といふのも、此の水道工事と關係があるやうに傳へられてゐるが、未だ確かな出處を見出さぬ。塚は今富人渡邊某氏の邸（前田中子爵邸）内の南端山下氷川明神（？）の附近にある。（碑もあるやうだが、外からは讀めぬ。又近寄ることの出來ぬのは遺憾の極みである）庵らしいものもある。是は芭蕉が水道工事に從事中、屢〻此の龍隱庵を訪ひ、此の邊の風景が、山を負ひ、橋を控へて、宛ら琵琶湖畔の粟津の眺望に似てゐるとて、每に激賞して已まなかつた跡だと言傳へられてゐる。寛延三年長谷川馬光の門人素什芬露等が、「五月雨に隱れぬものや瀬田の橋」の句を埋め

云云、告レ病乞レ暇乃去。とあるのなどにも本づいたのかも知れぬ。此の記事も何かに據つたのであらうが、此の傳へは、他書に未だ見ず、且通說と兩立し難い處もあるので、容易に信じ得ぬ、或は前後の事實を混雜しての傳へかとも想はれる。何にしろ、松本氏の說の詳細を承知せぬのであるから、深く言ふことは暫く避けて置くが、若し果して聞くが如き根據に過ぎぬならば、二十三歳說を取ることは、聊か危險でないかと思ふ。藤堂家の工事と宗房とを强ひて關係させて考へねばならぬ必要は勿論無い。宗房二十三歳の頃に、關口の工事が竣成し、其の後工事などは全く無かつたとの明證があれば格別、さうでなければ、『野史』の記事などに依つて前項に擧げた諸書の記事を抹殺するのは穩かでない。若し其の後も工事が續いたものと想像しても差支無いならば、宗房が、藤堂家に關係の有無に拘はらず、之に從事することは、何の不思議も無い筈である。否若し出奔を實とするならば、藤堂家に關係無く從事するのが却て自然と謂はねばなるまい。特に「一功を立てゝ辭仕」した者が、人の門に遺吟を置いて出奔するといふのも變なやうに思はれるが、如何であるか。詳しい說を聽かぬことであるから、是位で措かう。尤も二十一二歳の頃に、主君に從つて工事を勤めたとの說もあつたと見え、冠山侯の芭蕉傳にも一寸そんな事を云うてゐるから、『野史』の記事と合せて、卒かに否定すべきでも勿論ない。たゞ是迄の材料では、二十九歳東下後の事とするが穩かなやうである。『素堂傳』の記事を確かとも謂へぬが、同書が「功を修めたれば」と云うた語氣も、二十二や三の若者の事とは想はれぬ。又桃青の職掌なども、此の語に

喜多村信節の記事

二十三歳從事說

に疎く、其任に勝へざる故に、やがて職を捨てゝ深川といふ所に隱れ、俳諧を以て世の業と」したとある。此の話では、江戸に連れて來て直に水方の官吏としたやうに聞えるが、それは聽き誤りとも、傳へ誤りとも記し方の曖昧とも謂へる。田舍者の特に俗事に疎い宗房が、大江戸に來て直に役人になつたとも一寸思へぬ。食客などしてぐづ〳〵してゐると、三年や四年は直に經つて仕まふ。特に高野幽山等の執筆をしたとの傳へもあり、旁々右の兩書の傳へを合せて、予は三十七歳迄工事四年間從事の說に暫く從うて置き度いのである。喜多村信節の『筠庭雜錄』にも、桃青が江戸に來て、卜尺の家に居た頃でもあるか、水道普請に從事した。「當時玉川兩水道共に、町年寄支配なれば、彼者さやうの工夫者なりしかば試みに差圖をはからはせ」たのであらう。とて、延寶八年六月の觸書といふものゝ寫しを出してゐる。此の觸書などを卒かに信ずることは無論出來ぬが、是も年月がよく合ふ。(隱遯は同年冬と思はれることは後にいふ)而して是等を否定し得るやうな有力な反證は、自分の是迄調べた所では、先づ無いやうである。

然るに茲に一異說がある。それは松本某氏の說で、工事從事は宗房二十三歳の年の事で、是で一功を立てゝ辭仕したといふのである。(沼波氏芭蕉全集)聞く所に依れば、是は藤堂家が江戸關口の水道の工事に携はつたのが此の年であつた事から案出した說であるといふ。或は『野史』の芭蕉傳に、壯而有二遯世之志一、竊謂樹二一功一而逃去、會藤堂氏受レ命修二小石川水路一、甚七時調二練工夫一、遂成レ功、迨二畢之日一

水道工事從事

風俗文選の説

文選の説の長處

波は單に二年越(例の王仁の「冬ごもり今を春べと」の歌に依つて)繫ける爲の語に過ぎぬ(一串抄等)といふは、尤もらしい説であるが、どうも判然せぬ。古郷で越年した意の句とも取れるやうである。

水道工事に從事したことは、諸書にも傳へて居り、素堂傳にも、素堂の語として「友人桃青も嘗て水道工事の功を修めたれば」などあるので、確かであらう。但し時期や年限や職掌等に就いては、一向に取留めた記錄が見えぬ。それで予は『風俗文選』の作者傳の所説に本づいて、假説を立てゝ置かうと思ふ。同書には、背世爲レ遺レ功、修ニ武小石川之水道一四年成、速捨レ功而入ニ深川芭蕉庵一出家、年三十七とある。工事從事の時期年限を明記したものは、此の他には見えぬやうであり、且此の作者傳は簡單ではあるが、割合に正確で、誤りが至つて稀であるから、予は此の記事を重視するのである。尙又、四年成と明記するからには、何か相當な據處があつたものと見るのが、至當と思はれるのである。

假右の記事を其のまゝに取ると、三十四歲頃に從事し、其の功を竣つて深川に隱遯したことになるのである。三十七歲は延寶八年で、後にもいふが、芭蕉庵入庵は、此の年といふのが最も實に近く思はれるので、尙更予は此の記事に注意する譯である。(俳家奇人談にも同じ樣に記してあるが、此の書はあまり當てにならぬ)此の記事は先づ『桐雨筆記』の梨一の注(奥細道菅菰抄)とよく合ふ。同注は、梨一が卜尺の子から親しく聽いた話を記したのであるから、架空の臆測とは違ふ。其の話には卜尺が芭蕉を京都から江戶に連れて來て「しばしが程のたつきにと、緣を求めて水方の官吏とせしに、風人の習ひ、俗事

山岸半殘が會に、「百里來たり程は雲ゐの下涼み」、桑名氏興行に渡邊某の宅では「詠るや江戸にはまれな山の月」など詠んだとある。(但し同書に、それから京に上つて、新玉津島で季吟から傳授の事があつたとあるは、季吟が玉津島に移つた年と合はぬから、容易に信ぜられぬ）是等の句が果して芭蕉のであるか否か、なほ精査を要するは言ふ迄も無いが、延寶歸鄕說の參考として、相應な價値はあらう。

鄕里の宿所

偖又此の時兄の家の後園に無名庵を結んだのゝ由、伊賀の傳說を記した書共に見えてゐるが、實かどうか。或は此の時でないとしても、無名庵が芭蕉の結んだものであることは實らしい。『枯尾華』に依ると最後の行脚の時再び古鄕に庵を結ぶとしてある。是に據れば、二度庵を構へたやうに聞えるが、どうであるか。此の庵は芭蕉歿後間も無く、城南大福寺に移したが、それを又藩侯白舌君藤堂釆女が其の別墅に移して再形庵と改めた。後また東出に移され、今も改築されたものが遺つてゐる。因みに云ふ、所謂伊賀の五庵は、此の庵と、土芳の蓑蟲庵(西日向町)苔蘇の瓢竹庵(東日向町)猿雖の東麓庵西麓庵（車阪町の東南隅）をいふので、芭蕉が鄕里に歸つた時は、多く是等の家に足を留めたので、歿後自然と遺跡として名高くなつたのである。今も形や處が變つても、名だけは大抵傳へられたものが遺つてゐる。(第一節鄕里の遺跡の項參看、なほ五庵に關しては、木津碩堂氏の芭蕉翁の面影等に詳記）

難波の二年越

「古里の梅や難波の二年越」といふ句は、未だ確かな出處を見出さぬが、諸書に引いてあつて、延寶頃に古鄕に歸つての句とされてゐる。「古里の二年越」とあるので、二年ぶりに古鄕に歸つた時の句で、難

吟門下で、且芭蕉の舊主との關係もあり、是等の緣から、幽山の執筆をしたのかも知れぬが、是は確かではない。但しありさうな事で、他書にも、芭蕉が東下の當座は、人の執筆などして暮してゐたなど記してゐるものもある。『眞澄鏡』に「幽山の執筆たりし頃、撫つけ(〇總髮のことか)に成時の發句、我黑髮撫付にして頭巾哉」とあるのも、或は實かも知れぬ。實とすれば、東下後間も無く剃髮したとの說は誤りとなるのであるが、無論確かとは謂へぬ。剃髮は、芭蕉庵入庵の頃と想はれることは、後にいふ。若しさうとすると、此の時の撫付は、剃髮の準備のやうになつた譯である。

延寶四年(冠山俟の芭蕉傳には、三年、一說に四年としてある)に一度歸國したとの說は、諸書に見えてゐるが、疑うた者も多い。但し此の說は決して無造作に抹殺することは出來ぬ。それは「秋十年却りて江戶を指す故鄉」の句(後にもいふ)が貞享元年で、此の年から延寶四年は、九年前に當り、「十年」がよく協ふが、此の時に歸らぬとすると、貞享元年から、始めて江戶に出た寬文十二年迄は十三年となつて、「十年」と少しく協はぬかの感もするからである。九年を「十年」といふ方が、十三年をさういふよりも、無論實に近い。延寶三年に歸國したとすれば尙更恰も十年となる。固より此の句だけに據つて延寶歸國說を是とすることは出來ぬが、諸書に記してあるのを、有力な反證も無いのに、疑ふのは穩かであるまい。且此の歸國の事を竹人の芭蕉傳は較〻詳しく書いてゐる。それに據ると、歸國の途中に「山のすがた蠶が茶臼の覆ひ哉」の句あり、六月伊賀高畑氏の市隱亭で「富士の風や扇子にのせて江戶土產」、

事としてあるが、どちらが是とも容易に決め兼ねる。

其角の入門

其角の芭蕉に入門した年は、十四歳の秋といふことである。（みゝな草）『五元集』のはし書にも「延寶のはじめ桃青門に入りしより云々」とあつて、延寶元年は其角十三歳に當るから、兎も角十三四歳の頃に入門したことは確かである。すると芭蕉が江戸に出てから僅か兩三年後でもあり、一方も十三四歳とあれば、初めは俳諧よりも寧ろ手習讀書でも教へたので、それが師弟の縁となつたというやうなことかも知れぬ。

嵐蘭の入門

嵐蘭の入門は、延寶三年芭蕉三十二歳の時で、是は元祿六年嵐蘭が逝去した時の芭蕉の誄辭（風俗文選六）に「予と因むこと十年あまり九年にや」とあつて、逆算すると其の年に當つてゐる。嵐蘭は相當の年であつたから、或は歌俳を學ぶ爲の入門であつたかも知れぬ。此の人は其角と反し、武士氣質で、嚴重な家庭教育を受けた人らしく（其角雜談集）操行なども立派であつたらしい。

高野幽山の執筆

當時貞德派の名士高野幽山（重頼門、有名な江戸八百韻の撰者）の執筆をしてゐた（眞澄鏡）と傳へられるのも、若し實ならば、此の頃の事であらう。此の幽山は、嘗て藤堂任口（藤堂家の庶流で、伊勢久居五萬石に封ぜられた俳諧殿樣で、季吟の門人であつた。元祿十年八月卒す、年五十四。伏見の任口上人と此の人と別人であることは、勝峰晋風氏が明かにした。自笑の白露の誹論にも兩任口の同名異人のことに言及してゐる）に、竹内爲人と改稱して仕へたこともあるといひ（俳家大系圖）任口は芭蕉と同じく季

江戸に來り、此の寺に草鞋を解いた。(此の事だけは他書にも見えてゐる。芭蕉庵春秋に素丸の濱木綿の自序にもある由である)而して此の寺の傍に小庵を結んで朝暮禪に參じたといふのである。又芭蕉歿後素堂が此の寺の域内に桃青堂を建てたが、素堂も歿後茲に合祀された。其の因縁で、一時寺號を芭蕉山桃青寺と改めたが、後舊稱に復したのを、明治二十六年に再び桃青寺と改め、芭蕉堂を再建した。(以上、内田氏の芭蕉傳に依る)といふのであるが、どうも容易に信じ難い。何か立身の道でも求めるつもりで東下したらしい宗房が、東下後直に庵を結んで參禪を事としたなどは、ありさうもない事のやうに想はれるが、如何であらうか。又別に、芭蕉庫云々の傳へもある。此の芭蕉庫(後の稱)とは、もと駿河臺中坊家(南部家?)にあつた文庫で、慶長五年の創建であつたが、明暦三年の火災の時も、此の庫だけは燒け殘つたので、老臣濱島某が之を守つてゐた。濱島某は、伊勢安野津藩の出で、芭蕉は其の津藩の分家に仕へてゐた因縁から、東下後此の庫に草鞋を解いたといふのである。(茗荷集)(宇橋編、東都に於ける芭蕉の遺跡等を記したもの)此の事は可なりに信ぜられてゐたものと見え、他書にも往々記されてゐる。『一話一言』にも材料が出てあり、「右版本は」などあるから、庫のことを記した小冊子もあつたらしい。多分似た事實だけはあつたのであらう。後に何やらの古竹を拾ひ、花筒に造つて關係者に分つたなどいふことも右の書共に記してある。芭蕉が云々は、此の花筒の記に依つたのであるといふ。一説には、此の庫に居たのは、庵燒失の時ともいふ。(冠山侯芭蕉傳)但し前記の書共には、皆深川入庵前の

杉風家との關係

たと、父が物語つたとある。(同書に、一説に、本船町の長の序令といふ者と共に、江戸に下つたともいふが、卜尺序令共に古い俳書に見えてゐて、或は異名同人かとある)「杉風祕記」(杉風句集に引く)には江戸に出て杉風方に落付いたとあるが、どうも卜尺の家に先づ着いたとの記事が實らしく思はれる。但し前にもいうた通り、杉風の番頭の伊兵衞が、芭蕉の甥(眞澄鏡)で、其の緣で杉風に便るといふも、ありさうな事であるから、いづれ卜尺のみを便りに出た譯でもあるまい。特に宗房卜尺杉風共に同門の俳人で、杉風の本店のあつた小田原町と本船町とも、直ぐ近くであつたから、どちらの世話にもなつた事であらう。併し出た當座の頃は、卜尺が家に居て、帳付のやうな事をしてゐたといふのが、實らしく思はれる。『みゝな草』(其角年譜)などにも、卜尺に便つたとしてある。

季吟の東下との關係

桃青の東下頃に、季吟が歌學を以て江戸に召されて、東下したと書いてゐるものも、往々あるが、是は誤りでないかと思ふ。確かなもの(北村季吟傳國學者傳記集成等に引く)に記された所では、季吟が江戸に召されたのは、元祿二年のやうである。尤も醫員に准じて召されたとのみあるが、實は歌學を以て召されたのであらう。それは兎も角も、季吟の東下と芭蕉の東下とを關係を付けて考へた說は、從ひ難いやうである。

草鞋を脫いだ處に就いての異說

東下後便つた處に就いて、其日庵に傳へた一異說がある。(錦江の芭蕉傳に出てゐる說か)芭蕉が東海道を下る時、偶ゝ江戸中之鄕定林院(今本所原庭町)の默宗和尙と邂逅し、禪を講じて相親しみ、伴うて

卜尺を便るか

た人としては、どうしても不自然である。予の想像の如く・藤堂家に對して表向何か憚らねばならぬ事があつて、一時身を隱した位に解すれば、解されぬ事も無いが、是を『貝おほひ』前後に起つた事とし、例の雁の句を遺して江戸に亡命したものとすると、一層自然に解することが出來る。但し此の說は、前にもいふ如く、今少しく何か確かな材料を得ぬと、從ふに躊躇せざるを得ぬのであるから、予は之を芭蕉傳中の重大なる宿題として殘して置かうと思ふのである。

第三節　江戸に出る

寬文十二年廿九歲の九月（前述の如く、一說に從へば春となる）に、始めて江戸に出た。此の事は諸書の略ぼ一致する所で、三十歲との異說もあるが、二十九歲說が先づ從ふべきであらう。（みゝな草にも、寬文十二年九月としてある）然るに、江戸に出るに、何を目的としたか、誰を便つたか、出てから何處に居たか等に就いては、異說まち／＼で、明らかには判つてゐぬ。『眥撇抄』の芭蕉傳（即ち桐雨筆記に書入れしたもの）には、此の書の著者（蓑笠庵梨一）が、嘗て東都に遊んで、日本橋本船町（小舟町とも）內八軒町の長二世卜尺（即ち芭蕉門の卜尺の子）を訪うた時の話を記してゐる。それに據ると、卜尺の父即ち一世卜尺（卜尺は姓の小澤の草體小澤を省略したのだといふ。名は太郎兵衞と籍庭雜錄等にある）が、一年京都に上つた時芭蕉に遭うて、江戸に伴ひ歸り、暫時の生計の助けにもと、地方の官吏をしたが、風人の常として、俗事に疎く、其の任に堪へず、やがて職を捨てゝ深川に隱れ、俳諧を業とするに至つ

の田中常矩の選んだ句集中の宗房の句を見て敬服したと傳へられるのも、此の頃であらうとある。（俳諧叢書中、元祿の蕉風）或人の芭蕉傳にも、そんな事が書いてあつた。是は何に出てゐるのであるか未だ見當らぬ。許六の『俳諧問答』の「自讃之論」に、常矩の付句と、桃青のとを比べて、桃青を「中々及ばざる上手也」とあつて、桃青の「聽耳や餘所に怪しき」の付句を引いてゐるが、此の句は延寶五年の信章信徳との三吟中のもので、江戸に出てから數年後の付合である。（例は後で引く）

『貝おほひ』は宗房が江戸に出た年の正月二十五日（天滿宮の祀日）に出來た天滿宮奉納の三十番俳諧合で、序も判詞も宗房であるから、宗房が宗匠として出したものであらう。序に「伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にして自ら序す」とある。伊賀上野は、單に宗房の郷里を記した迄で、實は京都での興行かも知れぬと疑うてゐる者もあるが、さうではあるまい。「伊賀上野松尾氏」と態々記した體といひ、又立派な大宗匠の數多居た京都で、宗房の判詞で集を出すなどが、容易ならぬことゝも想はれるし、旁々郷里での撰に違ひ無からう。上野には、鎭守としての立派な天滿宮（今縣社）があつて、是は藤堂家とも深い關係のあつた社である。又此の書の寫本には、有跋のもあるが。（板本も有跋のがあつたのであらうが、未だ見ぬ）現に予の見た種彦書入の寫本（洒竹文庫本）には、松尾氏宗房雅伯爲二予斷金之友一（〇中略）寛文壬子孟春日伊陽城下横月漫跋と、上野の人が跋を書いてゐる。是等から推しても、上野での撰集と斷定して可からうと思ふ。此の郷里で堂々と撰集を出したといふ事實は、跡を晦まして遁世なり亡命なりし

郷里には密接な關係がなかつた

許六を感服?

郷里を亡命後、二十年近くも郷里には寄り附かなかつたやうに記してゐるのは、此の事實からも固より誤りと見ねばならぬ。尚又、郷里の神社に奉納の句合といへば、多分作者達も郷里の人々であらう。して見れば、少なくも其の當時だけでも郷里と餘程接近してゐねば、斯樣なことは出來ぬ筈である。自分にはどうもこんな風に想像される。一時郷里を亡命し、諸所を流浪したものとしても、其の內には郷里に歸り、藤堂家などには內證に、郷里にも滯留したり、又京阪にも出たりといふやうな風に暮してゐたのではあるまいかと。それは、芭蕉のやうな世才に疎い虛弱な人が、郷里の世話に少しもならずに、此の五六年間を繁華な都會に獨り立で無事に暮し得たとは、考へ得られぬからでもある。何か聊かの風說があつた爲に、例の氣の弱い人であつたので、其れを苦にして亡命しはしたが、所謂生理に拙くて、隨分窮迫に堪へなかつたので、其の噂の鎭まつた頃に、そろ／＼歸郷したといふやうなことかも知れぬ。而して近所の若い者達に俳諧の指南したりして、郷里の家の厄介になつてゐたが、俳諧では飯は食へず、世渡りには拙く、藤堂家に再び仕へるといふ譯にも行かず、己むを得ず、同じ季吟門下の卜尺や杉風などを便りに、江戸に下つたといふやうなことではあるまいか。是等は京阪流浪を假に事實と見た上の想像であるが、若し流浪を事實とすると、どうもさうでも考へぬでは、辻褄が合はぬ事のみ多いやうに思ふ。

佐々醒雪氏の說に、許六が談林派(とあるが、系圖を見ると、貞德門の片桐良保の弟子になつてゐる)

東山に庵居及び其の號

かも知れぬ。或は鬼貫の師の重頼などの執筆をしたのを誤り傳へたのかも知れぬ。

又一時東山に草庵を結んで、泊船堂宗房又桃青、又宇陀法師、釣月軒宗茂など號したともいふ。（湖中芭蕉傳等）又天々軒と號したのも、此の頃だといふ。許六の『宇陀之法師』には「先師伊賀に住める頃釣月軒宗茂、泊船堂宗房など、書なぐりの反故云々」などある。此の伊賀に云々も、果して確かなものに依つたのかどうか判らぬが、東山云々の不確かなことは、是等でも推せるかと思ふ。是等の號の內、泊船堂は、江戶深川の庵の別號との說が實らしく、（後にいふ）又桃青の號も、東下以前の號との確かな徵據が無い。釣月軒は後にいふ『貝おほひ』の序に見えてゐるが、其の他は明らかでない。天々軒は恐らくば桃青の號の緣で稱したのであらう。さすれば是も東下後の稱かと思ふ。たゞ前にも記した金福寺の芭蕉庵は、芭蕉の遺跡であるとも傳へられてゐたから、芭蕉が果して此の頃在京したものとすると、茲などにも居たのかも知れぬが、是も確かでない。

流浪間の鄕里との關係

偖又出奔後京阪間に滯在してゐたと假定しても、其の邊にのみ居たのであらうかといふに、どうもさうではないらしく想像される。是も確かにはいへぬが、鄕里にも相當に接近してゐたものらしく思はれる。それは、右にも引いた『宇陀之法師』の記事などもあるし、又『墨水消夏錄』（燕石本）などにもある通り、遁世後も矢張伊賀に隱れてゐたとの言傳へがあつたり、第一何よりの徵據は『貝おほひ』が鄕里上野町の天滿宮への奉納の句合であつたらしいことである。（此の事は別にいふ）、『次郎兵衛物語』に

季吟に學ぶ

を書いて貰うたりしてゐる。又北村季吟に學んだといふことも事實であらう。(綾錦に菊岡隨性軒如幻導而入二季吟門一とあるは、何に據つたか)が、是も京都で學んだのかどうか、明らかでない。季吟とは藤堂家奉公時代からの關係もあり、後にも季吟父子とは至つて親密にしてゐたことなどから推しても、始終接近してゐたことゝは想はれる。但し著述の手傳をしたなどいふのは如何かと思ふ。又或時桃青が季吟に、『萬葉集』が全篇橘諸兄の選んだものでは無く、多くの人々の家集を寄せ集めたものと見えると云うたので、季吟が其の見識に服し、大に得る所があつたと季吟が素堂に物語つたとの話がある。(俳諧芭蕉談) 是も實らしくないが、(附編參看)季吟に親炙してゐたとの傳說の一參考とはなるかも知れぬ。其の他京阪間に流浪してゐた間の事として、いろ〳〵と傳へられてゐるが、一も確かと見るべき事は無い。京阪流浪を實としても、始終鄕里と接觸を保ち乍らしてゐたものらしいことは、後にもいふ。

鬼貫の執筆說

　鬼貫の『俳諧七車』の三宅嘯山の跋に、鬼貫の「世の常の話」(平生の言ひ種にの意であらう)に「さいつ頃筆執らしめける桃青をのこ云々」とあるので、鬼貫の執筆をしたこともあるのであらうといふ。付合での執筆は、一座中の字も一寸善く書き、俳諧の方式なども一通り心得てゐる人でなくては出來ぬ筈である。それ故、京阪流浪說を實とすると、好きな道でもあり、早熟な鬼貫の一座した俳席などに、宗房が執筆をしたものと解すれば、別に怪しむには足らぬことである。併し芭蕉が江戸に出たのが二十九歲の年で、其の時鬼貫は甫めて十二歲の筈であるから、如何に鬼貫が早熟としても、或は誇張に失した傳へ

雲霞に晦ます龍の如く、山にや蟄せし、海にや隱れし」（「繪詞傳」）行跡が甚だしく曖昧である。此の間京阪の邊に彷徨うてゐたと想像されてゐるが、それも何をしてゐたか、主として何處に居たかといふやうなことは、よく判らぬ。一說に伊藤坦庵（那波活所門、寶永五年歿す、年八十六）に漢學を學んだといふは確からしい。是に就いては、洛外一乘寺村の金福寺芭蕉庵の碑の淸田文興の碑誌（都名所圖會等にも引く）に予義祖伊藤坦庵先生亦與ㇾ翁交、坦庵集中有下謝二翁邀飮一詩上、亦可三以想二翁爲一人矣とあり、又蕪村の「芭蕉堂再興記」（蕪村文集に見えてゐるが、都名所圖會には寫經社集序として引いてある）にも、此の芭蕉庵「再興發記の魁首は、自在庵道立子（○碑誌に姪道卿新建云々、道卿名敬義予仲氏第二子、出嗣二樋口氏一爲二吾藩同宗川越侯源公一知二京邸事一とある人か）なり。道立子の大祖父坦庵先生は、蕉翁のもろこしぶみ學び給へりける師にておはしけるとぞ」とあるから、疑ひはあるまい。尤も『坦庵集』は未だ見ぬ。因みにいふ、此の金福寺芭蕉庵は、其の地が芭蕉の遺跡であるとの里人の口碑に依つて、蕪村が再興したもので、今も庵も碑も遺つてゐる。或は芭蕉が東下前に一時東山に居たといふ其の地が即ち此の一乘寺村であつたのかも知れぬが、徵すべき材料が無いので、よく判らぬ。田中桐江に學んだとの傳へもあるが、是は未だ確かな出處を見出し得ぬ。兎に角芭蕉が、漢籍は幾らか讀んでゐたことは、其の文章や句評などに徵することが出來る。特に莊子などは愛讀してゐたらしい。又北向雲竹に書を學んだといふことは事實であらうが、果して京都に居て學んだものかどうか。後にも、此の人の噂をしたり、又幻住庵の額

又芭蕉の關口水道工事の傳說中に、幕府の作事方松村市兵衞といふ名も見えてゐるが、(芭蕉が此の人の許に居て工事に關係したといふのである)此の人と伊兵衞とも何か關係があるらしく想はれる。杉風が幕府の御用達であることも頭の中に置かねばならぬ。『湖東問答』の松村桃鏡の序に、祖父伊兵衞、晩號ニ一道、父重羽云々とあるのは言ふ迄も無く此の伊兵衞で、又芭蕉庵燒失後再興の時の寄附帖に伊兵衞とあるのも此の人かも知れぬ。伊兵衞が芭蕉の姪であることは、他書にも記したものがある。其の鄕里は大和(山城の誤か)の加茂らしいことは、後にいふ。是等の重々の因緣から、壽貞親子も、杉風家に近づき、其れを番頭の伊兵衞が特に世話してゐたのでがなあらう。好齋老は、竹人の芭蕉傳に、深川の隱者で、桊順尼、禪可坊(共に遺言に見えてゐる名)も同所の人とあるが、詳しい關係に就いては、他に徵すべき材料を得ぬ。

要するに、芭蕉の亡命の眞原因が何であつたかは、今に於いてもなほ疑問として殘すの外は無いが、蟬吟公に死に別れたことのみが唯一の原因ではあるまいといふだけは、上に述べたやうないろ〳〵な理由から、大體に於いて推測して可からうと思ふ。而して其の原因の一として、鄕里での婦人に關する傳說と、壽貞尼の事とは、有力な參考になるには違ひ無い。併し是とても、なほ今少し取留めた材料が無くては、何とも斷定し兼ねるのである。

二十四歲頃に亡命したものと先づ假定して置いて、偖其れから、二十九歲東下迄の五六年間は「跡を

是だけでは、無論さう決めてしまふ譯にも行き兼ねるのである。

是迄いうて來ると、何人も、芭蕉の藤堂家奉公時代の婦人に關する傳說と、此の壽貞とを、因緣を付けて考へて見ずに居れぬであらう。故大野洒竹氏なども斯く考へた一人であるといふ。無論全くの想像に過ぎず、他に何の據處も無いのであるが、予もさう想像してゐた一人である。それは若し奉公時代の風說の一を假に實とすると、芭蕉のやうな性質の人が、忽ち之を忘れて、後に又妾を求めるといふやうな事は、自然と考へられぬからでもある。壽貞が芭蕉と同鄕の人であつたことは、壽貞が次郎兵衛の母であつたことから知られる。それでこんな風にも想像される。藤堂家時代に、或る侍女との噂を朋輩などの間に立てられ、それを厭うて身を晦ましたが、其の女も其れが爲に奉公を止めて剃髮し、家も豐かでなかつたので、芭蕉の世話か何かで一家江戶に出で、芭蕉も氣の毒に思うて其の女を妾ともつかず、女中ともつかずに出入させた。それが壽貞である。といふやうな事であつたかも知れぬ。但し壽貞が芭蕉の乳母であつたとの傳へ(次郎兵衛物語)も亦一笑に付する譯には行かぬ。單に右の書翰や、次郎兵衛と芭蕉の關係や、それこれから推す時は、乳母であつたとする方が、一層自然で、考へ易いのである。其れで此の問題は、なほ暫らく疑問として置く方が安全であらう。

右の書翰の宛名の猪兵衛伊兵衛は恐らくは同人であらう。一說に、杉風の手代に松村伊兵衛といふ芭蕉の甥があつて、(眞澄鏡)芭蕉が杉風に便るやうになつたのも、其の緣であらうとも想像されてゐる。

壽貞と芭蕉庵との關係

考の『十論爲辨抄』にも載せてあつて、文句は大同少異であるが、「當年は」が「當夏は」となつてゐて、前の壽貞の死亡を聞いての手紙の日附の六月とよく合うてゐる。さて又今一書別に杉風宛で『眞蹟集拾遺』(沼波氏の全集に引く)に出たものがあつて、是は行脚の道中の樣子を膳所から杉風に知らせたものである。其の日附や、文中の日取等に就いては、多少の疑問の餘地もあるが、(後にいふ)兎に角確かなものであらうと思ふ。其の中に、

一、猪兵衛病氣、桃隣無二御油斷一被二仰付一可レ被レ下候。折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。され共壽貞病人の事に候へば、しかじか茶をまゐるほどの事も得致まじくと存候。(〇中略)猪兵衛桃隣指圖にて、ともかくも留守相守り、火の用心能仕候樣に、被二仰付一可レ被レ下候。

の一節がある。是に依れば、芭蕉の旅立後壽貞は病中ながら芭蕉庵の留守居をしてゐたものらしく想はれる。すなはち、杉風に、芭蕉庵を訪ねて下つても、壽貞は病中ゆゑ、御茶も碌々差上げられまいとの意らしい。

妾説と乳母説

右四通の書翰に據つて察すると、壽貞と芭蕉との關係の、一通りでなかつたこと、芭蕉が最後の行脚の時は、壽貞は病を抱きつゝ芭蕉庵の留守居をしてゐたこと、理兵衛は壽貞の父か何かで、「細工」を業としてゐたこと、(おふうは母などにや)芭蕉に死なれると其等の人々は便りを失ふこと、等が想像される。是等を綜合して考へると、壽貞が芭蕉の妾であつたとの傳へも、可なりに有力なやうに思はれる。但し

第　二　書

壽貞無ニ仕合ー、まさ、おふう、同じく不仕合とて、難ニ申盡ー候。好齋老へ別紙可レ申候へ共、急便候間此書一所に御覧被レ下候様存候。萬事御肝煎御精御出しの段々、先書にも申來、扨々忝。誠に不思議の緣にて、此御人賴候も、箇樣可レ有端と被レ存候。何事も〳〵夢幻の世界、一言理窟は無レ之候。兎も角も能樣に御計可レ被レ下候。理兵衞もうろたへ可レ申候間、とくと氣をしづまらせ、取亂し不レ申樣に、御しめし可レ被レ下候。以上。六月八日。桃靑。猪兵衞樣。

第　三　書（遺言の一節）

（○前後略）一、伊兵衞に申候。當年は壽貞事に付、いろ〳〵御骨折、面談に御禮と存候處、無ニ是非ー事に候。殘り候二人のもの共、十方をうしなひ、うろたへ可レ申候。好齋老など、御相談被レ成、可レ然了簡可レ有候。

右の內、第一書は、前後の文言から察すると、芭蕉が京都邊での旅行先から江戸に送つたものらしい。而して日附の六月三日は、桃隣への傳言の依賴などもあるので、最後の行脚、即ち元祿七年のであることが判る。桃隣は芭蕉が奥羽行脚の後に鄕里から江戸に伴ひ下つたのである。第二書の六月八日は、それより五日後で、是は壽貞の死去の通知を得ての返事と見える。さすれば三日の手紙と行き違ひに死去の通知を受けた譯で、五月末頃に壽貞は江戸で亡くなつたものと見える。第三書は遺言で、此の書は支

通説では、蟬吟公卒去(四月)の年の秋といふ事になつてゐるが、實は其の後のある年の春と見るのが當つてゐるやうに思ふ。葛飾素逕は其の翌年春との説を取つてゐるが、兎に角「雲と隔つ友かや雁の生別れ」の春の句であることは、少しく考へれば何人も氣の付くべきことである。翌年春と決めるのも、單に句から想像したのに過ぎぬが、何れにしても、蟬吟公に別れて直に遁世したのではなく、其の間になほ多少の時日があつたことだけは、推測して可からうと思ふ。「雲と隔つ」を秋の句だとの説を取る者もあるが、予は春説を主張する者である。

壽貞尼の事

近頃から問題にされてゐる芭蕉の若い時の妾であつたとの傳へ(野坡門の風律の小ばなしと題する書に出てゐると云)のある壽貞尼の事も一言して置かねばならぬ。先づ『有磯海』に「尼壽貞が身まかりけると聞きて」と題して「數ならぬ身とな思ひそ魂祭」の句が出てゐる。それから『芭蕉翁眞蹟集』(蓼太輯)に此の尼の名の見えてゐる書翰が三通出てゐる。(是等の書翰は、一葉集や、句選年考などにも引いてある)

壽貞關係の書翰

第一書

(○前後略)一、理兵衛細工無レ之時分、せめて煩ひ不レ申樣に御氣を可レ被レ付候。右之通り、壽貞にも御申聞かせ可レ被レ下候。おふう夏かけて無事に候哉、樣子具に御申越可レ被レ下候。六月三日。桃靑。

猪兵衛樣。

くも想はれるのであるが、(是は二十四五歳頃に亡命したものと假定していふのである) 是も公けに知れてゐぬ。且何故に芭蕉が青年時代の事を殆ど全く語らなかつたのであらうか。又四十一歳の歸郷以來、郷里には、歸つたり立寄つたりしたことは度々であるが、紀行文からは、郷里の段は、兎角省いたり、又遠慮克に書いたりしてゐるやうに見える。尤も是は立入り過ぎた想像かも知れぬ。(全體芭蕉の紀行文は大抵生前には公刊しなかつたものらしい) 臨終の時も門人達が、伊賀への病氣知らせの書に對する返事が無いので、更に飛脚を立てようかと芭蕉に伺うたけれ共、藤堂家への畏れもあるからとて、許さなかつたとも傳へられてゐる。(此の事は例の花屋日記に出てゐるのだから、確かではないが)其の他いろ〳〵の事實を綜合して推すと、芭蕉は始終郷里に立寄つたり、又郷里の事を言うたりすることを遠慮してゐたやうに取れるが、如何であらうか。單に主君に別れた爲に、遁世したのならば、何も郷里を遠慮するには及ぶ間敷いこと、言ふ迄もあるまい。或は、一旦主家の意に背いて遁世したのだから、遠慮したのかも知れぬとも思ふが、どうもそれだけではないらしい。芳野行脚の時、探丸公の花見に招かれて「さま〴〵の事想ひ出す櫻哉」と詠んだ事など、紀行文から前書を省いてある。探丸公の句は『猿蓑』などにも出てゐて、內實は芭蕉の弟子分となつたらしい事など見ても、主家で留めるのを無理に遁げたやうな關係としては、自然でないやうにも思ふが、如何であるか。此の郷里との關係の事は、聊か臆測に過ぎてゐるかも知れぬが、參考迄にいうて見たのである。又前にも一寸いうたやうに。宗房の亡命は、

亡命後の芭蕉と郷里との關係

の侍女と云々といふのが、最もありさうな譚である。脚本『伊賀の仇討』（紀上太郎）も、芭蕉を劇中の人物としてゐるので珍らしがられてゐるが、是も宗房の相手を藤堂家奥方附の侍女にしてある。是等の傳説は、悉く女色に關係してゐるが、宗房が女色などには全然因緣が無かつたのを、勝手に想像で捏造し出したものとのみ見るべきであらうか。是等の内一つ位は、實に近い傳説が混つてゐたのではあるまいか。芭蕉のやうな人格の美はしい德望の高かつた人は、之を傳へる者は、あらぬ事を附會しても、彌が上にも美はしくし度がるのが普通の人情である。然るに特に郷里で此のやうな傳説が言傳へられたといふには、誤傳にしても、何か其の誤傳の本になつた或る事實があつたのではなからうか。後に遁世者の生活をした爲に、高僧のやうに思はれてゐたゞけに、尋常ならば、靑年時代を此のやうな忌はしい譚に汚す（尤も皆寃罪のやうに記してはあるが）のを厭ふのが、崇拜者の眞情であるべきに、此のやうな傳説に餘儀無く附纒はれたといふのは、何かあつたものと見るべきが自然ではあるまいか。

芭蕉が二十九歲で江戶に出てから、始めて郷里に歸つた四十一歲迄、足かけ十三年を經てゐる。此の間にも歸郷したことがあるとの説もあるが、それにしても、十年間近くは歸らなかつたのである。何故さう永く郷里に寄り付かなかつたのであらうか。尤も交通の不便な時代に、十年位歸郷せぬからとて、疑問を立てるにも當らぬが、後には折々歸つてゐることゝ合せて見ると、多少の疑ひを感ぜしめぬでもない。是より先、亡命の後は、京阪の邊に彷徨ひ、又實は郷里にも歸り、或は滯留などもしてゐたらし

も「仕官懸命の地を羨やみ」など言ひ得るか知らぬ。是等の後の言行から察して、予は桃青の亡命の原因を、他に求めねばならぬと臆測する者である。少なくも主公に死に別れた事のみが唯一の原因ではあるまいと考へるのである。其の最大の原因は何であつたかは、判らぬが、前述の事だけは、略ぼ謂へると思ふ。

桃青が藤堂家に仕へてゐた間の出來事としていろ〳〵と傳へられてゐる譚がある。ある説には、桃青の宗房が十九歳の時に、蟬吟公の侍女と通じたとの寃名を負ひ、之を憤つて一旦主家を出奔し、後蟬吟公の卒去を聞いて歸參し、其の遺髪を高野山に納め、それから遁世したといふ。(錦江芭蕉傳内田氏芭蕉傳に引く)又一説には、蟬吟公の卒後、相續爭ひが生じ、宗房は未亡人を助けて、遺孤良長(後俳名探丸、蟬吟の弟といふが實らしいことは前にいうた)の、當時三歳であつたのを護り、忠勤を勵んだ爲に敵黨に忌まれ、未亡人との醜聲を傳へられたのに激昂したのが、實は遁世の原因だともいふ。(岡野正味芭蕉遁世考、内田氏芭蕉傳に引く)或は又主君の花見の御伴をして、袴を損じたのを、彼の親戚なる公の侍女某が繕うてゐたのを、同僚に怪しまれて、公に告げられ、侍女は其の爲に入水して死んだので、之を悲しむの餘り、世を厭うたのだとの説もあるといふ。(冠山侯芭蕉傳)甚だしいのは、嫂即ち半左衛門の妻との間に醜聲を傳へられたのが、遁世の原因だともいふ。(伊賀傳説と云)以上の傳へは、要するに、何れも宗房の亡命の原因を主君に死に別れた事以外に在りとするのである。是等の傳説中、蟬吟公

仕官懸命の地を羨み

第一其の爲ならば、人の門に書置を遺して遁げ出さねばならぬ迄に、主家で致仕を許さぬといふも訝かしい。又殉死云々の說もある。路通などは、殉死し度かつたのを、國法の爲に妨げられでもしたやうに云うてゐる。(芭蕉行狀記)寛文三年に幕府は殉死の禁令を出してゐるが、其の前年には、藤堂家が旣に禁令を出してゐる。乃で佐々醒雪氏なども、若し此の禁令が無かつたならば、宗房なども眞先に死なねばならぬ處であつたと說いてゐる。(醒雪遺稿)併し是は、先づ宗房の遁世を蟬吟公に別れた爲だと豫め頭の中で決めて置いて、それから逆に割出した考で、言ふ迄も無く甚だ覺束無い說である。而して特に殉死をし後れた爲ならば、其の殉死が、宗房の本意であると否とに係はらず、尙更出家祝髮でもしさうな筈である。然るに亡命後、一向出家も祝髮もせぬのみならず、却て其の意味と反對に取れるやうな事をやつてゐる。すなはち、江戶に出て水道官吏となつたり、(水道工事に從事したのは、江戶に出る前だとの說もあるといふが、暫く舊說に從ふ)「暫らく身を立てんことを願へども、之が爲(〇狂句を好む爲)に障へられ」(笈之小文)と述懷したり、更に「ある時は仕官懸命の地を羨や」んだり(幻住庵記中の語)してゐる。尤も「仕官懸命の地」は、藤堂家に奉公してゐた時の事を云うたものと解釋する者もあるかも知れぬが、前後の文意から察すると、さうではないらしい。又さうとした處で、此の樣なことを公言して憚からぬといふが、主公に別れて世を果敢無む、又は主公に殉じ後れた人の爲し得ることであらうか。たとひ義理一片にしても主公に後れた爲に遁世した苟も武士たる者が、特にあの遠慮深い芭蕉が、厚顏に

して確かな證據が無いのである。特に亡命して跡を晦ましたと傳へられる宗房に、五六年の後に早くもあの立派な二十五番句合を堂々と郷里の鎮守に奉納し、且之を集めた『貝おほひ』を公にしたりした事實の解釋には、予は是迄大に苦しんでゐたが、若し此の江戸に出た時に亡命したものとすると、是だけは氷解する譯である。例の『次郎兵衛物語』が、出奔して直に江戸に出たとしたのも、年齢を甚だしく誤り乍らも、上野から直に東下したとの傳説を聞傳へて書いたからでないとも限らぬ。是は從來の傳へとあまりに甚だしい相違があるので、輕々しく取るべき説では固よりないが、確かに考究に値する異説である。次に述べる芭蕉亡命の動機に就いての疑問は、前から抱いてゐた私見で、某雜誌に載せたものであるが、若し假に右の異傳に從ふことにすると、蟬吟公に死に別れた事のみが、亡命の動機であるまいとの予の私見は、愈〻有力になつて來るのであるが、固より輕率には之を信じ難いのである。

第二節　亡命の動機及び亡命後

芭蕉の亡命（通例遁世といふてゐるが、遁世の語は當らぬ）の原因を、多くの傳記類は、大抵其の主君蟬吟公の卒去に歸してゐる。併し此の説は容易に首肯し難い處がある。（或書には、松尾家と大阪の花屋とは、緣家で、蟬吟公卒去の頃に、花屋の一子伊三郎といふ者も死んだので、宗房は一層無常の感を強くしたとあるのは、確かゝどうか）主君の早世に、世の無常を觀じて遁世したものならば、出奔後は直に坊主にでもなるか、又は郷里に留まり、世を捨てゝ主君の墓守にでもなるかしさうなものである

仕まふことは、どうも出來にくいやうである。以下異說を紹介して見よう。

其の異說といふは、卽ち竹人の芭蕉傳の說で、是には寬文十二年の春二十九歲で仕官を辭して甚七と改め、東武に赴く時、例の「雲と隔つ友かや」の句を詠んだとしてある。從來の芭蕉傳に頭を慣らされてゐる人は、此の說を聞いたら、直に一笑に附して仕まふかも知れぬが、さう無造作に否定して了ることは出來ぬと思ふ。全體二十三四歲說が、旣に前述の通りで明徵がある譯ではなく、それから京阪邊を徘徊してゐたといふのも、確かな記錄がある譯ではないのだから、此の異說に就いては、冷靜に考へて見ねばならぬ。特に雁の句を春としてゐる處も、注意に値する。『伊賀實錄』が此の出奔を三十歲の時の事としてあるのも、是に近い。是等の二書共、鄕里の口碑を記した可なりに古いものである。是等の說は二十九歲の春に鄕里で『貝おほひ』のあつた事實と合せ考へて、深く推究して見ねばならぬ。予は豫てから鄕里で『貝おほひ』を公にした事實は、鄕里を出奔した宗房としては、どうも聊かそぐはぬ處があるやうに思うてゐた。それで事に依ると、「雲と隔つ」の句は、江戶に出る時の吟といふが、實際かも知れぬ。而して蟬吟公に死に別れた後も、なほ引續き藤堂家に仕へてゐたのでないとも斷言出來ぬ。若し此の傳へに從ふ時は、二十三四歲亡命說及び其れに關聯した傳へは、殆ど根柢から覆されることになるのであるが、或は今後の調査の次第に依つては、さういふ事にならぬとも限らぬ。元來京都に居て、東山に菴を結んで住んだとか、難波で宗因に從うたとか、季吟の執筆をしてゐたとかの、樣々の傳へは、一と

にあるが、果してさうか。

偖又宗房の亡命の原因に就いては、是も後でいふが、茲では亡命の月及び年に就いて先づ一言して置かう。通説では、亡命は、蟬吟公歿年の七月（文曉説に九月）といふことになつてゐるが、是は誤りらしい。何となれば、右の「雲と隔つ」の句は、確かに春の、多分二月の句で、湖中などは、其の『芭蕉畧傳』に、遁世を七月とし乍ら、『一葉集』發句部には、右の句を春に入れてゐる。葛飾素蓮の説に、遁世は翌年二月であらうとある（芭蕉庵春秋）が、實は是も句から想像した迄に過ぎぬ。假に二月を確かと見ても、何の年であつたかを決めることは、難かしいのである。偖かうなると、是迄殆ど通説になつてゐた二十三歲説が、だん／＼搖ぎを生じて來る譯になる。

即ち亡命は普通に二十三歲、又之を疑ふ者も其の翌年位迄しか持つて行かぬのであるが、稀に是等と甚だしく異うた傳へを記したものもある。それは後に改めていふが、兎に角上に述べた事は、單に一般に信ぜられてゐた通説に過ぎず、正確な根據ある譯ではないのである。予なども、二十三四歲亡命説を假に定説と見て、其れから他の事柄にも考へ及んで見たこともあるが、どうも是は危險なやうである。二十三歲秋説も、『桐雨筆記』始め、古い傳にも多く見えてゐるのであるが、何れも多少曖昧な記し方をしてゐる。事に依ると、此の説は、單に蟬吟公の卒年に、「雲と隔つ」の雁の句を秋と見ての想像を附加した考から出たのかも知れぬ。兎も角も、二十三四歲説は是迄得たゞけの材料では、確乎不動の説と決めて

ゝいふ程の事でもない。

宗房の亡命(又遁世とも)は、是迄の通説では、蟬吟公卒去に引續いてのことであつたとされてゐる。此の事には、いろ／＼疑問もあり、なほ深く考査すべき難問題であるが、それは後でいふとして、以下先づ通説に依つて逃べて行かう。

寛文六年宗房二十三歳の夏四月二十五日(公の卒年月は斯様に判つてゐるが、年齢の確かなことを書いたものが殆ど無い。次郎兵衛物語には芭蕉と同年とし、又ある傳には十九歳としてあるが、容易に信じられぬ。郷里の傳へに、正保三年生れで、卒年は二十一とあるが、是も確かゝどうか)に蟬吟公は不幸にして亡くなられた。(上野町夷町山溪寺に葬る。謚號貞眞院實叟宗正居士。此の墓を發見したのは、露人エリセーフといふ者だと云)宗房は哀しみのあまり同六月に遺髪を奉じて高野山に登り、之を報恩院に納め、厚く供養して歸つた。それから間も無く遁世の志を起し、終に隣家の同僚孫太夫といふ者の門口に、

雲と隔つ友かや雁の生別れ

の一句を短冊に認めて遺し、跡を晦ました。一説に、門に貼り付けたとあるのは、餘りに譚めく。竹二坊の傳には、孫太夫の門口に包んだ手紙が置いてあつたので、開いて見たら、此の句を認めた短冊であつたとあるが、是位の處が實際であらう。此の孫太夫宅は、玄蕃町の宗房の宅の隣家であつた由、或書

に使したとの傳へも、諸書に見えてゐるが、是は恐らくは事實ではあるまい。季吟が新玉津島に定住したのは、天和年間からのやうである。(北村季吟傳、國學者傳記集成等)俳諧仲間の家來宗房を、其の俳諧の師の許への使にするといふは、あり得べきことであるが、新玉津島云々は疑はしい。又ある傳(洒竹文庫本、逸名)に、伊賀の名張の渠が連俳を好み、季吟を招待して之を學んだ。季吟の屋敷跡といふが、後迄あつたとある。季吟が未だ住處不定であつた頃には、そんな事もあつたらう。宗房の「紙子着て夏より著し桃の花」は、或書に二十三の時の吟とあるが、確かゝどうか。兎もあれ、宗房が藤堂家出仕時代に俳諧の一通りの修養を積んだといふ程のことは、事實と見て可いやうである。

此の出仕間の事であるか、芭蕉が九州に旅行したのは確かなやうである。元祿二年(?)の加賀の北枝への消息に「二十六七年以前(○芭蕉二十一二歳の頃に當る)太宰府へ參詣致し候。外連二人、我と三人にて、歩行候へ共、知音も無く候て、見物所計尋歸候云々」(消息集)とある。此の太宰府參詣を或書には寛文九年としてあるが、何に據つたのであるか。又浪化の物語(俳諧正語抄)に、芭蕉が肥後の山中を過ぎた時、五十計の男が、妻らしい婦と薪を下して阪の上に休んでゐたのを見て、賤の女に却てわり無き夫婦の語らひがあるとて、感じたなどの譚もある。此の譚は確かゝどうか判らぬが、九州に旅行したとの傳へを助ける材料とはならう。又天の橋立、四國などにも旅行したといふ(芭蕉翁略年譜等)が、何に據つたのか、未だ確かな出處を見出さぬ。是等はさして遠隔な地でもないから、旅行したとて、取立て

ら、幾らか根據があるとも謂へようか。

偖又蟬吟公は、和歌を冷泉家に受け、俳諧を季吟に學んだとあるが、季吟に學んだことは實であらう。さうらしく思はれる事がいろ〳〵ある。蟬吟の俳號も、季吟の偏名を取つたのかも知れぬ。さすれば之に仕へた宗房も、自然に俳諧に親しみ、季吟に近づいたといふことも、あり得べきである。『桐雨筆記』等に、季吟の門人となつて、十四歳の時（明暦三年に當るから、此の話を實とすれば、支考等の承應出仕說が是となる譯であるが）「犬と猿世の中良かれ酉の年」の句を詠んだとしてある。但し此の句は『鷹筑波集』に出てゐる「犬と猿の中立なれや酉の年」と酷似してゐるので、疑ふ者もあるのは、尤もである。此の疑ひが無くても、確かな資料が無いと、幼時秀吟を出したとの傳へなどは、容易に信じ難いことの多いのが、傳記類の例である。隨つて十四歳頃に既に仕へてゐた證據とするには、やゝ薄弱であらう。但し蟬吟宗房の兩吟もあり、句反故なども數多遺つてゐた（湖中芭蕉傳）といふは、あるべき事である。蟬吟公の句としては、大阪役で戰死した前出の祖父良勝の遠忌の「大阪や見ぬ世の夢の五十年」（猿蓑）や『蕉門古人眞蹟』に出てゐる「そり高き霜のつるぎや橋の上」などの外に、諸書に散見してゐる句も少なくない。「松かざり竹の八千代も添ひにけり」「高岡も生駒も遠し夕霞」など聞えた句である。（勝峰晋風氏の調べに依れば、續山之井に三十九句、佐夜之中山に一句、耳無草に二句、世粧に一句ある由、但し付合は除く）或は、季吟が當時京都の新玉津島社に祠官をして居たので、宗房は主命に依つて屢ゝ同社

ある。いづれとも確かなことはいへぬが、是などが自然で、實に近いやうに想はれる。蝶夢の繪詞傳に、玄番町に芭蕉の住んだ家の跡があつたやうに記してゐるので、調べて見たが、判らなかつた。或は右の別屋敷を誤つたのでないかと思ふが、どうであらうか。(第三節郷里の宿所の項參看)

藤堂家に仕へた年齢に就いても、二三の異傳がある。一説に九歳乃至十一歳頃に當る承應中(支考芭蕉翁碑銘序)ともいひ、寛文二年十九歳の時(竹二坊、冠山猴等の芭蕉傳等)ともいふ。或は寛文の初としたものやら、其の他彼是あるが、先づ上の二説が有力なやうである。例の『次郎兵衛物語』に六歳としたのは珍らしい。上の二説中でも、十九歳説が最も多いやうであるが、是等も確かな資料か無いので、どの説を是とも謂ひ兼ねる。芭蕉と蟬吟公との間の君臣の情誼が尋常で無かつたから、承應頃から仕へたといふのが實らしいと説く者(内田氏の如き)もあるが、情誼が云々といふのは、大抵芭蕉の亡命を、蟬吟公に別れた爲の遁世と決めてかゝるからの臆測に過ぎぬやうである。遺髮を奉じて高野山に納めに行つた事は、實であらうが、是とて特別の情誼と解さねばならぬこともあるまい。主君でもあり、俳諧仲間でもある人に對して、是位な事は當然であらう。それ故是等から出仕の年齢を想像するのは、危險でないかと思ふ。今少しく有力な材料を得ぬ限りは、想像にしても容易に下し難い。又宗房の職は、蟬吟公の近習役であつたやうに普通に傳へられてゐるが、或は料理人であつたの説もある。(老之樂中破笠の話)是もどちらとも考へ兼ねるが、後説は破笠が芭蕉から直接か間接かに聽いたことゝも想はれるか

町の兄の家でなかつたかと想はれるが、よく判らぬ。又藤堂家に出仕後は、始終同家の屋敷内に住んでゐたものか、又自宅から通うてゞもゐたものか、是も判らぬ。或は藤堂家の別屋敷(中屋敷とも下屋敷ともあるが、どちらか)のあつた玄蕃町(茲には今も呉服屋某の別莊内に樣々庵跡といふのがあつて、芭蕉が例の「樣々の事想ひ出す櫻哉」を詠んだ處と傳へられてゐる。此の地の儒服部竹塢の遺稿に樣々庵記と題した文もある。即ち探丸公が花見を催して芭蕉を招かれた屋敷跡である)に住んで居たと書いてゐる者もあるが、是も判然せぬ書き方である。或は玄蕃町の屋敷に蟬吟公が住んでゐたので、其處に宗房も仕へて住んでゐたとの意味になるのかも知れぬ。冠山矦の芭蕉傳には、さうして



幼名

を得ぬ。

芭蕉の幼名も、諸書に記す所は中々多い。與作、金作、半七、半七郎、友七郎、甚七、甚七郎、甚四郎藤七郎、忠左衛門、友七郎など、凡そ十餘の異傳がある。是等の出處を一々擧げるのは、煩はしいから省くが、是等の內、金作(古い芭蕉傳には大抵見えてゐる)甚七郎(素堂の松之奥に見えてゐるが、今の同書は僞書の疑ひがある。但し此の名も隨分古いものにも見え、又香月半山が野坡の依囑によつて書いたといふ大阪遊行寺の碑文に甚質とあるといふが、是は甚七郎の略稱とも見られる)忠左衛門(是も諸書に見え、又湖中芭蕉傳には、高野山の過去帳にも此の名が出てゐるとある)などは、先づ實に近く思はれる。忠左衛門は多分元服後の名でもあらう。又名乘の宗房は、『貝おほひ』(後にいふ)に見えてゐるから、無論確かで、是は諸書にもある通り、先祖宗清の偏名を取つたのであらう。因みにいふ、芭蕉當時の俳人で宗房と稱した者が數人あつたやうで、隨分紛らはしく、他の宗房の句を芭蕉の宗房のと間違へた例もある。(和州八木の寺田宗房、京の宗房、伏見の宗房、高井宗房など、皆別人であることは、勝峰晋風氏がよく調べてゐる)

鄉里の遺跡

兄半左衛門の家は、上野の赤坂町にあつたので、今も其の跡の家といふのもある。又松尾家の菩提所が農人町の愛染院であつたことなどは、確かと見て可い。たゞ芭蕉が幼時何處で育つて、出奔迄は何處に住んでゐたかといふやうな事になると、明記したものが無い。或は、生れたのも幼時居たのも、赤坂

宗清—（○中略）清正 山川
- 宗時
- 勝島
- 西川
- ○○松尾—某 百司 柘植に舊宅在—某 與左衛門
  - 命清 半左衛門
  - 女子
  - 宗房 芭蕉庵桃青
  - 女子 嫁片野氏
  - 女子 嫁畑内氏
  - 女子 於よし後に命清養女と成

此の中の於よしは、芭蕉の書翰中にも「母樣於よし云々」と二個處程見えてゐて、予は此の系圖を見る迄は、芭蕉の妹でもあるかと想像してゐたが、此の系圖に依つて明らかになつた。尤も此の系圖を、飽迄確かなものと決める譯にも行かぬが、他の系圖に比しては、最も信用すべきものであらうと思ふ。元來先祖の系圖などいふものゝ、多くはあまり當てにならぬことは、何人も承知の通りで、是なども、芭蕉の親子兄弟の處だけ位を參考にして置けば可い。

半左衛門の後

半左衛門一家は三代目の寶暦年間に、疫病の爲に死に絶えた（竹二坊芭蕉翁正傳集）とあるのは、多分實であらう。年代などに多少の誤りは有り得るとしても、一家の死に絶えた事など、伊賀の傳說 事實とに本づいて書いたものに、間違は無からうと思ふが、如何であるか。（竹二坊の傳は誤りも多いが）然るに近頃迄半左衛門の子孫と稱する者もあつたといふが、是等は確かなことであるかどうか、迷はざる

の伊賀實錄に依れば、元祿年中、義仲寺の碑と同時に建てたものと云）所藏の位牌（寺傳に松尾家より納めたものと云。確かなものとして據ることは出來ぬが）に月峰不殘居士、芭蕉庵桃靑居士と二人しか並んで無く、月峰は卽ち兄半左衞門であるべき筈なことなども、二人兄弟であつた參考とはならう。若し三男あつたとしても、一人は夭死したのであらう。此の半左衞門の方は、芭蕉の書簡や其の他『笈日記』などにも、よく出て來る人で、芭蕉に後れて亡くなつてゐる。其の歿したのは、右にいうた位牌に據れば、元祿十五年三月二十九日である。それから芭蕉に俳諧を學んだ山岸半殘は、芭蕉の姉婿（一說に妹婿）であるとの說もあるが、若し是が實ならば、下に揭げる系圖中の、單に女子とのみあるのが、半殘の妻かも知れぬ。但し是は想像迄に過ぎぬ。松村伊兵衞（後にいふ）や天野桃隣が、芭蕉の姪であるといふは、實らしいが、其の關係を明記したものが未だ見當らぬ。又山田雪芝は芭蕉の從弟であるといふ。（冠山族芭蕉傳）

偖又芭蕉一家の系圖は、諸書に樣々に出てゐるが、茲に、纏まつた芭蕉傳としては、最も古いものゝ一である竹人（川口庄太夫、荻子の弟と云）の『芭蕉翁全傳』（土芳の兄景賢の口傳を記したものと云。奥書寶曆十二年。蝶夢の繪詞傳に、伊賀の芭蕉全傳とあるは、此の書を指したものか）中の系圖を揭げて見よう。（淸正は他書には正淸ともある）

芭蕉の主家

出であるのは、上記のやうな上野と伊豫との關係があつたからかも知れぬ。此の母は、芭蕉の甲子吟行の頃には旣に亡くなつてゐたやうに想はれるが、又其の後の書翰に「母樣およし」などある所から見ると、是は繼母でゞもあつたものと見える。芭蕉の主家藤堂氏の祖は高虎の從弟新七郎良勝で、此の人が始めて上野城を預つた(?)のであるが、是は大阪夏陣に戰死した。芭蕉の仕へたのは其の子の良精の家で、良精の子の良忠通稱主計俳名蟬吟に近侍したのである。因みに云ふ、後に芭蕉が親近した探丸公は、蟬吟公の子ともあるが、弟とあるが正しいやうである。一說に、探丸公は實は蟬吟公の父(即ち良精)の號とも傳へられてゐる由、上野の某の話であるが、是は誤りであらう。良精も山溪寺に葬られたものらしく、墓に與雲院祥岳全箪大居士延寶二甲寅年五月二十四日とあるといふから、其の後に芭蕉も會うたり、撰集に句も出てゐる探丸公でないことは明らかである。又或書に百歲は探丸公の弟とあるが、果して確かゝどうか。

兄弟姉妹二男四女か

又兄弟は、二男四女といふが通說であるが、三男說(竹二坊芭蕉翁正傳集等)もある。併し二男說が正しいやうである。三男說では、長は與左衞門で赤阪町に手蹟指南をし、次は半左衞門命淸で藤堂主殿(一說に九兵衞)長基に仕へ、次が則ち芭蕉であるといふのである。(同)然るに此の與左衞門の事は、後に一向何にも所見が無いのみならず、父の名と紛れたかの疑ひもあり、(父の名を繼ぐこともあるが)父も手蹟指南をしたともいひ、且半左衞門の宅が赤阪町に在つたのであるから、是等が混同しての誤傳かと思はれる節もある。それに、上野町の松尾家の菩提所の愛染院(所謂古鄕塚のある處で、此の塚の碑は、百明房

たのであるか。藤堂良勝（後にいふ）と共に戰死した者の名中に、松尾甚兵衞統幸といふのがあるといふが、或は是を誤り傳へたのかも知れぬ。手蹟指南をしたのは、實は此の父與左衞門であると記したものもあり、鄕里でもさう傳へてゐるといふから、或は其れが實かも知れぬ。芭蕉が見事な手蹟であつたのも、父の感化からかとも想はれる。

母は伊豫宇和島の產れで、桃地氏であるといふが諸書の記す所である。但し桃地と松尾氏の祖百司（伊賀七黨の一と云）とは音が近くて聊か紛らはしく、支考の「芭蕉翁石碑銘序」にも、松尾氏は「其の先は桃地の黨とかや」などあつて、混同されてゐる。一說に、百司氏も桃地氏も、古くは柘植にあつたともいふが、明らかでない。但し百司氏の方は、今は無いらしいが昔はあつたものと想はれる。遠藤貞松の『芭蕉翁略傳』（遠藤蓼花氏所藏）に、母の名を「いよ」としてあるのは、珍らしい傳へであるが、或は伊豫の出といふのを、其の名と傳へ誤つたものかの疑ひがある。竹人の芭蕉傳（後にいふ）に據れば、此の女は、伊豫から伊賀の名張に來て、松尾家に嫁したことゝなつてゐるが、元來上野と伊豫とは、全く因緣の無いこともない。藤堂氏の本家の祖高虎はもと宇和島の城主で、後同國今治に移り、最後に伊賀伊勢に封ぜられたのである。又伊賀の蕉門の西島百歲の父八兵衞は、有名な治水事業家であつたが、伊豫に招聘されて治水工事をやつてゐる。（其の傳を記した書もある）芭蕉の家が此の西島氏の隣家であつたといふことも、芭蕉の水道工事從事にも關聯して、考の中に置いて可からう。兎に角松尾家の嫁が宇和島

寺の角上の「芭蕉行狀碑」(碑は今もあるが、漫漶して讀み難い處もある。但し幸に其の全文は寬保三年の芭蕉五十回忌追善集の屋土里塚に出てゐる。角上は蕉門の堅田本福寺千那の養子で、碑は即ち五十回忌に建てたものである)や『誹論』等に見えてゐる。『反古集』(廣文庫引く)にも五十二歲とあるが、是は元祿八年歿すと誤つてゐるから、結局五十一歲說と同じい。其の他にも五十二歲說に依つたものは、彼是あるが、上記のものなどが本となつたのであらう。此の外に五十三歲說(俳諧家譜等)五十五歲說五十七歲說など、いろ／＼あるが、五十二歲說と共に、誤傳であらうと思ふ。

享年は五十一歲說が正しからう

五十一歲說の正しいと見るべきは、よく何人も引く貞享元年甲子吟行の時の、芭蕉が尾張の嗒山の「師の櫻昔拾はむ木葉哉」の發句に對しての挨拶の脇「薄に霜の鬚四十一」のあることで、先づ何よりの徵據である。支考も『笈日記』に此の句を引いてゐるから、支考は五十一歲終焉說を取つたと見て可いのである。それに『風俗文選』の作者傳『桐雨筆記』其の他の傳も大抵此の說を取つてゐる。先づ五十一歲說は定說と見て置いて可からう。

先祖及び父

松尾家の先祖は平氏で、賴朝の頃の人彌平兵衛宗清であるといふ(宗清の事は吾妻鏡等に見えてゐる)此の說は確かとは謂ひ難いやうであるが、强ひて穿鑿する必要もあるまいから、略して置く。次に

與左衛門說と儀左衛門說

芭蕉の父は、儀左衛門說と與左衛門說とあるが、與左衛門說の方が古いやうである。一說に、芭蕉の兄半左衛門の幼名が儀左衛門であつたともあるから、儀左衛門說は、是が紛れたかの疑ひもある。此の外

甚兵衛說

に、父は上野の鐵砲鍛冶松尾甚兵衛といふ者であつたとの說(風俗文選犬注解等)もあるが、何に據つ

祖先以來柘植に住んでゐたが、父與左衞門（後にいふ）の時に上野の城下に移り住んだといふだけは、先づ實らしい。此の父の上野に移り住んだのが、芭蕉の生後であれば、芭蕉は柘植に生れたことゝなり、生前であれば、上野で生れたことになるのであるが、上野に移つてから生れたとの說（竹人、貞松等の傳）が、鄕里での傳へのやうである。（單に柘植の人とか上野の人とかしたのは、どちらの說とも定め兼ねる）いづれにしても、幼時から上野で育つたことは明らかであるから、上野の人といふ方が實に近い譯である。後にいふ上野の松尾家の菩提所愛染院に、芭蕉の兩親の墓は無いらしいから、兩親は歿後柘植の方に葬られたのでないかと思ふ。宗旨も柘植に居た時は禪宗（柘植の松尾家の菩提所は東柘植村の萬壽寺かと云）上野に移つてからは眞言宗となつたらしい（愛染院主の話）から、半左衞門の時から、改宗したので、兩親は元の宗旨の禪宗で、先祖以來の地の柘植の方に歸葬されたものと見える。是は昔からよくある例であるが、さう想はれる迄で、確かなことはいへぬ。

生年は正保元年といふことになつてゐるが、是は歿年の五十一歲から逆算したのである。正保元年は卽ち寬永二十一年で、十二月に改元してゐるから、それ以前に生れたのであれば、寬永の生れといふのが正しい譯である。生れた月を明記してあるものは、是迄見た覺えが無いが、春生れたと記したものはある。（洒竹文庫本の一書であるが、其の名を逸した。芭蕉翁一代錄？）但し確かな據所があつたのかどうか判らぬ。又五十一歲說の外に、五十二歲說もあつて、『淡々雜談集』中の其角自筆の年譜及び義仲

は、此の雲煙を朗かに拭ひ去ることは、到底不可能であらう。

予の見た傳記類の參考書の事は、重要なものだけに就いては附編に別にいふ。傳記類以外の引用書中でも、手許や手近に無いものは、忙がしい中に、圖書館で大急ぎで覽たり、人の家で一寸寫し取らせて貰うたりしたのも多く、是等は、寫し誤りや混雜やが無いとも限らぬ。いづれ予の調べは、本書に終つた譯ではないから、其等が氣付けば、全部に亙つての訂正と共に、訂正する時機もあらう。又池永太蟲の輯めたといふ『芭蕉眞蹟集拾遺』(高安月郊氏所藏と云)の如きは、校合の疑はしい處や、合點の行き兼ねる書翰などもあるが、兎に角面白い材料であるのに、原本を見せて貰ふ機會を得ず、已む無く『芭蕉全集』(沼波氏)の引用に依つた。其の他、所在は判つても見ることが出來なかつたり、又所在も、原本の有無も判らぬものもあつた。是等は他書から引いた旨を記して置いた。出處の怪しい事や、搜つても出處の判らぬ事は、重要ならぬ限りは、記さぬことゝした。又考證上さして緊要で無いものは、木板本が手近に無かつた爲、活版本を引いた處も數個處ある。緊要なものは特に其の旨を附記した。

第一節　少　時

芭蕉の生地に就いては、伊賀國柘植(和名抄に柘殖とあるが本字で、ツゲはツミヱの約訛である。殖植は通用字で、ヱは即ちウヱであらう)説と上野説との二説ある。此の二説中、是迄得た材料だけではどちらが是とも決め兼ねるが、上野説の方が實に近いやうに思はれる。諸書の傳ふる所を綜合すると、

前編　芭蕉の經歷及び爲人

（人としての芭蕉）

本書の最初の計畫は、芭蕉の俳歷や俳風に關する記述を精しくして、傳は極く簡單に附錄するに止めるつもりであつた。處が書き初めて見ると、從來の傳記類が、どれもこれも駁雜散漫で、誤謬や曖昧な個處があまりに多く、是等に據つて好い加減に片付けて置くことの、甚しく不安なるを感じて來た。乃で計畫を更め、先づ傳記類や、是に關する資料を、手の及ぶ限り博く搜つて、書いて見たのが本編である。芭蕉の遺跡も、重要な處だけは親から探つた。其等で、傳の部があまり長くなつた爲に、俳歷俳風の評論は、出來るだけ短かく約めることにした。

本書の傳も、謂はゞ不完全極まるものである。併し是迄に世に現はれた材料や調査の程度からは、先づ是位な處より仕方が無いであらう。考證の物足らぬ處や、錯誤や蕪雜やの、多くの缺點のあるのは、著者の能力の不足の致す所である。併し細かい點は先づ措いて、大體に於いて、目下の處、是以上に論斷を進めることは容易でないと思ふ。特に芭蕉の深川入庵の頃迄の經歷は、判つたやうでも薩張り取留めが無く、如何に搜つても、不相變雲煙模糊の裏に在る。何か新しい有力な材料でももつと出て來ぬ內

毫も遜色を見ぬ程のものもあつた。此の人の連俳を精細に調べたならば、蕉風を究める上にも大に參考にならうと思ふのであるが、予はその元祿以後のものはあまり多く見てゐぬ。今左に寶永七年の『ふくろ角』（此の書中の支流等の漢和三吟も一寸面白い例である）中の百韻の一節を抜き出して見よう。是は檀林臭の幾分が殘つたものであるが、それでも蕉風に近い處がある。

淋し夜の明けの篳篥臓にしみ　　奚之
眞葛の時雨月ぬすむ森　　蘭孤
歴々も古みよしのゝ物語　　鶴士
おほひつ開つ鏡みて泣く　　蘆鶴
染あくむ俄分限の戀ころも　　龍淵
七日たしなむ灸も癒けり　　言水

次韻の地位

さう思うて見れば、意付の程度が多少進んでゐるやうで、句々の興味も幾分か豊かになつたか知らぬといふ氣もするが、それもそんな氣がするといふ位な程度に過ぎぬ。但し芭蕉が之に對して次韻をしてゐる位であるから、可なりのヒントを芭蕉に與へたものと見える。けれどもそれも『虛栗』よりもなほ以前のことであるから、正風としての影響を與へたのではない。『次韻』を或る人々の如く蕉風の先聲と見る場合には、正風に感化を及ぼしたと謂はねばならぬが、此の說は正しいとは思はれぬ。

信德と蕉風

たゞ信德は芭蕉とも交り厚く、右の事もあり、發句も正風體のが少なからずあり、晩年には古風を離れてゐたやうであるから、それこれを合せて、蕉風に幾分の影響を與へたであらうと想像される迄である。『去來抄』に去來が「振舞や下座に直る去年の雛」の初五を置き煩うたのに對しての芭蕉の評に「五文字(〇初五)に心をこめて置かば信德が人の世やなるべし」云々とある。是は信德が兎角「人の世や」など、仰山に言ひ度がる癖のあつたのを嘲り氣味に云うたのらしいが、斯く「人の世や」など言ひ度がる所がやがて亦彼の俳風の地味な點を現はしてゐよう。其の地味な所が即ち蕉風と相通うてゐた譯である。

池西言水の付句

以上の外に、注意すべき人々はなほ多からう。紫藤軒言水なども確かに其の一人で、この人は元祿初年頃迄の付句の風は純然たる檀林風であつたが、何時の間にか蕉風に接近し、元祿二三年頃からのものは純然たる蕉風と謂うても可いやうになつてゐる。此の人も蕉門の人々とは廣く交つてゐたから、自づと之に化せられたものと見える。風が其れであるのみでなく、中々巧みで、蕉門一流の人々のに比べても

「雨の日や笠下げて行く燕子花」「名月や今宵生るゝ子もあらん」「明くれて大根うまし神無月」「据風呂や庭にしばしの冬構」の類は蕉風に近い。是等は或は蕉門の人々と接近してゐた爲に、感化を受けての句と見るべきものかも知れぬ。「七百五十韻」は甚く芭蕉を動かしたものであるが、其の序文にも「至詞不レ飾・至實不レ華、達士賢而少、我友はおほくして、しかもあほうどもなりといふこと左のごとし」（春澄）などゝふざけてゐるだけに、今から見て何處が當時の檀林風と異うてゐたのか、一寸見分けが付き兼ねる。

江戸櫻志賀の都はあれにけり　信徳
東叡山の麓なる春　如風
孔子堂朝たつ霞鳥鳴て　春澄
胡麻餅そなへ雲かをるらん　政定
一重は飽蒲鉾などの月　仙菴
おつぎの間へも氣を付けて秋　遠之
篠薄よしなきあほうすゝむるや　正長
かへらぬ露の役者借する　如泉
世の中を樂長老の他なりと　執筆
電光碁數寄石の火とかや　信德

なかつた。連句でも「宗祇法師の雜談にも、上手の付句は他人の仲好きが如し」云々「宗長法師の雜話にも、付句は只前句に離れて而も離れぬやうにあるべし」云々(獨言)などゝ要領を得たことを云うてゐるが、技倆は發句よりも又劣つてゐた。「禁足之記」に、嵐雪と付合したことを設けて記してあるが、其の揚句に「歌仙しかけて辛き目をした」とあるは恐らくは僞らぬ自白で、連句は蕉門には迚も及ばぬことを自認した語でがなあらう。

素堂

素堂(享保元年歿す、年七十五)は芭蕉とは略ぼ同年、且親友で、早時には芭蕉との付合なども折々あつたが、俳風は蕉風よりも寧ろ檀林風に近かつた。但し文章など中々得意で、又一寸面白い處もあつた。其の方で芭蕉には多少の影響を與へたであらうと思はれる。芭蕉も序跋や何かをよく素堂に賴んでゐる。其の親密であつたのは、二人の庵居が近かつたからでもあらう。芭蕉は素堂の詩才を稱してゐたといふ(黑雙紙)が、其の詩は太したものでなかつたとしても多少の益を與へたであらう。『枇杷園隨筆』に芭蕉の偈とも詩ともつかぬものを載せてあつて、眞僞は不明であるが、眞物とすれば或は素堂などの感化に成つたのも知れぬ。尤も詩を坦庵にも學んだ筈ゆゑ、固より是位のものは作れたかも判らぬ。

信德

信德(元祿十一年歿す、年六十六)は芭蕉には可なりの先輩で、且當時の俳壇の元老株であつたが、芭蕉とは親しく交り、付合などもし、又有名な『七百五十韻』は芭蕉に『次韻』をさせた程大なる影響を與へたものである。發句も「遲櫻蟻の飯引く深山哉」「富士に添うて三月七日八日哉」「五月雨や繁みが中の花石榴」

んだといふのならば幾らでもあるが、もつと嚴密な意味で謂ふと、さう多くは無い。此の點では俳諧は連歌とは聊か趣を異にしてゐる。連歌では救濟の頃には既に正風體が可なりに進み、宗砌心敬の頃には是が連歌の本流となり、宗祇は寧ろ之を繼承大成したに過ぎぬ。俳諧では、芭蕉の出る迄は芭蕉に類似の正風俳諧に着眼した者は殆ど無かつたのである。たゞ多少似た者を擧げるに滿足せねばならぬ。予は其の代表者として小西來山上島鬼貫山口素堂伊藤信德等を擧げようと思ふ。

來山

來山（享保元年歿す、年六十三）は檀林派の前川由平門であるが、其の發句のあるものは寧ろ蕉風に近く、句集を讀んだゞけでは檀林派の俳人とは一寸判定し得ぬ迄に他の同派の人々とは變つてゐる。佳句に富んでゐる所は恐くは芭蕉以前の俳人中では第一位を占めてゐよう。香奩體とでも謂ふべき句も少なからぬ。來山の句集は其の歿後に出た『今宮草』と『續今宮草』とがあり、後者には肖像も出てゐる。爲人も洒脫清高で又篤實な一面も有つてゐたらしい。『俳諧五子稿』には發句のみが集めてある。句例は好句が多きに勝へぬから茲には省く。

鬼貫

鬼貫（元文三年歿す、年七十八）は俳諧よりも寧ろ俳論が優れてゐた。その『獨言』の如きは、所謂まことの外に俳諧無しと道破し、殆ど蕉風の爲に發せられた俳論のやうであつた。其の句も爲人に類して孤峻峭直の氣を呈び、一種の特色はあつたが、俳論の圖拔けて進んでゐたのに比べて、聊か釣合はぬ所があつた。「來いといふ時には來いでおういおい」（七車）などゝ、抱負は高かつたが、技倆はそれ程では

滑稽傳』に宗因を「古風の俳諧たゝき破り、天地の間に獨歩す。世擧つて宗因風と稱し、面白がる」とあるが、俳諧を自在なもの面白いものにしたのは實に宗因であつた。其の特色ある句調は「書初や七十歳筆攝洲の住」「御靜かに御座れや夕陽未だ殘の雪」「花むしろ一見せばやと存候」「不二や扇おつ取直して之を譬ふ」「屋根や時雨谷深うして耳遠し」「頭巾寒うして北に峩々たる青山無し」といふ風であつた。或は字あまりの漢語調を用ひ、或は謠曲調を用ひ、奇語奇想奇法奇趣を以て、詼謔の裏に一種の矯健雄邁の氣を磅礴させてゐる。後の蕪村の如きは、句調や語勢は蕉風よりも寧ろ檀林風に近似したものが多かつた。それ程宗因の句は此の方面に新らしい手本を示したのである。(枇杷園隨筆の芭蕉の自筆といふに「未だ宗因如きの興作無し。宗因如きの惡句無し」とあるものは眞筆かどうか)此の奇語奇調を最も極端にしたのが岡西惟中などで「玉の臺も何せむ汁のむくら生飯の麥」「たはこ紅葉してみよしのゝ櫻もよしやなに」「難波にも珍ら墨書の浦囘なりけり秋」「たゞなほやは有べき月やとる池の里」といふ風であつた。近頃の新傾向とか稱するものに調子はそつくりである。此の句例は惟中の『蚤の子のすさび』から引いたのであるが、此の紀行中の句は大方此の奇調である。芭蕉一派では之を代表してゐるのだが天和三年の『虚栗』で、大淀三千風なども大に此の變風を好んだやうである。ある時代から次の大なる時代への過渡期には、得て斯様な全然常規を逸したものゝ行はれる時代が何の歷史の上にでもあるやうである。

芭蕉と前後して、蕉風以外にも正風の俳諧に着眼したものもある。尤も多少正風の句に近いものを詠

つて減せられたやうに見える。宗鑑などは、指合や法式を顧慮しなかつた爲に却て感興の豐かなものがあつた譯である、尤も蕉風などに比べれば、感興の有無と謂うても、其の間は五十步百步の程度に在つたこと言ふ迄もない。貞德には自作の發句連句も中々多く、著書も多かつた。和歌の方でも多少の地位を占めるべき人であつた。併しそれ等も興隆の方で、作家としてゞはなかつた。俳諧でも前述の如く寧ろ其の方であつた。當時は俳諧は中々盛んとなり、大家も多く出たが、宗因が出て檀林風を皷吹するや古風は次第に衰微し、蕉風の頃には殆ど絕滅の有樣となつた。古風と次にいふ宗因の風との相違は後編に一言するであらう。貞德の俳諧に關しては『醒雪遺稿』に可なり整うた論文がある。

西山宗因(天和二年歿す、年七十八)も始め連歌師であつたが、後俳諧に趨いた人である。貞德も此の人も立派な士流の出である。檀林風の祖として、其の磊落逸宕勁奇俊爽の句を詠んだことは普く人の知る所である。其の句は概して陽氣で賑やかで、寂しい落付いた味などは殆ど無いが、稀には「菜の花や一もと咲きし松の下」「有明の油ぞ殘る時鳥」「秋は此法師姿の夕かな」(西行像讃、此の句は虛栗にも入る)のやうなものもあつた。但し其の爲人は高逸瀟洒な處があつて、甞て黃檗の卽非に參禪したこともあると傳へられ、尋常の俳諧師の流ではなかつた樣に想はれる。『東之紀行』(續々群書類從地理部にも收む)なども見ても、其の優雅な人柄が偲ばれる。(藤井博士江戶文學研究參看)『去來抄』に芭蕉の言として「宗因無くんば我々の俳諧今以て貞德の涎をねぶるべし。宗因は此道の中興開山なり」とある。許六の

もあつた。此の人には前記の『獨吟千句』があつて「いさゝだに座頭まがひの杖つきの、淨瑠璃語れ燈火のもと、今宵早時は丑若更け果てゝ」といふ風で、文學史や風俗史の材料となるやうな句も多いが、內容は詞の繫りで輕い戯謔を弄んだに過ぎぬ。或書に、上の二人は特に狂體が得意であつたので、他の連歌師達も狂體の句はすべて此の二人に歸したのが、二人の俳諧師となつた本であらうとあるが、是等が多分實情を得た說であらう。此の人に就いては其の遺書の多くが近頃發見されたので、可なり精しい研究も發表されてゐる。（宗鑑に就いてはなほ研究すべき餘地が多い）

次に出たのが所謂古風俳諧の祖松永貞德（承應二年歿す、年八十三）で此の人は俳人としてよりも寧ろ俳諧敎育者又は弘布者として偉績のあつた人である。俳諧師で花之下の稱號を得たのは此の人が始めてゞある。其の門下からは北村季吟。高瀨梅盛。雛屋立圃、山本西武、安原貞室、松江重頼、池田是誰、石田未得、半井卜養等の俳諧師や狂歌師の、當時では一流の名家が肩を駢べて輩出してゐる。後に俳諧を多く出版した例の井筒屋庄兵衛も其の門下であつたといふ。又俳諧の式目では有名な『御傘』を出して式目を大成してゐる。『淀川』『油粕』は二書共宗鑑に因んだ名（前者は宗鑑の住んだ山崎を流れる川で、後者は宗鑑が油筒を鬻いだに因む）で、宗鑑の付句を評したり、自分でも付け試みたりしたものであるが、『御傘』と共に貞德三部書と呼ばれてゐる。三書共俳諧の興隆を助けるに大なる功績のあつたものである。但し穿鑿がだん〳〵喧ましくなつただけに、貞德に至つて俳諧は却つて生氣を失ひ、面白味は却

ある。それが却て連歌の本來の要求であつた滑稽趣味を發揮した譯で、且連歌の內容が和歌と同じやうなものになつた爲に飽きられたといふ時代の趨向も加はつて、俳諧の發達を促したのである。

最初に此の方面の專門家として出たのが山崎宗鑑で（天文二十二年歿す、年八十九。異說もある）其の句は全く狂歌趣味であつた。此の人には狂歌集もあつたといふ。卑猥な事でも一向無遠慮に詠んでゐるが、一種の才氣が閃めいてゐて、其の人物や生活の放曠恬淡なのと相應じて、少なからぬ逸興を感ぜしめる。卑俗な材料を構はずに詠んだので、例の元政が隱逸傳を著す時、宗鑑のかの「かきつばた」の聯が卑俗の氣があるとて、宗鑑を入れることを見合せたと傳へられ（其角雜談集、蕪村發句解等）又『犬筑波集』中の句が狂歌と間違へられて傳唱されたこともある。（用捨箱等）『御傘』の序には此の集が出た爲に世人が俳諧を卑んだとある。此の人には長い連句は無かつたらしい。此の種の、性格の單純な才氣の走つた人には、實は連句は適はなかつたのである。又此の人に俳諧の式目があつたとの傳へもあるが誤りらしい。（臨池叢書、醒雪遺稿等）次に出たのは伊勢の荒木田守武（天文十八年卒す、年七十七）で『新撰菟玖波集』にも其の句が入つてゐるが、後俳諧を專らにした。流石に神官で、且名門の出でもあり『伊勢論語』といふ敎訓歌なども出してゐるだけに、宗鑑に比べれば聊か上品であつた。『獨吟千句』の跋に「さて俳諧とて漫りに笑はせんとばかりは如何ん。花實を具へ風流にして、而も一句正しく、さて可笑しくあらんやうに世の好士の敎なり」など云うてゐる。「元朝や神代の事も思はるゝ」などの不朽の名句

ふ說も無いではないが、其等は予等に取つては殆ど一顧にも値せぬ。

第二節　芭蕉以前の俳諧

俳諧は連歌から出たもので、主として德川時代以後に發達したものである。芭蕉の出る迄の俳諧は、實は多く兒戲に類したもので、文學として太した地位を認めることは出來ぬが、歷史的に見る時は、是に相應の意義と價値とを附さねばならぬこと言ふ迄も無い。本書々數十頁を別に「芭蕉迄の俳諧」の一編を立てゝ費す筈であつたが、印行の都合上已むを得ず削除した。機會があつたら、連歌の略史と共に此の部を略叙した一書をも纏めて見度いとも思うてゐる。

極く大づかみに謂ふと、芭蕉以前の俳諧は、一、創始時代卽ち室町時代、二、準備時代卽ち戰國時代三、興隆時代卽ち德川初期などゝ分つことが出來る。一の代表者は宗祇及び其の一派で、二の代表者は宗鑑守武、三の代表者は貞德及び古風の一派、宗因及び檀林風の一派である。宗祇が「俳諧連歌百韻」を試みたことが、諸書に見えてゐて、此の百韻は今も完全に傳はつてゐるのかどうか、自分は未だ見ぬが、是が俳諧付合の祖となつたとも謂はれ、又宗祇や其の一派が、俳諧體の發句や付合をも折々の戲れに試みてゐたことが『實隆公記』などにも見えてゐるから、其れ等が直接に俳諧の祖となつたものと先づ推定しても可いやうである。連歌はもとくふざけたものであつたのを、俳諧體を別に立てねばならぬ迄に、宗祇の頃の俳諧の本流は全然まじめなものとなつてしまひ、俳諧體は例外乃至餘戲として弄ばれたので

一卷を總括代表するやうな心持に詠んだのである。且其れに季節を取ることも、亦一は其の連句の出來た時節を表はす必要から始まつたものである。節物を一定したのも是と同趣旨から出てゐる。然るに今の俳句は、連俳と全く無關係になつたのであるから、連句に附隨して發達して來た諸性質は自づと退化して行かねばならぬであらうと思ふ。但し是は現在又は將來に就いていふのであるが、過去の歷史を調査する者にも、是等は必ず頭の裏に置かねばならぬ重要な事柄である。過去の俳諧では、俳句は實は連句の一部分のある一體たることを豫想しつゝ發達して來たものと見るの外は無いのである。

俳句の興味さへも、外國人や外國の文學で頭を慣らされてゐる人には、容易に感じ得ぬやうである。アストン氏の『日本文學史』なども、俳句の地位を甚だしく卑く見てゐる。況や連句となると、日本人でさへも判らぬといふ人が多い程であるから、外國人などには判らせる望みは當分先づ無いものと思はねばなるまい。隨つて其れに最も得意であつた芭蕉に、文學者としての世界的地位を與へる迄には、前途なほ遼遠であらう。或は永遠に望めぬかも知れぬ。而も吾等は、其の地位を占め得る人たるを毫も疑はぬと同時に、連句は亡びても、其の精神と風趣とは國文學の何處にか不朽不滅の力を持續しつゝ進化發展して行くであらうと確信する者である。道行文に興味を感ぜぬ人には連俳の興味は解るまじく、連俳の興味の解らぬ人には蕉風俳句に大なる興味を有ち得まい。而も是等は國詩の最要の一部を占めてゐるものであるは、前述の通りである。俳句や和歌が、他邦に類例無く形が短いとて、文學としての生命を疑

り考へられてゐはするが、一事一物をさう因果律や規則づくめを以てのみ常に觀ることは出來るものでない。謂はゞ必然のやうな亦偶然のやうな、規則が有るやうな亦無いやうな風に、宇宙の事々物々は吾々の眼に映ずるのである。連俳は卽ち此の直覺に映じた有樣を其のまゝに詩形に寫し取つたものと見られるので、道行も亦此の變態の一種と見得る。道行のみならず、長唄のやうなものでも、首尾一貫せぬ意味の聯絡の確かでない語辭を、詞の緣や單純な聯想に依つて排列して行くやり方は、よく用ひられてゐる。而して斯樣な處が却て吾々に大なる感興を與へるのであるが、是も一種の道行の變形と見るべきものかも知れぬ。兎も角も是等は國文學中で、外國語には到底飜譯の出來ぬ部分である。連句も亦是等と殆ど全く同性質のものであるは言ふ迄も無い。謠曲や淨瑠璃、特に近松の世話物などから道行の一段を省いたならば、如何に索漠たるものとなるであらうか。而して近松の道行は、恰も其の頃に行はれた連句と行方が酷似してゐたのである。其の連句の最高處を代表してゐるのが卽ち芭蕉である。兎に角是等のものは、恐らくは他邦に類例の殆ど無い我邦の特產物で、最も興味ある、又深く檢覈すべき國文學の要部の一である。此の方面に從來餘り手の着けられなかつたのを、予は寧ろ不思議に思うてゐる。

今の所謂俳句が、連句の生んだ一詩形であることも、亦よく〳〵記憶して置かねばならぬ。子規氏等が連句を排斥してから、此の事を忘れてしまうた人が多いやうであるが、俳句として十七文字の一詩形が略ぼ獨立した時代でも、發句は卽ち發句で、無意識中にも、自づから一卷の連句の立句として、先づ

は其處迄極端に推詰めてゐられまいが、予は右のやうに考へてゐる。先生は茶道の一例を擧げて居られるが、他にも數へ切れぬ程例がある。連歌と俳諧との關係も亦此の一例に過ぎぬ。

連歌の特質

それで連歌又は連句の特色に就いて一言して置き度い。連歌は所謂「前念後念をつかず。又盛衰憂喜の境をならべて移りもて行くさま、浮世の有さまに異ならず。昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉にうつろふさまなどは、飛花落葉の觀念も無からんや」（筑波問答）といふ風で、一處に停滯するを嫌ひ、一句々々情景を變じて行くやうになつてゐる。俳諧では「たとへば歌仙は三十六歩なり。一歩も跡に歸る心無し。行くに隨ひ心の改まるは、唯先へ行く心なればなり」（白双紙、芭蕉の語と云）とある如く、一度經た趣向を二度繰返さず、先へ〳〵と進むやうになつてゐる。（子規氏などが、連俳は變化を主とする故文學でないとの奇論を立てたのも、是を誤解した爲である）斯樣な行き方は、全體どういふ根源から出たのであるか、是を考究するのは大なる興味があるが、今は其の遑が無いから措く。禪の一念の停滯を忌む思想などは正しく影響してゐるであらうが、其ればかりでは勿論ない。

道行と連俳

我が邦の鎌倉時代から以後の謠ひ物や、誦み物語り物の類に附隨して（といふよりは寧ろ中堅となつて）發達した「道行」といふものも餘程是と性質が似てゐる。連歌と道行とは確かに思想上の同一源流から出てゐるやうに思ふ。全體宇宙間の出來事は、客觀的にはある因果律に支配されてゐるのであらうが、之を眺めてゐる人から主觀的に謂へば、種々相の間には各〻關係があるといふことは、心の底にぼんや

俳味は洗練された一種の滑稽味

味の滑稽味であるといふに就いては、異議を唱へる者もあるかも知れぬが、是は過去の歴史に就いて謂ふので、現在又は將來の俳諧を是で律しようと謂ふのではない。芭蕉と雖も此の意味の滑稽味を全然離れてゐぬことは否定し得ぬ。此の意味の滑稽は、固より狂歌や川柳の洒落とは甚だしく相違したものであるは論ずる迄も無い。

斯く連歌も俳諧も同じ要求から出て同じやうな經路で發達したのである。それ故中世の連歌は即ち近世の俳諧、近世の俳諧は即ち中世の連歌である。但し民間に流行したものは、中世では多くは短句に長句又は長句に短句を付けること(所謂連歌)で、近世では發句又は冠付のやうなものであつた。併し是は一般俗間の事で、專門家の間に行はれたものは殆ど同じであつた。而して連歌も俳諧も我が邦の詩形中の最も特色あるものゝ一であつたこと言ふ迄も無い。

中世と近世との關係

議論が少しく岐路に入るが序でに一言して置かう。近頃内藤湖南先生が南畫の位置に就いての御說を發表(太陽)されたが、其の中に、國の衰頽期に起つた思想や藝術は、大抵次に來る新時代を支配し、又は之に方針を暗示するのが例であると論せられてゐる。是は自分が平生考へてゐたことゝよく一致し、特に我が邦の中世と近世との思想乃至文學の關係に就いての考に其のまゝ應用し得る。予は德川時代の思想乃至文學は、大部分室町期及び其の前後にかけての時代に創始又は養成されたものを完成圓了したに過ぎぬとするものである。德川時代に創始されたものはあまり無いと予は見てゐる。尤も先生の御考

宗祇芭蕉はまじめな頂點の代表者

其の反動

よう筈がない。連歌は和歌に對して、恰も謠曲に對して狂言が出たやうに、滑稽趣味の要求から生れ出たのである。世人は往々連歌はまじめなもの、俳諧はふざけたものといふやうに考へてゐるやうであるが、是は全く誤りで、連歌と俳諧とは實質上毫も異はぬもので、其の相違は、單に時代と、弄ばれた範圍が前者は多く上流社會後者は多く中流以下の社會であつたといふ位な點に止まるのである。而して共に始めは單に言語の末に輕淺な戯謔を弄したに過ぎなかつたが、だん／＼發達するに隨つて、戯謔も次第に高尚となり、遂には動もすれば本來の滑稽の要求を遠ざかる程まじめな處まで行き詰めたのである。其の最もまじめな頂點を代表してゐた人は、連歌では宗祇、俳諧では芭蕉であつた。而して極端にまじめになつても、宗祇時代の連歌こそ餘りに和歌に接近し過ぎた感があるが、俳諧の方は、蕉風ですらも所謂「俳味」と謂はれる高尚な洗練された一種の滑稽味を其の本義から驅逐して了はなかつたのである。一は其等の爲でもあらう、連歌は其の反動として、宗鑑守武の狂歌趣味の所謂俳諧連歌の發生を促し、それが即ち俳諧の本となつた。俳諧の方も相應な反動があつて、芭蕉歿後洒落風だの化鳥風だのを生じてはゐるものゝ、本來の要求たる滑稽味を「俳味」として維持してゐた爲に、大なる反動は起らなかつた。併し蕉風でも、餘りにまじめな寂しいものになり過ぎたやうな氣味もあるので、蕪村などは「祇園會のはやし物は不レ協二秋風音律一。蕉門の寂栞は可レ避二春興盛席一」（歳旦辭）といふやうなことを云うてゐる。蕪村等の俳諧が芭蕉に比して洒落味の多かつたことは言ふ迄も無い。「俳味」が一種の洗練された廣い意

芭蕉研究

樋口功 著

序編　芭蕉以前の連歌及び俳諧

第一節　連歌と俳諧

共に滑稽的要求から出たもの

俳諧の前身として連歌がある。本書にも連歌の變遷の極めて大要だけでも叙べようと思うたのであるが、芭蕉に關する部分が豫定以上に長くなつたので、省略することにした。而して連歌の分だけは、即に宗祇法師を中心とした連歌史樣のものを書いて見度いと思うてゐる。

さて是迄調べて見た所で、予は次のやうな結論に達してゐる。即ち連歌も俳諧も、共にまじめな和歌の類に對してふざける方面の要求から發生したものである。滑稽諧謔を好むは、我が國民本來の氣輕い快活な性質の一部分として固有の天性であつたらしい。滑稽の要素は殆ど凡ての文學を通じて行き亙つてゐる。古いものでもさうであるが、特に近世になると、江戸趣味などは全く洒落を生命としてゐた程である。斯樣な國民が、其の平民文學として始終澁面や泣顏に日を暮してゐる漢詩や和歌のみに滿足し

後編　芭蕉の俳風及び其の變遷（文學者としての芭蕉）

目次

序編　芭蕉以前の連歌及び俳諧

前編　芭蕉の經歷及び爲人（人としての芭蕉）

本書は連句に關係した事に就いては、縷過ぎたり重複したりした說明も多い。是は予の考を可成徹底させようとしたからで、從來連句が殆ど世人に顧みられず、其の爲に簡單な概括的說明だけでは、予の考を誤解される虞れがあらうと思うたので、さうしたのである。

ば、東京のある文庫で見てノートに取つた材料は、出處を書き落し、ある人の手數を煩はしてやう〲その出處を明らかにし得た。といふやうな事もあつた。こんな譯ゆへ、書名や引用等に就いて誤りが少なくないかも知れぬことは、呉々お斷りして置く。且又調査の不行屆、體裁、順序、行文等の不滿な點も到る處にあつたが、例の癖に强襲されることを惧れたのと、一はあまりに曠日彌久に過ぎると、約束した出版者に迷惑をかけるのとで、先づ〲刊行することにしたのである。無責任だと謂はれるかも知れぬが、自分としては相應に骨も折つたし。且與へられた時間内では、是以上の事は實は難かしかつたのである。

本書を起草したのが一昨年の初秋で、脱稿したのは昨年の初夏、印刷にかゝつたのは初冬である。校正中に直した處も少なくないが、印刷上直し兼ねる處は其のまゝにして置いた。それで昨夏以後に得た材料で取入れなかつたものも多い。是等もだん〲と補訂して行つて、幸に版でも改める機會があつたら、もつと自分にだけでも心ゆくものにしたいと希うてゐることは言ふ迄もない。

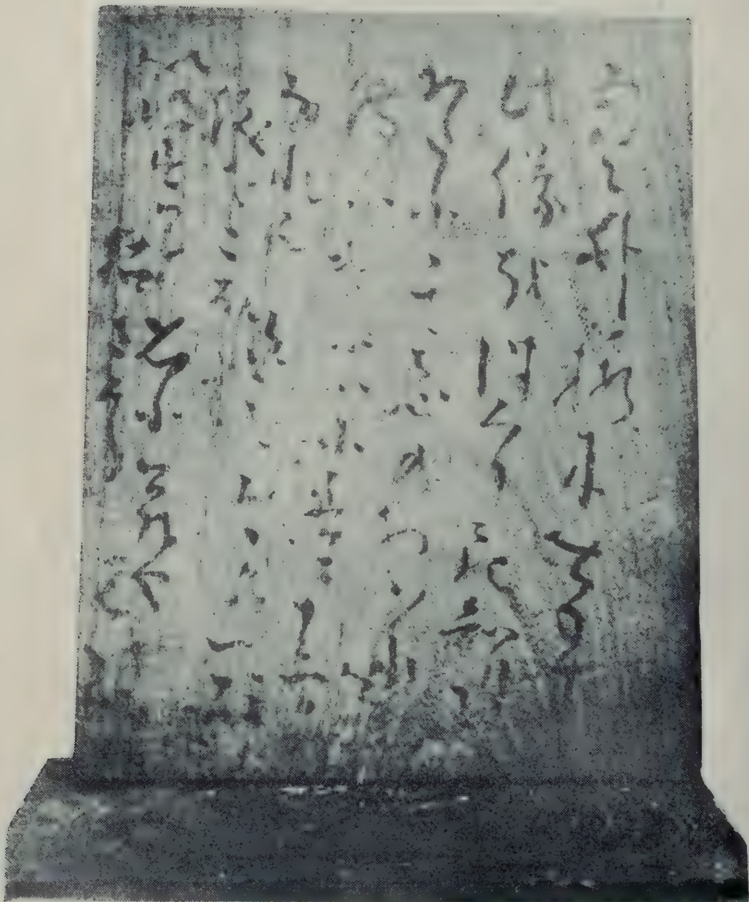
本書の出版を慫慂されたのは藤井紫影先生で、又材料を獲るにいろ〲と便宜を與へられたのは勝峯晋風氏である。特に篤學なる勝峯氏は、煩瑣に堪へぬやうな材料の調査に迄一々予の依賴に應じて、多忙な時間を割いて下さつたことは、感謝の外ない。本書の意外に早く成なつたのは、藤井先生が前から手を引き、勝峯氏が後から背を押して呉れた御蔭である。

自序

從來の芭蕉研究にはいろ〳〵と缺點があつた。其の缺點は可なりに大なるもので、輕く看過して置いても好いやうなものではなかつた。本書が是等の缺點を補ふに足るやうなものでないことは言ふ迄もないが、本書を讀んだら、從來の研究の甚だしく不完全であつたことが幾らか解るであらう。「芭蕉の研究はもつと根本的にやり直す必要がある」といふことだけが略ぼ明らかになれば、本書の目的は達せられるのである。

著者が國文學や俳諧に沒頭し始めたのは、中年以後からである。だから自分には專門家であると公言し得るだけの自信はない。特に著者は考據は甚だ短とする所である。のみならず、一方には又烈しい空想癖に始終累はされてゐる。一度此の癖に襲はれると、知辨的や論證的な仕事はどうしても手に着かなくなる。實は本書の起草中や校正中にも、折々その來襲を受けた。而してこんな仕事は一そ抛つてしまはうかといふやうな氣になつたことさへ二三度あつた。が、辛うじて己を制して、兎も角も結末だけはつけることにした譯である。

それに著者は又可なりに忙しい俗務を有つてゐる。それを僅な時間を無理に割いて出來るだけ材料の整備に努めた。其の材料は大部分は手近には無かつたものである。それゆへ其等をノートに取る際などにあまり急いで寫し誤まつたり、肝腎な點を記し漏らしたりした事柄も間々ある筈である。一例をいへ



同厨子蓋裏書（爾更か）



傳許六作芭蕉木像

(京都雙林寺芭蕉庵藏)

樋口功著

芭蕉研究

文献書院

芭蕉研究

樋口功著